
生徒会執行部～前期の部～

霧崎ミヤビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会執行部〜前期の部〜

【Nコード】

N5290W

【作者名】

霧崎ミヤビ

【あらすじ】

どこにでもありそうな長閑な高等学校、？山ノ下高校？。

そこで新たな機関？生徒会執行部？が発足される。

生徒達の要望や苦悩を司る彼らを待ち受けていたのは、一癖も二癖もある問題の数々だった。

この物語は、個性豊かな彼らが織り成す、ある種の冒険譚である。

よくある風景の、よくある話。

第0話「これが償いの始まりである」

全校生徒と教師の皆さん、おはようございます。お集まり頂きありがとうございます。これより、臨時生徒総会を始めます。司会は私、生徒会長である小淵稻座おふいねくわが勤めさせて頂きます。

それでは、この春、今日から新たな機関として活動を開始する、生徒会執行部？の概要を説明します。

基本的にこの機関は、？生徒会？が担えない仕事や諸事情等の解決を補助する立場にあります。よって、生徒会執行部、以下？執行部？としますが、これには絶対的権限は存在しません。伝統である球技大会やマラソン大会等の運営は、例年通り生徒会が行います。承認の方は拍手をお願いします。

……ありがとうございます。

次に、執行部の発足について。

執行部会長曰く、生徒会はとても良く仕事をしているが、その分ピリピリした空気が抜けていない。ついで昨年度の失態を拭う期間が必要。故に今の生徒会には、欠点部分を補う補助機関が不可欠である。

なので、執行部が補助する事により、生徒会はより重要な仕事に重点を置く事が出来る。それに、この山高の生徒の願望書は県で一番の多さである。それらの判断を我ら執行部に任せて貰う事で、仕事の効率がアップするはずだ。との事です。

他にも活動予定はあるらしいですが、ここでは時間の都合上省略します。この方針を承認する方は拍手をお願いします。

……ありがとうございます。

それでは本日より、生徒会執行部の発足、及び活動の開始を生徒全員の承認の下、許可します。

では、以上で臨時生徒総会を終わりに。
はい？ 役員紹介がまだ？ そんなの、プログラムにありました

っけ……。

え、勝手に組み込まないでくれます！？ こっちにはこっちのプランというのがあるんですよ！ …… まあいいですけど。

皆さん申し訳ありませんが、今しばらくお付き合いください。これから生徒会執行部の役員の紹介を行います。…… えー、どうやらスクリーンに直接紹介データを投影するとの事です。

…… はい？ それも私がやるんですか？ いやいや、自分でやって下さいよそんな事。

機材の使い方が解らないなら初めからその方法を盛り込まないで下さい！ あーもう、小林君、やって！ 私も解らないもん、そんなの！ いいからやるのっ、会長命令！

そうそう、初めから素直に従えばいいんですよ！

という訳ですので、皆さん今しばらくお待ち下さい。文句はここに居る執行部会長に思う存分どうぞ。

（3分後）

はい、よく出来ましたね小林君。後で飴あげますよ。

お待たせしました。これより、役員の紹介データを投影します。

小林君、どうぞ。

会長・天川三紀
あまかわさんき

所属・二年三組

年齢・十六歳

性別・ユーモアな男

身長・173cm 体重・63kg 髪・茶髪で男前のオールバツ

ク

意気込み・ドントウォーリー！　ビーハッピー！

副会長・城古我龍じょうこがりゅう

所属・二年一組

年齢・十七歳

性別・ゲームに命を懸ける男

身長：174cm　体重：55kg　髪：もじゃもじゃ

意気込み・果たしてユクモでアマツは狩れるのか。

副会長・関野恵せきのめぐみ

所属・二年二組（留年生）

年齢・十七歳

性別・男つぱい女

身体・身長：164cm　体重：47kg　髪：黒の尖がり帽子を

被っている為不明

意気込み・歯向かう奴はしばらくから覚悟しやがれ。

書記・二ノ宮春香にのみやはるか

所属・二年四組（飛び級）

年齢・十五歳

性別・子供っぽい女

身長：152cm　体重：秘密　髪：純白のショートヘア

意気込み・お金の事なら相談に乗ります！

会計・廣瀬夕菜ひろせゆうな

所属・二年五組

年齢・十六歳

性別・危ない眼鏡女

身長：167cm 体重：機密 髪：紫毛のロングヘアー

意気込み・WRYYYYYYYYYYYYYYYY

えっと……。なんですか、これ。明らかに門出に相応しくない表現が混ざっているんですけど。特に意気込みの部分、ふざけてるんですか？

え、アドリブ？ 意味間違えてますよ！ 本当にやる気あるんですか！ ある？ あるならあるなりの紹介文にしてくださいよ！……まあいいです。これで今日の臨時生徒総会を終わりにしたいと。

今度は何ですか！

え、声明発表？ 今更要らないと思いますが……。どうしてもやりたいですか……。まあ確かに重要だし……。

じゃあ、手短にお願いします。という訳で皆さん、申し訳ありませんが、もうしばらくだけお付き合ってください。いいですか、これで最後ですからね！

それでは、会長である天川さんからお願いします。

「えー、皆さん、おはようございます。生徒会執行部会長の天川です。本日より行動を開始する生徒会執行部ですが」

はい、そこまでです。

「ええっ！？ 早くねえ？ いくらなんでも早くねえ？」

もう一時間目に食い込んでるんですよ。時間調整に必死なんですよ、こっちは。

「でも、ここからが重要なんだけど……」

はい、次に副会長の城古さん、お願いします。

「無視!？」

「あまりめんどくさい願望書は出さないように。以上」

ちよつと待つて下さい。早速マニフェスト違反ですか!？」

「手短につて言っただろ。何か不満でも?」

先輩にその口調は何ですか! それにさっきの行動方針は何だったんですか!？」

「細かい事をネチネチと……。これだから年寄りは」

細かくないと思いますけど!？」一歳しか変わりませんが!？」

「はい、次に副会長の関野さん、お願いします」

それは私の台詞です!

「変な事したらぶつ飛ばす。以上」

何をするつもりですか!？」

「結局のところ、世の中は力が絶対なんだよな」

そんな、いきなり究極的な結論を感慨深く言われても! もっと平和的な道もあるはずですよ!

「追加。オレに文句言う奴もぶつ飛ばす」

書記の二ノ宮さん、お願いします!

「えっと、よくわかりませんが、お金の事なら任せて下さい!」

仕事を金で解決するつもりですか!？」

「はい!」

認めないで下さい!

「結局、世の中はお金なんです!」

またそんな話を! ここは世の中の摂理を言い争う場ではありませんよ!

「生徒会長さん、そんなツツコンでばかりいると、時間なくなりますよ！」

「だったらツツコませないでくれます!？」

「そういう言い方が、女性として、駄目なんだと思います!」
「何だかあなたにだけは言われたくないです!」

「むっ! 今すぐくムカツとしましたが、私は大人なので大人しく引き下がります! 私はどこかの誰かとは違いますから!」

「どうしてこの人達は三年の私にこうまで威圧的なんですか!？」

「ああ、もういいです……。相手するだけで疲れます。会計の廣瀬さん、お願いします。」

「……………」

「もしかして緊張してるんですか? だったら無理に話さなくても良いんですよ。」

「……………」

「だからって無言はやめませんか!？」

「…………クシュンッ」

「……………」

「…………(ペコリ)」

「終わりですか! くしゃみだけで終わりですか!」

「…………えっと、もう終わりでいいですか?」

「満足ですか、そうですか。私はとても不満ですけどね!」

「それでは、今度こそ、臨時生徒総会を終わりにします。長い間お付き合い頂き、ありがとうございました。どうか今度とも、生徒会共々よろしく願います。」

「はあ、疲れた……。」

こうして、彼らの物語は始まったのだ。

この物語は、どこにでも居る高校生達が、どこにでもある日常を過ごす話。

よくある風景の、よくある話。

第1話「暴力とは時に輝かしい」

「という訳で、まずは互いの理解を深めたいと思う！」

「どういう訳だ」

俺　城古我龍は、会長である天川三紀にツッコむ。何故か俺は、何時の間にかそういう役に定着してしまったらしい。

放課後現在、先日新たに発足した？生徒会執行部？は、生徒会室の隣の空き部屋に身を置いている。空き部屋と言っても、実際は秩序のない資材置き場だったのだが、これを機に新たにちゃんとした置き場を作り、ここを執行部の活動場所にする事が決定した。

だがそこには、内部事情的な裏がある。

臨時生徒総会での執行部の役員紹介や声明発表が、あまりにも特異でいまいち信用に欠けると言って、生徒会会長は監視の意を含めて隣に執行部を置いたのだ。

昨日も、会長がこつちに顔を出して「ちゃんと仕事をしてください！」と叱りつけられた。トランプで遊んでたからだろうが、仕事が無い以上は仕方が無い。

それが災いしてか、ここには座るための長机と椅子のセット一式しかない。資材のあまりだ。だがこれは逆に、これから好きにこの部屋を色づけしていいという事だろう。とりあえず、ハイビジョンテレビを会費で買って、新型ハードを置こうか。

「で、互いの理解を深めるって、どういう事だよ」

俺の右隣に座っている、魔女が御用達のような帽子を被っている関野恵が訊ねる。

「よくぞ訊いてくれた！　俺は全員の事柄を網羅してるが、お前ら同士は解らないだろう？　だからこそ、互いの心情を今この場で充分に理解しようって事さ！」

天川は仰々しく両手を上げて言った。ふむ、筋の通る話ではある。少なくとも俺は、そんなの知る由も無いからな。

この生徒会執行部を発足させると言って、このメンバーを集めたのは他でもない天川だ。故に会長というポストに位置しているのだから。

しかしその当時、俺と天川以外……つまり女子メンバーは、全員登校拒否をしていた。それを天川はある方法で説得し、こうして学校に来させた。つまり、天川は全員のコンプレックスや状況を網羅しているという事だ。

「例えば……春！」

「！ はい、何ですか？」

俺の正面に座っている、書記である二ノ宮春香が、急に振られたため驚いている。

「お前は恵が何故、スカートに男子の制服ズボンを履いてるか、知ってるか？」

「それは知らないですけど……。きっと、ファッションだと思いません！」

二ノ宮の回答に、関野が頷く。

「うん、正解」

あっさり当ててしまった。天川は「あれ、おかしいな」と頭を掻く。

まあ傍から見ても、関野のファッションセンスはどうかと思う。まるでスケバンだ。……いや実際にそうなんだっけか。

ともかく、その所以は何なのか、訊ねてみよう。

「それにしたって、何でそんなファッションなんだ？」

「ん。それはな、オレは女として見られるのが嫌だからだ」

「ああ、だからオレっ娘なんだな。わざわざ時代遅れな事を」

「うるせえ！ とにかく、これなら脚を見られる事はねえだろ？」

「寧ろ別の意味で見られまくなと思うんだが」

「それにオレは、そこら辺の女子と違って胸元も露出しないし、スカートも短く履いてない。極め付けに、なんとピアスをしてないんだぜ！」

「別に女子は絶対ピアスを付けているとは限らないがな」

だかこうして見ると、関野はその部分を除けば、校則をしっかりと守っているように思える。

リボンもしてるし、紺色のブレザーの下に見えるワイシャツの第一ボタンもしっかりしている。ここまでするのは、かなり真面目な生徒だけだ。正直言つて、そんな奴をクラスで見た事はない。

「その帽子とズボンを除けば、とても不良軍団のリーダーとは思えないな」

「今はそれも形だけだからな。実質リーダーなんか勤めてねえよ」

「なのにリーダーなのか」

「まあ、そこは色々あるんだよ」

「なるほど」

そう。その？色々？に、以前の登校拒否の理由はある。だから、これ以上は深入りしない事にする。

「どうだ龍！」

「おお、何が？」

いきなり、天川が声を大きく張った。

「今のようにな、一つのことを指摘するだけで、会話は進むものなのだ！」

「まあ、確かにそうだな」

ここで俺は気付く。最初にこの話題を出したのが、天川だったという事だ。つまり、天川は初めからこの展開を狙っていた！？

更に、わざと自分を引き下げることで、この展開をスムーズにした……？俺を聞き手側にすることで……？

「天川……まさかお前……！」

「気付いたか、龍」

「ここまで図っていたとは……」

「甘いな、俺は更に、お前がそう言うことも読めていたッ！」

「何だとッ！？」

「それにも気付かないとは、まだまだだな」

「くっ」

「何だこのやり取り……」

関野が呟いていたが、この心理を読み解けないようであれば、まだまだ未熟者と言わざるを得ない。俺と天川の間では、高度な心理戦が繰り広げられていたという事なのだ。

天川は悔しさに俯く俺を跡目に、話題を変換する。

「んじゃあ次は……。そうだな、春！」

「え？ 私……特に変わってるところはないと思います！」

「いや、金銭感覚に問題があると思うよ」

「それは、ないと思います！」

「あるよ！」

そう言つて天川は、俺達に視線を送る。どうやら、俺達にもそう言つて欲しいらしい。

確かに二ノ宮の金銭感覚……というか、環境はおかしい。

昨日なんか、お菓子にと言つてキャビアを持ってきたし、トランプは何故か金色に輝いていたし、今持つてきている鞆だって、見るからにかなり高そうだ。光ってるしな。裕福なのは解るが、それでも色々違和感は否めない。

ならば、この問いで大体の疑問は晴れるだろう。

「二ノ宮は、月の小遣いはいくらなんだ？」

これを訊けば、だいたいその家計が解る。五千円くらいなら普通。それ以下は若干厳しい。以上は裕福と見ていいだろう。二ノ宮の場合は、確実に一万は貰っているだろうが。

「あ、お小遣は貰つてませんよ！ 私は好きな時に、いくらでも家のお金を使つていいって言われてますから！」

何という事だ。まさか小遣いという制度を超越しているとは！

次元が違う！

「どれだけ裕福なんだよ！」

関野がツツコんだが、二ノ宮は首を傾げた。

「いえ、裕福ではないですよ！」

「え、そうなのか？」

「はい！ 遠くのお友達は月 × 万円貰ってるって言ってますから、まだまだうちは貧乏です！」

「謝れ！ 全国のローンを払ってる家族に謝れ！」

俺はすかさずツッコむ。ピー音で伏せられる程の額を貰ってるのはどういう事だ！？

「嫌です！ うちも貧乏って言ったら、貧乏なんです！」

「それは二ノ宮の友達に比べたらだろう。少なくとも俺の家と比べれば、遥かに裕福だぞ」

「一緒にしないで下さい！ 二ノ宮家の名が廃ります！」

「別にそれは無いだろう。大体それだったらこっちの名の方が廃る」

「はあ……。いいですか？ この程度の裕福さで満足しては駄目なのです！ それこそ世界の頂点に達するくらいの財産を築き上げなければならぬですよ！ 解りますか？ 世界制覇ですよ、世界制覇！ その辺のチャチな家庭とは目標が違うのですよ！」

「あ、……。ああ。そうか、うん。じゃあ、頑張ってくれ」

何だか話してると気が滅入る。金銭感覚云々というか、もう家庭そのものがどうかしてるんじゃないか？

「駄目だこいつ……。早くなんとかしないと……」

天川が呟く。俺達は深く頷いた。

すると、二ノ宮はバンと机を叩いて立ち上がる。しかし、身長が災いしてか、まったく威圧感はない。

「どうしてですか！ 私は、そんな風に言われる筋合いはありませんよ！」

「春は将来、絶対に破産すると思うよ」

「あ、大丈夫ですよ！ 限界まで養って貰いますから！」

「まさかの二ノト宣言！？」

「親にも推奨されてます！」

「何だつてえ！？」

「私は、あると思います！」

「出来ればなくしてくれないかな！」

二ノ宮は「ふふん」と無い胸を張ってふんぞり返っている。働く気などさらさら無いとでも言いたげの様子。

どうやら、二ノ宮の進路は二ノトで決定のようだ。これは職員室呼び出しは確実だろう。親も。

「もういいや……。夕は……」

天川が視線を向けた先の、フレームレスの眼鏡を掛けている廣瀬夕菜は、他の皆が話をしていてもパソコンから目を離さない。一体そこまで夢中で何をしているのだろうか。気になるので、訊いてみる事にする。

「廣瀬は、何でそんなにパソコンに夢中なんだ？」

「……………」

声を掛けてみるが、反応が無い。画面を凝視しつつキーボードを叩き続けている。どれだけ集中しているんだ。

「おい、廣瀬」

二ノ宮の隣でパソコンをいじっている廣瀬を、机を叩いて呼ぶ。

「！」

これには流石に気付いたようで、ハツと顔を上げてこちらを見る。先程の表情とは打って変わって仏頂面だ。まるでつまらないものを見ているような……。まあ、否定はしないがな。

「何でそんなに、パソコンに夢中なんだ？」

「……………」

何か打っている。

ていうか何だ、そのタイピング速度！？ 反対側からでも見える程の残像が！？ そんな速度で叩いていたら、キーボードが大破してしまうんじゃないか！？

目まぐるしい手の動きが収まると、パソコンの画面を俺に見せてきた。アクセサリのメモ帳が展開されていて、文字が羅列されている。

「ん？ ……今は神奈川県民全ての所得情報・家計情報等の個人情報

報を集めてる、ハッキングして？」

廣瀬は何食わぬ顔で頷いた。

「……………。いやいや」

「…………？」

「首を傾げても駄目だろ。これ、明らかに個人情報保護法に反してるだろう」

再びタイピングし、俺に画面を見せる。

「ん。これはいつか来るであろう個人情報大喪失に備えての行為だから、違反にはならないはず？ いやいやいや」

「…………？」

「そういう問題じゃないだろ。そんなの来たとしても、別の大きなところがちゃんと管理してるから大丈夫だよ」

再びタイピング。

「えっと…………。私は、ないと思います！」

「私の台詞を奪わないで下さい！」

『二ノ宮（春）は黙ってる』

「ええ！？」

「大丈夫だから。ちゃんと信用出来るところが管理してるから。一般市民がちよっかい出す問題じゃないから、これ」

いや、よく考えると、これはもう一般市民の域じゃないな。

再び以下略。

「最近は何務大臣の違反とか秘書が捕まるとか色々あるから、信用出来ない…………。うわあ、ここでこれ出されたら、何も言えないんだが…………」

以下略。

「目標は、全国民の個人情報の網羅？ これ続けたら、確実に国家から指名手配されるぞ」

略。

「私は、ないと思います！」

「またですか！」

『黙れ二ノ宮（春）』

「ええ!？」

「あ、待てよ。もしやこれ、既にこの学校の全校生徒の個人情報

……」

「……………」

すると、俺の懸念を確実なものとするかのように、廣瀬の眼鏡が怪しく光り、口元がニヤリと不敵に笑う。

『!』

何という事だ。もうこの学校に、プライバシーの権利は通用していなかった!

「うん、これ以上夕に突っ掛かると、大変な事になりそうだからやめような、龍」

「……そうだな」

「じゃあ、最後は龍な」

「は? 天川は?」

「それは、いつかのお楽しみだ」

「おい、人の事を散々聞いとしてそれはないだろう」

「会長だから、許されるんだよ」

「正直この機関に、会長とかの役員柄は関係ないと思うんだが」

「という訳で、最後は龍だ」

「どういう訳だ!」

……しまった、ツツコンでしまった! 流れが出来てしまった!

天川がニヤリと口元を笑わせる。また図ったか、こいつ!

しかし、流れを作られては仕方ない。乗るしかないようだ。

「でも、俺にそんな変わったところはないと思うんだが」

『ある!』

「!？」

な、何だ、この団結力は。

「まず、そのゲーム中毒!」

我先にと、天川が指摘する。

だがそんなものは予測済みだ。

「ああ、その何が悪い？」

「開き直りやがった！ 親に言われなかったか、ゲームをやりすぎるなと！」

「生憎、親もゲーム愛好家だね」

「何だと……。どうせ、やりすぎで目が悪いくせに！」

「残念ながら、視力は1.5だ」

「何だとおおおお！ 俺より高い……」

天川は基本、攻め方がへたくそすぎる。全部否定すれば、すぐ折れる。嘘でも。実際は1も無いのだが、まるでバレていない。

「そんなゲームばっかやってると、家族に迷惑かけるぜ？」

関野が急にそんな事を言ってきた。だが既にそれは自問している。いや、大丈夫だ。音量は最小限にしてるし、コントローラーを操作する時に出る音も極限まで抑えているから、まず家族の就寝を邪魔することは無い」

「ちげえよ。電気代だよ、電気代」

「ぐっ！」

こればかりは反論出来ない。養ってもらってる以上、それが家計に影響すると言っても過言ではない。

「特にお前、かなりやってそうだからな。就寝の邪魔をしないって言ってるところを見ると、深夜でも構わずやってんだろ？」

「そりゃそうだろう」

「何当たり前みてえに言ってたんだよ。それがいけねえんだ、それが身体上に迷惑をかけていなくても、実は家計は痛い打撃を受けているんだぞ！」

「くっ……。ええい、お前達に何が解る！ 俺の家の何が解るって言うんだ！」

俺はここで強気で反撃する。

「俺の家には俺の家の事情があるんだ！ 他人であるお前達に、何が解る！」

「少なくとも、お金が泣いてるのが解ります！」

「黙れ二ノ宮ア！」

「ええ！？」

「お前はもう、金の事をしゃべるな！ 金というワードを口に出すな！」

「そんな……どうしてですか！ 心底憤慨ですよ！」

「もういい、こいつは無視しよう。何だか見ているだけで腹が立つ。

「俺がゲームするには、夜しかないんだよ」

「うむ、その心は？」

天川が眉を顰めながら訊くのに対し、俺は額を押さえながら答える。

「帰った後は、妹の相手をしなくちゃいけないからな」

『え』

「え？」

「何で皆が驚くんだ？」

「妹？ 龍の妹……？ んなアホな！」

天川を筆頭に、順々に嘆きの声上がる。いや待て、お前はその事を知ってるはずだろ！

「そんな……かわいそすぎるぜ……」

「私は、ないと思います……」

「……ぐすっ」

「何でそうなる！ 俺ならまだしも、妹を愚弄するのは止める！」

『でも』

「謝れ！ そこは素直に謝れ！」

『でも』

「いくら血が繋がってなくてもな、大事な妹である事には変わりないんだぞ！」

『え？』

途端に、皆は何故か救われたような顔で、天を仰ぐ。ていうか何なんだ天川は！ 如何にも知らないような仕草で！

「良かった、本当に良かった！」

「地球は救われたぜ……」

「本当、良かったです！」

「……イエア」

「おい！ 俺は地球の害虫か何かか！？」

「ただ電気を消費するだけの人間は、滅びろ、龍」

「俺だけじゃないぞ！？ 世界中にゲームしてる人、たくさん居るぞ！」

「死ねってマジで」

「何故俺だけそんな仕打ちを受けなきゃいけないんだ！」

「私は、あると思います！」

「ない！」

「……………」

「ゲーム厨は引き籠もってるだと？ パソコン中毒のお前には言われたくない！」

「はぁ……。何で、こうなった……」。

「とにかく、俺は帰ったら義理の妹の面倒と、姉の相手と、母の手伝いをしなきゃいけないんだ」

『え』

「ええ？」

「またこのパターンか！？」

「もしかして、龍の家族って……」

「天川が恐る恐る訊いてきた。訊きたい事は解るので、すぐに返答をくれてやる。いや、お前は知ってるはずなんだがな、忘れたのか？」

「ああ、皆義理だ」

「俺がそう言った瞬間、先程まで俺を悉く批判していた皆が沈んだ。暗い空気が、この部屋中に立ち込める。」

「いや、別に気にしてないから。寧ろ受け入れてるから、大丈夫だから」

『……………』

はあ、何でこうなる。この部屋は雰囲気の下が激しすぎるぞ。

「気にしないでくれ。義理って言っても、今は楽しいし、居心地もいいし」

「いや、そうじゃないって」

「え？」

あれ、何か俺、勘違いをしていたか？

「迷惑掛けてるのが……まさか、実の家族じゃなかったなんて……」

「え、そこ？」

「かわいすぎるぜ……。何で龍を受け入れたんだ！」

「……やっぱり、俺が悪いのか……？」

「何て残酷な運命なんでしょう！」

「ざ、残酷……」

「ありえないんだＺＥ」

「……………」

そうか……。やはり、地球は俺を拒絶しているのか……。

俺は荷物を片付け、皆の前で一礼。

「本当に、すいませんでした」

「？」

「俺なんか、死ねばいいんですよね」

「いや、そういう訳じゃ」

「生まれてこなければ良かったんですよね」

「おい、キャラがおかしくなってるぞ、龍」

「ええ、俺は地球を食い荒らす害虫ですね、解ります」

「やばいです！ 龍さんが壊れました！」

「永遠に、さようなら」

「乙」

そうだ、俺は、この世に生まれちゃ駄目だったんだ。死ねばいいんだ、死のう。

詩織、蓐、由紀さん、ごめんなさい。今まで迷惑を掛けて、本当にごめんなさい。のうのうと生きていて申し訳ありません。死んで

償うんで、お許し下さい。

俺はさっさとこの部屋を出ようと、ドアを開けた。

「あつ……」

開けるとそこには、山高の女生徒が居た。どうやら入ろうとしたらしいが、入るタイミングを計っていたらしい。

「えつと……。ここ、執行部ですよね？」

「すいません。死に行くんで、そこをどいてくれませんか？」

「え、……えっ！？」

「ちよつと待ったあ！」

なんとか龍を落ち着かせ、自殺を防ぐ事に成功した俺達は、初の仕事の依頼主である、三年生の上原うえはらさんの話を聞く事にする。

にしても、龍は意外に心は打たれ弱いようだ。ゲーム中毒のころだけを攻めただけで、自殺衝動に駆られていたからな。俺は他にも、めんどくさい精神と、その変な髪も攻めようと思ったのに。まあいつかは攻めてやるさ、自殺しない程度に。

「じゃあ、上原さん、説明してくれますか？」

「はい……」

三年なの、二年だけの執行部に頭が上がらないところを見ると、かなりの引っ込み思案のようだ。髪は普通の黒いショートヘアーで、見たところ校則を守っている容姿。見るからに優等生オーラ満載である。

そんな人が持ち出す仕事は、絶対に楽な仕事ではないが、確実に成果を挙げられるに違いない。俺は期待を寄せて、話を聞く。

「私の弟……。上原亮介りょうすけっていう生徒が、一年に居るんです。こういうのもなんですけど、かなり優等生です、私と違って。だから、とても誇りに思ってるんですけど、ここ最近、帰りが遅いんです。何でって訊いても、答えてくれなくて……」

「それを、執行部がなんとかしろって言うのか？」

龍が結論を急いだ。

「はい、そうです」

「却下だ」

おいしい！ 勝手に何却下してるんだよ！

俺が異議を唱える前に、龍は理由を紡ぐ。

「そんな私事を学校の公共機関である執行部に持ち出すべきではない。そういうのは、家族間で解決すべき問題だろう」

む、意外に正論を言ったな、こいつ。これには充分すぎる説得力がある。はつきり言ってこんな小さな小さな問題の始末をしては、キリが無いからな。

「解ってます！ そんなの、百も承知です！」

しかし、それでも健気に反論する上原さん。

「でも、私じゃ何にも出来なくて……。いつもは大人しいのに、最近荒っぽくて……」

「それは最早家庭教育での問題だろう。まったく、親は何をやっているんだ？」

「……………」

「……ああ、そうか。悪かった」

龍が無言の表情を見て悟り、皆も理解する。育児放棄か死別かは解らないが、とりあえず親は居ないらしい。

ていうか龍は、先輩に対する口の利き方を勉強した方が良さぞ。

相手がこの温厚な上原さんじゃなきゃ即説教だぞ。

「それでも何とかしなきゃと思って、こっそり後をつけたんです。

そしたら、大高と絡んでるみたいで……」

「！！」

大民高校。だみんこうこう 略して大高。だいがう

県で一番の不良率だと言われている、かなり荒れている高校だ。

他校によく絡み行事を台無しにしたり、他校の生徒から金を巻き上げているという噂もある。世間的にも疎まれてる存在。山高も例外ではなく、行事の時には厳しく検問している。

「自分から……?」

俺がそう訊くと、上原さんは一度だけ頷いた。ううむ、タチが悪い。向こうから絡まれてるならまだしも、自分から望んでとなると……。

「確かに最近、山高生徒からの大高に関する報告は多いみたいです
ね!」

春が手元の資料を読む。

「? 昨日、大高の連中にメンチビーム喰らわされた。どうにかして欲しい? とか、? 大高が他校の生徒を恐喝してました。その内私達にもその被害が及ぶのではないでしょうかと、願望書の多くは、大高が占めてます!」

「なるほど、これは大きな問題だな」

龍が深刻そうな顔で頷く。

しかしおかしいな。どうして山高を狙うんだ? ゆきぐにこう 雪国高校は大高

を敵視していて、よく喧嘩してるらしいから、大高としては雪国の方をなんとかしたいと思うはずなんだが。

「それは……オレのせいかもしれねえ」

重い口調で、恵が口を開く。

「知ってるだろうけど、オレは不良女子のリーダーで、去年はかなり大高とやりあってたんだ」

「それなら知ってるけど、もう手を引いたんだろ、恵?」

俺の場合は関わったりもしただけど。

「ああ。オレが土下座して謝って、ボコボコにされて、もう山高には手を出さないでくれって言った」

「なら、どうして?」

龍が訝しげに訊ねた。

「それが逆に、山高を狙わせてるのかもしれないえ」

恵は額に手をやり、俯く。

「オレが居なくなつたのを良い事に、何の関係もない山高の生徒が

……」

ふむう、確かにそう考える事も出来るだろうな。

つまり、恵はある意味、山高を守っていたという訳だ。

「あの……。どうすればいいんでしょうか？」

上原さんが不安そうに訊く。

正直、これは困った事になった。山高が手を出せば、山高の評判が下がる。だが、何もしなければ被害は増える。となれば、やっぱり手は一つだ。

「弟さんを説得しよう！」

俺は高らかに提案する。

「一人で無理なら、皆で説得すればいい！」

「それは無理だろう」

「ええ？」

が、龍が一瞬で却下した。

「説得したところで、通じる相手じゃない。既に大高と絡んでるんだ、口は通用しないだろう。それに、たとえ説得出来て手を引かせても、その後の報復が怖い」

うう、かなりの正論だ。反論の余地がない。

「じゃあ、どうしりゃいいんだよ」

俺は逆に龍に訊く。

「上原さんは、どうしたいんだ？」

すると、今度は龍が上原さんに訊いた。

「え？」

「弟を、どうしたいんだ」

上原さんは俯く。

「私は……。弟が楽しいなら良いと思っていました……。でも、大高生と一緒に同じような事をしていたり、悪い事をしていたりすると思うと……」

「で、どうしたいんだ」

そんな結論を急がなくても……。いや、敢えて急いでるのかもしないな。

上原さんは唇を噛み締め、決意の一言を発する。

「ただ。弟と、話がしたいです」

俯いたまま、そう言った。親がいない中、一人で食事をして、誰とも話せずに毎日を過ごすなんか、悲しすぎる。唯一のより所である、弟もそんなんじゃない、どこにでも良いから縋りたくなるわな。

「解った」

何を解ったのかそう言うと、龍は立ち上がった。

「お、おい。どうすんだよ、龍」

俺は慌てて訊く。

「廣瀬、その生徒の居場所解るか？」

龍は無視して、夕にそう訊く。すると、夕はちょちよいとキーボードを叩き、すぐにパソコンの画面を龍に見せる。

おい、まさかな。

「そこまで遠くないな」

「待てよ龍、お前！」

恵が立ち上がり、龍は頷く。

「行つて、話をするしかない」

「駄目だ！」

恵はそれを却下する。

「そんなことしたら、より山高に被害が広がるだろ！ 最悪の事態だけは避けたいんだよ！ またオレが謝れば、いんびんに済む話だ！」

それを言うなら？ 穏便？ だ。

「そうやってまた謝つて、また殴られるか？」

「それで済むなら、それでいい！」

「良くない！」

龍は大きく声を上げ、前髪の隙間から覗く真剣な眼差しで恵を見る。

「お前はそれでいいと思ってるかもしれないがな、他の奴は、少なくとも俺は、それで良いとは思わない！ 友人が殴られるところ見

せられて、心地良いと思えるか？」

「それは……そうだけど！」

「それに、相手は高大だ。もうそんなの通用しない。大体、ここでお前が出しゃばってみろ。その場はどうにでもなるかもしれない。けど仲間にそれが伝わって、それこそお前の懸念する最悪の事態だ。付け込むには格好の理由になる。ここはあまり顔が割れてない俺が行くのが一番だ。？ 穩便？ に済ますのならな」

「……！」

恵は悔しそうに唇を噛み締めるが、龍の説得に渋々引き下がった。

「お、おい、本気で行く気？」

最後に俺が確認すると、龍は静かに頷いた。

「何、すぐ戻る」

「……なら、俺も行くよ」

会長である俺が、事件の末路を見届けない訳にもいかないからな。かなり怖いけど、行く他無い。

「怪我しても知らないぞ？」

龍は苦笑混じりに警告するが、負けじと鼻を鳴らして強がっている。

「俺はそんなにヤワじゃねーぜ？ 俺は上原さんを守らないといけないからな」

「ええ！？ 私も行くんですか！？」

上原さんがまさかと言った様子で驚いた。いや、流れ的に行くんだろーと思ったんだが。

「行きたくないんですか？」

俺は上原さんに訊ねる。

上原さんは一度下を向き、少し経ってから立ち上がる。しかしもう、この表情を見れば言葉などには要らないわけ。

「行きます」

想像通りの返答だった。

時刻は夕刻。そこは、一軒のコンビニの裏。

三人の大高生徒と、依頼主の弟である亮介君がたむろっていた。何故かその周りには、金属バットが数本転がっていた。いつでも襲えるように、あるいは迎撃出来るようにしてるんだろうか。用意周到と言うか何と言うか……。

亮介君の容姿は、完全に大高流になっていた。ボタンはオールなし。袖は雑に切っており、頭はワックスでツンツンの赤髪。とてもじゃないが、この上原さんの弟とは思えない。

その集団は一見、普通に話しているだけのように見えるが。そのメンバーの指先には、紫煙が立ち昇るタバコが一本。

「亮介……！」

俺の後ろに付いていた上原さんが、悲しそうに名前を呟いた。

「ど、どうする、龍？」

こりゃあ策無しで突貫しても返り討ちに遭うだけ……。一体、龍はどんな秘策で以って対処するつもりなんだ？

「どうするも何も、話に行くだけだ」

え、それだけっすか。

龍は毅然と立ち上がり、まるでトイレにでも行くかのような足取りで俺達から離れていく。

「ちょ……。あ、じゃあ、待ってますわ」

どうせ止めたって、水を差すだけだろうし。

にしてもチキンだなあ、俺。でも、喧嘩とか無理だし。とりあえず、この物陰から観察しよう。周りには誰もいないから、会話も全部聞こえるだろう。

龍は躊躇無く、その集団に近づいた。

「あ？ 何、あんた」

一人の大高生徒が、早速絡んだ。見るからに強面で、ヤンキー臭ビンビンだ。おーこわ。

「上原亮介」

しかし龍はそんな奴は目もくれず、亮介君だけを見て、名前を呼んだ。

「ああ？ 気安く名前呼ぶんじゃないよ。何だよお前、おい」

ふてぶてしい態度で顔を近付け、鋭く威嚇する亮介君。

不幸にもどうか予想通りというか、すっかり大高に毒されていた。上原さんが悲しそうにため息を吐く。

「お姉さんが心配してる。家に帰ろうか」

「はあ？ 何お前、気持ち悪いんですけど！」

そう言つて、その集団はゲラゲラと笑う。期待通りの下品さだった。

「岡本さん、どうします、こいつ？」

大高の一人が、リーダーっぽいやつにそう訊く。うわあ、何あれ、鼻ピアス三つもつけてる。気持ち悪っ！！

「何だ、お前？」

「山ノ下高校生徒会執行部副会長、城古我龍だ」

「生徒会執行部？ …… ぷはははは！ お前それあれだろ、関野つて奴居るだろ！」

「ああ、それがどうかしたのか？」

「お前、関野の事知ってるか？ あの有名な不良女子軍団？ 女鬼おんき？ のリーダーなんだぜ？」

「ああ、知ってる」

「そいつがさあ、いきなり土下座して、？ もう手出ししないから、仲間にも、山高にも手を出さないで欲しい？ とか言ってるの！ しかも、いくらでも殴つても蹴つてもいいからってな！ 仲間の前でそんな事して、情けないったらありやしねえよ！」

お笑い種の如く、リーダーはゲラゲラと下卑た笑い声を上げ、仲間もそれに釣られて高笑い。

一方の龍は、それを払拭するかのように鼻笑い。

「喧嘩しか脳のない奴が何を言ってるんだ？ つまらない笑いは御免被る」

「あんだと、てめえゴラア！」

うわ、急に怒った！ しかもめっちゃでかい声！ こりゃあいい近所迷惑だぞ。

「調子乗んのもいい加減にしろよ、餓鬼が！」

「血の気の多い餓鬼に言われたくないな」

「っ！ この野郎！」

ついにリーダーはキレて、右手を上げ、顔を目掛けて殴り掛ける。上原さんが目を瞑る。

うん、それは良い選択だ。これから起こる出来事は、見ない方が良いだろう。

少々、現実味が薄れるからな。

「躰の時間だ、悪餓鬼共」

バキッ！

そんな、何かが折れたような音がした。普通なら、龍の鼻が折れでもしたかと思うだろう。あの屈強そうな拳に殴られもしたら、そうなくても不思議じゃない。

しかし、それは見当違いというもの。

何故なら、そのパンチを龍は、ヘッドバットで返り討ちにしたらからだ。

「いッ！？」

リーダーは思わず声を上げ、右手を抑える。間違いなく、あれは右手が折れたな、うん。だがその代償に、龍の頭からは血が流れ出ていた。

「つてええええエエッ！ な、何だこいつウっ！」

「てんめえ、よくもやってくれたなあ！」

「おい、やっちまえ！」

そう言つて、残りの二人は金属バットを取り、振り上げる。おいおい、最近の不良はここまでやるのか！？

「死ねえ！」

バキッ！

また、何かが折れたような音がした。二本ものの金属バットが一斉に襲い掛かったんだ、今度こそ、龍のどっかの骨が折れたかと思える。

だがそれもまた、見当違い。

何故なら龍は、二本の金属バットを右腕で振り払い、逆に粉碎したからだ。その代償として、今度は右腕から血が流れる。いやそれどころか、恐らくあの腕はもうポツキリ逝ってる事だろう。

「なあ……っ。なっ、何者なんですか、あの人！」

何時の間にか目を開けていた上原さんが、あまりに異様な光景に驚いて俺に訊く。

「あー……。とりあえず、あいつは身体の造りが普通じゃないんです、話すと長くなるので、これで納得してください」

「で、出来ませんよ！」

そりやそうだよな。でも、事実だから仕方ない。見ての通り、金属バットをいとも容易く破壊する高校生が普通なはずはない。

その証拠に、自らも普通ではないはずの不良達は、ジリジリと後ずさっている。

「う、うわあ、ば、化け物お！」

「逃げろ、逃げろお！」

いよいよ恐怖を言葉にした二人は、苦悶するリーダーと一緒にすたこらさっさと逃げてしまった。絡むのが速ければ、逃げるのも速い。やれやれ、褒めるべきなのか貶すべきなのか……。

結局残ったのは、亮介君ただ一人だ。

「さて、帰るか」

そして龍は、血を流しながら平然と、何事も無かったかのように亮介君に言う。やばい、ここだけ見れば歴戦の勇者だ。

「ふ、ふざけんなよ！」

そう言っ亮介君は、懐から煌く何かを取り出した。

なんと、それはナイフだった。構えてはいるものの、今の光景を目の当たりにしたせいでガタガタ震えている。きつと頭の中はパニ

ツクになっっているんだろう。

「どうせ、姉貴が言ったんだろ、俺を大高から離せって！ でもな、俺は自分から大高と絡んでるんだよ！ 好きでやってるんだよ！ 中途半端な優しさなんか、いい迷惑なんだよ！」

「……一応訊くが、どうして？」

「強く……強くなりたかったんだよ」

「強く？」

「大高みたいな、喧嘩が強い奴らと一緒にいれば、強くなれると思っただ！」

龍は顎に手をやって、解せないと言いたげに首を傾げる。

「どうして？ お前は優等生のはずだろう？ 充分強いじゃないか」「成績が良くなったって、駄目なんだよ！ 所詮そんなのは飾りなんだ！」

そう声を荒げて、俯く亮介君。

「姉貴が一度、不良に絡まれたんだ。金出せって。俺はそれを、遠くから見ただけだった。助けられなかった！ 俺が弱いからだ！ 勉強ばかりに逃げて、ずっと紙とばかり向かってたからだ！ 人と面向かう勇気がなかったから！ だから強くなりたかったんだ、姉貴を一人で守れるように……！」

「亮介……」

上原さんが、顔を伏せた。

亮介君の気持ちは解らなくもないが、少々いきすぎなんじゃないだろうか。強くなろうと思っただけでも、人として充分強いだろう。亮介君は、道を間違えてしまったんだ。もっと別の道を選んでいれば、こんなややこしい事にはならなかっただろうに。それだけに悔しい気持ち湧き上がって来る。

「あんたみたいな他人に何が解るんだよ。解ったような口、利いてんじゃないよお！」

とうとう錯乱したのか、亮介君はナイフを手に龍に向かって突進し始めた。

いや、これマジでやばい！

「亮介！」

上原さんが名前を呼ぶが、聞こえている様子はない。

ていうか、おい、龍！ 逃げろよ！ 何余裕ぶっこいて不動なんだよ！ 死ぬぞおい！

「龍」

俺が口を動かした時には、時既に遅し。亮介君のナイフが、龍の腹を突き刺していた。血が、地面にゆっくりと垂れる。

上原さんと俺は口を手で覆い、驚愕している。

「龍！」

俺が駆け寄ろうとすると、

「来るな！」

龍に強く止められた。

「まだ、大丈夫だ」

血を吐きながら、そんな事を言った。いや、全然大丈夫そうじゃないって。

「上原亮介」

龍は視線を亮介君に戻す。

「確かに俺は他人で、お前達姉弟の事を充分に知りはない。

だがな、こんな俺でも、解る事が一つだけある」

亮介君は、患部に視線を固定して呆然としていた。人を刺してしまった。その感情が、今彼を支配してるに違いない。

だが龍は、そんな亮介君の顔を左手で掴み、無理矢理自分に向けた。させた。

「果たしてこれは、強さか？ 他人を弄んで、他人の血を浴びて、他人を苦しめて笑う事が、強さの証か？ いいや、違う。これ

は強さなんかじゃない。ただの逃避だ。他人に縋りながら生きる、真に弱い者が歩む末路だ！ お前は、そんな道を望んだのか！？」

「うつ……。お、俺は……」

「亮介！」

遂に上原さんが叫んで、亮介君に駆け寄る。

「姉貴!?」

亮介君は龍の腹に刺さったままのナイフを手放し、上原さんを見る。

「姉貴……俺」

亮介君が言ってる最中に、何かが弾けるような甲高い音が鳴り響く。上原さんは頬を叩いたからだ。

「馬鹿! 亮介、何をしたか解ってるの!? 人を刺しちゃったんだよ!? 殺人未遂なんだよ!? 逮捕されちゃうんだよお!？」

「俺……俺え……」

亮介君は身体を震わせて、今にも泣きそうだった。そんな亮介君を、上原さんは優しく抱き締める。

「強くなくても良いから……。弱くたって、亮介は亮介でしょ……? だからもう、私を一人にしないで……」

「……姉さん……」

互いに涙を流しながら、抱き締め合う二人。ふうむ、実に感動的だ。

「良かったな、上原家族」

腹にナイフが刺さったまま、そんな事を言う龍。あーあ、かなりシニールだ。感動場面ぶち壊し。

「ふ、副会長さん! その傷……!」

「大丈夫だ。大した事は無い」

そう言って、龍はナイフを抜き、近くに放る。

「どう考えても死にますよ! ほら、血が溢れてます!」

「いいや、大丈夫。それよりほら、弟と話、するんだろう?」

「でも」

「家に帰って、それからゆっくり、話すと良い」

それだけ言うと、龍は俺の元に近寄り、手を出す。見ると、龍の額からは汗が滲み出ている、右腕はダラリと垂れていた。

「……久しぶりに一気に血を流したから、ちよっとまずい」

「言わんこつちやない」

俺はポケットから一つのカプセル薬を取り出し、龍に手渡す。とどのつまり、俺の出番っていうのはこれだけだ。薬だけなら、自分で持てればいいのにな。

薬を飲み込むと、龍はふうと息を吐き、落ち着いた様子で言う。

「帰るか」

「……そうだな」

未だに抱き締め合う二人を背に、俺達は学校へ戻ることにした。

「ところで、龍」

「何だ」

「本人は気にしなくてもさ、薬を飲んでも血は止まらないから。ドバドバ出てるから。かなり目立つから、それ」

「……あー」

案の序、俺達は周囲の注目を掻つ攫い続けた。PTAとかが怒らなければいいけどなあ……。

「城古我龍君、入りなさい」

扉を開けると、ふさふさな白髪頭の校長と、毛が無くなってきている中年男性教頭、更には生徒会長であるオレンジツインテールの小淵がいた。

定年の近いこの校長の、そのシャキリとした姿勢には感銘を受ける。高齢者が差別化されている中でも、毅然と職務を全うしようとする精神は、生徒会執行部役員として尊敬したい。

「おや、随分ひどい怪我をしたようですね。右腕は、折れて？」

額に包帯を巻いてる俺を見て、校長はそう促し、俺は座る。流石は校長室、ふかふかの椅子だ。本当は右腕と腹にも巻いているのだが、見えてないだろう。昨日の内に右腕は動かせる程度になって良かった。

「では、小淵さん。今回の件について、説明してください」

教頭が言つて、「はい」と返事をした小淵が説明する。

「今回、生徒会執行部は、一人の女子生徒の依頼を受け、その処理過程上で大高との乱闘に発展しました。大高生徒一人が右手に重傷を負い、大民高校側から厳重な処罰を所望するとの便りが来ています。」

話が簡潔すぎる。確かに、乱闘つばくはなつたが、そもそも悪いのはあつちだ。先に手を出して来たのはもあつちだし、実際のところ俺は直接手を下した訳ではない。仮にそうだとしても、正当防衛になり得る事態だ。

「この事実を、認めますか？ 副会長、城古我龍君」

伸びた白髭を触りながら、校長が訊いた。

「まあ、認めますが」

「では、処罰の方ですが」

「随分話を急ぎますね」

「あなたは、他校の生徒を傷つけるどころか、本校の評判を悪くしました。おかげで、PTAからは苦情の嵐です。それらは全て、あなたに責任があります。まったく、頭を下げる私の身にもなって欲しいものだ」

「……………」

なんともまあ、自分が情けなくなってくる。

こんな校長を、一瞬でも尊敬したいなどと思つてしまった自分が、よつて、あなたを二週間の停学処分としますが、何か異存は？」

「いいえ、ありません。 それでは、失礼します」

俺はそう言つて立ち上がり、校長室を出ようとしたが、

「待ちなさい」

校長が俺を引き止めた。正直、俺は一刻も早くこの部屋から出て行きたいのだが。

「何です？」

「あなたは何故、こんな事をしたのですか？」

怪訝な顔で校長が訊いた。そんなのは自明の理だ。

「生徒の依頼を受けたからです」

「そうだとしても、こういう結果になることは解っていたはずですよ。山高の評判を下げ、増してやそれを自らの責任にしてまで、何故？」

「簡単ですよ」

「ほう。それは一体？」

「あなたは生徒と評判、どっちが大切なんですか？……いいえ、間違えました。自らの保身と生徒の身心。あなたにとっては、どちらに価値があるんですか？」

「……………」

「失礼します」

俺は校長室を出て、軽く息を吐く。

別に格好をつける為に言った言葉では無いが、何となく今の言葉は、俺自身にも深く響いた。

？己を切り捨てても生徒を守る？

これが生徒会執行部の目指す、最高の生徒会。

それを実現出来るよう努力しようと、改めて考えた。

……ああ。でもその前に、停学処分だ。詩織に言ったら、何て言われるか……。

「兵藤さん」

「はい、校長？」

校長室で、校長が教頭に言いました。

「彼の処分は、撤回します」

「はい？」

「責任は、私が取りましょう」

「ちよつと待って下さい！」

生徒会長である、小淵が言います。

「悪いのは、明らかに執行部です！先程の言葉に惑わされてはいけません！所詮は詭弁ですよ！校長が自ら責任を取るような事

ではありません！」

「そうかもしれないね」

「なら！」

「ですがね、小淵さん」

校長は小淵を見て、笑顔で言いました。

「年寄りには、若者に負けたくないというつまらない意地があるのです。それだけが、年寄りの唯一の取り得なんですよ」

第2話「線路は常に枝分かれしている」

「という訳で、大変な事になった！」

「どういう訳だ？」

金曜の活動も、いつも通りのやり取りで始まった。しかし龍の様子は、天川の言いたい事がよく伝わってないらしい。どうにもこいつは、自分のやらかした事の重大さを理解してないらしい。オレにだって、天川が何を言いたいのかよく解る。

それにしても、あの大怪我をたった三日で完治するなんて、ホントどんな身体してるんだ、こいつ。まあ、金属バットを素手で碎く時点で大分おかしいんだけど。

「どういう訳だ？　じゃないだろ！　お前、あの帰り道でどんだけ人に見られたと思っただよ！　ええ？」

天川が立ち上がって、龍を威圧的に見る。

「あの帰り道？　……何だったか」

だが龍は、訝しげに首を傾げた。

「もう覚えてないの！？　三日前の事だろ！　上原事件だよ！」

「……ああ、上原事件か」

上原事件。

それは、この生徒会執行部の記念すべき初の仕事であり、初の職員室どころか校長室呼び出しを喰らった事柄である。生徒会執行部としては、とてもじゃないが華やかなスタートとは言えない切り口だった。

ようやく事情を察したのか、龍は神妙に頷いて　。

「それがどうかしたのか？」

やはり首を傾げた。

「どうかしたのか？　じゃねーから！　大問題だから！」

「解決したじゃないか」

「したけどね、ある意味してないんだよ！」

龍は「うーん」と顎に手を当てて唸る。別に考える事でもねえだろ……。

数秒後、龍は天川の方を見て一言。

「解らん」

それを受けた天川は、思い切り椅子に崩れ首筋を搔く。

「頭良いようで悪いな、お前。いいか、確かに上原一家の蟠りは解決した。今では亮介君は髪も服装も元に戻して、毎日一緒に姉と登下校してるらしい。でもな、PTAは納得してないんだよ」

「どうして？」

「どうして？　じゃないってモー！」

天川が机を強く叩いた。二ノ宮が「ひゃっ」と驚く。なんか、今日の天川はかなり苛々してるみたいだ。一体どうしたんだか。

「落ち着けよ、天川。物に当たるなんか、らしくないぞ」

オレは言葉で天川を落ち着かせる。

「あ、ああ。悪かった。でもな、これはかなりやばいんだ」

「やばい？　PTAがなんか言ってるのか？」

「だってな、このシリーズ始まって早々、打ち切りの危機なんだよ」

「二話で！？　そりゃ打ち切り最速記録だろうな！」

「ああ。このままじゃあ、恵のオレっ娘問題が未解決のまま、打ち切りになってしまう。それだけは、なんとしても避けたい」

「別にそれはいいだろ！　一人称なんか個人の勝手だろうが！」

「いいや。これは、シリーズ最大の課題だと、俺は考えている。異論は認めん」

「考えるな！　そこで異論は認めろ！　そんな事よりもっと別の事を考えろよ！」

「別の事って、例えば？」

「ええ？　……えーと……うーんと……」

「ほおーら、ないだろ？」

「いや、二話の時点じゃそこまで重大な課題は見つからないと思う！」

「ところがどっこい。あるんだな、これが」

「な、何だよ」

「聞いて驚け！　それが巷で話題の、PTA問題なのだよ」

振り出しに戻っただけじゃねえか！　今のやり取りは、必要だったのか！？

「勿論」

「！？」

こ、心を読まれた……！？

「お前は考えてる事が、顔と胸に出やすいんだよ」

「胸に出やすいってどういう事だよ！」

「その残念すぎるバストが、災いになってるのかもな……」

そう言っつて、残念そうにオレの胸を見た後、ちらつと廣瀬を見る
天川。

……ああ、いいなあ、胸大きいの。何でオレは大きくないんだろうなあ……。ブラさえつけられないなんて、ひどい運命だよなあ。何であんなネット中毒女が、胸大きいんだろう……。おかしいなあ、健康面ならオレの方が何枚も上手なのになあ。畜生、いいなあ、羨ましいなあ……。

「……恵？」

「……」

「恵さん？」

「ハッ！　な、何だよ！」

「……ごめん」

「何で謝るんだよ！」

「いや……。胸がないのは、女として見られたくないって言ったのと同じ理由で気にしてないのかなと思っただ……。でもまさか本気で悩んだとは思わなかったんだよ。紳士である俺が、まさかそんな事にも気が付かなかったなんて……。悪気はなかったんだ！　頼む、許してくれ！」

「マジ！？　マジ謝り！？　やめてくれよ、頭上げてくれよ！　そ

んなマジで謝られたら、余計心が痛むだろ！」

「これが、不良娘の成れの果てだ。二人とも、悪い事はしないように」

『はい』

「頷くな！ いや頷くのはいいけど！ 悪い事はしちゃいけないけど！ そんな理由で頷くな！ 不良でも、胸大きい奴は居るから！」

「それに比べて……うう、恵は何て悲しい子なんだあ……」

「泣くなア！ ますます悲しくなる！」

「まずい、このままでは、ずっといじられる。いじり倒される。もう胸のことを言われるのは嫌だ！ 結構、気にしてるんだよ、悪かったな！」

「こうなったら、維持でも他の問題を見つけてやる！」

「問題だったら、まだまだあるだろうが！」

「ああ、勿論オレっ娘の方も、ちゃんと話し合う予定だ。安心しろ」

「今すぐその予定は排除しろ！ ほら、例えば廣瀬！」

「……？」

「見るよこのすました顔！ このネット中毒こそ、何とかすべきだろ！」

「恵……。それは、駄目だ」

「何でそんなマジ顔で、諭すように却下！？」

「夕からネット中毒が抜けてしまったら、個性がなくなってしまうだろう」

「ネット中毒が個性かよ！？ 欠点を無理矢理正当化してねえか！」

「それこそ何とかするべきだろ！」

「いいや！ こればかりは、譲れない！」

「何でお前がそこを譲らないんだよ！ 保護者かよ！」

「本人は激しくどうでもいいって顔してんのに！」

「無駄だ、恵。お前のオレっ娘問題以上の事柄など、この執行部にありはしない」

「いや、絶対ある！ そんな下らない問題より、もっと考えるべき

問題はあるはずだ！」

「ほお」

「！　そうだ、二ノ宮の金銭感覚！　これこそ」

「いいや」

オレの言葉を、天川は神妙な表情で遮る。

「それはもう、無理だ」

「な、何でだよ！」

「一話とネタが被るからだ」

「いいだろそんなの！　減るもんじゃないし！」

「そりゃ減るもんではないがな。とにかく、それは駄目だ。春が沈黙してる事からも、この重大さは必然だ」

沈黙してるのは、特に関係ないと思うんだが！

ならば……仕方ない！　最終手段だ！

「ほらほら、ユー諦めちゃいなYO！」

「まだだ！　まだ、終わってねえぞ！」

「む、その心は？」

「お前達は忘れている……この執行部で一番多くの欠点を持ち、今現在最も空気の奴の存在を！」

「！　ま、まさか！」

執行部全体が緊張感に包まれる中、オレはその？問題？を指差す！

「犯人は、お前だア！」

そう、執行部副会長の城古我龍こと、龍を！

「は？」

当の本人は、こちらの話は何も聞かずに、携帯ゲームに没頭してる有様だった。

「見るあの姿を！　俺は関係ありませんよーと言わんばかりに、ゲームに逃避する様を！　何も理解出来てない愚かな様を！」

「そうだ……俺達には、もっと他にやるべき事があるじゃないか！」

「そうです！　オレっ娘（爆）なんかより、こっちを何とかするべきです！」

「やばし」

決まった！ これでいじりの対象が、龍に変更された！ ふふふ、悪いな、龍。だが、もうこれしかなかったんだ！

見ると、龍はゲーム機を片手に、面々の顔を見渡している。

「え、何だこれ。俺、何か悪い事したか？」

まったく自覚なしだ。

かわいそうに、自分の駄目さにここまで気付かないとは！

「はい！ 私に、とっておきの案があります」

そう言って立ち上がり、ズンズンと龍に近づく二ノ宮。すると、

龍の右手を両手で握り締め、真剣な眼差しで龍を見据える。

「龍さん！」

「は、はい」

あまりの真剣さに驚いたのか、年下に丁寧になる龍。

そして二ノ宮は、息を大きく吸い込み、その一言を放つ！

「髪、切りましょう！」

「どういう訳だ！？」

『こういう訳だ（です）！』

「ああ！？」

「私が最高の散髪屋を雇うので、安心して下さい！」

「何を！」

「私は、あると思います！」

「何が！？」

「という訳で、私の家に今すぐゴーです！」

『ゴー！』

「一体全体、何がという訳なんだ！？」

という訳で（？）、何故か二ノ宮家に連行されてしまった俺。現在、鏡の前で座らされ、髪を切られる準備は万全だ。いや、何でこうなった。

それにしても驚いた。二ノ宮の家を見たとき、それはとても驚いた。

まさか本当に、金色に光る豪邸があつたなんて。

玄関まで、赤い絨毯が敷かれている光景が、本当に存在していたなんて。

更にその周りには、黒服の警備員がずらり。一体どんな仕事をしていたら、ここまで金が使えるんだろうか。これが成金という奴なのか。

そして何故、家の中に散髪室があるのだろうか。席も三つ分確保されている。素直に散髪屋に足を運べばいい事だというのに、無駄遣いも甚だしい。やはり金持ちは発想が違うな……。

「ではお客様。本日は、こういった形にお切りしましょう？」
男性の散髪屋が丁寧に俺に訊ねた。

が、突然に連れて来られた身。そんな事を訊かれても困る。

「え？ えーと……」

実際、散髪屋の経験は今日が初めてだ。いつもは面白半分で、勝手に詩織や莓に切られてしまうからな。

……思えば原因は、この二人にある気がしてきた。まあ単に伸ばしすぎたつてのもあるだろうが。

うーん、とりあえず短めでって言えばどうとでもなるか。あまり髪型なんて気にしないし、何でも良いや、この際。

「いや、駄目だ龍！」

「は？」

「お前のセンスは線型的に駄目だから、俺達が決める！」

「さっきから駄目出しばかりだな！」

「よし、皆！ 龍の髪型を決めるぞー！」

『おー！』

何でこんな無駄なところで団結力発動するのか……。もつと他で使つべきだろう、その団結力。

でも実際、それは言えてる事だから俺としてもありがたい。それ

にこのメンバーは、顔だけなら目を引くところがある。それなりに気の利いた髪形を提供してくれるだろう。

約一名を除いて。

「じゃあ、まずは俺から提案しよう」

天川が身を乗り出して、俺の頭をじろじろ見る。

「やつぱ長いのは似合わないだろうな。正直、それはキモい」

「いきなり今の俺を全否定か。もう何でも良いから、早く決めてくれ」

俺が急かすと、天川がポンと手をついて提案する。

「よし！ アフロにしよう！」

「何でもそうなる！？ 却下！」

「何でも良いって言ったじゃないか」

「だからってそのチョイスはおかしいと思うんだが！」

「ええ？ アフロって、便利な髪型だと思うぞ？」

「そういう問題じゃない！ 単純に俺が嫌なだけだ！」

「我が儘は駄目だ！」

「自分の髪型なのに！？」

「今のお前に、人権は無いと思え！」

「ある！ いかなる時でも、人権は不滅だ！」

「それはどうかな？」

「どっかの主人公みたいにカッコつけて言ってもあるものはあるんだよ！ どうかかなもこうかなもないんだ！ アフロは今後一切、断固として拒否する！」

「ええー。……じゃあ俺から言える事は、何もないな」

「アフロ以外ノープランだと！？」

「だってねえ……はあ……」

「ため息の理由がまったく解らない！」

言うだけ言って、天川は皆の元へ帰って行く。

「アフロは駄目だってさ」

「何だと！ ……我が儘だなあ、あいつ」

「信じられません！ アフロが駄目だなんて！」

「やばし」

「全部聞こえてますけどー？」

何？ アフロってそんなに推奨されてたのか？ どんな理由で推奨されてるんだ？

「お客様……」

ふと、散髪屋が嘆息気味に声を漏らした。

「はい？」

「あまり、我が儘はよろしくないかと……」

「あんたもか！ あんたもアフロ推奨派か！」

「便利ですから」

「どこが！？」

「困った時は、とりあえずアフロにすれば万事解決します」

「そういう方向での便利性！？ それは散髪屋としての営利的なメリットだろ！ 俺へのメリットは何も無いだろ！」

「ありますよ。とにかく、目立ちます」

「メリットですかそれ！」

「おや、お客様は目立ちたくないのですか？」

「一言も目立ちたいなんて言ってますんよ！」

「そうですね……はあ……」

「プロが客の目の前でため息を吐いただと！？」

おいおい、この人に任せて大丈夫なのか？ これでも、最高の散髪屋なんだよな？ 金貰ってるんだよな？ 猛烈に不安になつてきたぞ。

「龍さん！ ならば私が、納得の行く提案をしてみせます！」

そんな事を自信満々に言う、雇い主である二ノ宮。

「説得力皆無なんだが」

「大丈夫です！ アフロ以外の可能性を、頑張って探します！」

「やっぱりアフロ以外はノープランなんだな」

「アフロが駄目ですと、そうですね……。とりあえず、長いのは、

無しですね！」

「まず髪を切るんだから、長くつてのは無理だろ」

「短くという前提ですと……こんな、こんな、こーんな感じで、ここをちょいよいつてやって、ここをバーンとやるのは、どうでしょうか！」

「！　おお、なんかかなり、それっぽくなってる！」

「でしょう、でしょう！」

「いい、いいじゃないかこれは！　想像以上だ！　説得力皆無とか言つて悪かった、二ノ宮！」

「いいんですよ！　お互い様です！」

ん？　お互い様つて、どういう意味だ？

……まあいい。とりあえず、二ノ宮の見事な提案のおかげで、これ以上変な事は聞かなくて済みそう。

「じゃあ次は、廣瀬さんですよ！」

な訳はなかった。まだ二人、めんどくさい奴が居たな、うん。

廣瀬は二ノ宮とタッチを交わし、選手交代。今度は廣瀬が俺の髪型プランを提案する。

「……………」

と思つたら、鞆からパソコンを開き、カタカタキーボードを打ち、画面を俺に見せる。

「……何だ、これ」

そこには、ヒトデの頭をした漫画のキャラが映っていた。しかも動画で、今まさに決闘の真っ最中だった。

これはどういう事かと視線を向けると。

廣瀬は強く推すように、親指をグツと突き立てた。

「いやいや！　何だよこれ！　まさか、これがプランだなんて言うんじゃないだろうな！？」

「イエス」

「無理だろ！　漫画のキャラの髪型を現実で作るなんて普通無理だろ！　何より、それを俺でやるな！　実験材料か俺は！」

ここで再び、カタカタタイム。

「ええ、これを現実にするのが、私の夢だった？　だから、協力してほしい？　……いや違うだろ！　今は俺の髪型を決めてるんだよ！　廣瀬の夢を叶える為にやってるんじゃないんだよ！」

「きつと、似合う（笑）」

「笑いながら推すな！　ますます不愉快になるだろうが！　とにかくそれは却下だ！」

俺が断ると、やれやれと言わんばかりに首を振りながら戻っていった。

こうなるから嫌なんだ！　何でそんなのが通ると思えるか解らない！　俺はまな板の上の魚だとも言うつもりか！？

「よし、最後はオレだな！」

……あー、しかもまだめんどくさそうな奴が居るし……。何か気合入れて指鳴らしてるし。言うだけなのになんで指を鳴らす必要がある？　まさか実力行使する気じゃないだろうな？

「よく聞け龍。オレの意見はだな」

「却下」

「おい、まだ言っていないだろ」

「却下」

「え、まさか発言自体を」

「却下」

「聞け！　まずは聞け！　聞けば解る！　却下を出すのも、聞いてからでいいだろ？　とりあえず」

「却下」

「うがあああああああ！　聞けって言ってんだよおおおおおおお！」

関野があまりにでかい声を出したので、発言だけは許す事にする。しかし……。

「毎日とんがり帽子を被ってる奴に、髪型の事を言われる筋合いはないんだが。増してやファッションセンスも最悪だろう。はつきり

言って、俺以下だ」

「なんつー駄目出し！ オ、オレの事はいいんだよ！ これには深い理由があるんだから！」

「毎日ハロウィン気分だもんな」

「違えよ！ そんな気分じゃねえよ！」

「まあそれはさておきだ。 正直、さっきの二ノ宮のプランで十分だと思うんだよ。俺はあれでかなり良いと思ったし。それに、悪いけどお前が変な事を言うのは目に見えてるからな。この面子でボケ担当はどう考えても関野だろう。どうせ、アフロがダメならモヒカンとか言いそうだしな。いや、リーゼントか？ まあどっちでもいいや。とどのつまり、俺にとってはマイナスイメージの情報しか与えられないという訳。だから、聞く必要はないと」

と、そこで、関野が身体を震わせてるのが解った。

「あれ、どうした関野」

「ふざけんなよ、てめえおい！」

「！」

関野は、さっきのとは比べものにならないくらい、更にでかい声を出す。

「何でそうやって決め付けるんだよ！ オレは自分の番が来るまで、ずっと龍に似合う髪型考えてたのに！」

「いや、でもそれが駄目なんだって」

「何で信じてくれないんだよ！ オレはただ、龍が喜んでくれると思って、ただ、考えてただけなのに……。それが龍にとって嫌な髪型かもしれないけど、聞いてくれたって……。いいじゃんかよ……」

そう言って、関野は俯く。

あれ、おかしいな。俺はかなり正論を言ったはずなんだが、まるで俺が悪役みたいじゃないか。そもそも被害者は俺なのに、何故こんな役回りに転じなければならないんだ

「……………」

なっ
！

まさか、泣いてる！？ あの関野が、泣いてるのか！？ 泣かせ
てしまったのか、俺が！？

……いや馬鹿な。仮にも、泣く子も黙る不良軍団を仕切る女頭領
が、こんな下らない事で涙腺を崩壊させる事など。

「うう……」

ありえなくもなかった！ これは完全に泣いてる！ 手で拭
われる涙が光っている、わざとじゃない！ 嘘だろ、こんな事にな
るなんて、思ってもみなかった！ 完全に俺の失態か！？

「せ、関野……？」

「うう……うう」

涙を堪える様は、さながら強気の子供のようだ。これ以上、事態
を悪化させる訳にはいかない。

俺は立ち上がり、関野に近寄る。

「どうせオレなんか……オレなんかあ……」

「関野！ 落ち着け！ まずは深呼吸をして気持ちを落ち着かせる
んだ！」

「うううう……」

くそ、反応がない！ これはかなり重傷のようだ！ まさか関野
が、ここまでメンタル面で脆いだなんて！

「オレなんか……居ない方がいいんだ……龍にとって、オレなんか

」

「恵！」

俺は下の名前で呼び、肩を両手で掴み、涙で濡れた瞳を見る。

「ごめん。本当にごめん。何も考えずに……お前の気持ちを考えず
に、馬鹿な事を言った俺が悪かった。だから、泣き止んでくれ。泣
いてるお前なんか、見たくない」

「うっ、うっ……」

それでもなお、泣き続ける関野。

あれ、かなり真剣に謝ったのに、効果なしか！ だったら何だ、
土下座でもすれば許してくれるか？

「駄目だ、龍！」

「天川？」

「恵はキャラも容姿も時代遅れ！ そんな典型的な謝りじゃ、恵は泣き止まない！」

「な、何と言う事だ！ 関野がそこまで、キャラを引き摺るなんて！
「だったらどうすれば！ 俺には、これ以上の謝りは出来ない！」
「身体だ！ 身体に示せ！」

「な、何だって！？ どういう事だ、それは！ ていうかアドバイスしてくれるなら、手伝ってくれよ！ ただ傍観してるんじゃないくて、手を貸してくれよ！」

「身体……。関野にとつての、身体に示すということは……。あれか？ あれしかないのか？ もう、やっちゃうしかないのか？」

「……致し方ない。これがご所望とあらば、なんなりと応えてやる！」

「よし、天川。包丁をくれ」

「おう！ ちょっと待ってろ、今すぐ持って ってちげーよ！
何切腹しようとしてるんだよ！ 跳躍しすぎだよ！ 死ぬだろ！」

「覚悟は、出来てる」

「その覚悟は別のところに使えよ！ もつと穩便に済ませられるだろ！ ハグだよ、ハグ！ 男ならそれしかないだろうが！」

「なんつー！」

「それも充分跳躍的だと思うんだが！ まだ顔を合わせて数日の彼女を抱き締める、そう言うのか天川は！？」

「確かに女子にはそれが効果的なのかもしれないが、相手はあの不良娘の関野だぞ？ 子供っばさが抜けない二ノ宮あたりならまだ勝算はあるだろうが、いくらなんでも関野には……。」

「ううええ……」

「ああ、戸惑っている内にどんどん関野の状態が悪化していく！
これ以上情けない泣き声を出さないでくれ！ あの男勝りな関野はどこに行ってしまったんだ！ 見ていて幼気で痛ましい！ 辛い、すごく辛い！」

……ええいくそお、もうどうにでもなってますえ！

「！」

関野を強く抱き締めた瞬間、泣き声が止まった。よし、今だ！

「ごめんな。何でもするから、もう泣き止んでくれ」

「……何でも？」

「何でもする。何でもする。だから、泣き止んでくれ」

「……うん」

頷いた。つまり、泣き止んだ！？ やった！ やったぞおおおおおおお！

ちらつと皆の方を見ると、あちらも歓声に満ちていた（実際に声は出してないが、そんな感じ）！

「じゃあ、これ、やって」

「ん？」

未だに抱き締めながら、言葉を交わす。

「何？ 何をすればいい？」

「この髪型に、して」

「……………」

とんでもないフラグが、抱き締めた瞬間に立っていたんじゃないか？

だが、聞かない訳にはいかない。

「勿論」

終わりか……。明日から、俺は不登校になるのか……。しかし、これは関野を泣かせた罪。償えるなら、償おう。

……友人が俺の為に考えてくれたんだ。その想いは、しっかりと受け取ろう。

「終了しました」

もう太陽が沈みかけている頃、自称最高の散髪屋がそう言って、部屋から出て来た。俺達は今、馬鹿みたいにただっ広い居間に居る。

これが幾つもあるってんだから驚きだ。

俺達四人は、恵の機嫌を取り戻す為にと、外で色々やって恵を宥めた。ブランコに乗せたり、キャビア食わせたり、大富豪やりたり。それが功を奏して、今の恵はいつも通りの恵だ。

いやしかし、一時期はどうなるかと思った。まさか、龍が恵を泣かせるなんて。正直俺も龍と同じ考えだったから、龍がかわいそうに感じた。

でも、恵が涙を流したのは事実。それは謝るべきで、やるべき事はやるべきだ。そんな訳で、今龍は恵が考えた髪型のプランで散髪し、ちょうど終えたようだ。

「しかし、どんな髪型を提案したんだ、恵？」

「それは見てのお楽しみだぜ。それはもう、見違える程になってるはずだ！」

「でも、私のプランの上に行くとは思えません！」

「いいや、これは、モデルとしていけるくらいだと、オレは噛んでるぜ」

「モデル！？ それは凄い事になるかもしれないね！」

「ふっふっふっ」

と、不敵に笑う恵。うーん、やはり説得力がイマイチない。アキバに居そうな格好をして、何を根拠に胸を張るのかね。無いけど。

「……………」

一方、残念そうにパソコンの画面を見つめる夕。この中で一番役に立ってなかった夕であるが、一応は慰めておく事にする。

「いや、いくらなんでも、それはな……。次があるさ、次が！」

現実的な髪型ならまだしも、ヒトデは無理があるだろう。まあ次があっても、実現する事はないだろうが。

「龍さん、どうぞ」

散髪屋が促すと、龍が恥ずかしそうに扉から出て来た。

「……………」

出て来た瞬間、俺達は言葉を失った。

それは、今までの龍とは思えない姿だった。人というのは髪型が変わるだけで、こんなにも印象が変わるとは。

覆い被さっていた前髪が短くなった事で、初めて龍の双眸がきちんと窺える。こんな綺麗な瞳を隠していたんだから勿体無い。他にもすっかり日の目を見なかった後ろ首も露出し、耳も出ている。所々をワックスで整え、すっかりと今時の男子風だ。

全体的にもつさりしていた龍の髪がかなりスマートになり、見栄えが良くなった事ですっかりと見え方が違う。これはもう、普通にイケメンである。

衝撃の事実！ ゲームオタクの龍は、イケメンだった！

「凄い！ 凄いです！」

春が興奮して龍に近付き、両手で龍の右手を握る。

「私のプランなんか、ミジンコのようです！ でも、悔しくないです！ 寧ろ清々しいです！ こんな素敵な龍さんを見れるならば私如き、灰にでも二酸化炭素にでもなります！」

「二ノ宮、言ってることが色々おかしいぞ。それと恥ずかしいから、そんなじろじろ見ないでくれ」

「くうー！ その恥じらつてるところがかなりいいです！ そそります！」

「やめてくれ、気持ち悪い！」

そんなやり取りをしてる龍を、夕はケータイのカメラで角度を変えて何枚も撮影していた。夕があんなに興奮するのも珍しい。これは、アップされるだろうな。

「いやあ、見違えたじゃなか、龍！」

とりあえず俺も、絶賛しておくことにする。

「どうだ？ アフロなんかより、全然いいだろう？」

「ああ、アフロなんて言った俺が馬鹿だったよ！」

「解ればいいんだ、解れば。 ちよつと、悪い」

龍は春の両手から右手を解くと、恵の方へ駆け寄った。

「……っ」

恵はまだ、さっきのことを引きずってるみたいで、龍と視線を合
わせない。さながら、悩ましい恋心に翻弄される乙女のように……。

「ああ、なんて可愛いんだ！ あそこまで可愛い恵は見たことが
ない！」

「関野」

「……………」

「関野？」

「オレの……名前は……っ」

「恥ずかしそうに俯いて、一言。」

「恵、だよ……………」

ぐうううあああああああああああ！

こ、この胸のときめきは、まさか、アレなのか！ 東京方面で散
々と宣伝文句とされている、あの感情なのかあ！？ も？で始ま
って？え？で終わる、オタク様御用達の上等文句！ うああ、可愛
すぎる！ 何で俺の時はそういうの言わないんだよお！

春なんか、両手を組んでキラキラした表情で見守ってるし、夕は
何度も撮影してる！ ここまで俺達の心を打つなんて、なんて破壊
力なんだ、？萌え？！

「…………恵」

「っ！」

そう言って、今度は龍が恵の右手を両手で握る！ おお！ これ
はまさに、プロポーズの瞬間だ！

期待を踊らせ、俺達はその瞬間を待つ。

二人は情熱を滾らせるように見つめ合い、そして……。

「ありがとう」

「うっ。…………お、おう、どうだ！ オレにかかれば、龍をイケメン
にするくらい、朝飯前ってこった！」

「ああ、そうだな」

「ううっ。…………は、離せよっ」

そう言って、頬を染めながら龍の手を振り払う恵。

「たくつ、手なんか握りやがってっ……。恥ずかしいだろうが！」
「そうか？ 俺なりの感謝の示しなんだが」

「っ！ あーもう、帰る！ 早く帰る！ おかげでこっちは腹が減っしょうがねえよ！」

「……そういえば、もうこんな時間か。俺も、早く帰らないとな」
そう言いながら、こちらに帰って来る二人。

「……いや！ いやいや！」

『違あああああああう！』

『！？』

「プロポーズしろよ、龍！」

「はあ？」

「関野さん、何で自分から手振りほどこいちゃうんですか！ 絶好のチャンスだったのに！」

「チャンスって何だよ！ オレはそんなの、狙ってねえよ！」

止めに夕が、先程激写した光景を二人に見せる。

『今すぐ削除しろ！』

なんだかんだで、今は帰り道。俺の家まで、後少しだ。

あの後、廣瀬が撮影した画像を全部削除して、二人の変な考えを無くさせていたら、すっかり夜だ。既に七時を回っている。一応詩織にはメールしておいたから、飯はもう食べ終えてる頃だろう。

暗い家路を辿り、何事もなく家に着いた。俺はドアをくぐり、すぐあるキッチンを抜ける。

「りゅーにいい、おかえりー」

すると、居間で義理の妹である苺が迎えてくれた。

苺は小学二年生で、背も平均的。いつもならその青い髪は下ろしているが、家では詩織にポニーテールに纏めてもらっている。パジャマ姿であるということは、もう風呂には入ったという事か。

「ただいま、苺」

そこで、四角い木製机に並べられている食器に気付く。

「あれ、まだ食べてなかったのか？」

「うん。しおねえが、りゅーにいをまつて」

「おお……。それは、悪かったな」

「ううん、ぼくちんだいじょうぶ！」

「それはどこで覚えた？ 今すぐ忘れような」

「じゃあ、わたくし？」

「別にそれでもいいとは思うが……。もっと、小学二年生の女子っぽいのでもいいんじゃないか？」

「じゃあ、おら！」

「何でそうなる？」

「だめ？ じゃあ……。せつしゃ！」

「時代が違うし、この場合は？ わらわ？ だな」

「むむむ、ならば……。あたしつちでどうだ！」

「素直に苺って言おうな」

「わかった！ いちごは、だいじょうぶ！」

「うん、良かった」

何で妹とのやり取りが、こんなに疲れるんだろう。気持ちがほぐれると言えはそうだが、その上に更に疲労が重なってプラスマイナスが見事に相殺だ。

とりあえず俺は鞆を適当に置き、ソファーに座り苺に訊く。

「あれ、詩織は？」

「あ、しおねえはね、でかせぎにいつてるよ！」

「何だって！？」

一体何がどうなってそんな事態になったんだ！？

「はやくおふろばをそうじしなくちゃっていつてた！」

「何だ、風呂掃除か……」

どう見間違えれば、風呂掃除が出稼ぎに見えるんだか。小学二年生の頭脳は不思議で一杯だな。

「あ、龍、おかえり」

と、噂の主が後ろから声を掛けてきた。

詩織は俺と同じく高校二年生だが、何故か姉を気取られている。まあこちらは身を置かせて貰っている立場だから、文句を言う筋合いは無いが。

妹とは違う、黒いさらさらした長い髪（詩織の高校では、髪の色は原則黒のため、染めている）を揺らしている、はつきり言っているの美人だ。本人曰く、街中でモデルにスカウトされた事すらあるらしいし、中学ではアイドル紛いな立場であったとか。お馴染みのセーラー服を着ているから、まだ風呂には入っていないようだ。

「ただいま。悪いな、俺のせいで食事が遅れて」

「大丈夫。さ、食べよ食べよ」

詩織と俺が座って、まだ空席が二つあった。

「あれ、由紀さんは？」

「今日は帰らないよ。会社に寝泊まり」

「そうか」

どうやら、今日はとても忙しいらしい。俺からすれば正直嬉しいが。

そうして定位置に座り、箸をと手を合わせ、いつもの一言。

『いただきます』

今日のメニューは、肉じゃが、タマゴ焼き、焼き魚、マカロニサラダ、ご飯、味噌汁の定番メニュー。これを疲れて帰宅してるにも関わらず、一人で作ってしまうから、俺は詩織に頭が上がらない。

味は勿論、

「おいしー！」

俺も同じように感じたようだ。

「うん、我ながら上出来」

詩織も自画自賛していた。いつものことだ。

「相変わらず美味しいな、うん」

「じゃあ、今日も食器洗いやつといてね。その間に私はお風呂入るから」

「……えー」

「えー、じゃないの！ どうせやる事はないくせに！」

「いや、今はとても重要な伏線が回収されるところなんだが」

「ゲームは休日だけって言うてるでしょ！ とにかく、やっておきなさい！」

「いやしかしだな」

「返事は？」

「綺麗にしておきます」

「よろしい」

詩織は俺の返事に満足し、テレビをつける。居候の身である以上、圧力を掛けられては成す術が無い。今日も深夜こっそりやらなければならぬようだ。

『青沼事件、有罪判決です！』

ちゃーちゃちゃちゃーちゃーちゃちゃちゃーちゃちゃちゃー。

聞き慣れた音楽が流れ、後半のニュースが始まる。

「またニュースか」

「ニュースは見てて飽きないでしょ」

「もう少し、苺にも解るような番組をだな」

「りゅーにい！」

「ん？」

「りゅーにいつて、どーていななの？」

「ぶっ！」

妹から信じられない単語が出て来た！ 少なくとも小学二年生が話すような単語では無い。吹きかけたご飯を口に抑え込み、口を抑える。

「苺、それはどこで覚えた？」

「おちてた！」

「どういう事だ！？」

「おとこはみんな、どーていなんです。ってかいてあるかみが、おちてた！」

「誰だ落とした奴！　いいか、それは間違いだ。　ああ待て、あの意味で間違っていないかもしれない。そもそも母、童貞というはだな」

「龍なら、あるいは……」

馬鹿げた事に、詩織までノッてきてしまった。

「おい！　お前も妹に正しい教育をしるよ！」

「何言ってるの。私の妹よ？　そんなのは必要無いに決まってるでしょ」

「まだ純粹なんだから、どう転がるかも解らないだろ！」

「りゅーには、どーてい」

「ほらあ、どんどん変な方向に伸びていくだろう！？」

「大丈夫よ」

そう言つて、キリツと表情が変わる詩織。

「私の、妹だから」

「その根拠のない理由はやめてくれませんか！」

「仕方ないなあ。じゃあ、様付けしたらいいよ」

「え、俺？　俺が！？　お前の妹だぞ！？」

「当たり前でしょ、龍なんだから」

「その理由が意味不明でびっくりだ！」

「りゅーには、いっしょーどーてい」

「詩織様、どうかお願いです。何とかして下さい」

俺は頭を下げた。これ以上母が変な知識を身に付けるのは嫌だし、何よりそんな悲しい歌を歌われるのが不憫でしようがない。

「うむうむ、そこまで言うなら、貴公の願いを叶えて進ぜよう」

「どうして上から目線なんでしょうか！」

「Because, I am a God」

「マジ発音で言ってきた！」

ここまで妹に関して無関心な姉は、果たして他に居るのだろうか！　しかしここは願いを聞き入れた神様。しっかりとその成就を図ってくれる。

「苺、いい？」

「なあに、しおねえ？」

「その言葉はね、龍にしか言ってはいけないの」

「待って下さい、神様」

早速、願いを壊されてしまった。

「わかった！ りゅーにい、りゅーにい！」

そして純粋な苺は、すぐに信じてしまう訳で。

「……何でしょうか」

「この、どーていがっ！」

「……ぷくくっ」

……………。

教育は大変だ。

「ふう」

食器洗いを終え、苺との ×ゲームを散々やって、ようやく風呂に入る事ができた。この一時が、一番落ち着く。

今日は由紀さんがいないから、仕事の手伝いはしないで済むが、執行部に来た願望書の始末が残ってる。土日によってもいいんだが、休日はゲームをしたいので、日は越すだろうが今日中にやってしまおう。

「りゅーにいー！」

「んん？」

ドア越しから、何故か苺の声が。

「どうした、苺？」

「おせなかをおながしいたします！」

「……何だって？」

「おせなかを、おながしいたします！」

そう言いながら、服を脱いでいるのが解る。まったく、何でそんな言葉を。

「莓、さつきもそうだけどな、覚えるべき言葉とそうじゃない言葉があつてだな……」

待てよ。……え、脱いでる？

「ちよ、ちよっと待て、莓！」

「なあに、りゅーにい」

「お前、また風呂入る気か？」

「うん。いったでしょ。おせなかをおながしいたします！」

「い、いいです！ 結構です！ 間に合ってます！」

「えー、でも、もうすつぽんぽんだよ」

「何い！？」

これは、色々とまずい。確かあれだ。ポルノなんたらかんたらに引つかるとか引つかからないとか。万が一でもそうなれば、俺は速攻で刑務所行きじゃないか！ 冗談じゃない！ 近親相姦なんて一瞬たりとも望んだ事は無い！

とりあえず俺は、呼び出しボタンを押す。何度も押す。詩織が来るまで、耐えなければ！

「じゃあはいるね、りゅーにい」

「待て！ 落ち着け！ 慌てるな！ 焦るな！ 気を確かに持て！」
「またないよ。おちついてるよ。あわててないよ。あせつてないよ。きはたしかにもってるよ」

「ああ、何でこんなところが姉譲りなんだろう！ とにかく駄目だ、莓！」

「どうして？」

「色々と問題があるんだ！ いいか、男と女は一緒に風呂に入っちゃいけないんだ」

「うそー。みっちゃん、おにーちゃんといつもおふろはいつてるって、いつてたもん！」

「ぐっ……。みっちゃんの家はみっちゃんの家！ うちはうちだ！」

「おーぼーだよ、りゅーにい！ いちごはっ！ せいせいどうどうとっ！ あにとおふろをはいることをちかいますっ！」

「余計な宣誓はしなくていい！ いいからっ、駄目なものは駄目だ！」

「そ、そんなぁ……」

「葛が、力なくぺたんと座り込むのが解る。」

「りゅーにい、いちごのことくらいなんだ……」

「そ、そういう訳じゃない！ これは、教育上悪いんだ！」

「せいきょういくはひつようだって、しおねえがいつてたもん！」

「何で要らん事ばかりを吹き込むんだ、あの神様は！」

「な、何やってるの、葛！」

「ここえようやく、噂の神様がご到着した。」

「しおねえ。せいきょういくはひつようなんだよね？」

「え、ええ、勿論！ でも、それはまだ本で知る事よ。行動に出るのは、まだ早いわ」

「性教育の必要性を否定しろ！ まだその歳では必要ないはず！」

「ほら、服着て。こっちで遊びましょ」

「うん……」

「渋々、服を再度着る葛。良かった、最悪の事態は免れた。」

「でも、しおねえもいつてたもん！」

「！ ほ、ほら、行くよ！」

「この予感っ！ 詩織の数少ない弱点を握るチャンスな気がする！」

「待て葛！ 言うんだ！ 詩織が、何だって！？」

「龍まで何言ってんの！ ほら葛、早く！」

「しおねえね、またりゅーにいとおふろはいるのたのしみっていつてたもん！」

「あっ……」

「……」。

「え？」

「……詩織様？」

「さあて、お姉ちゃんとお遊びしましょうか、葛」

「クール気取っても遅いんですけど」

「サーテ、ナンノコトデシヨウカ、フッフ」

「ロボットになっても意味無いんですけど」

「サササー」

「去るな！」

あ、本当に去りやがった！ 自分が不利になった途端、いつもこれだ！ 逃げ足だけはいつも速い！ 正しく脱兎の如くだ！

……でもまあいいや。やっと静かになった。俺は顔を風呂に沈め、気を落ち着かせる。

静かな水の中で、苺の言葉を思い出す。

また？ また入りたい？

俺に詩織と風呂に入った記憶は、どんなに紐を辿っても、思い出す事は出来なかった。

いや 紐なんて、どこにもありはしなかった。

深夜零時。誰も居なくなった暗い居間で、俺は願望書の処理をしている。

にしても、大高以外の事はとても下らないものばかりだな。？映画館を設置して下さい？だの？露天風呂を開拓しろやゴラ？と言った、私欲の権化たる願望書だらけ。せめて？ゲーム室を作ってくれ？というものなら考えても良いのだが。

「！」

俺はドアの開く音に反射し、後ろを振り向く。

そこには、俺と同じグレーのパジャマを着た詩織が立っていた。しかも何故か、苺と同じように髪をポニーテールに纏めている。

俺は再び願望書に目を戻し、処理を再開しながら言う。

「まだ寝てなかったのか？ もう日が過ぎたなのに。早く寝ないと、明日の講習会に行けないぞ。今から寝れば、六時間は寝れるだろ」

その瞬間、背中に豊かな胸が当たるのを感じた。

詩織の両腕が俺を捕らえ、詩織の顔が右肩に乗る。つまり、詩織に後ろから抱き締められている。

「詩織？」

「……………」

とりあえず、俺は作業を中断する。

「髪、切ったんだね」

「気付いてなかったのか？　そういえば、苺はまったく触れなかったな」

「うん、言わなかっただけ。今の方がいいよ、龍」

「そうか？」

「うん、そうだよ」

そう言いながら、左手で俺の頭を撫でる詩織。改めて、関野じゃない、恵に感謝する。後、一応散髪屋にも。

「龍」

「ん？」

「好き」

唐突に、耳元で囁く様に告白された。

「龍の事が、好き。大好き。誰よりも、愛してる」

「本気で言ってるのか？」

「私が嘘ついたこと、ある？」

「ないな」

「でしょ。龍は？」

「え？」

「龍は、私の事、好き？」

それは、今の俺には最も辛い質問だった。

「……。ああ、俺も、詩織のこと、好きだよ」

「嘘」

鋭い声で、あっさりと、嘘だとばれてしまった。

「ごめん」

「まだ、何も思い出してないんだ」

「ごめん」

「一番好きだって言ってたのになー。誰よりも愛してるって、言ってたのになー」

「ごめん」

「謝ってばかりじゃん」

「……ごめん」

「はああ、まったく……」

詩織は深くため息を吐いて、体重をかけてくる。それには、俺に対する愛情と、失望が重なってるように感じた。俺はただ黙って、それを受け止める。

「きつと、いつか思い出すよ」

「……ああ」

「焦らなくて、いいから」

「ああ……」

「思い出さなくてもいいから……このままでいいから……」

刹那、詩織の瞳から、涙が零れ落ちた。

「もう、居なくならないで……」

涙が、俺の右脚を濡らす。

詩織は泣きながら、俺をより強く抱き締める。

俺は何も答えずに 答えられずに、目を閉じる。

解らないよ、詩織。

俺には、お前の涙の理由が解らない。

俺は、本当の？俺？を知らない。

詩織、お前が真に想ってる？俺？は 。

本当に、この？俺？か？

その？俺？の名前は、城古我龍だったのか ？

「あア

」！

深夜零時過ぎ、俺は幸せな夢の中で突如目が覚め、近所迷惑にも

程があるくらい大きな声を上げてしまった。

何故なら……。

「PTAの事、言っの忘れたあ

」！

第3話「私利私欲は時に己を化かす」

「という訳で、大変な事になったああああああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「!？」

天川の叫びに驚き、俺はいつものツツコミが出来なかった。一体どういう事なのか、俺は詳細を訊ねる事にする。

「ど、どうした天川。何があったんだ？」

「どうしたもこうしたもへったくれもあるかああああああああああああ！ g t k l d r w p q m v f g h l s x d l j」

天川は頭を掻き毟り、解読不可能な叫びを部屋に響かせる。俺は手で促しながら停止を求める。

「落ち着け！ まずは落ち着いて、日本語をしゃべれ！」

「w q s d f t b m k v c f g p s d v c d f」

「一体何があった！ 応答をしろ、天川！」

「t y p q w m s d s n g h j y t r w q m k」

「ああもうっ、うるせえよおっ！」

痺れを切らした恵が、天川の腹に強烈なパンチを食らわした。

「ぐふっ！」

大きなリアクションと共に血を吐き出し、腹を抱えながら倒れる

天川。そして、見下す恵に手を延ばす。

「恵……どうして……？」

「お前が悪いんだぜ……このオレを怒らせたんだからな」

「めぐ……みい……」

バタリ。

天川、死亡。

……おいおい。

「何をやってるんだ……。始まって早々、殺してどうする」

「はあっ!? し、しまった！ オレとした事が、天川みたいな雑

魚相手に本気を出しちゃった！ 天川、大丈夫か！？ 返事をしろ

天川あああああああ！」

恵は返事のない天川を抱き、天へ叫ぶ！　しかしぐったりとうな垂れた天川からは、生気の欠片も感じられない！

ああ、何て事だ！ 天川が……俺達の会長の天川が……死んでしまった！

悲しみの静寂に包まれた執行部室は、何時にも増して暗い空気が漂っている。皆涙を惜しみ、ただ天川の冥福を祈っているかのようだ。

我らが天川よ、どうかその魂は、安らかでありますように。

「うん」

死体と化した天川を無造作に放り捨てた恵は、亡き会長に代わり、俺達役員に告げる。

「オレの……オレ達の愛する天川が死んでしまった。よって、今からは副会長であるオレがこの生徒会執行部を仕切る！ 異論は認めねえ！」

副会長なら俺も相当するはずなんだが、おかしいな、まったく文句が出ない。……そうか、やはり恵こそが会長に相応しかったのか！

新たに会長となった恵は、神妙な顔付きで天川の死体に目をやった後、俺達に次なる活動を命じる。

「という訳で、今日は解散。お疲れでした。」

「お疲れっした〜」

つまり恵は、天川の死を悼む為に今日は各自家に帰って祈りを捧げるといふ事だな。うむ、流石は恵。心が広く、そして女神のように慈悲深い。

さあて、家に帰ったらジョナサンの続きをやるうかな。

「ちよつと待てええええええええええ！」

不死鳥の如く蘇った天川が、さつさと帰ろうとした俺達を引き止める。

「……くっ、後一步のところを」

「何でそんな残念そうなんですかなあ！」

「馬鹿な、オレの一撃を食らって生きているだと!？」

「何度も喰らってるから嫌でも慣れてんだよ！」

「はあ、天川さんにはがっかりです！」

「俺はお前達の反応にがっかりだよ！」

「……チツ」

「盛大な舌打ち!？」

仕方なく俺達は、渋々再度席に着く。せつかくのずらかるチャンスが台無しだ。

定位置に戻った天川は、気持ちを切り替えるように机を叩き、仕切り直す。

「最初にも言ったが、大変な事になったんだよ！」

「それは金曜にも聞いたが」

俺がそう言くと、天川は再び机をバンと叩く。もっと机を大切にしろよ。貴重な一つなんだぞ。

「それよりも大変になったんだよ！ 金曜は龍の髪型変更作戦を実行しちまったからな！」

「自業自得だろう」

「な、何て事を！ 今お前がその頭をしてられるのは誰のおかげだと思ってる、ええ!？」

指差しながらそう言うが、生憎天川に恩義はあまり感じていない。俺は隣を見て、力強く頷く。

「それは勿論、恵のおかげだ」

「っ！ てか、いつまで恵って呼ぶんだよ！ 関野でいいよ、もう！」

「……いいや、駄目だ」

「何で天川が答えるんだよ！」

「龍、これからも恵って呼んであげて下さいな」

何故か丁寧な頭を下げてきた。

「何でお前が頼むんだよ！ 余計なお世話っつーんだよ、そーいう

のは！」

そして何故か執拗に恵は拒み続ける。

それにしても、何で名前で呼ばれる事にそこまで恥じらいを感じるんだ？ 俺なんかいつも名前で呼ばれてるぞ。寧ろ苗字で呼ばれる事が珍しい。

まあ、ここは適当に流しておくか。

「ああ、任せろ」

「何で承諾するんだよおおおおおおお！」

「あつ！ 大変な事に気付いてしまったぞ、恵！」

「今度は何だよ……」

恵は疲れ気味に訊いた。

「龍が恵と呼んでしまったら、俺と呼び方が被る！」

「そんなの別に気にする事でもねえだろ。お前だって、天川って皆から呼ばれてんじゃねえか」

「そうか……。やはり恵は、龍に名前で愛おしく呼んで欲しいんだな」

「いやそういう訳じゃねえよ！」

「おっと、言い方を間違えた。……欲しいんだな、龍が」

「何でわざわざやらしい言い方にした！？ 別に欲しくもねえよ！」

「安心しろ。龍はこれからもずっとそう呼んでくれるさ。なあ？」

「ああ、任せろ」

「会話の流れ理解して言ってるか、お前！？」

何だか知らないが、恵は顔を赤くして驚愕の表情をしていた。ちゃんと話を聞いとけば良かったかな。

「んー。じゃあ、俺は恵の事をなんて呼べばいい？」

「何でもいいわ……。適当に決めろよ」

「解った。じゃあ？ オレっ娘？ って呼ぶわ」

「適当すぎだろ！ ふざけんな！」

「じゃあ、？ オレ入り娘？」

「箱入り娘みたいに言っても駄目だし、何もうまくねえ！」

「我が儘だなあ。じゃあ？時代遅れ？で決定な」

「最早呼び名でも何でもねえよ！」

「じゃーもーいーよー。？めぐみるく？で」

「何で割り切ってそうなるんだよ！」

……うーむ。

PTAについては、何時ツツコめばいいんだ？ 話の脱線に誰も違和感を感じないのが凄いな、この面子は。

「はい！ 天川さん、私にとっておきの案があります！」

唐突に、二ノ宮が元氣良く挙手をした。

「マジか。じゃあ夕、何かないかな？」

「ええ！？ 華麗にスルーですか！？」

廣瀬は興味無いと言わんばかりに首を振った。ホント、パソコンしか目をやらないなこいつは……。

「マジか……。ならば仕方ない。腹を括って、春の意見を聞こうか」

「腹を括らないと聞けないんですか、私の意見！」

「……ゴクリ」

「唾を飲み込んでまで何を覚悟してるんですか！」

「例えるならば、核戦争」

「私は核だったんですか！？」

「扱い方を間違えると……！」

「扱い方とか言わないで下さいよ！ いい加減にして下さい！」

「大丈夫だって。ただの悪ふざけだから、ははっ」

「程がありますよ！ …… まあいいです。いいですか？ 女の子と

言うのは、可愛い呼び方をされた方が嬉しいんですよ！ 好感度が

通常の二倍に跳ね上がります！」

「ほほう。んで、春の提示するのは？」

「ずばり、？メグ？を推奨します！」

「！メグ、か……」

「私は、あると思います！」

「ああ、俺もあると思う！」

「でしょう、でしょう!」

「よし、そんな訳で、今日からメグと呼ばせて貰うでしょう!」

「駄目ですよ、天川さん!」

「な、何だ?」

「ただ、メグと呼ぶだけでは駄目です! それだけでは、好感度はピクリとしか動きませんよ!」

「なら、どうすれば……?」

真剣な表情で天川は、二ノ宮の言葉を待つ。

……いや、何でこんなので盛り上がっているんだ。これじゃただのテーブルトーク部じゃないか。生徒会の姉妹機関である事を自覚しているのか、この会長は。

「ちゃん付けをするんです! を付けると、更に良いです!」

「な、なるほど! 解ったぜ、春!」

「解るな! ツッコむの面倒だったからツッコまなかったけど、そこまでしなくていいっつーの! メグだけでいいよ!」

「いや、好感度の為なら俺はやる!」

「やらなくていい!」

「という訳で、メグちゃん これから、よろしくな!」

「どういう訳だあああああああ!」

恵は俺のツッコミ台詞を使って、また天川の腹に強烈なパンチを食らわせた。

「ぐふう!」

大きなリアクションと共に血を吐き出し……。

て、おい。

「ストップ」

俺は二人を止める。

「何だ、龍。今から俺が、死に際の台詞を言い残して死ぬところなのに」

「そうだぞ。オレが死体と化した天川を抱いて、天に向かって叫ぶって重要なところなのに」

「ループで尚且つノリノリか！ もういいよ、それは！ さつき見た！ P T Aはどうなったんだ！」

「あ」

天川が何かを思い出したような声を出す。

「そうだ、そうだった！ こんな事をしてる場合じゃなかった！」
慌てて元の席に戻り、天川から遂にその全貌が語られる。

「三日前にも言ったが、大高との騒ぎの件を、P T Aが生徒会執行部に責任を取らせると言っている」

「言ってねえよ！」

恵がすかさずツツコむ。確かに三日前は、P T Aのワードしか聞かされなかった。

「いいや、言ったね。間違いない！」

「何でそんな自信満々なんだよ！ 間違いあるわ！」

「ええい、ツツコむな！ 今はそれどころじゃないんだ！ 黙って聞けえ！」

あまりに真剣に言うので、静寂になる執行部室。

「本来なら龍の停学処分を通る話だったが、校長が代わりに責任を取った事で、P T Aが怒っている」

「？ 何ですか？ 校長は確か、龍さんの一言に揺らされて、良心で自ら責任を取って代わったはずですよね？」

二ノ宮の言う通りだ。何せ、それは俺の計算通りだからな！

…… 勿論ただの詭弁だが。

「それが逆に仇になつてんだよ」

「どういう事ですか？」

天川が俯いて嘆息する。

「P T Aは、執行部が校長に責任を取らせるように仕向けたと考えているんだ」

「！ な、何てめでたい頭をしてるんですか、P T Aのおばちゃん達！！」

「うん、それは若干喧嘩売ってるから、本人達の前では言わないよ

うにしような」

「でも、事実です！」

「あまり言わない方がいい事実もあるんだよ」

「それで、PTA執行部に何を求めているんだ？」

もう余計な事を言ってる場合じゃない。俺は結論を要求する。

「龍。結論を急ぐのは、お前の悪い癖だぞ」

「本当は三日前に話すべき内容だったんだろ？　だったら、急ぎの内容なんじゃないのか？」

「まあそうだけども。PTAが、執行部に弁解の機会を与えてやると言ってるんだ。これ次第で、ここが消えるか消えないかが掛かっている」

PTAか……。これは少々、厄介な存在だ。

山高のPTAの影響力は大きく、その気になれば部活一つを潰す事も容易い。それは、この執行部も例外じゃない。それどころか、大した活動をまだしていない……。つまり成果を上げてないところを取られれば、本当に簡単に潰されてしまうだろう。

「今回は、直接関わった俺と龍が弁解に行く。上原一家も協力してくれるから、廃止にはならないだろうさ。　　いいや、させない。まだ始まったばかりだ」

天川が何時に無い真剣な表情で言う。

「こんなところで、終わらせてたまるか！」

ガッツポーズを決めながら言ったが、俺としては不安の象徴にしか見えない。

「意気込みはいいが、勝算はあるのか？　喧嘩ならまだしも、口勝負で勝てる相手とは思えない」

「その通りだ、龍。おばちゃん達は日ごろの立ち話で、トーク力は尋常じゃない数値になっている。何か言えば、何かのケチをつけて確実にツッコんでくるだろう。今のところ、ここにそこまでの応戦力を持つてる人間は居ない」

相変わらずの的確な推測。残念な結果だが。

「だからこそ、今日は夕の力を発揮する時なのだ！」

「……？」

そう言つて、廣瀬を指差す天川。

「さあ夕、PTAのおばちゃん達の弱味を今すぐ調べるんだ！」

「！」

これまた酷い策を考えたものだ。

廣瀬は親指を立てると同時に、PTAの弱みを調べ始めた。

「夕の事だから、十分もすれば調べ終わるだろう。俺達はそれを切り札にして、最悪それでおばちゃん達を制圧すればいい」

うむ、この神速を見せ付けられれば、反論の余地は無い。

「そうだな。で、その弁解の時間は？」

「ああ、それは……」

天川がケータイの時計を見て、石のように固まった。

……まさかな。

こんな定番なオチを、天川が仕出かす訳が無い。

仕出かす、訳が……。

「多目的三に、今日の、五時」

時刻は、四時五十七分。

「十分もねえだろ！」

恵のツツコミと同時に、俺達は走り出した。

目指すは、四階の多目的三！ 果たして、一階から僅か三分で這い上がる事は出来るのか！？

時刻は五時。俺達は何とか、時間には間に合った。

既にそこには、PTAのおばちゃん方五名と、上原一家もいた。案の定、俺達が一番遅かった。急いで走って来たため、息が上がってしまっている。龍と俺は膝に手をついて、息を整えながら話す。

「おい、天川……はあ、何で、こうなった……はあ」

「これは、想定外だった……はあ、メグをいじってたのが原因で……」

俺に最後の望みを託し、バタリと倒れる龍。

嘘だろ……。ナイフで刺されても死なない人間が、運動不足が原因で死んでしまうなんて！ くそおっ！ 龍、お前の意思是、確かに継いだッ！

「という訳で上原さん、龍をお願いします」

「ええ！？」

ま、実際はひゅーひゅー言ってるだけだから、時間が経てば蘇るだろう。

「……いい加減にきなさいよ！」

「はい、すいません。これが最後です。悪気は無かったです。許してください」

「ふんつ。ほら、とつとと、言う事を言いなさいよ。どうせ、執行部は廃止する事には変わりないんですからね」

「いや、それだけは勘弁して下さい、本当に。きつと真実を聞けば、それはなくなると思います。とりあえず、あなた方が聞いた事実を教えてくださいませんか？ こちらの知ってる事実と若干異なるようなので、確認しておきたいんです」

「ふんつ。山高の生徒会執行部は、一人の生徒の依頼を受けて、大高の生徒達に喧嘩を仕掛け、一人の生徒に重症を負わせたのでしよう？ だから大高から、その生徒及び機関に相当な処分をするように催促が来たと……。当の本人は、もう完治しているようですわね。どうせ、それほど怪我じゃなかったんでしょう？」

「やっぱ違いますね。まず、こちらからは喧嘩を仕掛けてはいません。寧ろ、あちから仕掛けて来ました。それに、確かに龍……。当の本人の怪我は完治していますが、実際の怪我は、腹部をナイフで刺された上に頭を殴られ血を流し、右腕を二本の金属バットで殴られ、骨折に近い怪我を負っています」

本当は殴られてはいないが、それに近いからいいだろう。それに右腕で二本の金属バットを折ったなんて言っても、信じるはずがない。骨折こそしてるだろうが、それだとあまりに不自然だ。ここは

これで通そう。

「ナイフで刺された？　しかも骨折に近い怪我あ？　そんな怪我が一週間足らずで治るはずがないでしょ！　それどころか、今元気に登校してるなんてありえないわ！　嘘もうまく吐きなさいよ！」

しまった。それも大分非常識だった。

「でも、事実ですし。ねえ、亮介君」

「あ、はい……」

以前とはまるで別人の、丸くなっている亮介君が言う。

「龍さんをナイフで刺したのは、僕なんです。だから、六日前にナイフで刺されたのは事実です。姉が依頼したのも、僕に関する事で……。責任は全部僕にあります！　僕に責任を負わせて下さい！」
「またまた。亮介君はそんな野蛮な生徒さんじゃないでしょう。知ってるわよ。一年で一番の成績で、部活動も友好的。何の落ち度も無いあなたが、そんな事をする訳がないわ」

「僕はそんな人間じゃないです！　僕は」

「これも、あなた達の仕業なんでしょう、会長さん？」

「は、はい……」

何でそこで俺に話を振られるんだ？

「亮介君に全ての責任を転嫁するつもりなんでしょう？　まー、何て卑劣で臆病な不良生徒なの！？　こんな子が会長だなんて、それだけで腹立たしいわ！」

おいおい……どんな思考の持ち主なんだ、この人。人間不信かよ。
「ち、違います！　僕が言ってる事は全部事実で、僕がやった事なんです！」

それでも負けじと亮介君は反論をしてくれたが、おばちゃんは軽く往なす。

「はいはい、もう大丈夫ですよ、亮介君。あなたに責任を負わせるなんて、絶対にしないからね。執行部の思い通りにはさせないからね。本当に責任を負うべきなのは、執行部だからね。本当に悪いのは、この頭の悪い会長の執行部なんだからね」

「そ、そんな……。僕は、事実を言ってるだけなのに……」

……ここまでのものなのか、PTAというのは。いや、大人達は表面上の事しか信じられない、生徒の声を信じようとしな。自分の事しか信じない、残念すぎる人間なのか。

正直こちらが人間不信になってしまっいそうな勢いだ、ここはあなたがそうでないと信じるしかないな。

無駄だとしても無意味な事はない。抵抗は続けてみよう。

「ちよつと待つて下さいよ。これが真実です。確かに、本人は他校の生徒を傷つけ、結果的には山高の評判は悪くなりましたけど」

「認めましたわね、素直でよろしいこと」

「認めてませんよ！」

「いいえ、認めたわよ。私達が問題にしてるのは、山高の評判なんだから」

「うっ。いや、しかし！」

「しかも、執行部は何をしたかは知らないけど、圧力で校長に責任を取らせようとしたところか、今度は成績優秀の亮介君にまでそれを働こうとした！ 恥すべき行為ですわ！」

「それも違います！ 断じてそんな事はありませんし、増してやしようとは微塵も思つてません！」

「何を言つても無駄ですよ。そもそも、執行部なんか必要ないでしょう。生徒会があるんだから。こんな無駄な機関は、今すぐに無くすべきですよね？」

『そうですね』

PTAおばちゃんの見解が一片の狂い無しに一致した。このまま通して堪るかッ！

「そうじゃないですよ！ 何で信じてくれないんですか！ 亮介君と俺の言つた事は、間違いのない事実なのに！」

「その証拠はあるの？」

きつ、汚え！ 弁解であるが故に、そんなのある訳が無いじゃないか！

「それはないですけど」

「それじゃあ、信じるものも信じられないわねえ……クスクス」
『クスクス』

「ううわ、こんな古い笑い方を全員にされるなんて、結構屈辱だ！
「それじゃあ、生徒会執行部は廃止という方向で。異議がある方は？」」

『異議なし』

「では、そういうことで」

「異議あり！」

俺は異議を唱え、何とかおばちゃんを引き止める。

「証拠はないですけど、言ってる事は本当なんです！ 信じて下さい！」

「信じられる訳ないでしょう、あなたの言う事なんて」

「どうしてですか！」

おばちゃんは「そんなの決まってるじゃない」と前置きし、その意を言う。

「何度も補導暦のあるあなたに、登校拒否していた生徒を中心に公共機関を作ろうとしたあなたのどこに、信じられる要素があるの？

思想がおかしいと思えませんか？」

「っ！」

それを出されると痛い。確かに何度も補導されたのは事実だし、世間から見れば登校拒否していた人を使って公共機関を作るのは、あまり良い目で見られないかもしれない。

「あなたみたいな学校の寄生虫の言う事なんか、信じられる訳がないでしょう！」

責任者が笑いながら言うと、おばちゃん全体が笑い出す。

「寄生虫の巣なんか、無くすべきですよねえ？」

『そうですね』

「それでは、本日より生徒会執行部は」

ビキッ！

最悪の宣告の直前、何かにひびが入るような音がした。

視線を回して見ると、龍はいつの間にか立ち上がっており、右手で黒板全体にびびを入れていた。突然の事で、PTA一同は言葉を失っている。勿論俺達もだ。

「証明すればいいんだろう？」

「はっ……。は？」

「俺はナイフで刺されても元気で登校出来るって事を証明すれば、信じてくれるかって訊いてるんだ、おばちゃん方」

「ああっ！ それは禁句だぞ！」

「おばちゃ　！　……そういう問題じゃないの。私達は　」

「じゃあどういう問題なんだ！」

「バキィ！」

龍は目の前にあった机一つを、チョップの要領で両断した。上原さんはあくまで可愛く驚いたが、最も驚いているのは、無言になっているおばちゃん達だ。

自らが否定していた事実に近い現象を、現在進行形で目の当たりにしているのだから。

「事実を言えと言われて、言ってみれば否定の嵐！ あんたらは何を信じる？ 生徒を信じないで、何を信じる！？」

「……ふ、ふんっ！ 机の意味も無く壊してしまう狂暴な人の言う事なんか、信じられる訳がないでしょう！」

「何だこの　」

「龍！ 落ち着け！」

俺は暴走しかけた龍を、寸前で制止する。

「もう無駄だ。このおばちゃん達は、俺達の言う事なんか信じないさ。こいつらが信じているのは、金だけだ。金の亡者だ」

「しかしだな天川！ こいつらの言ってる事は狂ってる！」

「……良いんだよ、それで」

「何？」

「狂ってくれてた方がやりやすい。いいから、黙って見ててくれよ。」

暴いてやるさ、おばちゃんの本性をさ」

「……………」

俺の説得に納得はしていないだろうが、龍は下がった。

「はっ！ それで？ もう諦めるの？」

まさか。諦めが悪いのが、俺の唯一の取り得なんだ。

寧ろここからが、正念場。

「だったら仕方ないですね。あまりやりたくなかったけど、最終手段……交渉でもしましょうか。　　こういうのはどうです？　うちの中に、金が残って仕方ない奴が居るんですよ。それはもう、とち狂ってる額を稼いでる大富豪がね。予め資料を見ているのなら解るでしょう？　そいつの金で、この件は無かった事にするってのはどうですかね。一人一千万は下らないですよ。どうします？」

「！　一千万……！？」

「天川！　何を考えて　」

「龍、少し黙ってる」

おばちゃん達が唾を飲み込む。もう一押しだ、もう一押しで、勝てる！

「その気になれば、二千万も行けますよ。現金でも、小切手でも可能です。こんな話は滅多にないと思いますけどねえ。このままPTAやってても、夫の給料を合わせて月三十万行くか行かないかが限度でしょう？　ここで話に乗ってくれば、一瞬で大金持ちですよ。身内を見渡して、まるで考えるような顔をするおばちゃん達。

いいや、そんな考える必要はないだろう？　あんたらの答えなんか、既に目に浮かんでる。確実に乗るはずだ。

「その話は、本当なんでしょうね？」

代表して、責任者が訊ねる

「勿論です。こんな状況で、嘘なんか言えませんか」

「……それなら……」

責任者はおばちゃん達と顔を合わせ、頷く。

「いいわよ、その話。乗ろうじゃない」

ほら見る。やはりあんたらは、金の亡者だ。文字通りな。

「そう来ると思った。じゃあこれで、この件はなかったことでもいいですよ？」

「ええ、忘れましょう。さっきは寄生虫なんか言ってごめんなさいね。あなたはとつてもお利口な子だったわ。うふふ」

「嫌だなあ、お利口なんて。俺はただ、？理由？が欲しかっただけですよ。我ながら、あくどいやり方ですよ」

「……え？」

「校長、聞いてましたか？」

「ええ、聞こえてましたよ」

『！？』

俺が初めて校長の名を出すと、おばちゃん達は驚きの表情を固めた。

ドアが開くと、そこには毅然とした態度の校長が居た。

「天川、これは……？」

「何、ちよつと廊下で聞いてて下さいってお願いしただけだよ」

校長は威風堂々と入り、責任者と面を向かう。

「これは、どういう事ですか？」

「校長、これは……」

「黒板を破壊し机を両断し、更には生徒の賄賂を簡単に受け入れるPTAあるまじき行為です」

「ち、違います！ 私達は悪くありません！ 私達は」

「黙りなさいっ！」

「っ！」

校長の一喝で、静かになる多目的室。

「あなた達の言う事には確証がありません。よって、これらは大人であるあなた方の責任です」

「なっ！ 私達は何もしていません！ この破壊行為は、全てその生徒がつ！ ねえ、皆さんそうですねえ！？」

おばちゃん達が首肯しながら、龍を指差した。校長は龍に振り返

り、問う。

「城古君。これらの破壊行為は、あなたがやったのですか？」

そう問われた龍は、当然のように首を振る。

「まさか」

「なっ！ う、嘘です、校長！ その生徒は嘘を吐いています！」

「そうですか、解りました。城古君は何もしてない？」

「ええ、勿論」

「ちよつと校長！ あなた、私の言う事を信じないで、そんな生徒の言う事を信じるんですか！？」

「おいおい、冗談は大概にして欲しいな。高校生がこんな事、出来る訳ないだろう」

笑いながら惚ける龍に、校長は頷く。

「まったくです。嘘も上手く吐きなさい」

「こ、校長！？ 私は事実を言っているのに……どうして信じて下さらないの！」

「信じられる訳ないでしょう」

校長は再度おばちゃんに振り返り、鋭い声で言う。

「あなた達のような金の亡者の言う事なんか、信じられる訳がありません」

結局、この経緯を以っておばちゃん達はクビ。もう一度、PTAメンバーを編成し直しになった。

俺達は三人しかいない校長室で、後談をしている。

「天川君、お仕事ご苦労様でした」

「いえいえ。こんなのなら、お安い御用です」

そう、これが今回の仕事。現PTAの解散の理由を作ること。

「まさか、これが校長からの依頼だったとは……」

何も知らなかった龍は驚いていた。

「悪いな龍、言わなくて。敵を騙すにはまず味方からだ」

「別にそれはいいんだが……。校長、何故？」

校長は椅子に座り、「まあ、座りなさい」と促す。俺達はそれに従う。

「彼女達は、金を貰うためにPTAに入っていました。会費を少しずつ着服していたのですよ。仕事をしてくれるなら別にそれは構いませんでしたが、まったく手についていなくてですね。注意はしましたが、証拠が無いとばかりにしらばつくられるばかりでして。

おかげで生徒会は年々、大忙しでした」

「だから、執行部に？」

「そうです。これ以上、無駄な金は失いたくないのでね。解散させるには、契約上それなりの理由が必要だったんです。だから天川君にどうにかできないかと頼んだ時、私がこの案を出しましたね。執行部に危険はありましたが、私が執行部に加担する事で、天川君は承諾しました。そして、彼は見事私の望む結果を導きました。天川君、感謝しますよ」

「いえいえ、気にしないで下さい」

「じゃあ、PTAが執行部に責任を取るよう求めるように仕向けたのは……」

「そう、私です」

この仕事は、かなり綱渡りだった。

校長が謝罪の際、執行部にそうしろと言われたみたいな事を仄めかし、PTAがそれに乗り、執行部を処罰しようとする。俺達はそれを食い止めると同時に、解散の理由を作らなくてはならなかった。本当なら、夕の調べた事を頼りにすれば良かったんだが、予想外にそれは出来なかった。だから、予め呼んでおいた校長を上手く使う必要があった。

まあ何とかうまく行ったが、実際はノープラン。少しでも失敗すれば、本当に執行部が消えるところだった。

「校長」

龍が校長に呼びかける。

「何ですか？」

「聖職者とは思えないやり方だ。生徒の手を汚し、自分は汚れないとは」

校長はニコリと笑って、頷く。

「褒め言葉として受け取っておきましょう」

いや、せめてそこは否定して欲しかった。

「まあ構わないが。で、校長」

「はい？」

「報酬は？」

龍がそんな事を言い出した。何言ってるんだか、まったく。

「龍。執行部は、そういうところじゃないから。報酬とか貰わないから」

「馬鹿を言うな。そんなんじゃないあ、これから一生食って行けないぞ」

「食って行くつもりはないから！　そういう機関じゃないから、ここ！」

「いえ、いいですよ。これは完全に私個人の依頼で、校長としてあるまじきものです。口止め料として、何かしましょう」

「そんな、校長」

「話が早くて助かるな、校長」

「おい」

「じゃあ、とりあえず、執行部室にハイビジョンテレビを設置して貰おうか。勿論、一番高い奴だ」

「何で上から目線！？　そんなの無理だろ！」

「解りました」

「解っちゃったんですか！？」

「寧ろそれで済むなら、今すぐ設置しましょう」

「無駄に仕事早いですね！　ていうか、本当にいいんですか？」

「ええ、構いませんよ。ただし、これから先は忙しくなるでしょうがね」

校長は手を組んで、顎を乗せる。

「もう生徒達には、執行部はボランティアグループというイメージが浸透してるはずですよ。これからは、理不尽な依頼やくだらない依頼等がたくさん来るでしょう。更には願望書の処理や雑務。五人では手に負えなくなるかもしれませんよ。それでも、いいんですか？」
「勿論！」

俺は立ち上がる。

「それが理想ですからね！ 毎日仕事で忙しい！ 嫌になる！ でも、楽しい！ そんな機関を、このメンバーで作ることが夢だったんです！ まだ夢は始まったばかりだ。こんなところで、終わらせる訳がありません！」

俺の熱弁に校長は静かに笑い、立ち上がる。

「そうですか、解りました。好きにするといいでしょう」

「ええ、好きにさせて貰いますよ！ さあ龍、戻るぞ！」

「もう戻るのか？」

「当たり前だろ！ 楽しい時間を無駄にする手はない！」

「楽しいんだか、面倒なんだか……」

そう言いながらも、立ち上がる龍。

「二年生か、卒業はまだ遠いな……」

執行部のメンバーを全員二年生で揃えたのには、訳がある。

皆で一緒に卒業出来るからだ。途中で、誰も欠ける事がないからだ。途中で誰かが居なくなるなんて、悲しいからな。

「さあ、行くぞ龍！ 俺達の青春へ！」

「最も俺に合わないワードだな」

「何言ってるんだ！ よし、俺がお前をそういう人間にしてくれる！」

「完全に断る」

「何だとお？ 俺に任せればなあ」

そんな会話をしながら、俺達は執行部へ戻る。

夢はまだ、始まったばかり。何の駅にも到着していない。通過もしていない。

終点は、まだまだ遠い。

「天川さん！ 龍さん！ 高級ハイビジョンテレビが、業者さんに
よって神速で設置されました！」
『仕事早いなあおい！』

第4話「記憶は夢に敷かれている」

「という訳で、俺達で番組を作ろうと思う！」

「どういう訳だ」

今日の活動もいつも通り、天川と龍の応酬で始まった。

今の執行部室には、先日設置された大型ハイビジョンテレビがある。オレの家のテレビはちっちゃいテレビだから、こんなでかくて迫力のありそうなテレビで番組を見れるのは結構感動的だ。

唯一、二ノ宮が「こんなんじゃない駄目です！ もっと大きくて画質がいい物がですね」と、文句を垂らしていたが、学校でこれはかなり豪華なはずだ。校長室にもないだろ、こんなの。

そんなテレビを背に、天川はそんな事を言い出した。

「昨日届いた数ある願望書の中に、こんなのがあつたんだよ」

天川は資料を一枚取り出し、龍に渡す。

「えーと？ これは放送委員会からだな。？教室にある小さなテレビを使ってなんかできないでしょうか？ 使う時と言ったら授業だけで、もつと活用出来る気がするのに勿体無いと思います。放送委員会は昼の放送で手一杯なので、執行部の方で何か案はないでしょうか？ 放送委員会も可能な限り協力するつもりなので、必要な事があれば放送委員会に申し付けして下さい？ だと。また面倒な事を……」

龍は如何にも面倒な様子でため息を吐くが、出来ない訳でもなさそうだし、放送委員会も協力する姿勢っぽいから、やらざるを得なさそうだな。

「それで、番組ですか……」

二ノ宮も若干面倒そうに言った。

「うむ。テレビと言ったら、番組だからな！」

「具体的な内容は何なんですか？」

「それを今から決めるんだよ！」

と言っても、俺の中では即決

な案があるんだけどな！ 会長たる者、役員全員の意見を吟味しなければならぬ！」

「なるほど……。流石は会長です！」

「という訳で、番組の内容を決めるぞー。まずは、メグあたりはどうだ？」

何故か最初に振られてしまった。

「オレかぁ……。あんまテレビ見ないから、わかんねえわ」

「なんかやりたい事はないのか？ メグは妄想が激しそうだから、結構あると思うんだけど」

「オレそんな風に思われてんの！？ 妄想なんか全然してねえよ！」

「やらしい方向だもんな」

「勝手に話を進めんな！」

「いやいや、今更隠しても遅いから。なあ、龍？」

「うん、遅いな」

「え！」

「なあ、春？」

「関野さんは、この中で一番の乙女です！」

「ええ！？」

「なあ、夕？」

「……（笑）」

「笑うんじゃねえ！」

そんな……。オレがそんな風に思われていたなんて！ 妄想激しいとか乙女とか……。まんま女に見られてるじゃねえかよ！ 一話のオレの孤高で凛々しいイメージはどこへ消えたんだよ！

「！ そうだ、最近オレの立場がおかしいぞ！ 何でオレはいじめられキャラの立場を確立してるんだよ！ そういうのは、二ノ宮あたりが妥当じゃねえか！」

そうだ、オレはここに入った当初、一話の時点ではいじる側に居たはず！ 一方の二ノ宮はいじられる側にあつたはずだ！ 何故ここに来て立場が逆転している！？

だがどうしてだろう。指差した二ノ宮は首を傾げてるし、他の皆も何だか訝しげだ。

「何を言っているんだ、メグ。立場が逆転とか、そもそもしてないから。初めからこの立場だから、メグは」

「ああれ！？　またオレの考えて事、顔に出てた！？」

「うむ。特にそのペツタンコな胸にな」

「もう胸の事はいいんだよ！ 二話でいじつただろ！」

「いや……。その胸も、シリーズを通しての課題だと、俺は考えている」

「何でオレの事だけ永久課題!？」

「だって、ねえ？」

うん

「頷くな
！ 大体、今はそれは関係ねえだろ

「番組の内容だろ！？」

「だいじょぶだいじょぶ。今日は時間たっぷりあるから、思う存分
いじれるぜ」

「その時間は会議に使え

!

「まあまあ。楽しいからええじゃないか」

「いじられる方は割りと楽しくねえよ！」

「あれ？　メグはMだろ？」

「違えよ！？ 普通だよ！」

「私は、あると思います！」

「ねえよ！ 普通だよ、オレは！」

「(苦) ……」

「苦笑すんな！」

「龍。将来のフィアンセとして、それはどう思う？」

「将来のフィアンセえ！？ な、何勝手に決めてんだよ！ 要らね

えよ、今現在もゲームに没頭してるような奴なんか！」

「おいおい、それは二話の時点でフラグ立つたんだからさあ、素直に認めようぜ。もう回避不可能だから。なあ、龍？」

「え？ あー、そうだな」

「はああ！？」

「ほーら見る。龍はもう、いつでもOKらしいぜ！」

「いやぜってえ話聞いてねえだろ！」

「さあ、龍の元へ飛び込むんだ！」

「さあ、じゃねえよ！飛び込まねえよ！」

「なあ、龍。いつでも準備OKだよな？」

「え？ あー、OKOK」

「お前はそろそろ話の流れを理解しろよ！ まともに会話する気あるのかよ！」

「いやまったく」

「だ、たよな……。誰がこいつと、フィアンセなんて！ け、結婚なんて……。御免だ、絶対。……。そんなの、まだ先の話だし……。」

「……変な事を考えると、また顔に出るから止めておこう……。」

「顔じゃなくて、胸な。ペタンコな胸」

「いちいちペタンコ言うな！ とにかく、オレの意見はねえから、別の人に回せよ！」

「ちえっ、解ったよ。じゃあ春」

「はい！ 任せて下さい！」

「と見せ掛けてタ」

「拳手していた二ノ宮はガクンとなる。」

「ま、またですか！ また華麗にスルーなんですか！」

「何故かそういうキャラが定着してしまっただな」

「くっ！ いいですよ、スルーすればいいじゃないですか！ 好きなだけスルーしちゃって下さいよ！」

「解った。という訳でタ、何かやりたい番組とかないか？」

「相変わらずな神速でタイピングした後、画面を天川に見せる。」

「どれどれ……。？ズバリ！ 今年のオススメアニメ特集・深夜Ver-?……」

「ワクワク」

「ワクワクされても困るんだけど！ どうすればいいの、この一部の生徒にしかウケない番組！ 採用はする訳ないけどさ、すると期待してワクワクしてる人が居るんですけど！」

「ジー」

「なんか上目遣いで舐められるように見られてるんですけど！ どうすればいい？ ねえ、どうすればいいのさ！」

「……………」

「くそっ、ここぞつて時に黙りやがって！ ……いいか、夕。番組っていうのはこの生徒が全員見るんだ。そんな解る人にしか解らない内容の番組を流す訳にはいかないだろ？ だから」

「……………（涙）」

「泣いた！？ 泣いちゃったのか、夕！」

「シクシク」

「……………」

「え、ちょ、何で俺が悪いみたいな視線！？ 俺は正論を言ったぞ！ 全校生徒の事を考えた、至極まともな主張を言ったぞ！」

「ウルウル」

「うっ、そんな目で見られたら……。いや、駄目だ！ こればかりは、譲れない！」

「チッ」

「何で皆で舌打ち！？ あーもう、とにかく夕の意見は全面却下！」
「……………ゴオオオオオオオオオオ」

「燃えてる！？ 夕の中で何かが燃えてる！」

廣瀬はパソコンを自分の手中に戻した後、再び神速でタイピング。一体何をしているかは、あまり知りたくない。とりあえず、今後の天川の身が危なくなるかもしれないな。

「はあ、じゃ、最後は龍な」

「！？」

自然と龍が名指しされてたが、忘れられている二ノ宮が驚愕していた。

「そうだな、やはり」

「ちよつと待つて下さい！ 私がまだです！」
負けじと、二ノ宮は天川に食い付く。

「え？ 春はもうスルーでOKなんだろう？」

「程度があるでしょう！ 普通、次は私です！」

「春に普通が通用するとても？」

「しますよ！ 私は普通の一般市民です！」

すると天川は深刻な表情で胸を抑え、深呼吸する。

「……解った。解ったから、覚悟を決めさせてくれないか？」

「何の覚悟ですかぁ！」

「例えるなら、核戦争」

「使い回し！？ 三話のネタをそのまま使い回しちゃっていいんですか！」

「春なら許されるはずだ、きつと」

「その根拠は何なんですか！ とにかく、役員全員の意見は平等に尊重するべきです！ 民主主義的に進めるべきです！ そんな常識も守れないなんて、それでも会長ですか、天川さん！」

「必死すぎワロタ」

「むかつく笑い方しないでください！ 天川さん、悪ふざけにも程がありますよ！」

「解った解った。ったく、これだからお子様は……」

「確かにこの中では一番年下ですけど……私は飛び級ですよ！ 普通に進級を重ねている皆さんより、私は凄いです！ そんな私の意見には、より耳を傾けるべきだと思います！」

「ふう……。もう、疲れるからいいや。聞くよ、聞く聞く。だからさつさと言ってくれよな。まったく」

「ひ、酷い扱いです……。まあいいです。いいですか？ 私が提案するのは、より庶民的で、高校生の内に知っておけば、将来役に立つ事を発信する番組です！」

二ノ宮が人差し指を吊り上げながら言った。

「ほう、その心は？」

「ずばり、雑学番組を提案します！」

「二番煎じ臭がぷんぷんするな」

「そうですか？　ならば、料理番組でどうですか！」

「それ自体は構わないが、この中に料理出来る奴は居るのか？　ちなみに俺は普段からコンビ二弁当だから、料理なんてからっきしだぞ」

二ノ宮は「むっ」として、一人ひとりの顔を見ていく。

「当然の事ながら、私は不可能です。とすると、関野さんは……出来る訳ないですね」

「むかつく言い方だが、出来ねえな」

「夕さんは一人暮らしですよ？　だったら出来るはずですよ！」

へえ、廣瀬って一人暮らしなのか。なら出来ても不思議じゃねえな。

と思つたが意外にも、廣瀬は自信無さげに首を振つた。

「ええ！？　出来ないのに一人暮らしなんですか？」

「通販で生きてる」

「そうなんですか……。じゃあ龍さん……は訊くまでもないですよ」

その言い方に、龍は「おいおい」とゲーム機を置いて反論する。

「侮つて貰つては困るな。俺だって料理ぐらいは出来るぞ」

『え』

さらりと、龍の口から衝撃的な発言がなされた。

いくらなんでも、それはないぜ。ゲームオタクは普通、出来ないのが定石のはずだ。……てか、こいつのキャラっておかしくないか？　ゲームオタクの癖に喧嘩はめっちゃ強いし、イケメンだし、更に料理も出来るって……。どんだけ万能なんだよ！

「出たな、このパターン。だが今回は動じないぞ。出来るったら出来るし、悪い事ではないはずだ」

「……ならば、料理番組案は無いですね」

「何でそうなる!？」

「龍さんの料理なんて、生きるか死ぬかの選択肢の時以外に食べた
くないです……おえ」

「想像して吐くな! ちゃんと喉に通る物を作れる。例えば、スク
ランブルエッグとか」

「それは誰でも作れますよ!」

「そうか。じゃあ、豚ばら炒めのキノコソテーだっけ、何だっけ……
まあ、そんな奴」

「本当に料理出来るのかは解りませんが、とにかく、料理番組は却
下です! 龍さんが主導する番組なんか、ブーイングの嵐に決まっ
てます!」

自分で提案しといて何自分で却下してるんだか。龍は若干不満そ
うな顔をしたが、ゲームの方が重要らしく再びゲーム機を手にした。
「よく考えると、この執行部で定番の番組をやるのは無理な気がし
て来ました!」

「今更気が付いたか、春」

普通の人間が少ないからなあ。世間から見れば、外れてる人間ば
かりだし、ここ。

「じゃあ、最後は龍な。さっき言い掛けた事は?」

龍は手を忙しく動かしながら、画面を見たまま答える。

「勿論、ゲームのゲームによるゲームのためのゲーム特集
」

「という訳で、俺の案で決定だな」

「……………」

食い付いても無駄だと考えたのか、龍はそのままゲームに没頭す
る。

「んで、そのとっておきの案は何なんだ?」

オレが代表して訊くことにする。

「いやいや、ここで種明かしをしたらつまらないだろう? 明日の
お楽しみだよ」

「はあ？ それはないだろ。横暴だぞ、それは」

「かかったな！ リバースカードオープン！ ？会長権限？！」

「何だそりゃ」

「この効果により、俺以外の役員の意見を無効にし、俺の意見を無条件で決定事項とする！」

「何て理不尽な！ ていうかそれ使うなら、オレ達の意見聞く必要なかっただろ！」

「うん。だって、暇潰しだもん」

「オレ達は暇潰し要因かよ！」

「既に、放送委員会ともコンタクト取ったしな」

「今回はやけに仕事が早えな！」

「おう。メグをたっぷりいじるためにな！」

「何で！ 何でそんなにオレをいじりたいの！？」

「楽しいから」

「オレは楽しくねえんだけど！」

「そういうことを健気に言って反論するのを見てるのが楽しいんだよ……ふふふ」

「ドSか！」

「ドMか！」

「違えよ！」

「まあまあ、そうかつかすんなや。まだ始まったばかりやで？」

「何で急に関西弁！？」

「ドSと言ったら、やっぱり関西弁かと思って」

「関西人に謝れよ！ 別にそういう人ばかりじゃねえよ！」

「いやあ、やっぱりメグをいじると楽しいなあ」

『楽しいなあ』

「もう帰らせるおおおおおおおおお！」

そんな訳で、結局帰りまですっといじられたオレ。もうこれはいじめなんじゃないかと思うんだが、どうだろう。

喧嘩なら負けねえのになあ、龍以外。はあ……。

翌日。執行部室には、いつも居るはずの天川は居ない。何故なら、今は番組の中継先に行っているからだ。今日は天川の考えた番組を、ここだけに試験的な意味で流すと言う。

「にしても、中継なんか出来んのかよ」

恵が怪訝そうに言つて、二ノ宮がテレビを見ながら言う。

「さっき放送委員会がテレビに細工してましたから、きっと本格的な番組が出来ると思います！」

まあ放送委員会も承諾した内容だから、変な事はしないだろうが……。それでも嫌な予感がするのは何でだろう。

「四時半だ。テレビつけようぜ」

恵がそう言つと、二ノ宮がテレビの電源を点ける。すると、そこにはマイクを持った天川の姿があった。

「あー、あー。おーい、聞こえてるかー」

「聞こえてますよー、天川さん！」

二ノ宮が大袈裟に手を振りながら答えた。

「よーし、じゃあ始めるぞー。山高生徒会執行部による、突撃！
役員の家！」

「二番煎じな癖に語呂悪いなあい！」

恵がツツコむ。だが天川は「チツチツチツ」と指を振る。

「甘いな、メグ！ これは執行部の役員の知られざる素性を探り、全校生徒に知って貰う事で俺達をより理解して貰い親しみを持って貰うという素晴らしい番組だぞ！」

「オレ達からすりゃとんだいい迷惑だな！」

「という訳で今日来たのは、こちら！」

そうしてカメラが映し出したのは、ある一軒家。とても綺麗な外見をしていて、住む人の性格がそのまま表れているような。

……んん！？

「ではでは、突撃してみましようかー」

「ちょっと待った！」

俺は天川を玄関の目の前で止める。

「どうした、龍」

「どうしたもこうしたもない！　そこは俺の家だぞ！」

『えっ！？』

皆が一斉に驚く。いや、廣瀬は相変わらずノーリアクションだったが。

「いや、そういう番組だから」

「だからって本人の了承も得ないでそんなのをやるな！」

「大丈夫、もう取ってあるよ。詩織さんに」

「まずは役員である俺に取れ！」

「何言ってるんだ。お前の家じゃないだろう？」

「ぐっ！　そう言われればそうだけど、そうじゃないような……」

「という訳で、ゴー！」

「ああ、くそっ！」

何だろう、この気持ち！　勝手に自分ん家に入られて行くこの気持ち！　いや、俺ん家じゃないけどさ、じゃないけどさ！

「龍さんの私生活……非常に興味があります！」

「義理の家族つても見てみてえな」

「サッ」

廣瀬に関しては、ビデオカメラを構えていた。やめろと言ってもやめないだろうから、敢えて言わないが。

「お邪魔しまーす」

「いらっしやい、天川君」

玄関を開けた天川を、相変わらずの制服姿で詩織が迎えた。

「おおー、詩織さん。相変わらず美しい」

詩織は、天川のお世辞に「あらやだ」とわざとらしく言って、頬に手を当てる。

「ふふっ。毎日龍に、たっぷり時間をかけて洗って貰ってる甲斐があるわ」

「大丈夫。楽しいから」

「論点がおかしい！ 俺は楽しくないぞ！」

「もうっ、龍ったら、照れちゃって」

「そのキャラもそろそろやめてくれ！ 俺を見る目がいいよ鋭さを増してきた！」

「じゃあ、様付けね」

「詩織様はどんなキャラがお望みなんでしょうか」

「うーん、龍のお嫁さんかな」

「詩織様どうかどうか怒りを、怒りをお静め下さって下さい。お願いです、詩織様。これ以上俺を変な目で見られないようにして下さい」

「もう、仕方ないなあ。今日だけだゾ」

「結局変わらなかった！」

「以上、龍と詩織さんによる夫婦芸でしたー」

「はあ、もう、ツッコむ気力が出ない……。そうか、昨日やけに鼻歌が高かったと思ったら、このフラグだったのか。くそっ、あの時にしっかりと対処しておけば良かった……」。

「冗談はともかく、詩織さんってかなり美人だな。モデル並じゃねえか、あれ」

「恵が感服していた。一応俺は補足を加えておく。」

「実際にスカウトされたらしいからな」

「え！？ す、すげえじゃん、詩織さん！ スカウトを蹴ってまで、龍の事を……」

「今の状況じゃまったく嬉しくないから、その認識はやめて欲しい」

「それにしても凄いです！ あんな変なキャラをやっている、一切美しさが崩れないとは！ まさに美の結晶！ 龍さんには、酷く勿体ないです！」

「ああ、もうそれでいいよ……。いや、別に付き合ったりしてる訳じゃないからな」

「でも、一緒に住んでるじゃないですか！」

「まあそうだけど……」

「ああ、何て寛大なお方なんでしょう！　こんなゲームばかりしている駄目人間を、優しい母性を伴いながら養ってくれているなんて！」

「お前には言われなくなかった事実だが、詩織には感謝の気持ちで一杯ですよ」

「……ポツ」

「ん、どうした廣瀬。何だか顔が赤いぞ」

「萌えた」

「何だとお！？　おいやめてくれ、詩織をそんな目で見るのはやめてくれ！　下手したら詩織は受け入れてしまつかもしれないから、本気でやめてくれ！」

「じゃあ、脳内で我慢する」

「それも何か嫌だけど……それでいいや、もう」

テレビを見ると、天川は詩織と適当な雑談を交わした後に、靴を脱いで家に上がる。

……待てよ。詩織の次は……。ああ、気が重くなる……。

「ま、立ち話もなんですから、中へどうぞ」

居間に邪魔した天川を次に迎えるのは、

「あ、どうもすいません。おっと、この子は……」

「あつ！　あまかわおじさん！」

苺だよな、やっぱり。いやそれ以外にないけども。

青いワンピース姿でごろごろしていた苺は、天川に飛びつく。ていうか天川、おじさんって呼ばれてるのかよ。なら俺もおじさんじゃないか……。

「やあ、苺ちゃん。相変わらず、詩織さんの妹なだけあってすっごい可愛いね、ホント。それに良い匂いだ。このままガブリと食べちゃいたい」

何だか感想が変態的だ！

「えへへー。ちゃんとひとりで、からだあらえるもん！」

「苺、ちよつと」

「？ なぁに、しおねえ？」

何故か詩織が苺を手招きし、耳打ちする。

「身体は、まだ一人では洗えないでしょ？」

おいカメラ！ 音を拾ってるぞ！ そこは拾うべきじゃないんじゃないのか？

「え、なにいつてるのしおねえ！ いちごはこれでも。あ、そうか！ そういうことなんだね、しおねえ！」

「そういう事よ。流石、私の妹ね！」

苺は天川に再び近付き、見上げる。

「あまかわおじさん！ さっきのは、なし！」

「うん？ 身体は一人で洗えるんだろう？」

「ううん！ ほんとはね、まいにち、りゅーにいていないにあらつてもらってるの！」

『え』

「姉妹揃って何言ってるんだあああああああ！」

またこれだよ！ 何で苺は悪いところばかりを姉譲りなんだよ！ 良いところだけ譲られてくれよ！

「苺！ おおい、苺オオオオオ！」

「ふにゅっ！？ りゅ、りゅーにいが、カメラのなかに！？」

「違うよ！ 中継だよ！ とにかく、苺！ 嘘は吐いちや駄目だろ！ 嘘を百回吐いたら、天国で舌を抜かれちゃうぞ！ 凄く痛いんだぞ！ いいのかそれでも！」

「うつ……。あまかわおじさん、ごめんなさい。ほんとは……」

よし！ 苺はまだ幼いから、ボケとツツコミの応酬は出来ない！ これで丸く収まる！ 不幸中の幸いといったところか！

しかしその影で、不穏な動きが。

「待ちなさい、苺」

やはりお前か！ 何で邪魔をするかな そこまで俺をいじめたいのか！？

「しおねえ……。うそをひゃつかいっていたら、てんごくでしたぬかれるって。したぬかれるのは、やだよ……」

「大丈夫よ。それは、龍の吐いた嘘だから」

「汚いッ！ 確かに、それは迷信かもしれない！ 嘘かもしれないけども！」

「え？ じゃあ、りゅうにいうそつき！」

「そうよ！ だから、苺も存分に嘘をついていいの！」

姉による悪い教育が始まってしまった！ 嘘を存分に吐いて良い状況は、少なくとも今ではない！

「わかった、わかったよ、しおねえ！ いちご、いきます！」

「行きなさい、苺！」

「あまかわおじさん！ いちご、うそつくね！」

「ああ、行きな、苺ちゃん！」

「うん！ いくよ！ いちごは、からだをひとりではあらえません！ いつも、りゅうにいらつてもらってます！」

「台無し！ カメラが見事に現場を捉えてたからそのよく解らない覚悟とかが台無しだ！ それに嘘って言っちゃったら、言う意味ないだろ！」

「しおねえ！ やったよ！ いちご、うそついたよ！」

「ええ、苺。よくやったわ。流石は私の妹ね！」

何故手応えありなんだ！？

「あまかわおじさん！ いちご、うまくうそつけたかな？」

「ああ、感動した！ 龍も今頃、焦ってるだろうさ！」

何でそんなので感動してるんだよ！ この番組は？ はじめてのうそつき？ か何か？

「りゅうにいい！ いちご、うまくうそつけたよね？」

「それ言った本人に訊いちや駄目だろ！ 全然駄目だよ、苺に嘘を吐くのは後三年くらい早いよ！」

「そ、そんなあ……」

俺の言葉を聞くと、苺はペタンと床に崩れる。……しまった。苺

は過剰に他人の言葉を受け取るから、リアクションも過剰になるんだった。

でもそれは、残念ながら事実だ。このどうしようもない現実を突き付ける事も、兄としての務めなのだ。めげるな苺よ。その敗北感を取り越えてこそ、人は成長していけるんだ。

「しおねえ。りゅうにいが、うそつくのはひやくねんはやいって……」

いや待て、百年とは言っていないぞ。

「よしよし。　　龍。今日帰って来たら、説教だからね!」

「ええー!　何でだ!?　俺は良い方向に教育したぞ!　ていうかどう考えても、お前の方が説教されるべきだろう!」

「あまかわおじさん。りゅうにいが、うそをついちゃだめだって……」

「よしよし。　　龍!　今すぐ説教だ!」

「何でそうなる!」

『説教だ(です)ー!』

「あああ!?!」

な、何で。何でいつもこうなるんだ……。俺は、苺の事を想って言ったのに。苺に姉の悪いところを受け継いでしまわないように頑張っているのに!

そりゃあ俺は血も繋がってない偽りの兄かもしれないが、それでも俺は本当の妹だと思って日々接しているというのにこの有様。一体何が……。俺の何がいけないんだ……。くそっ、何だか頭の中に蛆虫が沸いたような感覚が……。ツ!

……。あ。

「ああ!?　龍さんが机の角をむしり取ってしまいました!　天川さん、まずいです!　龍さんが、壊れるかキレます!」

「何っ。それはまずいな……。お二方、これ以上冗長になるとまずいです。ここは龍を落착けさせなければ。ちよっと協力して貰えますか?」

「そうね……龍は本当、短気だからね。じゃあ苺、さっきの事、龍に謝りましょうね」

「うん、あやまるー!」

「龍! 苺ちゃんが、もう嘘はつかないって!」

「……え?」

ほ、本当なのか……? 俺の願いが、ようやく叶ったというのか!?

「苺、ほら! ちゃんと龍に謝りなさい」

「りゅーにい、うそをついてごめんなさい」

画面の苺がぺこりと頭を下げて、丁寧に謝罪をした。ああ良かった……。俺は正しかったんだ……。努力は実るものなんだ……。

「解れば良いんだ、苺」

「もううそはつかないから……」

「ん? つかないから?」

苺は少し頬を赤らめながら、カメラに向けて一言。

「からだをあらってください!」

「何でそうなるんだああああアアアアアアアアア!」

何とか叫び続けていた龍を落ち着かせたオレ達は、番組の続きを見ている。

結局は、生徒会会長である小淵の一喝で龍は静まった。しかし驚いた。思わず耳を塞いでも鼓膜に届くような、でかい声が出るとは。あんな声で怒鳴られたら、そこら辺のチンピラも黙るだろうな。

「龍が落ち着いた事ですし、インタビューでもしましょうか」

あの言い方だと、実際は何をするかは決めていなかっただろうな。じゃあ、どんな質問がいいですか?」

インタビュアーが相手に質問を訊いてどうすんだよ!

「簡単な事でいいんじゃないですか? 私は何でもいいですけどね」
「いちごもなんでもいいですよ!」

あー、にしても尊ちゃんは可愛いなあ。あの姉あってこの妹あり
つてか。思いつ切りわしゃわしゃしたい。

「簡単な事かあ。んじゃあ、龍について、どう思います?」

「何で簡単な事で俺を出すんだ!」

また龍をいじるのかよ。壊れないか心配だな。

「早急に正しい教育が必要ですね」

「ですね!」

「童貞だしね」

「だしね!」

『え』

つまり……あれか。大人の教育が必要って……事なのか……?

「おおおおおおおい! いい加減にしるおおおおおおお
!」

「じよ、冗談よ……。やーね、本気になっちゃって」

「やーね!」

「……悪いがな、もう俺は精神的に限界を迎えつつある」

バキッ! パラパラ。

今度は、さつきむしり取った机の欠片を握っただけで粉々にしち
まった。うわあ……どんな握力してんだよこいつ。ゲーム機壊れん
だろ。

「……詩織さん、真面目に行きましようか。龍が、そろそろまずい
です」

「そうね、このままだと、帰って来た瞬間に襲われるわね。大切な
処女を奪われちゃう……」

「ふううー……!」

「いよいよツツコミを放棄しましたからね。これは相当来てますよ」

「あんな龍を見るのは、あの時以来ね」

あの時?

もしかして龍も、オレ達と同じような野蛮な時期があったって事
なのか?

「うう。りゅーにいがまたあなるのは、やだよ……」

葛ちゃんが怯えている。その時の龍は、このか弱い葛ちゃんにまで手を出したのか……？ やべえな、想像しただけで身震いしちゃう。

「大丈夫だ、葛ちゃん。ふざけずにちゃんとしていれば、龍は怒らないから」

「うん！ わかった！」

「じゃあ、まずは葛ちゃんに質問！ 葛ちゃんにとって、龍はどんな存在でしょうか？」

「りゅーにはね、いちごにとって……」

「葛ちゃんにとって？」

葛ちゃんは一度言葉を切って、息を吸って言った。

「いちごとって、かけがえのない、せかいいちだいすきなあにです！」

また変な事を言うのではないかと思っていたけど、どうやら見当違いだったみたいだ。

そんな事を簡単に言ってしまうのは、歳を重ねた身からすると羨ましいぜ。いつからだろうな、あんな風に？ 好き？ という言葉を簡単に言えなくなったのは。オレと同年代の奴らじゃあ、真剣な気持ちでそんな恥ずかしい言葉をこんな場で言える奴は居ない。

「りゅーに……おこってない？」

葛ちゃんは龍に恐る恐る訊いた。龍は偽りではないであろう笑顔を作り、優しい声で答える。

「大丈夫。ありがとうな、葛」

「えへへー。どういたしましてですよ！」

無邪気に笑う葛ちゃんを見ると、思わずこっちも笑顔になってしまう。それは、皆も同じようだった。いつの間にか、他の皆も笑顔になっていた。

「じゃあ次は、詩織さんですね」

「……どうやら、真剣に行かなきゃいけない空気のような」

また変な事を言う気だったらいい。自重する気なしがこの人は。
「それでは、詩織さんにとって、龍はどんな存在でしょうか？」

詩織さんは「はい」と前置きをして、数秒の間を置いた後に言う。
「私にとって龍は、世界一大好きな人間です」

居た。

恥じらいもなく、他の人が見ているところで容易く？好き？と言える人が。毎の天真爛漫さは、姉譲りらしい。それ自体はとても良い事ではあると思うんだが、ケースバイケースだろう。

俺は額を抑えながら、視聴を続ける。

「……撮られている中で、そんな大胆な発言をするとは……。その心は？」

「心も何も。これは私の、正直な気持ちです」

ツツコめない。この類の台詞は、何度も聞いたから。本気だつて事は解ってるから。詩織の真剣な想いに水を差すような真似は出来ない。

「初めて会った時から好きだったんです。彼とは中学で出会ったんですけど、その時から好きで好きで仕方がなくて。まあ、そこから色々あつて……。今はこうして、一緒に住んでいます。それがとても幸せなんです。もし、龍が居なくなると考えたら……。いえ、考えたくありません。龍は今の私にとって、家族と同じくらい、大切な存在だから……」

ふと顔を上げると、他の皆が俺を凝視していた。？信じられない、こんな奴を？みたいな視線だ。その事に関して否定はしない。する資格が無い。

「龍」

詩織がカメラの中から、俺を呼んだ。俺はカメラの詩織を見る。

「好き。大好き。誰よりも、愛してる」

いつの日か俺に言った同じ台詞を、再びこの場で俺に放ってきた。

俺は俯いて答える。

「……そうだな」

俺に答えられるのは、こんな生返事だけしかない。

「そうだな、じゃなくて！ 答えて！ 龍は私の事、好きなの！？」

今まで冷静で悠然としていた詩織が変貌し、必死の形相で俺に答えを求めて来た。だが今の俺に、その答えは見つかりっこない。

「答えられない」

俺はそのまま、短く答えた。

「嘘でもいいから、答えてよ……」

涙を呑みながら、詩織は言っていた。

だがもう、嘘は言えない。これ以上、彼女の想いを侮辱出来るものか。

「答えられない」

「……うっ」

「ストップ！ カメラ、カメラ止める！」

天川がそう指示したことにより、テレビの画面にノイズが走った。

俺は深くため息をつき、立ち上がる。

「帰ったら、説教だな」

「お、おい龍……」

恵が心配して声をかけてくる。

「大丈夫。これはいつもの事だから」

「いつもの事なのかよ！？ なら尚更だろ！ 何で答えてやんないんだよ！」

「答える資格……理由がないからだ」

この事はあまり言いたくはなかったが……。遅かれ早かれ、いずれは公になる事実。どうせの機会だ、ここでしっかりと明言しておこう。

「俺には、高校生以前の記憶がないんだ」

俺の発言に、部屋が静まる。

「いや、厳密には違うな。俺にはそれ以前の記憶は断片的にあるっ

ちやあるが、それは常軌を逸している」

「どんな……どんな記憶なんですか……？」

俺は目を瞑って、思い出せるだけの映像を投影させる。

「街だ……。街がある。俺達の住んでいる街じゃない。もつとどこか別の街。だけど、そう遠くもない街。銃声だ。悲鳴だ。血飛沫だ。俺の手に、一丁の銃がある。黒く、重い。まるで牙のような、何でも喰らい尽くしてしまうかのような獰猛な銃。それを、俺が撃つんだ。誰かに向かって。何度も、何度も。その度に、人がどんどん死んでいく。……気が付いたら、俺以外の人は全員死んでしまっているんだ。誰一人として、動いてる者は居ない」

相変わらずおかしな記憶だ。こんな物騒な話がある訳が無い。これが事実だったら俺は最早テロリスト。平然と高校生などやってられるか。

笑えてくる。妄想癖も大概にしろというものだ。

「ゲームのしすぎだな。どうかしてる」

「記憶が無いって………どういう訳だよ！」

恵がいつもの俺の台詞を使う。まったく、その通りだ。おかげで俺はこの様だ。きつと俺がこんな身体の原因も、そこにあるとは思う。

「なあ、廣瀬」

俺は前々から気になってたことを、廣瀬に訊ねる。

「この学校の生徒の情報を全て網羅してるんだろ？ 俺の情報は、

どうなってる？」

「………無い」

「無い？」

「どこを捜しても、無い」

「そうか………」

何となくそんな感じはしていた。簡単に見つかったら、苦労はない。

「見つける」

廣瀬が唐突に、そんな事を言った。

「絶対見つける。龍の事、絶対見つける」

「廣瀬……？」

一瞬冗談か何かかと思ったが、そうではない。こんな廣瀬の目は見た事が無い。本気でそう思ってくれている。勝手ながらそう確信した。

「……ありがとう」

「私も見つけますよ！ 私ん家の財力にかかれば、ちょちょいのちよいです！」

「おい二ノ宮、金の使い道を後悔するぞ」

「オレだって。いや、何にも出来ねえな、オレじゃあ……」

「いや、恵。気持ちだけでも嬉しいよ」

愚かな。俺は何て愚かなんだ。何故、こんな事にも気付けなかったんだ。

いつの間にか俺には、信頼出来る仲間が居たじゃないか。俺を想ってくれる仲間が。こんな俺を受け入れてくれる人が、こんな身近に居たんじゃないか。一人で抱え込んでいたのが馬鹿に思えてくる。

俺はもう、一人で悩まなくても良いんだ。ぶちまけていいんだ。

不満も、焦燥も、苦悩も。その為の居場所がある。その為の仲間が居る。一人じゃ、ないんだ。

「あれ、テレビが点きました！」

先程までノイズが走っていた画面に、涙を拭いた詩織が映し出される。

「詩織……」

俺はテレビに近寄る。

「龍……さっきは、ごめんね……」

「謝るのは俺の方だ。何度も泣かせて、ごめんな」

「私、決めたの。龍を待つって」

「俺を、待つ？」

「私、焦ってたんだと思う。また龍が居なくなっちゃうと思って、

龍に私の事を押し付けて、無理矢理好きにさせたかったんだと思う。最低だよ、私。私が苦しんでるんだと思ってた。でも、龍の方がずっとずっと、苦しんでたんだよね……」

「そんな事はない。詩織の方が、苦しかったろう」

「うっん、それは私の甘え。実際は龍の方が……。だから、龍が私の事を心の底から好きって言うてくれるまで、待つ！」

「……今の俺で良いのか？ 詩織が好きなのは、昔の俺だろう？」

「導入はそうだけだね。でも今は、今の龍の方が好きだよ。昔より、素敵だもん」

「……そうか」

俺は頬を掻く。昔の俺の事は知らないが、そんな事を言われると若干照れるものがある。

「じゃあ、最後に言わせてくれる？」

「どうぞ」

詩織は、俺が見た中で一番の笑顔で、何回も聞いた台詞を言う。

「好き。大好き。世界の誰よりも、愛してる」

その言葉は、今までの言葉とは違っていた。重さと言えはいいだろう。軽くなった。昔の俺にじゃなく、今の俺に、初めて言ったような。

俺も笑顔で、さっきの言葉を言う。

「……そうだな」

詩織は笑顔で手を振る。そうして、画面には再びノイズが走る。

「俺にはもう、昔の俺には戻れない」

俺は皆を見て、自分の考えを言う。

「昔の俺がどんなだったか……。詩織が好きだった俺はどんな人間なのか、興味はある。でも、知る事は出来たとしても、所詮今の俺に昔の俺になる事は出来ない。だから、俺は今の俺で生きる！ 昔は関係ない！ 今生きている俺が、俺だから」

そうだ。俺は、今の俺は、変な身体で、めんどくさがり屋で、ゲームが好きで、詩織を何回も泣かせてしまうような、皆が言う通り

の駄目人間なのかもしれない。

でも、それが俺だ。生きているのは、この俺だ。昔の俺は、もう居ないんだ。

「じゃあ、オレ達ができる事はねえな」

「良かったです！ これで、お金を無駄遣いせずに済みました！」

「……ふう」

「皆、ありがとうな」

俺は素直な気持ちで礼を言った。

「何言ってるんだよ。こっちは変な夫婦芸を見せられてイライラしてるんだよ！」

「まったくです！ 関野さんが、嫉妬に狂いますよ！」

「（爆）」

「嫉妬なんかしねえよ！ ていうか、何で爆笑してんだよ！」

執行部室は、またいつも通りの雰囲気に戻る。恵はいじられ、二ノ宮は笑い、廣瀬はいつも通りパソコンの画面を凝視する。

「ねえ、龍さん！ 恵さん、嫉妬してますよね！」

「ああ、そうだな」

「してねえよおおおおおおおおおお！」

そして俺は、いつも通りの受け答えをする。

そして皆は、いつも通りの受け答えをする。

それがここ、生徒会執行部。

今の俺の、居場所だ。

第5話「約束は確実に反故となる」

「という訳で、俺は今とても怒っている。いや、焦っている。……いいや！ もう何が何だか解らないが、とにかく今の俺は憤怒と焦燥で満ち溢れているッ！」

「どういう訳だ？」

五月。桜は散って、段々と暑くなっていく頃。いつもなら俺の一番言葉を、代わりに龍が言っていた。完全に立場逆転である。

さつき執行部室に来てみたら、龍がやけに覚束無い手つきで鞆の中を必死に漁っていた。どうやら龍の怒りは、その行動の理由にあるようだ。まあその行動を見れば大体の予想は付くが、一応訊いてみる。

「一体どうしたんだ？ そんなに気を立たせて」

「当たり前だ！ こんな事態に、気が立たせずに居られるか！ 緊急事態だ！ 異常事態だ！ ああアッ、許すまじき事態だ！」

何か若干言葉が変だぞ。それだけ頭に来ているという事か。

「それで、どうしたんだよ」

メグが詳細を希望した。龍は「よくぞ訊いてくれた！」と反応し、その全貌を露にする。

「俺の鞆から、大事な物が無くなっているんだ！」

「はあ？ そんなの、ちゃんと管理してなかった龍の責任じゃねえか」

メグの言う通りだ。高校生にもなって、自分の持ち物を管理出来ない人間は、高校生にあらず。高校生はもう大人だぞ。

だが、龍は「違う！」と反論する。

「今日の六時間目は体育だった。俺は着替えた後、それをちゃんと鞆にしまったんだ！ そして体育から戻って見たら、それが無くなっていた！ これは明らかな盗難だ！」

龍の主張が終わったところで、春が「はい！」と拳手する。

「それでも、龍さんに落ち度があると思います！」

「何だと二ノ宮ア！」

「ひゃうっ」

龍の大きな返しに二ノ宮は驚いたが、負けじと自分の主張を張る。
「この学校では体育中、教室には誰も居なくなるために、年々盗難が相次いでいます！　なので学校側は、貴重品袋というものを各教室に配っております！　それに貴重品を預け、体育の教師の目に届くところに置いておくことで、盗難を防ぐ！　これに従っていれば、龍さんのそれが盗難に遭う事はなかったはずです！」

春の言う通り、この学校では体育中での盗難の被害が多い。本当なら鍵付きのロッカーの実施が一番だろうが、まず学校にそんな金はないし、今のところ実施する予定もない。

だから？貴重品袋？なるもので、盗難の被害を防いでいる。実際、これが実施されてからは、劇的に盗難の被害は減ったという（生徒会調べ）。

高校生の貴重品と言えば、携帯電話か財布。状況によっては保険証等か。それらをきちんと入れておけば、大きな被害は起きないはずなんだが。

「確かに、それは二ノ宮の言う通りだ」

「でしよう、でしよう！」

龍は一度は肯定したが、すぐさま「しかし！」と否定する。

「それでも盗難は起きてしまった！　よって、貴重品袋の定義は最早意味を成さない！」

「なっ……何という人なんでしょう！　自分の落ち度を無理矢理なくすなんて！　実施した学校側が報われません！」

一体何のための貴重品袋だと思ってるんだ、まったく。

だがそこをうじうじ言っても仕方ないので、話を進めよう。まずは、何を盗られたかだ。

「で、龍は何を盗られたんだ？　それによっては俺達は勿論、学校も動くかもしれないぞ」

「それはな……」

龍が俯き、声のトーンを下げる。ああ、これはかなり大切な物を盗られたに違いない！

「ケータイか？ 財布か？」

「違う。それくらいなら、こんなに騒ぎはしないさ」

個人情報や金より重要な物……？

「一体それは……？」

「それは……」

ゴクリ。

全員が唾をのみ、龍の言葉を待つ。

そして遂に、龍は沈黙を破り、言った！

「ゲームだ。いつも持って来てる、携帯ゲーム」

「へ？」

全員の、間の抜けた声が合致した。全員で顔を合わせ、安堵する。

何だ、ゲームかよ……何の問題もないじゃないか。

しかし龍は、「おい！」と声を上げる。

「何全員で安心したみたいな顔してるんだ！ これは大問題だぞ！

盗難が起きたんだぞ！」

「龍。はつきり言うが、今回はお前が悪い」

「な」

俺は龍に、厳しい現実を突き付ける。龍が悪いというのは少し語弊があるが、これが現実だ。

「基本的にゲームは不要品だ。学校生活でそれは必要性が無い。学校側も、それじゃあ盗難として動かないだろう。紛失扱いにされて、捜されもせずにおしまいさ」

「な、何を言う！ ゲームは貴重品だ！ 何万すると思ってる！？」

「それを学校に持って来る方が悪いぜ」

メグもまた、龍に厳しく当たる。

「高価な物なら尚更だろ」

「だが、しかし……！」

「さつきも言いましたけど」

更に、春が追い撃ちをかける。

「そんなに大切な物を、何で貴重品袋に預けなかったんですか？」

「そりゃあ、預けづらিদろ、ゲームなんて……」

「それですよ！」

ここぞとばかりに春は立ち上がり、龍を指差す。

「預けづらいと思うのは、不要品だと自身で僅かでも感じてる証拠です！ クラスの皆から？えー、こいつ、ゲームなんか持ってきてるんですけどー？と思われたくないんでしょう！ そう思える物を我慢出来ずに持って来る龍さんが悪いのです！」

「しかし」

「しかしもお菓子もないです！ 大体、ゲームは家で楽しめばいいんです！ その楽しみを学校に延長するリスクは高いと解っているはずです！ それに極端な話、貴重品を肌身離さず持っていないかったのがいけないですよ！」

「……くっ！」

龍は膝をつき、床を見る。あまりの正論に、降伏したようだ。

「龍」

夕が龍の名前を呼んだことで、龍は顔を上げる。

「廣瀬……。お前なら、解ってくれるよな？ この辛さと惨めさを！」

夕は膝をついている龍を指差し、短い一言。

「ざまあ」

まさかの止めだった！

「……俺に喧嘩を売るとはいい度胸だな廣瀬。よし、その喧嘩、買っつてやる」

『買ってやらないで（下さい）！』

立ち上がりやる気満々だった龍を三人掛かりで落ち着かせる。突然何を言い出すんだ夕は。そりゃあいじめたい気持ちは解るけど、節度というものがあるだろう。

渋々と席に戻った龍は、まだ悔しそうに机の上で拳を固めていた。
「おい龍。気持ちは解つけど、もうどうしようも」

「解る訳ないだろ！」

メグの励ましは逆効果だったようだ。

「わ、悪い……。そうだな……。ゲームオタクの気持ちなんか、解る訳ねえや」

若干悪意のある謝りだな。

「違うんだ、そうじゃないんだ……」

龍はガクガクと身を震わせる。

「この事がもし、詩織に知られたら……。！　うああ……。！」
『あ……。』

確かに、それはひどい目に遭いそうだ。増してや養って貰ってる身だからなあ。それに、詩織さんは龍の事を溺愛してるから、どんな鞭を食らうのか……。想像したくもない。

「くそっ！　何だってこんな事に！」

龍は机をバンツと叩く。いやまあ、完全に自業自得なんだけど。

何だか追い詰めるようでかわいそうではあるが、俺は更に厳しい現実を述べる。

「犯人を捜そうにも、無理があるんだよ。学校には生徒だけじゃなく外部の人間もたくさん入って来るからなあ。もしかしたら盗んだ奴はもう、この学校内に居ないかもしれない」

「くっ……」

「でも、おかしいですね」

二ノ宮が資料の山を見ながら言う。

「最近の被害報告に、盗難はありませんよ。何で急に、龍さんが狙われたんでしょうか？」

「！　狙われていたと言っのか！？」

龍が顔を上げる。

「まあ、毎日高価なゲームを持って来ていて、体育の時は無防備なら、狙われるのも仕方ねえな。格好の餌食って奴じゃね？」

メグが推考した事で、龍はハツとする。

「もしそうなら、犯人はうちのクラスの誰かという事になる！」

「それはどうかな」

俺は現実的な考えを龍に伝える。

「その考えも間違いじゃないが、根拠は無い。根拠を除いて考えるなら、別の可能性はたくさんある。盗んだ奴は、今日たまたま山高に来て、ちょうど漁った鮑が龍のだったっていう、偶然の産物かもしれない。それにメグの考えでも、教室には他クラスの生徒も入って来る。その誰かが龍をマークして、体育中に盗んだという事もある。こんな感じで可能性を探ったら、キリがないな」

「廣瀬！ 今日の体育の授業で、俺のクラスで休んだ奴は居るか？」
無視かい。ていうか、それくらい解らないのか！

廣瀬は少しパソコンをいじった後、画面を龍に見せる。ていうか、そんな事まで解るのかよ！ どんだけスペック高いんだそのパソコン！？

「岡村！ こんな奴が、やったというのか……？」

その女生徒は、ピンクの長髪で眼鏡を掛けている、容姿的には大人しそうな生徒だった。とてもじゃないが、盗みなどを働くような人には見えない。

「龍。こいつはどんな生徒なんだ？」

メグが訊いて、龍が答える。

「見た通りだ。クラスでは目立たず、仲の良い人と話しているくらい。授業での発言もないし、大分引っ込み思案だと思うが……。廣瀬、他には？」

夕は首を振った。

根拠は乏しいが、怪しい。龍の中ではもう容疑者はこの生徒しか居ないようだ。

龍は少し残念そうな表情をしたが、すぐに憤怒の炎をメラメラ燃やしながら立ち上がる。

「よし！ 岡村は確か吹奏楽部だよな！ 殴り込みに行つて来る！」

「ちよつと待て、龍」

立ち上がった龍を、冷静に俺は制止する。

「証拠が無いだろ。体育の授業で休んだだけじゃあ、簡単に言い逃れられるぞ。岡村さんを容疑者として追及するなら、それなりの裏付けが必要だ」

「持ち物を調べればいい！」

「女子の鞆を男子が漁るのか？　あまりにもそれは画的に良くない」

「執行部権限で大丈夫だろう」

「それを世間は、権力の濫用って言っただと思う」

「何を言うか！　役員が盗難に遭っただぞ！　これは正統な権力の使い方だ！」

「個人的な理由で使っちゃ駄目だろう」

「ああああもうッ、じゃあどうしろって言っただ！」

「まあ落ち着けて、龍。俺に考えがある」

俺も龍に倣い、肩に手を置いて言う。

「ここはあくまでも龍の勘を信じるとして……。もしこんな子が犯人なら、ちよつと鎌をかければすぐに吐き出すはずだ。それでも何の事実も出てこなかったら、別の可能性を探るって事でいいだろ？」

「鎌をかけるって……。どうするつもりだ、天川？」

「誘導尋問って奴だよ。　適当な紐を伸ばしておけばいい。そうすれば、足元を見ない青二才は、勝手に転んでくれるのさ」

「本当に上手くいくのか？」

音楽室へ向かう廊下の途中、龍が不安そうに俺に訊く。

「大丈夫だって。何だかんだで上手くいくさ」

「しかし、失敗したら」

「おいおい、今更弱腰になってどうすんだよ。ゲームを取り返したくないのか？　大事な物なんだろう？」

「それはそうだが……。よく考えると、岡村以外にも出来る奴は居

る気がしてきた……。他クラスの奴も疑うべきだったかもしれない」
その考えにもう一足早く至って欲しかったな。

だがもう遅い。俺達はもう、音楽室の前に居る。楽器の奏でる音が、廊下の外まで漏れてくる。うーん……正直、下手だな。

「腹括れよ。無実だったら、謝ればいいじゃないか」

俺は元氣付けるよう龍の肩を叩く。すると龍は意を決し、音楽室のドアを開け、中を見渡す。

普通の音楽室だ。中には吹奏楽部の生徒が居て、トランペットを吹いていたり、ドラムを叩いていたり。今は個人練習をしているようだ。龍は五人の女生徒の塊から、リコーダーを吹いていた岡村さんを見つける。

「岡村。話があるから、廊下に来てくれ」

龍の言葉と同時に、楽器の音が止まる。呼ばれた岡村さんは首を傾げ、リコーダーを持ったまま廊下に出る。

龍がドアを閉めたところで、俺は話を切り出す。

「岡村さん、今日の六時間目の体育、頭痛が原因で保健室で休んだ……。間違いありませんね？」

「？ 何ですか、突然？」

「すいません、執行関連なので、正直に答えてくれると嬉しいんですけど」

「はぁ……。はい、そうです。保健室の田中先生にも、そう言いましたけど……」

そこで龍が、今日起きた事を話す。

「まだ公にはしてないが、体育の後、俺の鞆から大事な物が盗られた」

俺は岡村さんの表情を見る。白か黒かは、この反応でだいたい解る。

「え、そうなの？ それは、不運だったね」

普通の反応だった。表情にも崩れは見えない。この時点で、岡村さんが黒だと言うのは厳しいか。

それでもここで俺達は、岡村さんに疑いの視線を送る。

「……！？ まさか、私を疑っているんですか？　ち、違いますよ！　私はその時間、ずっとベッドで寝ていました！」

「でもな、盗めそうな奴はお前しか居ないんだよ」

龍が嘆息気味に言う。それでも、岡村さんは反論する。

「そんな事はないよ！　学校には外部の人も入ってくるし、他のクラスで休んだ人がいれば、その人の可能性だってあるでしょ！」

尤もな考えだ。しかし、俺はそれを否定する。

「今日の六時間目に休んだ他クラスの生徒は居ないんだ。それに、その時間に入ってきた外部の人間も確認されていない」

これは真っ赤な嘘。真相は夕に頼めば解るだろうが、その必要はない。

「そんな！　それで、私がやったって言うんですか？　濡れ衣です！」

俺達は同時にため息をつき、岡村さんを見る。むつとした岡村さんは、「なら」と前置きし、言う。

「どうやって私がやったって言うんですか！　証拠もない癖に！」

執行部は、根拠もなく生徒を疑うんですか？　最低ですね！　私は、城古君のゲームなんか盗んでませんよっ！」

おっほう、すげえ言われよう。でも、仕方ないか。確かに、根拠もなく岡村さんを容疑者にしたのは事実だからな。

さっきまでは、の話だが。

「岡村さん、もう隠さなくていいですよ。今なら、龍だって許してくれます」

「なっ！　だ、だから、私はやってないって言ってるじゃないですかあー！」

「はあ。なら言わせて貰いますよ。岡村さんが犯人だって事実を」

俺は今の会話で得た情報を元に、岡村さん犯人説を話す。

「岡村さんは、保健室のベッドで寝ていたと言っていましたね。山高の保健室のベッドは、窓側。それに一階。簡単に保健室から抜け

出す事は出来ます。そこから教室に行つて、龍の鞆を漁る……と言っても、入ってる場所を把握していたでしょうから、手際よく盗れたでしょう。そして保健室に戻る……。教室は三階だから、首尾よく行けば五分も掛かりませんね」
「っ」

岡村さんの表情が引き攣っている。どうやら凶星のようだ。俺は更に続ける。

「そして決定的な証言です。あなた、龍は何を盗まれたと言つてましたか？」

「え？ それは、ゲームつて……」

そこで俺は、龍に顔を向けて訊く。

「言つてないよなあ？」

龍は何度目かの嘆息をして、言う。

「言つてないな」

「あつ……！」

岡村さんはそこでようやく、自分のミスに気付く。

「龍は最初に言いました。？これはまだ公にはしてない？と。あなたは言いました。？城古君のゲームなんか盗んでません？と。龍は言つてませんでした。？盗まれたのがゲーム？だとは。どうして盗まれた物が、ゲームだつて解つたんですか？」

「それは……その……」

「答えは簡単です！ あなたが、龍のゲームを盗んだ犯人だからですよ！」

俺はビシッと岡村さんを指差す！ 決まつた……。と言っても、全ては岡村さんの自爆なのだが。

岡村さんは観念したかのように俯き、小さく言つた。

「すいません……。私がやりました……」

そう言つと岡村さんは、一旦音楽室に戻る。鞆を取りに行つたんだろう。待つてる最中、龍が俺の肩を叩いて言う。

「なるほど。確かに、青二才という言葉は適切かもしれない」

「まあそうなんだけどさ……。うーん、何だかあまりにテンプレートな終わり方で、しっくり来ないなあ。もっと複雑な何かがあると思っただけど」

「こっちはテンプレートで安心して。余計な事なく、ゲームが帰ってくれば俺はそれでいい」

「それもそうだな」

何事もシンプルが一番だ。

話していると、岡村さんが戻ってきて、鞆から龍愛用の携帯ゲームを取り出す。

「城古君……。本当に、ごめんなさい」

「……もうやるなよ」

龍は先ほど固めていた拳を解いて、ゲームを受け取る。相手が女子だから、堂々と殴る事は出来なかったな、残念。でも出来れば、問題を起こすのはやめて欲しい。

「だが、どうしてこんな事を？」

龍が岡村さんに訊く。

それは俺も気になる。こんな大人しそうな岡村さんが、どうしてこんな事をしたのか。逆に大人しいからやりやすかっただろうけど。だからって進んでやる事じゃない。何か理由があるはずだ。

岡村さんは躊躇したが、途端、龍の右手を両手で握って、龍の顔を見ながら言った。

「お願い！ 助けて！」

「えっ……。ええ？」

「どうしようもなかったの！ 執行部なんでしょ？ だったら、助けて！」

「ちょ、ちょっと待て……」

いきなりの切り出しに、龍は若干混乱気味だ。俺が仲裁に入って、詳しく訊く事にする。

「どうしたんですか？ 助けてって、どういう？」

岡村さんはハツとし、慌てて握っていた龍の右手を離す。「ごめ

んなさい」と赤面しながら謝った後、詳細を話す。

「実は……。大高の人達に、脅されてるんです……」

こんなところに出て来るか、大高よ。

「どういう事ですか？」

俺は更に訊ねる。

「たまたま大高の人に絡まれて、金を出せつて。三万出さないと、仲の良い奴がどうなつても知らないぞつて……。嘘だと思いましたけど、大高は悪い噂しか聞かないから……。でも、うちは貧乏で、三万も出せないんです。だからもう、盗みしかなくて……」

「それで、俺のこのゲームをねえ」

龍は手元のゲームを見回しながら言った。

「城古君、いつも体育の時は鞆に入れてるだけだから、やりやすそうだなと思って……」

「確かに、これを売れば三万は手に入るな。ソフトもあるから、五千円ほどお釣りが来る」

「でも、それも駄目になって、もうどうしようもなくて……」

……。えー。

俺達は正義をやったつもりだったのに、何でこんな事になるのかなあ。何か俺達が素直に諦めていれば、岡村さんは救われたって感じじゃないか。

遣る瀬無い。何故世の中というのは、こうも簡単に解決しない事が多いのだろうか。

「それで今日、そいつらに金を渡すつもりだったのか？」

「うん……」

浮かない顔の岡村さんに、龍は一度頷いて訊ねる。

「場所を教えてくれ」

「え？」

「おい龍！ またやる気かよ！？」

一度ならず二度までも！ また大怪我して問題になったらどうするんだ！

「行くしかないだろう」

「いやいや！ 何でもお前が行けば解決するみたいに言っなよ！？ 寧ろ悪化するかもしれないじゃん！ 前回だって、早速廃部の危機に陥ったつてのに」

「そうだぜ、龍。今回はオレが行く」

『！』

突然メグの声がしたと思ったら、いつの間にかメグが廊下の曲がり角から出てきた。どうやら何時の間にか聞かれていたらしい。

「岡村さん、場所は？」

「え？ えつと……。ここから南にちよつと行ったところの、廃工場……」

「おいおい。そんなところに女一人で行ったら、やられに行くようなもんだぜ？ 実際あいつら、かなりやってるっぽいからな」

メグが呆れているが、それはお前にも言えるという事を理解していないのだろうか。一応お前も女なんだぞ。まあ、やられるような奴じゃないのは解つてるけどさ。寧ろやり返されるけどさ。

場所を把握するとメグは、すぐにそこへ向かおうとする。だが、俺はそれを止める。

「メグ！ 本当に、いいのか？」

メグは止まり、俯いて沈黙する。

「もう、殴らないんじゃないのか？」

俺が言うと、メグは顔を上げて言った。

「そのつもりだったけどよ。前、龍に言われて気付いたんだ。オレの代わりに傷ついた龍を見たら、腹が立ってきてさ。龍だったから良かったけど……他の奴だったら、死んでたかもしれないね」

まあ、少なくとも致命傷でしょうな。龍の強靱な生命力が功を奏した。この同類は、そうは居ないはずだ。

「オレが始めた事だ。オレがケリをつける」

メグはそう言って、走り出す。

やれやれ……。あの鉄砲玉を止めるのは、俺には無理だ。とりあ

えずは、様子だけでも見に行っておくか。

「行こうぜ。まあ、俺達には必要ないと思うけどな」

「それなら行く必要すらないと思うんだが」

「何言ってるんだよ。もしもの事があつたらどうする？」

「……それもそうだな」

龍は岡村さんに振り向き、しっかりと目を見て言う。

「大丈夫だ。俺達が何とかする。岡村はここで、楽器を吹いてろ」

龍がそう言った後、俺達はメグの後を追う。

そこは、使えなくなつた機材や鉄屑があちらこちらにばら撒かれている一つの廃工場。辺りには家がなく、人通りが少ない。こういうところは、ブラックな活動には絶好の場所だ。大高生が好むのもよく解る。

「お前ら付いてくるのはいいけど、何もすんなよ。オレがやるからな」

恵が俺達……特に俺に釘を刺す。勿論、メグがニュース沙汰になるような事態にでもなれば飛び出していくが、それ以外では水を差すような事をする気はない。俺は首肯し、その意思を示した。

「うし。んじゃ、行くかな」

恵が入っていく廃工場の中を覗いてみると、三人の大高らしき生徒が鉄パイプを弄んでいた。どうやら奴らが、今回の首謀者のようなのだが……。

「おい、あいつら……」

天川が指差して、俺は頷く。上原事件の奴らだ。容姿は変わっていないが、リーダーっぽい奴の右手に包帯が巻かれているのが解る。まだ治っていないようだ。

「龍、隠れてようぜ」

「どうして？」

「龍を見たら、驚いて逃げるかもしれないだろ」

「……確かに」

そうなつては本末転倒だ。俺は天川に同意し、近くの積まれた金棒の陰に隠れる。ここからなら見えるし、会話も聞こえるだろう。

恵は座り込んでいる三人に向かう。途中、リーダーっぽい奴が恵に気づいた。

「おい、あれ……」

そして、全員が恵に気づき、立ち上がる。

「関野……」

恵は三人の前で止まる。

予想外の闖入者に三人はしばらく驚いていたが。

突如、脇を撥られたかのように腹を抱えながら笑い始めた。

「何しに来たんだよ関野！ また殴られにでも来たか、おい！」

「つか何だよその帽子！ 超ウケるんですけど！」

「あーそつだ、執行部さんよお。この怪我の慰謝料払ってくれよ！

お前の仲間にやられたんだけど、これ！」

「そんな事はどうでもいいんだよ」

恵の鋭く低い声で、大高生の笑いが止まる。

背筋が凍った。恵のあんな声を聞いたのは初めてだ。元不良は伊達じゃないらしい。

「うちの生徒を脅したんだつて？」

恵が訊いて、リーダーっぽい奴が答える。

「おお、今日ここで待ち合わせしてんだよ！ あの女、俺に肩ぶつけやがったからな！ 金ついでにやつちまおうかと思ってたんだけどなあ。結構、俺好みだったし？」

「相変わらず、腐ってる脳みそだな」

恵が苦笑しながら罵った。

「おい、調子乗んなよ？ お前、去年の協定忘れた訳じゃねえよな？ ? オレらはもう手は出さないから、そつちも山高に手を出すな？ つて約束」

「それはこつちの台詞だよ。てめえらが堂々と山高に突っ掛かつて

くるんじゃねえか」

「ふざけんじゃねえぞ！ この怪我させたの、そっちだろうが！」
その一言に、俺はとんでもない事に気付いた。

俺のせいだ。俺のせいで、その協定って奴が崩れたんだ。恵が相
当の覚悟と流血の末に契った協定を、何の考えもなしに壊してしま
った。あいつの右手と共に。

よく考えればあの時点では、大高は直接山高に手を出してはいな
かった。契機があるとすれば、俺がこの三人をのした時。つまり俺
の執行が、協定の綻びとなった。

……最早、これは恵だけの問題ではなくなった。執行部全体とし
て真摯に解決するべき重大問題だ。俺がそれを作っておいておこが
ましいが。

「だからちよいと金稼いで、ストレス発散でもしようと思った訳よ。
……そうだなあ、手始めにお前をやっちまうかあ！ お前は手出せ
ねえからな！ 初めに破ったのは、そっちなんだからよ！」

「……チツ。下らねえところで無駄な脳細胞使いやがって」

「ほざいてる！ 馬鹿なのはてめえも一緒だろ？」

「だったらもう撤回だ」

「……ああ？」

「撤回だつつてんだよ、クス野郎が」

恵が啖呵を切った直後、リーダーっぽい奴の身体が後ろへ吹き飛
んだ。

いや、殴り飛ばされたと言うのが適切だろう。恵の拳が顔面を思
い切り叩き潰し、その勢いのまま風に飛ばされたような演出を醸し
出したのだ。

「なーんで、俺はおめえらなんかに頭下げたんだろうなあ。むかつ
く、自分がすげえむかつく」

恵の背からは、底知れぬ怒りのオーラたるものが滲み出ているよ
うだった。それは自身に対しての憤りか、大高に対しての激憤か。
それとも、両方か。

「反吐が出るわ」

痰を吐くように言った後、恵のアップercutが一人に炸裂。まるで格闘漫画に出て来る技の一つのようだ。……あれは痛い。

喰らった一人は声を上げる間もなく、その場で顎付近を擦りながら蹲っていた。

「この野郎お！」

最後に残った一人は、持っていた鉄パイプで恵の頭をかち割ろうと振り下ろす。

しかし恵はそれを軽やかに回避し、その余韻で回し蹴りを食らわせる。細い脚に浮かされた身体は工場の更に奥へ運ばされた。

「その程度で不良気取ってんじゃねえぞ、アホンダラが」

まったく無駄の無い動き。ただの不良同士の喧嘩で片付けるのは勿体ないくらいの映えの良さ。故の一蹴。元不良リーダーとしての貫禄が、恵から溢れ出ている。

その姿は、まるで鬼。楯突く愚民を悉く圧倒し、見る者全てを恐怖に震わせる。

そんな恐ろしい印象を、魔女のような風貌の女子高生が与えてきている。何とも暴力的な魔法だ。白雪姫に毒を盛る魔女よりも直接的で簡素な魔法。その使い方を、恵はよく知っている。

「次にうちの生徒に手出したら、容赦しねえぞ」

いや、十分容赦してないと思うが。本気になったらどれだけ恐ろしい事になるんだ……？

恵は去り際にそう言っで、引き返してくる。その時、

「高石さんが……黙ってねえぞ……」

リーダーっぽい奴の声が聞こえた。こいつがさん付けするってことは、こいつよりも強い奴という事か。差し詰め、大高のリーダーだろう。

恵は止まったが振り返らずに 右手の中指を立て、短い一言だけを返す。

「上等」

こうして、影で結ばれていた山高と大高の協定は完全に崩壊してしまった。きつとこれからは容赦なく、大高は山高に手を出してくるだろう。それこそ恐喝、強姦、最悪殺人未遂まで出てしまつかもしれない。

？だがそれでも、オレが必ずケリはつける？

恵の険しい表情が、そう物語っているような気がした。

関野が軽い運動の如く大高生を一蹴してから、少し経った頃。

外壁が落書きだらけの大民高校は、中身もそれほど変わらない惨状だった。廊下は勿論、教室の黒板は常にハチャメチャな絵が描かれていて、授業で使われる様子は皆無。職員室にすらその余波が及んでいる。最早この無秩序な学び舎をどうにか出来る者は、少なくともこの学校の中には居ないように思える惨状だ。

しかし唯一、秩序の保たれている教室が一つだけあった。

三年三組は、二階にある三年教室群のちょうど中間に位置している。無論、三年教室は低学年と比べると遥かな荒れっぷりを誇る。

ガラスの破片が散漫していたり、犬や猫の死体が転がっているなど、傍から見れば常軌を逸している状況を三年は作り上げている。

だが三年三組だけは、綺麗清潔で孤高の立場にあった。連なる落書きが、ぷつりとその教室の前では途切れ、その次の教室から続きが描かれていたり、たむろする生徒達はその教室の前でだけは決して留まらないなど、三年三組は異例の存在感を放っている。

そんな三年三組の中は、椅子に座る一人を筆頭に、数十人の生徒が無言で佇んでいた。外見こそは不良そのものだが、予想される汚い言葉や軽い台詞は発せられていない。この光景だけならば、無言の屈強な男達が主人の言いつけを待っているように見える。

そしてこの沈黙は、慌てて教室に入ってきた生徒によって碎かれる。

「翔^{かける}さん、大変です！ 大変です！」

名前を呼ばれた椅子に座っている生徒は、目を合わせずに冷たく言い返す。

「下の名前で呼ぶな」

「あつ……す、すいません……」

「やり直せ」

「はい……」

生徒は一旦教室の外に出て、扉を閉める。

その後、すぐに先程のように慌てて教室に入ってきて、再び言う。

「高石さん、大変です！　大変です！」

「何だ」

高石と呼ばれた生徒は視線を傾ける。

「関野が動きました！　負傷者が三名です！」

「……そうか」

「協定は撤回だと！　好戦的な態度を示してます！」

その言葉を聞いた高石は、どこか満足そうな笑みを浮かべた。

「やっとその気になったか。それも、この会長のおかげか。　い

や、寧ろこいつは弊害か。……生徒会執行部……」

「その生徒会執行部に、とんでもない奴が居ると中山が言っていました！」

「ほお、どんな奴だ？」

「何でも、素手で金属バットを砕くんだとか！」

「それは興味深いな。……昔は俺もよくやったものだ」

「他にも、信じられないくらいの金持ちや、ネット犯罪を容易に行う奴も居るようです！」

「ふつ。よくそんな奴らが役員になれたな」

思わず吹き出した高石に、生徒は恐る恐る訊ねる。

「翔さん、どうします？」

「下の名前で呼ぶな」

「あつ……す、すいません……」

「やり直せ」

「はい……。高石さん、どうします?」

「どうするものもない。ようやく、待ちに待ったこの機会が訪れた。山ノ下高校生徒会執行部。奴らを潰す」

第・5話：その帽子には願いを込めて

「アタシは何で女なんだろう」

厨房だった頃のオレは、ずっとその事ばかり考えていた。

女っていうのは、皆醜い。

綺麗なのは、皆外見だけだ。

何かの為なら、皆簡単に汚い事をする。

金の為、男の為、子供の為。

例えそれが正義だとしても、オレにはそれが醜く見えた。

その生まれつきの黒い髪は何だ？ 染める為にあるのか？

その身に着けてる下着は何だ？ 見せ付ける為にあるのか？

その女としての身体は何だ？ 男に捧げる為にあるのか？

女は男に貢げば、生きていく事が出来る。

オレの母さんは言った。

「これは仕事なの。私の身体でお金が貰えるの。汚くても、これはちゃんとした仕事なの。恵も早く成長して、私と同じくらい稼げるようにならないとね」

風俗で働いていた母さんは、いつも帰りが遅かった。それくらい、その仕事は大変なんだと思っていた。嫌でも仕方なく、家族の為に働いているんだと思った。

でも母さんは毎日、働きに出るとき、まるで遠足に行く時のように笑っていた。

いつも胸元を開いているし、スカートは女子高生並みに短い。歳を誤魔化す為に、化粧品に何万も掛けていた。それだけ風俗に、力を入れていた。家族の為だと思ったら、そうじゃない。単に、自分の性欲に忠実なだけだったんだ。

オレの父さんは言った。

「あれは仕事じゃない。汚く、醜いやり方だ。あんな仕事、恵はやっちゃいけない。女を簡単に売るんじゃない。その身体は、とても

遅く美しいものなのだから。解ったね？」

建築家だった父さんの仕事は、とても力強く見えた。俺は父さんの言う通りだと思った。母さんの仕事は醜く見えた。

それからだ、オレが女を嫌になったのは。

学校でもいつも思っていた。

何でこいつは、スカートをこんなに短くしているのだろうと。下着が見えてもいいのだろうか。階段を上がる時、いつもスカートの後ろを押さえているなら、長く履けばいいのにと。どうして校則通りの長さでスカートを履いているのに、変な目で見られなきゃいけないのだろうと。

オレは決めた。女を棄てる。女として生きて母さんみたいになるなら、いつその事、棄ててやる。父さんみたいな、遅い男になつてやる。

そんな時だった。夜遅くにトイレに行こうとしたら、居間の電気が点いていた。

少し開けて見てみると。そこには、獣のように互いの身体を貪っている両親が居た。無我夢中で、オレが見ている事にもお構いなしに、嫌な音を立てていた。

何だよ。

父さんは遅い？

違う、男も醜い。女を貪りたいだけの、醜い獣なんだ。

オレの両親は醜い。

だから、オレも醜いのか？

そうなる運命なのか？

……認めない。オレは強い人間になる。汚い欲望なんかには負けない人間に。

それが、中学生の頃の話。

高校生になったオレは、周りの不良女子生徒に喧嘩を仕掛けまく

った。図書館にあった古い漫画を読んで、喧嘩出来る奴が強いんだ
と思ったからだ。

容姿も、中学の頃に比べれば劇的に変わった。長めのスカートに
ズボンを履いて、結んでいた長い黒髪はウェーブを掛けて、スケバ
ンっぽい感じにした。その姿を見た母さんは泣いて、父さんは怒っ
た。

でも、オレは言っただけだ。

「あんたらのせいだ。あんたらが醜いから。オレは醜くならない。
絶対に、そんなの認めない」

その日以降、オレはろくに親と話をした事がない。

気付けばオレの周りには、負かした不良女生徒が集まっていた。

「あんたに付いていく」

そう言われ続けて、数は気付くと五十四人になっていた。オレを
含めて五十五人。

やがてオレ達は、誰が言い出したかは知らねえが？鬼おんきのような女
達？という意味合いで、？女鬼？と呼ばれるようになっていた。オ
レはリーダーで、メンバーからは？姐ねえさんさん？と親しまれるようにな
っていた。

オレ達は知名度がそれなりに上がっていく内に、大高と張り合う
ようになっていった。理由は単純に「むかつくから」と、互いに感
じていたから。

道でばったり会っては殴り合って、どっちかが倒れるまで続く。
例えそれが深夜だとしても、近所迷惑なんか顧みず、ひたすら満足
が行くまで殴り続けた。

勿論、それは学校側から嚴重注意の嵐。停学になったりもしたが、
そんなのはどうでも良かった。

？オレは強い。汚い女なんかじゃない。？
それを証明出来れば良かったから。

そんな頃……オレが高二だった、寒くなりつつある十月の終盤。
オレの人生を大きく変える、あいつと出会った。

オレ達はいつも、一つの空き家を根城にしている。

誰も住んでなくて、業者もほったらかしにしてたから、丁度良い
と思える場所だ。一階建てだったが、全員が居座るには十分な広さ
だった。十分なテーブルや椅子がある。そんなところで、オレ達は
気が済むまで騒いでた。

だが勘違いしないで欲しい事は、オレ達はそこら辺のチンピラと
は違うって事だ。コンビニの駐車場に居座ったりしないし、無意味
に人から物を盗ったりはしない。それこそ？汚い人間？だからだ。
武力の使い方間違える事だけは絶対にしない。オレ達は悪役じゃ
ないんだから。

「なあ、試しにこれやってみようぜ」

相変わらずの騒ぎの中、ある一人が言った。

そいつの手には、どこからか手に入れた煙草が一箱あった。オレ
はそれを奥のボロいソファアから聞き、見ていた。

「おい、それどこで手に入れたんだよ？　今じゃあ自販でも買えね
えじゃん」

「それがさあ、道端に落ちてたんだよ。誰かが買って、落としたん
だろうな」

「ぶっはっは。馬鹿じゃん、そいつ！」

「折角拾ったからさあ、試しに吸ってみようぜ。大人の気分つての
を一足先に堪能って訳よ」

「へへ、そりゃ良いわ。どれ、早速」

「馬鹿野郎！」

五月蠅かった部屋の騒ぎが、オレの一声で静まり返る。

「そんなもんやるんじゃねえ！」

オレはそいつの煙草を分捕って、ゴミ箱へ投げる。思い通りの軌道を描き、着弾した。

「姐さん？」

「こんなのはな、弱い奴がやる事だ。法にも負けるような奴が、オレに付いてんじゃねえ！」

オレは声を荒げて言った。

未成年で煙草やら酒やらをやる奴は、根本的に弱いんだ。聞けば、親に飲まされるとかいう奴も居るじゃねえか。自分の住む国の規則も守れない奴が、オレの傍に居て欲しくはない。

「そんな弱い奴に、なって欲しくねえんだよ」

「姐さん……。アタシは、何て事を……」

「……もう、煙草なんかには出すんじゃねえぞ。二十歳になるまではな」

「ウッス！」

「おうおう、不良軍団とは思えない雰囲気になってんなあ、おい」
「！？」

聞こえるはずのない、男の声が響いた。全員が一瞬で緊張を握る中で、声のした方向を見る。

そこには、茶髪でオールバックの山高男生徒が一人居た。第一印象としては、爽やかそうな男子だ。

「誰だてめえ！」「何しに来たあ！」「ぶつ殺されてえのかあ！？」

一斉に五十四人の罵声が響く。男子は驚いて、手を振って「落ち着けよ」と言った。

「別に喧嘩しに来たとか、そういうのじゃないから。話をしたいだけだよ」

「話い？ おめえなんかと話す事なんてあるかよ！」

「そつだ！ 帰れ！」

「それともぶつ殺されてえのかあ!？」

いけねえ、これじゃキリがない。とりあえずは相手の話を聞かない事には始まらない。

オレは手を挙げ、皆を制する。オレは前に出て、男子と向かい合う。

「何の用だ？ オレはこのリーダーの、関野恵だ」

「そんなの知ってるよ。こっちじゃ超有名人だからな。教室でも職員室でも、お前の話題は絶えないぜ？」

「……お前は？」

「俺は生徒会副会長の、天川三紀だ」

「生徒会？」

とうとうあの生徒会も動いたか。噂は聞いてるけど、今年の生徒会はかなり過激らしいな。もしかしたら、オレ達にとんでもない制裁を下しに来たのかもしれない。

「生徒会が、何の用だ？」

「何の用だ、じゃねーよ。解ってるくせに」

副会長が呆れながら首を振った。

「もう、大高とやり合つのはやめてくれないかねえ。迷惑してんだよ。ご近所も、職員も、生徒も、生徒会も。お前らのとばかりで、山高生が絡まれてるんだぜ？ 恐喝、集団リンチ、強姦未遂……。」

警察沙汰になる事も起きてる。これ以上暴れられたら困るんだよ」

「それは出来ねえな。オレはあいつらが気に入らねえんだ。ぶつ倒さないと、気が済まねえ」

「……それだけじゃねえよ。お前、最近学校休み過ぎだからな。これ以上休んだら、単位足りねーぞ。留年しちまう。そんなの嫌だろ？ 去年だって、結構ギリギリだったのに」

……何でそんな事知ってんだよ、気持ちわりいな。

「別に構わねえよ。そんな事は、大分前に解ってるからな」

オレの返答に、副会長は「はあ」と軽くため息を吐く。

「どうして、そんなに大高に拘るんだよ。お前らはそれ以外には大

した事してないのに。寧ろお前は不良を更正してるじゃねーか。良
い事してるのに、勿体無い」

「喧嘩してねえと、強さを証明出来ねえからな」

「強さ？」

副会長は首を傾げる。

「オレは弱い人間じゃねえ。両親みたいな、醜い獣じゃねえ。それ
を証明したいだけだ」

「……んー、お前の家庭事情は知らないけど……。客観的な意見を
言わせて貰うと 弱いじゃん」

「……は？」

副会長は両手を挙げて、呆れるような素振りで言う。

「喧嘩でしか強さを証明出来ないなんて、弱者の極みだろ」

「何だとてもえ！」「姐さんは弱くなんかねえ！」「もうぶっ殺す
！」

オレは再び手を挙げ、皆を制する。

そんな説教臭い話は、もう親から頂いてる。だからこっちでも答
えは出してゐる。

「お前の弱さの定義なんか知らねえよ。オレはオレの信じるやり方
で強さを証明してるだけだ」

オレの持論を言つと副会長は「はっ」と笑った。

「馬鹿馬鹿しい」

「……んだと？」

「他人を傷付けて、見下して 優越感に浸る事が、強さかよ？」

「……………」

「それは強さの証明とは言わねーよ。己の醜さの証明だ」

「ッ！」

気付いた時にはもう、身体は勝手に動いていた。

オレは副会長の顔を、思い切りぶん殴っていた。副会長は倒れ、
頬を擦っている。

「イテテ……………」

「お前に何が解るってんだよ！ 男にオレの気持ちなんか解らねえよ！ 所詮男なんか、女の身体目当ての醜い獣だ！」

「ひでえ言われようだな、おい。とりあえず謝れ。俺以外の男全員に謝れ」

自分の事は否定しねえのか。

「俺は 昔の俺は、お前の言う通り、女を性対象としか思ってたな。最低の男だ、うん。でも、男全員がそうだとは限らないだろ？」

オレは「いいや！」と反論する。

「限るね！」

「……その心は？」

「俺の父さんは、母さんの身体を目当てに結婚した！ 毎日のように、子供が見てる事も構わずに、ただひたすら生々しくやってるだけだ！ どうせ男なんか、正統な理由を掲げて女に近づいて、最終的には身体を貪る！ クズだよ、男はただのクズだ！」

「これまた酷い言い方だ。男の面目丸潰れだぜ」

副会長は頬を擦りながらも立ち上がり、背を向ける。

「とりあえず、今日のところは帰るわ。あまりに痛くて、泣きそう。今一瞬、涙っぱいのが見えた気がするけど。」

「……二度と来んじゃねえ」

「嫌だね。また、来るよ。……あー、いてえ……」

嵐のように来た服会長は右手を挙げながら、嵐のように去っていった。

「姐さん！ 次来たら、あいつボコしましょう！ ウザすぎですよ、あれ！」

「……そんなのは、強さじゃねえ」

「でも、姐さん」

オレは「まあ待て」と、オレの考えを言う。

「あいつはオレが相手する。明日も来るなら……」

一対一の方が、いいからな。

「オーッス」

昨日と同じ時間に、仕事熱心な副会長は再びやって来た。

「おっと、これは……」

オレしかいない空き家に。

「待ってたぜ、副会長」

オレは立ち上がり、副会長を歓迎する。

「俺と一対一で話す気になったか？ いやー、良かった！ 野次馬は居ない方がいいからな、これで気楽に話が出る」

「そうだな。それじゃ……」

オレは構え、副会長を見据える。

とうの副会長は、「ちよつと待て！」と首を振った。

「俺はそんなの専門じゃないぜ！ 喧嘩なんかお断りだ！」

「オレと話すって事は、こうなるのさ！」

「な、何だそりゃあ！」

驚いてる副会長に、オレは軽いジャブを三発、腹に喰らわす。

「ぐふっ！」

唾を吐き出した副会長を、オレはアッパーカット、肘打ち、最後に回し蹴りで吹っ飛ばす。副会長はドアと激突し、また唾を吐いた。
「ああ……。イテえ……。ってか何、今の動き？ ジョーさんも吃驚だぜ……」

「どうした？ そんなんじや、オレは何も話さねえぞ」

「悪いけど、俺は殴りたい奴以外は殴らない主義なんだ。お前は、殴る対象じゃねーよ」

「……こんなに殴られても、平気なのかよ？」

起き上がりながら、副会長は言う。

「平気な訳ないさ……。けど、話はしたいんでね。まだ、倒れる訳にはいかねーのよ」

「ふざけやがって！」

オレは立ち上がった副会長の顔を殴り、再び倒す。オレは倒れた副会長に押し掛かり、ひたすら顔を殴る。

「男なんか、醜いもんさ！ そんな理由を付けるから、こうやって無力に殴られるしかない！ 下らねえプライドばかり持って、本当の真意を持つちやいない！ どうだよ、オレは強いだろ！？ 痛えだろ！？」

「強くなーよ」

「！」

オレは上げた右手を止める。

唇から血を流している副会長は、オレを見て首を振る。

「周りから見れば、お前の方が醜いはずだ」

「……戯言をお！」

オレは殴り作業を再開する。殴る度に、顔は赤くなり、血が出て、それがオレの顔へ飛び移る。

「ふっ！ ふんッ！」

副会長は、ただ黙って殴られ続ける。

「どうだ、解ったか！ オレは醜くなんかない！ 強いんだ！ お前なんかより、男なんかより、強いんだよお！」

あまりに興奮しすぎて、息が切れた。

「ハア……ハア……」

流石にここまで殴れば、この達者な口も黙るだろ。結局、男なんてのは弱いんだ。こいつもその例外じゃなかった。

もついい、さっさとこいつを外に放り出そう。

そう思い、立ち上がろうとした瞬間。

「足りねーよ」

「……は？」

副会長は酷い顔で、妙な事を言った。

「もっと殴れよ」

そう言っ、オレの右手を手に取り、自分の頬にぶつける。

「これっぽっちじゃ、お前の苦しみが解らない」

「な、何……言っただよ……？」

「どうにも、俺の強さの意味合いはお前と違うらしい。だから、お前のそれに近くしようと思ってな。だから　今日は殴られに来た」
「！」

こいつ……初めからこのつもりで……？

「さあ、殴れよ！」

「ッ！」

「思う存分、気が済むまで殴ってみろよ！　そんで俺の中の強さの定義を塗り替えてみせろよ！　教えてくれよ、お前の強さって奴をさあ！　俺の弱さって奴をさあ！」

「うつ……」

ここまで挑発されてるのに、何故か殴る気になれない。もう、拳を振り上げる気力が無い。

「どうして、そんな……」

オレが声を枯らせて訊くと、副会長は笑って答えた。

「話がしたいんだ」

「うわー、こりゃひでえや。俺のイケメンが崩壊してらあ」

洗面所から、副会長の声がした。バシャバシャと、顔を水で洗う音も聞こえる。

オレは座布団を椅子に敷いて、座って待っていた。とりあえず、話くらいは聞いてやる。内容は解ってるが、さっきの根性だけは認める事にした。

「お、悪いね」

顔を洗い終えた副会長は、もう一方の椅子に座る。顔を洗ったと言っても、痣はあるわ、口は腫れてるわで、入って来た時の顔の面影は一切ない。

「副会長、名前は何だっけ？」

オレは副会長の名前を訊ねる。

「天川三紀。天川って呼んでくれ。尤も、名前で呼ぶ奴は今のところ居ないけどな」

「天川。話って何だよ」

天川は「うむ」と頷いて、神妙な表情（と言っても、その顔では台無しだけど）で言う。

「お前さ、生徒会執行部の役員にならないか？」

「……はあ？」

どういう事だ？ 天川は、オレに喧嘩をやめて欲しいんじゃないのか？ 生徒会として、注意しに来たんじゃないのか？

それに、生徒会執行部なんて変な部あったか？ 名前からして生徒会と被ってるし、どう考えても生徒会から鬱陶しく思われそうな部だけだ。

「いやな、執行部を発足させるには、最低でも五人の役員が必要なんだよ。俺は会長で決まってるから、お前には副会長になって欲しいんだ」

急な話の展開に、オレは待ったを掛ける。

「ちょ、待てよ。オレへの話って、それだけか？」

「ん？ ああ、これだけ」

「生徒会としての仕事はいいのかよ」

「あー……それな……」

天川は頭を掻き、ばつが悪そうに言う。

「諦めた」

「諦めた！？ どういう事だよ！」

「お前の言う通りだったよ。強さの定義、弱さの定義は人それぞれだ。お前は必死に、自分なりに強さを証明しようとしてる。さっき殴られて、どれだけ真剣なのかは解ったよ。それに水を差す事は、生徒会としても、俺としても出来ないかなって」

「そんなんの仕事放棄したら……。生徒会クビになるんじゃないの？」

「いや。俺はもう辞めるつもりだから、それはそれでいい」

どういう事だよ……。生徒会執行部っていう新しい機関を作りたいのは解つけど、何でオレを役員にする必要がある？ オレみたいな奴が役員の機関なんか、すぐに職員会議で取り上げられるぞ。PTAも黙ってないんじゃないか？

「大丈夫だ。それは俺が何とかする」

「なっ!？」

こ、心を読まれた!? 読心術の使い手か、こいつ!

「いや。お前は考えてる事が顔に出やすいんだよ」

「そ、そうだったのか!」

知らなかったぜ……。気を付けねえと……。道理であいつらからやけに考えを言い当てられる訳だ。

「話を戻して……。どうして、オレを役員に？」

「そんなの簡単さ」

天川は一拍置いて、言う。

「お前が気に入ったからだよ」

「き、気に入った？ こんなオレを？」

「うむ」

天川は頷いて続ける。

「やっぱそういう機関には、喧嘩紛いなものもあると思うんだよね。生徒会はそのうのは弾いてるけど、それを解決する機関も必要だと思うんだ。だから俺は、生徒会執行部を作ろうと思ったんだ」

「理由になってねえよ。オレがどうして必要なんだ？」

「言っただろ。お前が気に入ったんだよ」

「オレのどこを？」

「全部」

「はああ？」

全部って……。大雑把すぎて意味わかんねえよ……。

「お前、結構辛そうな過去持ってるよな」

唐突に、そんな事を言ってきた。

「んっ……」

世間から見ても、これが辛いかどうかは解らないが、オレは両親のせいで生き方が歪んだ。もう、男を信じる事が出来なくなった。女として生きる事を拒絶するようになった。

なら、オレはどうすればいいのか。未だに答えが見つかってない気がする。今の喧嘩道は、ただの逃げ道のような気がして。

「じゃなきゃ、こんな逃避行みたいな事はしてないだろ。その過去、話してみてくれないか？」

「……………」

「話すだけでも、少しは楽になると思うぞ。溜め込むのは却って良くないからな。いや、無理ならいい。ただ、役員の苦痛を和らげるのは、会長としての務めかと思ってるな」

「誰も、役員になるなんて言ってるねえよ」

「おっと、そうだったな、悪い」

「でも……………」

何でだろうな。

男は信じられない。そう思ってたのに。

「その度胸に免じて……………話してやるよ」

ほんの少し。ほんの少しだけだけ。

こいつは、信じられる気がしてきた。

「……………そうか。そんな事があったから、男をあんな風に思ってたんだな。それに女も。こりゃあ、他人に解る訳ねーや」

オレの話を聞き終えた天川は、最初の感想を述べた。

話を聞いている天川は、真剣な表情で聞いてくれた。一度も嗤わず、オレの顔を見て、相槌をつきながら。

「気付けば、オレは不良軍団の頭だ。望んではいなかったけど、これでオレが強いつて事が証明出来るなら、それで良いと思った。

でも、それは強さじゃない気がしてきた。そこまで殴られても動じない、お前の方がオレよりよっぽど強いぜ」

「そんな事はないさ。言つたら、昔の俺は多分最低野郎だ。今は、その罪滅ぼし……みたいな事をやってるだけだ」

罪滅ぼしか……。オレも、するべきなのかもしれない。

「お前の両親はさ、確かに良くないところを見せたかもしれないけど、それはそれ程愛し合ってるって事なんじゃないか？ 愛し合う過程で、身体を求めるのは必然の事だろう。まあ勿論、節度は大切だと思うけどな」

愛し合ってる……。そんな事、考えてもみなかった。

オレの思い描いている愛し合いは、あんな裸でお互いの身体を貪り尽くす汚らしい行為じゃない。もつと……漫画みたいな、せいぜい甘いキスを良いシチュエーションでするくらい。服を脱ぐ必要なんか無く、心が通じ合ってるだけで満足出来るような青春風味。

けど、二人は大人だ。もう青春なんて歳じゃないもん。そんなの既にやり尽くしてるのかも。なら、あれが本当の愛の形なのかもしれない。

「いやこう言うのもなんだけど、そうじゃなくて、身体目的の可能性だってあるけどさ。それに風俗は宜しくない仕事ではあるけど、それでも仕事は仕事。それで食って生きてる人も居るんだし、それを楽しむ人も居る。経済的にも成立してるし、あくまで娯楽の一つだ。否定したい気持ちは解るけど、それじゃあお前の為に必死に働いてるお母さんが報われないぜ。ま、その話だと性癖が関係してるかもしれないけど、性癖も人それぞれだし」

オレの培ってきた結論が、天川の推論でどんどん覆される。反論する余地は、まったく無い。

「でも、お前は悪くないと思うよ。中学生だったし、そう考えるのも間違いじゃないと思う。寧ろしっかりしてるじゃないか。中学生こそエロエロ言ってるもんだ。周りに流されない強さは誇って良いと思う。ただ、両親は悪い意味でそんな事してたんじゃないと思う。大人の事情は解らないけど、少なくともそれは愛があつてこそ成り立つ訳だし……って、他人の俺が言つてもな」

「いや……その通りだと思う」

「お？」

オレは俯き、首を振る。

「オレは、独り善がりに考えすぎた。両親の気持ちなんか、考えてもみなかった。何より、そんな考えで……何の関係も無い人を殴り続けて、満足してた自分が一番許せねえ」

「じゃあ、もう殴るのは止めるか？」

「……ああ、やめる。もう殴らない」

それを聞いた天川は、笑って頷く。

「良かった。何とか結果に繋がって」

……こいつ、こうなる事まで想定してたのか？ まあいいや。

「だから、ケジメをつけねえとな」

「ケジメ？」

この世界に入ったら、そう簡単には抜けられない。何かしらの？ ケジメ？を示さないと、抜ける事は出来ない。フェードアウトは許されない。

何より、一切関係ない人達が、痛い目に遭ってる。それも片さないといけない。

「山高がオレのせいで被害を受けてるんだろ？ それも解決しないといけねえからな。とりあえず明日、山高の頭と張り合う」

「おい、早速前言撤回かよ？」

「喧嘩じゃねえよ」

オレは立ち上がって、座布団を持ち上げる。

「ケジメだ」

翌日。オレは大高の頭、たかいしかける高石翔を、廃工場に呼んだ。これで負けた方が、黙るって条件でだ。こうでも言わないと、奴らは来そうにない。

オレは必要な物を持ち、廃工場に入る。

そこにはただ一人、赤髪のオールバックの男、高石翔が腕を組んで待っていた。身長は百八十といったところ。半袖のワイシャツ姿という、今の季節じゃ凍えるような格好で居た。事故か何かで出来たのか、右頬には×型の傷跡がある。

「お前が、関野恵か。なるほど、鬼のような女と言われるのに相應しい容姿をしている」

高石翔の声は、思ったより低かった。それにドスの利いた声だ。如何にもって感じたな。

「お前こそ、いかにもって感じがするぜ。翔……ね」

「下の名前で呼ぶな」

声の温度が変わった。まるで沖縄から北海道に行き来するように。

「どうして？」

「親から貰った名前など、煩わしい」

「そう言うなよ、結構良い名前じゃねえか。遠慮なく、オレは翔って呼ばせて貰うぜ」

「……後悔させてやろう」

翔はやる気満々のように身構える。

しかしオレは手を出し、首を振る。

「今日オレは、喧嘩しに来たんじゃない」

「……何？」

「負けに来た。オレはもう、大高に手を出さない。だから、そっちも山高に手は出さないで欲しい」

オレの言葉を聞いた翔は、呆れたように首を振る。

「それが、女鬼の頭の結論か」

「ああ。オレはもう、人は殴らない」

「それを、俺達が聞くとしても？」

「思ってねえよ。だから、今ここでケジメをつける」

「……ケジメ？」

僅かに首を傾げた翔は、オレがポケットから取り出して物を見て目を見開く。

「そういう事が……」

スイッチを入れると、海岸に落ちてるパイプのように振動し出した。

……駄目だ。やっぱり、いざってなるとブルっちまう。

けど、これがオレの決めたケジメなんだ。

しつかり、落とし前はつけねえと。

じゃなきゃ、女鬼の名が泣くつてもんだ。

最後の最後まで、きっちりした面構えをしよう。

そうでなきゃ、意味が無い。

気付けば、彼女の髪はなくなっていた。

彼女は地面に落ちた自分の髪を見て、「ふっ」と笑った。

己の醜態を晒しつつ、尚且つ毅然と立つその姿は、まさに弁慶の立ち往生。

そんな意思を表すかのように、彼女は地面に膝を付き、男子を見上げて、頭を垂れた。

「この通りだ。オレなら、何されても構わない。だから、山高には手を出さないでくれ」

「……ふざけるな!」

翔はオレの頭を蹴り上げる。オレの身体は浮き上がり、地面に突き落ちる。脳震盪らしきものが、オレを襲う。

「それが、強さを求めた者の成れの果てか! そんな姿を見て、お前に付いて来た奴らはどう思う!? そんな惨めな姿を見たら、何て言う!？」

「さあ、な。でも、これがオレの結論だ。もう、人は殴らない。虚しさは、もう求めたくない」

「お前はそんなに弱い人間だったのか!? 強さを求める人間じゃ

ないのか！ 俺は、この傷を付けた人間を見下す為に強くなった！ お前も同じように強くなりたいと願っていたはずじゃないのか！」 傷っていうのは、その×型の傷の事か。こいつにはこいつなりの理由があつて、こんな事をしてるんだ。解る、それはオレにもよく解る。

でもオレだって同じような理由で、今こうしてこの場に居る。翔が譲れないように、オレにも譲れない事はある。

「もう、どうしても良くなった……。ただ、オレのせいで関係ない人が苦しんでたつてことに、罪を感じるようになった。だから、償おうと思った。それだけだ」

「……………。もう、いい。これ以上お前と向き合っても、何も得られない」

翔は踵を返すと、指をパチンツと鳴らす。すると、物陰からたくさん山高生が出てきた。数は……。数える気にもならない。とにかく、多い。

「好きにしろ。ただし、これが最後だ。悔いの無いよう、思う存分そいつを使え」

翔はそう言い残して、もうオレに興味がないように早々とした足取りで工場を出て行った。

翔が姿を消すと同時に、大高生の群れがオレへと迫る。

ここからが、一番の地獄になりそうだ。でも、これが今までオレがしてきた事。報いは受けないといけないんだ。

一人の大高生がオレを持ち上げ、より広い中央へ放った。顔を上げると。迫り来る靴底がよく見えた。

大高生達は、一斉に動き出した。

袋叩き、というのは、まさにこの事を言うのだろう。殴り、蹴り、また殴り、蹴り……。これの繰り返し。関野はただ、何の抵抗も無く、それを受ける。いや、受け入れている、と言った方が良いか。

これは、あいつの決めた事。

自分にそう言い聞かせ、今にも飛び出しそうな身体を自制する。行ったところで何も出来ない。そんな事は解ってるが、それでも何とかしてやりたい。

けど、俺だけじゃ何も出来やしない。

こんな無力な自分に腹が立つ。こんなんじゃ、会長なんて務まらない。

こんなんじゃ、あの生徒会は変えられない。

「姐さん！」

「！」

いつの間にか工場には、女鬼のメンバーがぞろぞろと入ってきていた。

「お前ら……どうして……？」

「姐さんに、何しやがるんだ！」

そう言って、雄たけびを上げながら突っ込んでくる、鬼のような女達。

駄目だ、お前らにまで、同じ目に遭わせるわけには……っ！

「来るんじゃねえッ！」

オレは精一杯の声で、皆を止める。それに釣られてか、大高生の動きも止まっていた。

「これが、オレのケジメだ！ お前らは何もすんじゃねえ！」

「でも、姐さん！」

「もう終わりにしたいんだよ。こんな生活は、もう終わりだ。オレも、お前達も」

「姐さん……」

皆は渋々、その場で下がる。もう充分だ、気持ちだけ伝われば、それだけで。

だが、大高生は動かない。解ってる、まだ殴り足りないって顔だ。

「どうした？ 殴れよ」

オレは立ち上がった、腕を広げる。

「好きなだけ殴れよ！ それがお前達の生き甲斐だろ！？ やりやあいいじゃねえか！ 好きなだけ、やればいいだろうが！」

「君達！ 何をやっている！」

そこに、二人組の警官が駆けつけてきた。この騒ぎを誰かが目撃したんだろうか、通報されたらしい。

大高生達はそれを見るに、慌てて持ち上げていた機材や木材を投げ捨て、一目散に逃げて行く。本当、逃げ足だけは速いよな。人の事は言えねえけど。

「また喧嘩か……。山ノ下高校も堕ちたものだ。どうせ、君が仕掛けたんだろう。おんき、だっけ？ こんな社会のゴミの集まりが存在してるっただけで、身震いするったらもう……」

「何だとてめえ！」 「調子乗んなよサツがあ！」 「ぶっ殺されてえのかあ！！」

「やめろ！」

オレは皆を止め、頭を下げる。

「すいませんでした。もう、喧嘩はしません」

「ふん……。ん？」

警官はオレの頭を見て、落ちてる髪を見て、鼻で笑った。

その後、オレの頭に手を置いた。髪がないと、ここまで触られた感が凄いとは思わなかった。

「その方が似合っているよ。ハハハハッ」

そう言いながら、警官は撤収した。それは褒め言葉なのか、皮肉なのか。でも、そんなのはどうでもいい。

「姐さん、髪……」

皆がオレを見て表情を引き攣らせる。

「いいんだ。これで、全部チャラになるとは思ってない。これからだ、これから。それに……」

オレは再び膝をつき、頭を下げる。

「すまなかった。オレの下らないことに、皆を巻き込んで」

「姐さん！ 頭を上げて下さいよ！ アタシ達は望んで付いて来たんです」

「オレは、弱かったんだ……。強いって、思い込んでた。皆の前を歩く、資格なんてねえんだよ」

「何言ってるすか、強いっすよ」

オレが顔を上げて見ると、皆は笑顔でオレを見ていた。

「こんな事を、一人ですらとするんですから。でも、次はアタシ達も呼んで下さいよ！ アタシ達は全員で女鬼なんですから！」

「そうっすよ！」 「一人だけ抜け駆けなんて卑怯だぜ！」 「ぶっ殺され いや、何でもねえ」

「皆……」

や、ばい。来た、うるって来た。

オレは瞳に溜まり込んで来る涙を、どうにか必死に零さないように上を向いたり目を見開いたりとしてみた。

でも、それは叶わなくて。

「あれ！？ 姐さんが泣いてる！？」

「嘘だろ！ 血も涙もないと思ってたのに！」

「おおい、泣く子も黙る女鬼のリーダーが泣いてるぞー！」

『ハハハハッ』

「……何笑ってたんだよお前らア！」

……名前の通りだ。

良い仲間に、恵まれている。

こんな果てしなく無力な俺にも、出来る事はあるんだろうか。

そういえば、今月は……。

それからオレは、一週間の停学処分となった。と言っても、あま

り学校に行つてなかったから、停学も何もないと思うが。

この停学を機に、親に全てを話して、親子関係を取り戻した。今では普通に生活している。会話は絶えない。本当の親子というのは、こついうのを言うんだろうな、多分。

今は夜の七時。テーブルを囲んで、テレビを見ながら母さんの作った夕飯を食っている。普通の、どこにでもある風景。ピンポン。

そんな風景は、一回のインターホンによって中断される。オレは立ち上がり、玄関の覗き穴から外の人を確認する。

「天川……？」

そこには、すっかり元の顔に戻った、制服姿の天川が居た。その手には、異様にでかいデパートの袋らしきものがある。

オレは扉越しに訊く。

「……何しに来たんだよ」

「話をしに来た」

「またかよ」

しつこい野郎だ。

「役員になるって話、考えてくれたか？」

あつ。そういえばそんなの言われてたな……。さっぱり忘れていた。

だが、出す答えは考えるまでもなく決まっている。

「無理だ。オレにはなれない」

「その心は？」

「オレなんかが、なれる訳ないだろ……。留年確実の、不良娘のこのオレが」

「ケジメ、つけたんだろ。だったらもう、お前は不良じゃない。我が高校の誇れる、健康で優良な生徒さ」

オレは思わず笑ってしまった。

「誰の一存だよ、それ」

「俺に決まってるんだろ？」

「もう会長気取りか？ 気が早いな」

「ハハハッ。……なあ、ドア開けてくれよ。外は結構、寒いんだよな」

「……………」

こんなオレを見たら、何て言うだろうか。天川でも、これは嗤うかもしれない。いや、嗤うはずはないさ。天川はそんな奴じゃない。

……ドアを開けた瞬間に、二つの意味の寒気が襲った。

オレはただ俯いて、天川と顔は合わせない。合わせたくない。きつと、声に出さなくても、嗤いを堪えるのに必死なんだ。勝手に、そんな風に考える。

「今日は、ハロウィンだろ？」

「え…………？」

十月三十一日。確かに、今日はハロウィンだ。さつきもその話で盛り上がっていた。

「それが、どうかしたのかよ」

オレが言ってる最中に、オレの頭を何かが覆った。同時に、オレの視界が真っ黒になった。

「なっ…………？」

「トリックオアトリート、てか」

オレは頭を覆った何かを手で触る。

……帽子？ それも、尖がり帽子。魔法ファンタジーの映画とかに出てくるような感じの尖がり帽子のようだ。

「ありや。ちよつと、でかかったかな」

オレは帽子を後ろにずらし、視界を確保する。そして初めて、天川と顔を向かい合う。「ははっ」と、天川は短く笑って、指を差す。「似合ってるじゃないか」

まさか天川は、オレの頭を思っで、こんなものを…………？

「っ」

オレは思わず、また泣きそうになった。でも、今回は堪えた。泣

くを見られるのは嬉しい事じゃない。増してや男に慰められるなんて屈辱的だ。

「これなら、寒くないだろ？」

オレは、何を考えていたんだろう。こいつは、天川は、オレの思ってる男とは違うんだ。何もかも、違うんだ。

醜くない、獣なんかじゃない。オレに癒しの魔法を掛けに来た、魔法使い。

「……う」

「お、どうした？　もしかして思わず涙か？」

「……バーカ。そんな訳、ねえだろ」

オレは笑いながら言っ

「笑えるじゃねーか」

天川もまた、笑いながら言っ

「思えば、最近のオレは、笑う事も、泣く事もなかった気がする。

ただのうのうと日々を消化してるだけだった。何だかなり久しぶりに、心の底から笑えた気がする。

「なあ、天川」

「ん？」

「役員になつたら……もっと、笑えるかな」

それを聞いた天川は、どんっと自分の胸を叩いて、自信満々に言う。

「勿論！　俺が笑い殺してやるよ！」

「……はっ。そいつは期待出来ねえな」

「何だと！？　俺を甘く見るなよー！　こっに見えても、漫才には自信あるんだぜ！」

「どうだか」

「……何だろう。」

笑いながらこんなに話をしたのが、懐かしい気がした。家族とは勿論そうしているが、赤の他人……特に男とこんな気分で話が出るなんて、思ってもいなかった。

今やっと、俺は確信した。

天川は、信用出来る男なんだと。

「役員、やるよな？」

オレはその問いに頷いた。

きっとその時のオレの顔は。人生で一番の笑顔だったと思う。

第6話「祭りは人を弄ぶ」

「おお、すげえな！ 客がどんどん入って来てるぜ！」

「人がまるで小魚のようです！」

「……………」

快晴の土曜日。時刻は十時。春季山高祭が開催されて十分後。三人（正確には二人）はテレビに映る正門の様子を見て驚きの声を上げていた。

正門で構えていた三人の生徒会役員の手が忙しく動く。二本脚で立つ黒帽子を被ったウサギが表紙のパンフレットを配っているからだ。にしてもこんな絵を描くなんて、美術部のセンスはどうなっているのだろうか。個性的と言えばそうなんだが。

山高祭が始まる前、放送委員が正門が見える絶好の位置にカメラを設置してくれたおかげで、このように正門の様子を見る事が出来る。何か特別な事が起こってないか監視が出来ると、徐々に天川が良い事を言ったのだ。たまには会長っぽい事も言うものだ。

その当人は今、「腹が減った」と言っでどこかに食べ物を買いに行っている。しかし、開催十分でこの人ばかり。人が川のように流れて来ている。果たしてそう簡単に物を買えるのだろうか。

そして当然その金は執行部に流れて自由に使えると……。ふふふ、今度は新型ゲームハードでも買おうか。薄型なのに排熱も抜群！ グラフィックも超美麗！ 処理能力も大幅上昇、大容量なのに価格は三万を切るという赤字覚悟の素晴らしい試み！ ユーザーとしては、是非とも買いたところだ！

しかし現在の状態からも解るように、執行部には山高祭に関する仕事は無い。監視というのも天川の独断なので、金が流れて来るかは怪しいところ。期待はしない方がいいだろうな。

「うわっ！ やべえ、外やべえ！」

ドアを開けて、昇降口を見た恵がまたも驚く。この部屋は昇降口

の前に位置している為、先程からもざわめきがよく聞こえてくる。

「おい龍、見てみるよ！ すっげえ人だぞ！」

言われなくても解つてる。恵はこの時期も不登校で山高祭を見た事は無かつたんだろうな。実質三年なのに、山高祭に携わるのが今年が初というのはいかななものか。

「見てみるって！ やべえ、マジやべえええええ！」

「落ち着け、恵。これが山高祭の標準だ」

「マジでえ！？ うわあ、山高って結構有名なんだな！ オレ山高を見縊つてた！ ただの田舎くせえ、しがない高校かと思つてた！」

「そうか。とりあえず、山高に謝ろうな」

「山高！ 変に見縊つててごめんなさい！」

その場で山高の壁に頭を下げる恵。相当テンションが高くなつてるようだ。これじゃあ、山高祭は年に二回あるという事も知らなさそうだな。山高生にとっては常識なのだが。

「でもこんなにたくさん人数が居たら、何かを買うのも大変そうだな！ 廊下とかすげえ事になってそう！ 天川大丈夫か？」

確かに、去年も大変だったな。いつもは少しの生徒がすれ違ったりいなのに、山高祭になると、人が擦り合うような状態。満員電車で揉みくちゃんちやらつて感じた。隣のクラスに行くだけでも、かなり疲れる。

「相変わらずの繁盛っぷりですね、山高祭！！」

「こりゃあ売店も大変だな！ 午後までもたないだろ、これ！」

その通り。それは実際、俺も経験している。

実際、去年のうちのクラスは何か売るのは決まっていたが、その何かが決まらなかった。意見の流れが滞る中、誰かが「もうフルーッポンチで良くね」と言つた為、缶詰の果物をサイダーに浸けた適当なフルーッポンチを売っていた。「どうせ売れねーよこれ」とクラス中が思っていたが、何故か飛ぶように売れて、午後は在庫切れで何もする事が無かつた。

食べ物なら何でも売れる。これが山高祭の魅力だ。

さーて、ちゃっちゃと焼きそばを買って戻ろう。そうだな、皆の分も買ってやるか！ さすが俺！ 寛大だぜ！ この優しい心遣いに感謝しろよな！

よし、カウンターに。

「……！？」

俺はその異様な光景に絶句し、立ち止まる。何度も瞬きをして、頬を抓って、夢じゃない事を確認する。

「何だ……これは……？」

それは長蛇の列が、教室中にうねっている状態。例えるなら、巻かれてしまわれているホース、綱引きの綱。たくさん人間が、まさにその状態なのだ。

「最後尾はこっちですよー」

そんなの言われなくても解るわ！ ご丁寧に旗を立ててくれてれば誰でも解るわ！

俺は最後尾に列んで腕を組む。ううむ、ここで会長権限を使えば、無駄に時間を浪費せずに焼きそばを貰えるんじゃないか？ 今こそ権力を振るう時じゃないか？

いや、それこそ権力の濫用なんじゃないか？ でもただ待つてたら、物凄く時間掛かりそうだしなあ。こう考えてる間にも、俺の後ろに客が列んでるし。

手元にあるカードは二枚。

『会長権限を発動する』

『大人しく順番を待つ』

どうする？ あーまーかーわー！

「おせえなあ、天川」

時刻は既に十一時を迎えようとしている中、恵が呟く。天川が食い物を買に行ったのは十時過ぎなのに、まだ戻らないのはおかしくないか？ どんだけ混んでるんだろうか。

「まだ一人も帰って行く人はいませんよ！ 山高、定員オーバーで崩れなければいいですけど……」

ずっとテレビを見ている二ノ宮が言った。いくら古い学校だからって、崩れる事はないと思うが……。

なんか不安になってきたな。確かに日々、所々に罅割れを見る。大丈夫なのか山高。悲鳴を上げていないだろうな？

「ふぁー、暇だ」

恵が欠伸をしながら暇そうに呟く。

「龍、しりとりしようぜ」

「以前の反省を活かそう。このメンバーでしりとりをやったら、変に力オスになる」

「あれは龍のせいだろ。龍が誰も知らねえゲームの用語を言うから」

「しりとり番町（爆）に言われたくないな」

「んなもんで爆笑出来ねえだろ！」

「爆爆爆爆爆爆爆爆爆爆爆爆」

「二ノ宮はツボみたいだぞ」

「ツボ浅っ！」

「……はぁ」

「廣瀬はお気に召さないみたいだぞ」

「寧ろ良かったよ！」

「俺としては、もっと突飛な事を言って欲しかったな」

「そんなリクエストは願い下げだ！」

「いいのか？ 職を失うことになるぞ？」

「そんな職に就いた覚えはねえぞ！」

「そうか？」

「そうだよ！」

「生徒会執行部公認なのにな？」

「勝手に認めるな！」

「この不況の中辞職するとは……。チャレンジャーだな」

「え、金貰えんの、それ？」

「貰える訳ないだろ、ボランテア同然なんだから」

「辞める理由としては十分だよな！」

「そうか？」

「そつだよ！」

コンコンツ。

俺達が恵いじりを楽しんでる最中、ちょうど良いタイミングで、執行部のドアを叩く音がした。天川だろうか。

いや、天川ならわざわざノックする必要は無い。ある意味この部屋の主なんだから。ならば来客か。こんな時に仕事の依頼は御免被るぞ。

……そして誰も動かない。仕方ないので、俺がドアへ向かう。

「どちら様ですか」

ドアを開けると　そこには、とても見慣れた顔が二つ。

「ハアーイ」

一人は星が弾けるウィンクをして、

「ハワイ？」

一人は首を傾げる。

俺は一拍遅れた反応で、ドアを閉めた。

「どうした、龍。誰だった？　何かやけに汗を掻いてるけど」

「ん？　ああ、なんか危なそうな人だった」

「危なそうな人？　どんな人ですか？」

「え？　そりゃあ……。血塗られた包丁を持った人だよ」

「確かにそいつは危ねえな！　よし、今すぐ警察に通報」

「いや！　別にそれは、必要ないと思う」

「必要だろ！　包丁持った人だぞ！？　しかも血塗られてるんだろ？　どう考えても殺った後じゃねえか！」

「そ、そうか……。じゃあ、今のは撤回。幼女一人をぐるぐる巻きにして連れ帰ろうとしている人に変更」

「それも十分危ない人ですよ！　というか、何でここに立ち寄るんですか！」

「うーん……。見せびらかしに、だろうか？」

「陰湿な犯罪者ですね！ とにかく、警察に通報」

「いやいや！ それは要らない、本当に」

「要りますよ！ 幼女一人の命が懸かってるじゃないですか！」

「多分、殺す気はないんじゃないかな。別方面だと思う」

「どんな方面でも犯罪なのは確実です！ 今すぐ通報です！」

「いやいやいや！ そんな事したら、そいつがかわいそうだと思う
ないか？」

「思いませんよ！ 龍さん大丈夫ですか？ とうとう頭がおかしく
なりましたね！」

「おかしいのは二ノ宮の方だと思う」

「うわあ、駄目ですこの人！ 早くなんとかしないと！」

「ちよつと！。開けてよ龍！」

ぐっ、ごまかしも限界のようだ。しかし、入れたくない……。か
なり面倒な予感しかない。ていうか、何でいるんだ！

「……あれ？ どつかで聞いたことのある声だな」

恵が気付き、立ち上がってドアに向かう。いやそれは駄目だ。俺
は立ちはだかって阻止する。

「何だよ、龍。どけよ」

「だから、この先には危ない人が居るって言ってるだろ！」

「……初めから誰も信用してねえから、そんな事」

「な、何だって！」

「ええい、どけっ」

「うっ」

俺は乱暴にどかさね、恵がドアを大きく開ける。

「！ あ、あなたは……っ！」

一人は「あっ」と言って、丁寧に頭を下げて、自己紹介する。

「はじめまして。先日お目に掛かったと思います、龍の妻である詩
織です。ほら苺、挨拶して？」

「あ、は、はじめまして！ えっと、しおねえとりゅーにいのいも

うとの、いちごです！　いまのところ、おそわれてません！」

『……………』

「その挨拶をなんとかしろ！」

どういう訳だ。

詩織と母が、生徒会執行部にやってきた。

「いやー、ごめんなさいね、急にお邪魔しちゃって」

全体的に白の私服姿の詩織は、本来なら俺が座ってる席に座りながら言った。おかげで俺は立つ羽目になった。赤いワンピース姿の母は今は居ない天川の席に座る。というか、天川遅すぎ。

「おお……。生で見ると、まるでビーンナスの様だぜ！」

恵が過大評価し、カメラを構えている廣瀬が激しく頷く。すると詩織は「あらやだ」とわざとらしく笑う。

「ふふつ、毎日龍に、たっぷり時間をかけて洗って貰ってる甲斐があるわ……………」

『え』

「言う側も言われる側も学習能力無しか！　4話を読んでみる！」

「ツッコミも学習能力無いよね」

「じゃあどうツッコめばいいんだ！　最善のツッコミは以前やったと思うんだがな！」

「突っ込むって……。やだ、龍……………」

「何顔赤くしてるんだよ！　決して卑猥な意味で言った訳じゃない！」

「駄目よ、龍。私、まだ心の準備が……………」

「しなくていいから、相変わらずの変な妄想をやめてくれ！」

「無責任な人ね、ホント」

「俺に何の責任があると言っただ！　勝手に妄想して勝手に暴露してるくせに！」

「龍だけにね」

「この状況理解してるか!?　ここは生徒会執行部!　中には俺以外に三人の役員!　俺だけじゃない!」

「ボソボソ(ちよつと、予定と違うじゃない)」

「お前の予定なんか知るか!　それにボソボソとなってるのに全然筒抜けなんだけど!」

「龍だけにね」

「……はあ、もう、嫌だ……」

俺はその場で体育座りし、膝の間に顔を埋める。隣の恵が「詩織さんの勝ちー」と言って、詩織の右腕を挙げているのが解る。別に勝負じゃないのに、何でどや顔をするのかは理解出来ない。

「生で見るとより面白いですね、これ!　こういうのを夫婦漫才と言っんですね!　勉強になります!」

二ノ宮が面白がつて見ていた。どこが勉強になるんだよ。くそつ、俺はそんなつもりじゃないのに……。最早、反論する気も起きない。何故なら……。

「りゅーにいい!　りゅーにいい!」

ほら、思った通り。今度は妹様がお呼びだ。俺は顔を埋めたまま答える。

「何でございましょうか、苺様」

「?　どうしたの、りゅーにいい!」

「あなた様まで、俺を苦しめるつもりでございましょうか」

「そんなことしないよ!　いちごは、しおねえのいもうとだもん!」
「理由が絶望的なのですが」

「しょうらいは、しおねえみたいなびじんになるもん!」

「今すぐその夢は捨てて下さい」

「ちよつと龍、それはどういう」

「じゃあ、おかーさんみたいになる!」

「それもやめた方が良くと思います」

「むっ。なら、いちごはどうすればいいの?」

「とりあえず、この中に居る全ての人は目指さない方が良くかと」

『おい』

「わかった！　じゃあいちご、ぼうずさんになる！」

「正気を保って下さい」

「だめ？　じゃあ、さぎしをだますさぎし！」

「もつと安全な職業に就きましょうか」

「あんぜん……。なら、じたくけいびいん！」

「一応外には出ましようよ」

「むーっ！　りゅーにい！　わがままにもほどがあるよ！」

「今更ですが、別に今はそんな事を考える必要はないかと」

「わかった！　もうかんがえない！」

「そうですね」

これだよ！　何でこんなところで二人に色々相手しなきゃいけないんだよ！　家の中だけにしてくれよ！　疲れるんだよ！

「龍さん！　お願いがあります！」

唐突に、二ノ宮が座ってる俺に見えるように手を挙げながら言った。俺は立ち上がってお願いを聞く。

「何だ」

「私、苺ちゃんが欲しくなっちゃいました！　なので、可愛い可愛い苺ちゃんを是非とも売って下さい！」

「えっ……ええっ！？」

また訳の解らない事を……。明らかに頭がおかしいのは二ノ宮だ、間違いない。

苺が椅子から跳ねるくらいに驚いているが、詩織は特に反応はない。きっと、俺が反論すると思ってるんだろうな。

しかし、今の俺は二人のせいであまり気分がよろしくない。正直もうどうでもいい。今なら苺を手放す事も惜しまない。よって、

「ああ、別に良いぞ」

『！？』

本来なら「どんなお願いだ」とツツコむところだが、敢えて肯定する。これには流石に詩織も驚いていた。ふんっ、ざまあみるがい

い。

二ノ宮は両手を合わせて表情をより明るくする。

「本当ですか！ なら、いくらで？」

「そうだな。やはり」

「ちよつと、龍！ 何言ってるの！ 苺を売るなんて！」

「大丈夫。苺ならきつと、美味しく育つさ」

「そっちの苺じゃないでしょ！ ……そうね、私の妹よ？ 三億は貰わないと無理ね」

「あれ！？ しおねえ！？」

何だといつ！ 姉が妹を見捨てた！？ こいつ、冷静に対処した結果がこれか！

恐ろしい奴だ……。自分が不利になる方へは決して動かない！

例えば妹が売春の危機であっても！ どれだけ利益主義なのだろうか！

二ノ宮は「うーん」と、指先を顎にあてて唸る。

「三億ですか……。それでは、安すぎる気がします！ 五億は出さないと気が済みません！」

「五億円の苺か、食べてみてえな」

想像して、苺をじつと見つめる恵。襲うなよ。

「ポ」

さつきから微かに紅葉している廣瀬はカメラを苺に向けている。

絶対襲うなよ。

「五億ねえ……。うん、いいわ。これで苺は、あなたのものよ」

「本当ですか！？ やりました、苺ちゃんを落としました！」

「う……うう？」

苺がツッコミを出来ずに話は進む。というかこの姉、ノリノリである。

「ふふふ。五億円、何に使おうかしら。苺、美味しく食べられるのよ」

「いいなあ、二ノ宮。今度食べに行くぜ」

「亜qwse drftgyふじこ1p:@」

「素晴らしっ」

「全然素晴らしくなあああああああああい！」

ガラガラガラガラ！

「五月蠅いですよ！ 静かにしなさい！ 一体何をやっているんですか！？」

シーン……。

「まったく！ 前回のしりとり騒動もそうです！ あなた達には学習能力がないんですか！ 小学生ですか！ それでも高校生ですか！ いい加減自覚しなさい！ ふんぷんですよ、まったく！」

ガラガラガラガラ！

『……………』

生徒会長の一喝で、部屋は静まり返る。さっきまで大声で泣いていた葛ちゃんもきょとんとしているくらい、生徒会長の声は馬鹿でない。生徒会長が泣いたら、大変な事になりそうだな。

「うっ、うっ……………」

『！』

葛ちゃんがまた泣きそうだ！ オレ達は団結し、葛ちゃんを宥める。

「えぐ…………しおねえたちとはなればなれになるの、やだよ……………」

「大丈夫よ、葛！ 本当に葛を売る訳じゃないから！」

「ほんとう…………？」

「ああ！ 愛しい葛を、二ノ宮なんかに売る訳ないじゃないか！」

「なんかにつて何ですか！」

「そうだぜ、こんな美味しそうな葛ちゃんを、二ノ宮なんかに渡して堪るか！」

「なんかにつて何なんですか！」

龍は天川の死体をポイツと放り捨て、焼きそば入り袋を手取る。
「さて、食うか」

「そうだな」「そうですね!」「コクリ」「そうね」「たべるー!」
「おいしいiiiiiii!」

全員が箸に手を伸ばした瞬間、天川が勢い良く復活する。

「もつと俺を労れ! 感謝しろ! それが会長に対する態度か!」
『会長(笑)』

「笑うな!」

何故かこういう時は素晴らしく団結する執行部(詩織さんも)。
多大な団結力の無駄遣いだ。

「はあ……でも、マジ疲れた。やべえわ今年は、尋常じゃねえよ」

天川は疲れた様子で、自分の席に向かうが、そこに座ってる苺ちゃんに気付き驚く。

「おお!? 何で苺ちゃんがいるんだ? よく見たら、龍の席には詩織さんが居るし……」

「あまかわおじさん、こんにちわ!」

「ああ、こんにちは」

「ごめんなさい、お邪魔してます」

「いや、いいんですけど……。困ったな、二人の分は買っていないだけ……」

「大丈夫。龍の分を頂くから」

「おい」

「あら、独り占めする気?」

「りゅーにいい、ずるい!」

「はあ……。いや、いいよ。あんま腹減ってないし」

龍は仕方なく承諾する。意外とちゃっかりしている詩織さんであった。……ていうか、何でオレはさん付けしてるんだ? 年下なのに。

「苺。天川君が座るから、立ちなさい」

「はい。あまかわおじさん、どーぞ!」

「おう、悪いな。……むつ。葛ちゃん、一ついいか？」

「なあに？ あまかわおじさん」

「俺はおじさんじゃなくて、お兄さんだ」

今更ツツコむ事なのだろうか。前もおじさんって呼ばれてたろ。

「だめだよ！ あまかわおじさんは、あまかわおじさんなんだよ！」

そして何故か拒否された！

「そうか、俺はおじさんか。それもいいか……」

いいのかよ！

「解った！ 葛ちゃん、これからもおじさんって呼んでくれ！」

「わかった！ まかせて、あまかわおじさん！」

何だこの変な会話は……。

「よし、それじゃ皆手を合わせて……」

天川が号令し、皆で礼儀良く合掌。

『いただきます』

行儀良く食べ始める。龍以外。

オレも割り箸を割り、焼きそばを食らう。普通に美味い。時間も時間だから考えもせずに箸が進む。皆そんな状態だった。詩織さんは「あーん」として、葛ちゃんに食べさせていた。葛ちゃんも美味しそうに食べている。

「……………」

一方、龍は腕を組んで壁に寄り掛かっていた。時々「ふう」と溜め息を吐いている。もう昼時だ、龍だって腹が減ってるのは当然だろうに。

それを見兼ねた詩織さんは「やれやれ」と、焼きそばを掴んで、龍を見る。

「ほら、龍」

「ん？」

「あーん、して」

「……………いや」

「焼きそば、欲しいんでしょ？」

「……要らないって。ほら、冷めない内にとつと食べるよ」
詩織さんの慈悲を、龍は意地を張って拒否した。本当は食べたい
くせに。

「無理しなくていいの。はい、あーん」

「してない。それに食うとしても、その食い方はお断りだ」

「もう、照れちゃって。家ではいつもこれでしょ」

『え』

「違っただろ！ また誤解を招くような事を！」

「あっ……。欲しいのは、まさか、こっち？」

「どっち！？」

「駄目よ龍……。ここはちょっと、目立つわ」

「ちよつとどころじゃないけどな！ 何を想像したらそうなる！」

「大胆すぎるのは、龍の悪いところよ」

「俺は何も大胆じゃないだろ！ お前の悪いところは妄想暴露力が

大胆不敵すぎるところだよ！」

「もう、ほら！ 周りの視線が痛いでしょ！」

「俺がな！」

「龍にはね、自重心が足りないわ！」

「お前がな！」

こんな会話を毎日してたら、さすがに疲れそうだな。大変だなあ、
龍。……さっきも同じような事を考えた気がする。まさか、歳か！？

疲れ気味の龍とは打って違い、詩織さんと葛ちゃんは楽しそう。

「はい！ りゅーに、あげるー！」

今度は葛ちゃんが、焼きそばを掴んで龍に向ける。

「……いやいいよ。食えって」

「はい、あーんして！」

「しないって！ 何で姉妹揃って同じ事を言うんだよ！ 本当に学

習能力ゼロか！」

「たべないの？」

「さっきからそう言ってるよな！ その耳は飾りか！」

「いちごのは、たべないんだ……」

「え？」

「しおねえのはたべて、いちごのはたべないんだ！」

「食べてないし！ 苺の目には俺のどんな姿が映ってるんだ！？」

「しおねえにだけ、よくじょうするんだ……」

「してないし！ というか妹に欲情したらそれこそおしまいだよ！
っていうか、何でそんな言葉を知っているんだ！？」

「……コホンッ」

「やはりお前か、詩織！」

「うう……」

『！』

まずい、また苺ちゃんが泣きそうだ！ オレ達は全力でジェスチャー及びアイコンタクトをする！

（龍、食え！ 俺が許すから食え！）

（苺ちゃんがまた泣いちまうだろ！ 何でも良いから食え！）

（また生徒会長に怒鳴られます！ その小さなプライドを捨てて食べるのです！）

（だが断れ）

「ぐっ……」

オレ達のジェスチャーは伝わったが、拳が震えている。どうしても「あーん」に抵抗があるらしい。確かに、あの隙の無い龍にとっ
ては身震いする瞬間かもしれない。

しかし、今にも泣きそうな苺ちゃんを見て、決心したようだ。

「あー、やつぱり腹減った！ 苺の焼きそばが食べたいなあー！」

よし！ なんか導入は変だけど、手応えあり！ 苺ちゃんは「ほんとう！？」と顔を上げ、焼きそばを掲げ、ご丁寧にも息でふうふうしてから龍に向ける。

「じゃあ、はい！ りゅーにぃ、あーん！」

「や、やはりその食い方なのか……。仕方ない……。あー……。遂に口を開けた！ 廣瀬は食うのを中断し、カメラを手取る。

無理もない、こんな光景は、次はいつ見れるか解ったもんじゃない。永久保存確定だろうな。

「苺ちゃんから焼きそばを口に運んで貰った龍は、あまり優れない顔で焼きそばを噛み締める。」

「おいしい？」

「うん、美味しいさ……」

美味しそうに食べてるようにはとても見えない表情で答える。それでも、苺ちゃんは満足そうに「よかった！」と言って笑顔だ。よくやった、龍！ とりあえず、この映像は近い内にネットに流れるかもしれないけど、気にすんな！！

「そ、そんな、龍……」

笑顔の苺ちゃんとは裏腹に、詩織さんは愕然とした表情をしていた。

「今度は何だよ……。もう要らないからな！」

「ひ、酷いわ……。私のを食べないで、苺のは食べるなんて……差別だわ！」

「もう面倒な事を言うんじゃない！ ツッコミは既に限界なんだよ！ 臨界点突破してるんだよ！」

「姉じゃなくて妹に欲情するなんて……。なんて卑劣な兄なの！？」

「姉妹揃って言うことが同じなのは何故だ！ 頭は良いのに学習能力がないのは何故だ！ この場を弁えないのは何故だ！？」

「この……ロリコンやろお！」

「ああああああああああああああああああああもおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

詩織さんが変な嫉妬に狂ったせいで、龍が壊れた。
今度はオレ達が面倒になりそうだ……。

「はぁ〜！ 良い空気だ！！」

時刻は十二時過ぎ。俺は外に出て、大きく深呼吸する。

この学校は山に囲まれてるから、都会に比べたら空気的美味さは段違いだ。勿論、さっきの窮屈な空気とは格が違う。今は人の入りが落ち着いてるから、外には昼食を摂ってる人が数人居るくらいだ。この風景こそ、正しく平和である。

何とか壊れた籠を抑える事が出来たが、さっきはまだ野良猫のように荒い息遣いをしていた。完全に沈静化するには、まだ時間が掛かるだろう。

にしても、生徒会の連中はこんな時間でも仕事してんのか？ 流石に飯は食ってんのかな。いや、あの会長の事だ。「生徒会は昼ご飯なんか食わずにキビキビと働くのです！」なんて事を言って重労働を強いているに違いない。

何をやっているのかと、俺は興味本意で正門に足を運んでみる。

「ん……？」

何だ？ テントの下のテーブルに突っ伏してる役員を二名確認。

おいおい、もしかしてのびてるのか？ まだ夏の灼熱には程遠いの、こんな暑さでくたばってたなら、この先生きていけねーぞ。これだからもやしっ子は！

俺はダウンしてる役員に近付き、肩を揺する。

「おい！ 何寝てんだよ！ 客が来たらどうすんだよ！」

「……………」

「おい？」

もう一人も揺すってみるが、反応は無い。返事が無い、ただの……

……。まさかつ！

「殺人……？」

俺は急いで二人の脈を診る。

……………。

……ん、普通に血は流れてる。生きてる。死体じゃなかった。ちよつと残念。いや冗談だけど。

何だよ、本当にのびてるのか？ まったく、生徒会は知らないだろうけどな、ここの映像撮ってるんだぞ？ 生徒会執行部は見た！

だぞ？

よし、このやる気の無い役員の姿を、校長に見せてやる！ そうすれば、お前達が握るはずの山高祭の売上は俺達が頂く事が出来る！ クククツ、日頃の恨みはこれで晴らす！ ほら見るよ！ あのカメラが決定的瞬間を捉えたのだ。

「！」

カメラが、壊れてる？ 何かが強くぶつかったような感じだ。カメラの下を見ると、中くらいの石ころが一つ転がっている。

……マジかよ、石ころでカメラ壊したの！？ すげえなおい！ 是非ともその才能を別のところに活かして欲しかったんだが！ 投擲競技で優秀な成績を修められるだろ！

クソツ！ 生徒会めっ、手の内はバレバレってか！ そこまでして仕事をサボりたいか！ はっ！ 見損なっただぜ！ 寝たきや寝てる！ 好きなだけな！

俺は踵を返し、帰ろうと足を動かす。まったく、とんだ無駄足だったぜ！

しかし、拭えない違和感に俺は足を止める。

いや普通に考えておかしい。何故そこまでする？ サボるといっか、休みたいなら、別の役員と交代すれば良い話じゃないか。五人居るんだから、出来ない話じゃない。

それに、何でカメラを壊す？ あまりよろしい話じゃないが、生徒会なら、放送委員会に乗り込んで映像を揉み消せばいいだけの話わざわざ証拠が残るこの方法を選ぶ必要はない。

それどころか、俺が知る限り、今の生徒会役員に仕事を放棄する奴は居ないはずだ。寧ろ望んで志願した奴しか居ない。

何より、本当にあれは暑さでのびてるのか？ だったら本気で保健室に運ぶべきだ。

俺はもう一度、二人の役員を見る。髪に隠れている首の裏を見て

みると、二人とも赤くなっていた。何かを叩き付けられたかのような、そんな印象を思わせる跡。

気絶している。いや、させられた。

一体誰に？ 一体何の為に？

カメラを壊す必要があるという事は、見られたくないという事。善くない行為をしたという事。それが、これか？

いいや違う。二人を気絶させても、何の得も無い。何か、別の理由があるはずだ。

俺はテントの下を探る。すると、役員の鞆が三つあった。

三つ。二つじゃなくて、三つ。

つまり、もう一人役員がいた。しかし、今は居ない。って事は、

「誘拐……？」

今の自分の結論を呟く。考えたくないが、今はそれしか思えないでも、どうして今なんだ？ 今は山高祭で人がたくさん居る。目撃される可能性は高い。要らない危険を冒してまで、誘拐するメリットがあるという事……。

違う、そうじゃない！ 重要なのは、誰が誘拐されたかだ！ こ

の二人は、古蛇こじやと神田かんだと言うらしい。この赤い鞆と黒いエナメルはこの二人のだな。ご丁寧に、名前シールが取っ手に貼ってある。こんな形で役に立つとは思ってもいなかっただろう。

残る青いリュックには、名前シールは貼ってない。申し訳ないと思いつつ、俺は中を漁る。何か、名前が解るもの……。

？ すーがく？ と書かれたノートを発見！ 名前は……。

「小淵……！」

会長だった。

嘘だろ……何で会長を誘拐する必要がある！？ あの実用性がまるで無い身体を何に使ったつもりなんだ！？ メリットがなさすぎる！ 犯人は馬鹿か！？

そんな事を言っても、何とかしない訳にはいかない。部屋に居た時は、カメラの映像は映っていた。だから、犯行からあまり時間は

経っていない。まだ近くにいるはず……！

俺は正門を出る。地面を見ると、タイヤの跡は無い。幸いにも、犯人は車ではないようだ。良かった、そうなら、走れば追い付けるかもしれない。

「車じゃない……？」

どうして？ どう考えても、車を使った方がいいじゃないか。早く逃げれる。ていうか、車を使わないで誘拐なんかするか？ 犯人は本当に馬鹿なのか？

……あー！ こんな事を考えても仕方ないんだよ！ 今は犯人を捜す事だけを考えろ！

道は三つ！ 前、右、左！ さあどうする！

「んーっ……右利きだから、右！」

シャッターの閉まった煙草屋の前を通り、コンクリートが固まった道を俺は走る。

根拠は無い！ でも走る！ 走れ、走れ！ とにかく走れ！ 一キロ走っても怪しい奴が居なかったら別方向だ！ もう三キロ走る！ また駄目なら五キロ走る！ それで済む事！ 大丈夫、体力には自信がある！ それくらいどうって事はない！

「！」

曲がり角から、一人が出て来る。頭を見る限り、男っぽい。赤髪のオールバックなんか、女はしないだろうし。それに半袖の制服姿から、学生と思われる。

男は俺を見る。……うわ、頬に傷がある。痛そうだ。

「どこに行く？」

低い声で、そう訊ねてきた。俺はその場で足踏みをしながら答える。

「捜し物だよ。急いでるんだ、そこをどいてくれ」

「捜し物というのは……。もしかして、これの事か？」

男が言うと、もう一人曲がり角から震えながら人が出てくる。オレンジツインテールの、小柄な女子生徒……？

「会長！」

まさか、こいつが犯人だったとは！

「その色々と残念なスタイルの山高生を今すぐこっちに渡せ！」

「残念って何ですか！」

男は「ふっ」と鼻で笑い、会長をひょいと摘んでこちらに投げる。

「きゃっ！」

「おっと」

俺は会長を受け止める。そして、鋭い目つき（だと思っ）で男を見る。

「何でこんな事をした！」

「生徒会執行部会長、天川三紀だな？」

むっ。俺の名前を知ってる……？

「如何にも。お前は？」

「大民高校三年、高石翔だ」

「高石……？」

「そう、高石だ。高石でいい」

高石……翔？ それってもしかしくなくても……大高の頭！？

おいおい冗談だろ！ 何でそんなやばい奴がここに居るの！？

……そういえば似たような声をメグの時に聞いた気がする……。まさか、通報した事がバレたのか！？

「な、何の用だよ……。それにしてもこんな会長を搔っ攫うなんか、

見る目がねえな！」

「こんなって何ですか！」

会長は俺の手から離れ、俺の後ろにちぢ籠る。声はでかくても、

根性は小さい。後スタイルも。

「そいつはただの餌だ。お前達を誘き寄せる為のな。ヒントを出しておいたから、簡単に解っただろう？」

「ヒント？」

何だそりゃ。いや、今はそれじゃない。

「餌って何だよ。確かに、ライオンの餌には持って来いかもしれな

いけどな！」

「嫌ですよ、そんなの！」

「宣戦布告だ。俺達大高は、生徒会執行部を潰す」

……は？

え、いや、今なんつった？ オレタチダイコウハ、セイトカイシツコウブヲツブス？

……はあッ！？ ちょっと待てよ。今県一番の不良高に宣戦布告されたぞ！？ こんな田舎にある高校の数ある部の中で生徒会執行部を潰す！？ 何で、どうして！？ 何か悪い事したっけ！？ いや、どっちかって言うとそのちが悪い事してない！？

「な、何だそれ！ 拒否、そんなの断固拒否！」

「関野が協定を撤回したからだ。そちらがその気なら、こちらも全力で抗戦する」

「いや待てよ！ 元はと言えばお前らが」

「異論は認めない。さあ、まずは会長、お前からだ」

高石が拳を握り、構える。

……え、ちょ、待て待て待て。俺喧嘩とか無理だから！ 何そのマジな目！ 駄目駄目、敵う訳ないじゃん！ 相手は大高の頭だぞ！ 無理無理、逃げよ逃げよ！

「あつ……」

俺の後ろの会長の震えが伝わってきた。

……逃げる訳にはいかねえな。女の前で逃げる男は男にあらず！ 男なら、当たって碎ける！ これぞ男の生き様！

俺は顔を両手で叩き、気合を入れる。

「よし、来いよ」

「ちょ、ちよっと！ 喧嘩なんて出来るの？」

「いや、無理！」

「余裕満々で敗北宣言！？ だったらやめて！ 逃げようよ！」

「いいか、会長。男にはな、無理と解つてても、やらなきゃいけない時があるんだ！」

「どこかで聞いた事があるような台詞！ 安っぽい覚悟なら要りません！」

「覚悟はいいか？ 俺は出来てる」

「出来てないですう！」

俺達のやり取りを見ていた高石は「ふう」とため息を吐き、首を振る。

「似ている」

「何が？ 何に？」

「お前達が、両親に」

「へえ。そりゃあ随分と仲の良い両親だな。羨ましいぜ」

「俺はそれを、影から見ていただけだったか」

「……………」

あの傷に、今の言い方…………。

「…………虐待？」

俺の推察に、高石は一瞬だけ面食らったような顔をした。

「よく解ったな。素晴らしい推察力だ」

「お前も、辛い過去を…………」

「何、大した事はない。貰う飯は残飯。水は近くの汚れた川。父の趣味は火炙り。母の趣味は鞭。それを毎日、変わりなく繰り返し受けていただけの話。背中には、その跡が刻まれている」

「酷い…………」

会長がこぼす。

「今となつては、懐かしい思い出だ」

「そんなお前が、どうしてこんな…………」

「強くなりたかった。とにかく、強く。誰にも負けない。誰にも屈しない。そんな人間になれば、昔の自分を忘れられると思った。

所詮世の中は弱肉強食。強者が弱者を食らう。強くなって、両親の立場になつてみたかった。それが導入だ」

「感想は？」

「…………無い、というのが一番だろうな。気付くと俺はこの立場に居

たが、そこからも得られるものは無かった。両親が得ていた快樂さえも、俺は感じる事が出来ないのか　ッ!？」

途端、高石が急に頭を抑えた。

「どうした？」

「いや……。昔を思い出すと、いつも頭痛がするだけだ。きっと、俺がまだ弱いからだ。　お前を下せば、少しはマシになるかもな」

高石は拳を固め直し、獣のような眼光を俺に向ける。

「改めよう。天川、まずは、お前からだっ！」

凄まじい瞬発力で、俺に向かってくる。

「うおお、どうすればいいんだ！　とりあえず、蹴るか？　それとも手を広げる？　ああ、解らん！　誰か、誰か助けてえ！」

「何をやっているんだ」

「！」

後ろからの声に、高石が止まる。この声は……！

「龍！」

良かった！　龍が来れば安心だ！　俺は会長を連れて、素早く龍の後ろに回る！

「はははーっ、運の尽きだぜ高石イ！　我らが誇る生徒会執行部副会長が来た以上、お前に最早勝ちの目は無い！　さあ龍、やつておしまい！」

俺は目標を指差し、指示する！

「龍……？　そうか、お前が城古我龍か」

高石は拳を解き、背を伸ばす。

「何だ、お前？　天川と……。……に何をした」

「名前忘れられてる！」

会長がショックを受けていた。

「俺は高石。大高の頭だ」

「大高の頭……。なるほど、お前が今までの元凶か。つまり、お前さえ木っ端微塵にしてしまえば、一切合財安泰という訳だな」

え、ええ？　今の龍は、発想がとても怖いぞ！　何があった？

まさか、さっきの事を未だに引き摺っているのか！？ 後遺症か！？

龍は手に持っていたアルミ缶を、片手でそのまま握り潰す。うわあ、相変わらず馬鹿力。

「今、俺は気分が悪いんだ……」

アルミ缶を手放し、

「だから、蹴る！」

意味不明な理由で、アルミ缶を蹴飛ばす！ アルミ缶は高石の顔に向かって、正確に飛んで行く！ すげえ、何か漫画みたいだ！

バシッ！

「！」

龍が驚く。それもそのはず、高石はそのアルミ缶を右手で、いとも簡単に受け止めたのだ。いや、絶対痛いって。

「これは驚いた」

そう言って、潰れているアルミ缶を右手で更に小さく握り潰す。

「俺と同じ事が出来るとは」

龍と同様に手放し、蹴飛ばす。アルミ缶は、龍の顔のすぐ横を飛んで行った。ぐああ、鳥肌が……。

「今日は、騒ぎを起こすのはやめておこう。折角の祭りだ。思う存分楽しむといい。 また会おう」

高石は背を向け、歩き始める。

「あ、おい待て！ 龍、追え！ 追うんだ！」

「……いや、やめておこう」

「ど、どうして！」

「アルミ缶を捨ててくれたお礼だ」

「……は？」

意味不明な事を言った龍は、振り返り学校に向けて歩く。俺達も慌てて付いて行く。

「龍、何でこっちだって解ったんだ？」

「お前と同じ理由だと思うぞ」

「龍も右利きなの？」

「……………。役員の指先が、こつちの方向を指していたらう」
そうだった。あ、さっき言ってたヒントってその事か。全然気付かなかった…………。

「ていうか会長。こういう時こそ、その馬鹿でかい声の使いどころだろ。叫べば誰か助けてくれたかもしれないのに」

「…………睨まれたら、声がでなくなつたの」

「ん？ それ、石になるんじゃない？」

「メデューサじゃなくて！…………あの目を思い出すだけで、今でも背筋がぞつとする…………」

睨まれると声が出なくなる…………？ 新手的スタンドか！？

…………いや冗談はさて置き。確かにあの目は恐ろしい。まるで羊を狙う狼だ。目を合わせただけで絶望的なシミュレーションが出来てしまう。

絶対的敗北イメージ。それを、高石は目だけで脳裏に焼きつかせてくる。大高のリーダーなだけはある、喧嘩の実力も天下一なのだろう。龍が来てくれて、本当に良かった。

学校の正門に着くと、龍はそのまますすぐ進む。ちょっと行くと、自販機があり、その横にゴミ箱がある。

…………冗談だよな？ さっきの龍の言葉って、こういう事？ いやいや、あそこからここまでどんだけ距離あると思ってたんだよ。プロのサッカー選手でも厳しい距離だろ。無理無理、ありえない。ありえるはずが無い。

そう思いながらも、俺はゴミ箱を覗く。

「…………嘘だろ…………」

本来の姿からかけ離れたアルミ缶が、一番上に捨てられていた。明らかに、さっき高石が蹴ったアルミ缶だ。

「面倒な事になりそうだな…………」

龍は嫌々呟いて、正門に向かう。

「…………あぁっ！ まだ午後の部が残ってます！ 急いで準備しないと！」

会長は、あまり速くないが、走って戻る。

俺はその場で立ち尽くす。

彼の闇は、大きすぎる。

受け止められる気がしない。

……俺は一体どうすればいいんだ？

「……いいや違う！」

解らん事を考えても仕方ない！ 重要なのは、今だ！

山高祭は、まだ終わってない！

俺達の祭りは、これからだ！

部屋に戻ると、中はとんだ大騒ぎになっていた。

「天川さん！ 大変です！ 廣瀬さんが暴走しました！」

「たすけてー、あまかわおじさーん！」

「何やってんだ夕！」

「いいわその顔！ もっとやっちゃって！」

「詩織さんまで何言ってんすか！ おい龍！ 苺ちゃんが貞操

喪失の危機だぞ！ どうかしろって！」

「……苺など、特甘なシロップを掛けられて頭の上から食われてしまえ」

「おおい！？ さっきの兄としての貫禄はどこ行った！？ ああ、

ああ、夕やめろ！ それ以上やったらポルノなんたらに引っ掛かる

！」

……やっぱり、祭りはもうおしまいでもいいかもしれない。

第7話「規則は影で心身を染め上げる」

「オーッス」

放課後。俺はいつも通り、生徒会執行部室に入る。既に中には、一人の役員が座っていた。

「おう」

男らしく答えたのは、所定の位置に座って腕を組んでいたメグ。相変わらずの尖がり帽子がよく目立つ。

「何だ、まだメグだけか」

俺は定位置に座り、色々ぶち込んでいる鞆を下ろす。色々入れすぎで重くて肩が凝るぜ、まったく。

「……まだ、来ないよな」

「ん？」

メグは怪しげに呟くと 突然、俺に頭を近付けてきた。何か、槍を突き付けられてるみたいなんだけど。

「な、何？」

「ちよつと、見てくれよ」

「は？」

ちよつと見てくれって……？ まさかつ！

「メグもいよいよ、臭いが気になる年頃か……」

「ちげえよ！ ほら、ここ！」

メグはもみあげ辺りを指差す。なんとそこにはっ！

「か、髪がつ！」

ほんの、ほんのちよつとだが、黒い髪がちよびつと出ている！ まるで種が発芽したかのような、何だか微笑ましい状態だ。

「やっと伸びてきたんだよ」

そうか……。よく思い出すと、あれから半年は経ってるんだな。それなら、切ったもんも伸びてくるもんだ。

「どうだ、すげえだろ！」

「いや、別に凄くはないけどな。人として当たり前的事だし」

満足したメグは頭を戻し、腕を組み直す。何だ、見せたかっただけかよ……。何の自慢にもなってないんだが。

まあメグだって、何だかんだ言っても女の子。頭が寒いつていうのは、やはり心細いのだろう。来年には、その帽子も押入れ行きだな。買った本人からすると、ちょっと感慨深いものがある。

と、ここでドアが開いた音がしたので見てみると、眼鏡の夕がご来場。

「オーッス」

俺が挨拶すると、夕は軽く会釈して、自分の席に着く。口数が少ないのは、いつまで経っても変わらなさそうだ。

夕は鞆を開けるとすぐさまお馴染みのノートパソコンを取り出し、開いて電源を点ける。コミュニケーションを取る気ゼロなのもなんとかならないかね。

「なあ廣瀬。いつもそんなパソコンいじってるけど、何やってんの？」

メグが日頃の疑問をぶつける。何か似た事を、以前龍が訊いてた気がするんだが。俺の記憶通りなら……。

「確か、あれだよな。神奈川県民の個人情報を集めてるとか」

「それはもう終わった」

おっほう。もう神奈川県民にプライバシーもへったくれもないって事かい！ 今すぐ条例でも何でも制定するべきな気がする！ いやすべきだ！ 頼むよ知事！ というか、一般市民一人に破られるセキュリティって甘すぎじゃない？

「じゃあ、今は何やってんの？」

夕はパソコンの画面をメグに見せる。

「何これ、ブログ？」

「ん」

俺も覗いてみると、確かにそれはブログだった。ピンクを背景に記事が展開されてる。ちなみに今開かれてる記事は、深夜アニメに

関する批評だった。文を見る限り、結構辛口のようだが。

「へー、廣瀬ブログやってたんだ。意外だなあ」

な、何だと！ メグがページを動かして、ブログを見ている！？

「メグ……お前、パソコン使えたのか！？」

「どれだけ過小評価してんだよ！ そんなくらい出来るわ！」

「ケータイも持ってないくせに……！」

「それは関係ねえだろ！」

時代遅れなんだから、パソコンなんて使えるべきじゃないと思うんだけど。どうせならキャラをぶらさず、時代遅れを極めて欲しかった。

「げっ！ 今日だけでもう五回も更新してんじゃん！ まだ四時前だぞ！？」

「頻度が大切」

「大切って！ 普通一日に一回、多くて二回じゃねえの？」

「アフィリエイトだよな、タ？」

タは頷いた。

「あふえり……エイト？」

メグは首を傾げる。なんだ、そんな事も知らないのか！ やはり時代遅れだな！ 安心した！

「仕方ない、教えてやろう」

俺は身乗り出し、教えてやる事にする。

「アフィリエイト・プログラム……成功報酬型広告とも言っな。これはインターネット上における広告形態を指し、ある広告媒体のウェブサイトに設置された広告によってウェブサイトの閲覧者が広告主の商品あるいはサービス等を購入した場合、生じた利益に応じて広告媒体に成功報酬を与える。という意味合いを示す言葉だ。例えばこれ、リンク繋がってるだろ？ これを閲覧者がクリックすると、広告媒体、ここではタのブログだな。つまりタに？ クリック報酬？ が約束される。クリック報酬ってのは文字通り、クリックされた回数に応じて決まる報酬な。んで、更にその人がリンク先で商品を購入

入、またはサービスに申し込んだ場合、？成果報酬？が貰えるという訳だ」

「ふーん」

メグは何度か頷いたが、すぐに首を傾げる。

「仕組みは解ったけど、何で何度も更新しなきゃいけないの？」

「解ってねえなあ。要するに、これで稼ぐ為にはたくさんの人にブログを見て貰う必要があるんだよ。だから可能な限り更新して、記事を増やしていく訳。読者に飽きられない為、読者を増やす為にな」

「あー、なるほど。で、これってどんくらい稼げるの？」

「普通なら、月五千円程度かな。子供の小遣いに満たないのが多い。ま、勿論夕は例外な訳で。五万は軽く稼いでるだろ」

「五万！ ホントか！？」

「先月は、十万くらい」

じゅ、十万！？ 予想の遥か上すぎる！

アフィリエイトだけでそんなに稼げるんなら、将来働く必要ないかもな。高校生のバイトよりも十分儲けてる。コンビニでせっせとレジ打ってる高校生……つまり俺涙目だ。なんかメグが「オレもやってみようかな」とか言ってるけど、絶対やめといった方がいいと思う。

「はあ。でも、それだけ稼げるんなら十分だよな。羨ましいわ」

メグの言葉に、そんな事はないと言わんばかりに、夕は首を振る。

「え、こんなんじゃない駄目なの？ ああ、そうか。廣瀬って一人

暮らしたもんな。じゃあ、他の方法でも稼いでんの？」

「転売だよな、夕？」

「ん」

「転売？」

まさか、転売まで知らないのか！？ どんだけ遅れているんだ、メグは！ ったく、俺が教えてやらなきゃ、愚か者の極みじゃないか。この先生きていけないぞ！

「メグ、転売というのは、買った物を買った時の値段より高くして

「売る事で利益を得る事だぞ」

「いや、それは何となく解るよ。でも、どんな風にするのかって」

「そんなのも解らないとは……。うーん、やっぱり時代遅れだな。」

「マジ安心した」

「すんな！」

「まあ、安物を漁って、もっと高く売れそうな物を別のところで売る。極めて単純な話だ。と言ってもタの場合は、ネットオークションとかでそういうのを探してそうだけだな」

「例えば、どんな？」

「んー……。最近で言うと、やっぱりこれだな」

俺はお決まりのポーズを決める。しかし、やはりメグには伝わらない！

「何だそれ？」

「俺のターン、ドロー！　ってやつ」

「ああ、それが！　それなら知ってるわ！　よく帰り道、子供がカード買ってるの見る！」

「そう。このカードゲームは、先日ギネスブックに認定されるほどの人気がある。しかし、会社の売り方に問題があって、一部のカードが高騰してるんだ」

「どんな問題があんの？」

「極端に言つと、人気カードの確立を操作する。つまり、人気カードがパックから出にくくする。これらのカードは高値の傾向にあるな」

メグはむつとする。

「あくどい売り方だな」

「ま、会社としての立場、運営方針もあるんだろうから仕方ないけどな。他にもあるぞ。カードの生産会社は雑誌会社と契約していて、雑誌では応募者全員サービスとして、五枚入りで限定カードを配付するんだ。それらのカードも高値になることが多い。タの場合は、それをたくさん応募して、値段が限界まで高まった瞬間を見

計らって売り捌くって感じだよな？」

俺の推論に、夕は二度頷く。以前家に行った時、その手の雑誌が山積みになってたからな。想像は出来る。

「で、それはどんくらい稼げんの？」

「物によるけど、雑誌代、小為替込みで八百円の予算で、一枚四百円で売れるとしても二千円。千円は儲けるな。特にホビーシヨップとかでは高く買い取ってくれる事が多いから、そこで売るともっと儲かるはずだ。更に物によれば、価値がもの凄く上昇するから、下手すりゃ万単位も稼げる」

「へえー」

するとメグはまた「よし、やってみよう」とか言っていた。やめとけて、買ってハマってしまった姿が目に見える。やる相手が居るのか定かじゃないけど。

「おはようございます！」

唐突なタイミングとかなり場違いな挨拶で、春が入場した。要らないと思うけど、一応ツツコミはしておくか。

「オッス。ちなみに今は朝じゃないぞ」

「解ってないですねえ。私はついさっきまで寝てたんですよ！　まったく会長だと言うのに、そんなのも解らないんですか？」

「解る訳ねえよ！　てか授業中に寝るな！」

「それがですねえ、体育の時、豪速球のハンドボールが後頭部に激突しちゃってたんですよ。そしたら何か頭がグラグラってなって、倒れちゃいました」

「気絶じゃんそれ！　よく平然とここに来れたな！」

「いえ、冗談ですから。でも、ベンチに座っててウトウトしちゃったのは本当です！」

「……あー、そう」

何か一気に意気消沈だ。簡単に嘘なんか吐きやがって。敬語で言えば良いってもんじゃないだろうに。

と言っても、この学校の体育の授業は、結構レベルが高かったり

する。

去年のバスケット部なんかは全国大会に行ってたし（助太刀した大輝のおかげだが）、他の運動部もそれに近い活躍をしている。登校するとき、それを祝福する報せが常に校舎に垂れてるくらいだ。正直、それがない時がない。

その結果に影響されてか、体育は中々にハードだ。龍はいつも体育の後死んでいるが、他の生徒はむしろやり足りないという感じがた多い。そんな輩が多いからか、体育中に保健室行きの生徒はよく見掛ける。だから、春の嘘が現実にも起きてもおかしくはない。起きたら起きたで問題だが。

「まったく、何で体育が六時間目なんでしょうかね……。困るんですよ！ 帰りのホームルームは遅くなるし、体操着は汚れるし、疲れするし！」

着席した春は即行愚痴る。まったく、これだからもやしっ子はいけないんだよ、ホント。

「ええじゃないか！ 健康的な汗を流す事は、身体に良いぞ」

「別に私は身体を動かす必要は無いんですよ。将来動かす予定も無いですし」

高校生の時点で本気で二トになる気満々だこいつ！ 進路希望に堂々と自宅警備員って書きそうな勢いだ！ うむ、ここは会長として、正しく矯正しなければなるまい！

「春、何かやりたい事ってないのか？」

「特に無いです！」

「簡単な事でいいんだぞ？ あ、ほら！ 女子なら料理とかやってもいいんじゃないか？」

「駄目ですよ！ 私、料理のセンスが絶望的なんです！ 両親には嫁に行けないなと太鼓判を押されるくらいですから！」

「痛いところを随分と明るく言うんだな。でも、少しくらいは出来るだろ？ 例えば……おにぎりとかさ」

春は腕を組み、「うーん」と唸る。

「それ、私の中ではランクAの難しさですね！」

「おにぎりでランクA！？ 米を握るだけなのにか！」

「どう頑張っても、形にならないんですよー。気付くとベツチヨベチヨになってます！」

「どんだけ力入れてるんだよ！ ……んー、じゃあスクランブルエッグ大丈夫だろ。前に誰でも作れるみたいに言ってたし」

「何言ってるんですか！？ 火を使う時点で不可能ですよ！ 火事になっちゃいますよ！」

「春は例外だったのか！ いや、大きく考えすぎだって。気を付ければ、滅多に火事にはなんないよ」

「あつ……。私、まず火の点け方が解りません！」

「致命的だなおい！ 先に言え！ だったらもうこれは大丈夫だろ！ 即席ラーメン！」

「それ料理と言えるんですか？」

「多分言えないと思うけど、もうやけくそで」

「何で天川さんがやけくそになってるんですか。まあそれはさて置いて、作れる訳ないですよね！」

「ここまで来ると逆に凄いな！ お湯注ぐだけの事なのに、それも出来ないなんて！ 天然記念物として登録してやろうか！」

「まず、ポットがどこにあるか解らないです！ あの広ーい台所のどこにあるんですか！」

「親に訊け！ ていうかそんなんじゃ、包丁もろくに使えなさそうだな！」

「実は私、包丁持つと、殺人衝動に駆られてしまいます！」

「二重人格！？」

「まな板を持つと、撲殺衝動に駆られてしまいます！」

「怖いなその人格！ ずっと封じといてくれよ！」

「とにかく、私に料理は無理なんです！ エプロンすら着けられないですから！」

「そりゃあ家庭科の実習が大変そうだ」

「……来週、あるんですよ。覚悟しなければなりません……ガク
ガク」

楽しい実習をここまで震えて恐怖する生徒が他にいるのだろうか。
来週の今頃には、指に絆創膏を貼ってるに違いない。いや、それ以前に春には包丁を持たせてはいけない。山高史上初の死者が出てしまう。

そんな会話をしていると、残る最後の役員　ぐったりした龍が
やってきた。

「オーツス」

「……ん」

力の無い返事をする、龍は席に座り崩れる。

「どうした、龍？」

「……いや、別に」

俺が訊いても、ぎこちない返事しか帰って来ない。何だか心配だ。
思い付く限り問い詰めてみる。

「眠いのか？」

「違う」

「怠いのか？」

「違う」

「人生に疲れたのか？」

「なんか変な方向に行ったけど、違う」

「フラれたのか？」

「誰とも付き合ってないし、違う」

「思春期なのか？」

「多分そうだろうけど、違う」

「じゃあ何だよ！　俺が思い付く事は全部言っただぞ！」

「随分と小さい脳みそだな」

突っ伏している顔を上げ、天井を見ながら言った。

「これは……鬱という奴かもしれない」

「何があった？」

「昨夜の事だ……。俺は夜中の一時過ぎに、いつもと同じようにゲームをしていた。先日発売した『ジヨナサン』シリーズの最新作をプレイしていた。そうだ、ちょうどテストタロツサに関する伏線が回収されようとした時、寝ているはずの詩織がいきなり俺の部屋に入ってきた、ゲーム機の電源を切ったんだ！　幸いにも直前にセーブしたから良かったものの、俺は怒った！　何をするんだと！　そして詩織の奴、再来週テストだから、テスト終わるまでゲーム禁止とかめかしやがった！　おかげでいつも持ち歩いているゲーム機も取り上げられてしまった……。今の俺は、生きている気がしない。強いて言うならば歩く幽霊だ……。」

「あゝ、だから今日はゲームしてないのか」

いつもなら座った瞬間にゲームを始めるのに、何で今日はしないのかと思ったら、そういう事か。でも正直、自業自得な気がするけどな。

「げっ、そーいやそろそろテストかよ……」

メグが苦い表情をする。

「どうせ赤点だらけなんだから、今更気にするなよ」

「うるせえ！ 今度こそは……！」

メグは去年の時点で留年は確定してたのだが、勉強してテストは受けていた。が、想像の通り赤点オンパレード。二年の基礎である、一年の勉強を怠っていたのだから当然の結果だ。……そうにしても、一桁だけってのはどうかと思うけど。

「テストなんてどうでもいいのに、無くなればいいのに……。うが
あああああああああああああああああああ！」

「下らない事で壊れている龍はさて置き」

「何が下らないことだあああああああ！俺にとつては死
活問題なのにいいいいいいいいおおおおおおおおお！」

俺は一枚の資料を手に立ち上がる。

「という訳で、今日は服装の乱れについて話し合おうと思う！」

「どういふ訳だああああああああああああああ……ん」

龍が顔だけこっちに向ける。何か気持ち悪い体勢だ。

「珍しく定番だな」

「うむ。数ある要望書に、こんなのがあつてな」

「どれどれ」

龍は身体を起こし、俺の資料を手に取り読み上げる。

「最近、校内の服装の乱れが目立つようになってると思います。ワイシャツが出てるのは勿論、ネクタイを着けてない生徒は多いし、女子に至ってはリボンもそうですが、スカートが短すぎると思います。このままでは、山高のイメージが大きく崩れてしまうと思います。このような服装の乱れをなんとか出来ませんか？　だそうだ。

……いやいや」

龍は首を振って、資料を俺に戻す。

「これこそ生徒会の仕事だろう」

「ご尤もなんだがな、何故か突き返された」

「はあ？」

先日、会長にこの要望書を渡した次の日、何故かこの要望書が目安箱にそのまま返されていたのだ。会長曰く、「執行部に来た要望は執行部でなんとかするべき」だと。完全に仕事放棄である。

そもそもこの学校、頭髮に対する規制はとっても緩いが、服装に対する規制は厳しい。

スカート丈の長さまで細かく設定されているし、ネクタイの理想の形だとか、上と下のバランスだとか、短髪と長髪の調和だとか……とにかく変なところで細かいのだ。

ま、それを完璧に守ってる生徒なんか、極少数な訳だ。正直このメンバーだって、完璧に守れてる奴は居ない。

「生徒一人ひとりに関する事ならまだしも、このような生徒全体に関わる事は生徒会がどうにかするべきだと思います！」

春が正論を述べる。もうホント、その通り。あっちの言い分も解るっちゃ解るけどさ。解るけどさ！

「そもそもどうにかするって、どうすりゃいいんだよ、こんなの。」

完璧な対策なんかねえだろ、これ」

メグが結論を急ぐが、俺はそれを制する。

「まあ待てメグ。とりあえず、お前がそのズボンを脱げば話は進む」

「な、何だよそれ！」

「役員からそんな格好じゃあ、示しがつかないんだよ」

「っ……………」

こんな魔法使い気分な女子に服装どうにかしろなんて言われても、説得力も何もないからなあ。

「ま、帽子はともかく、ズボンは脱げよ」

「ぐっ……………嫌だ！」

「だってメグの脚なんて見ないから。興味ないから大丈夫」

「そっいうんじゃないくて、露出するのが嫌なんだよ！」

「我が儘だなあ。学校に滞在する限り、校則従うのは礼儀であり常考だろ？ ファッションとか言うけど、一般生徒から見ればただの古臭い女子高生だからね」

「いいや！ こればかりは譲れねえ！」

メグはズボンを押さえながら頑なに拒否する。

「我が儘は駄目だ。他の女生徒は守ってるのに、役員であるメグが守ってなきゃ、こつちも取れる対策も取れない。まだ発足して間もないとは言え、ここは生徒の要望を司る重要な機関なんだ。自覚を持って、メグ」

「っっ……………」

仕方なく正論をかます。俺はあまり正論というのは好きじゃないが、致し方ない。

「くそう」

メグは渋々立ち上がり、ズボンに手を掛ける。ふう、やっと解つてくれたか。

「……………何見てんだよ」

「ん？」

ふと周りを見ると、皆顔を伏せていた。

「どうした、皆？」

「どうしたもこうしたもないですよ。普通、顔は伏せるものです」
「ええ？」

「女子が着替えるんだぞ。普通、顔は伏せる」

「脱ぐだけじゃないか」

「普通、伏せる」

「むー……」

普通、女子トイレに行かない？ こういう場合。

「おい、早く顔伏せろよ！」

メグが若干顔を紅葉させて怒鳴る。いや、だったら何でここで脱ぐのさ。恥ずかしいならトイレ行けよな。

何だか釈然としないので、俺はあくまでこの状態を崩さずに対応する。

「でもさ、上手くやれば中身見えずに脱げるかもよ？」

「何言ってるんだよ！？ いいから顔伏せろって！」

「男なら恥ずかしがらずに脱げるけどなあ」

「っ！」

龍がボソッと「ほどほどにしとけよ」と俺に言った。ははは、ここまで来たら止まらないぜ！

「そもそもメグって、どんなトランクス履いてんの？」

「はあ！？ トランクスなんて履いてねえから！」

「え……。えええー！？」

「そんな驚く事じゃねえだろ！」

いや、そりゃ驚くだろ！ 男子用のズボン履いてたら、下も男物だと誰でも思っさ！

……待てよ？ ということは……！

「ノーパンン！？」

「何でそうなんだよ！ちゃんと履いてるよ！」

「履いてるって……。女物の下着を！？」

「そっだよお！」

そ、そんな……。メグが、そんなものを履いてるなんて！

「がっかりだ！ 女を棄てるとか宣言したくせに！ その覚悟は口だけか！」

「だからって男になるとは言ってねえよ！」

「じゃあ何になるんだよ！」

「それは……」

「ほら、男しくないだろ？」

「そういう訳じゃなくてだな、女っぱさを棄てるっていつかな……」

……

「だったら脱げ！ 男らしくここで脱いでみるよ！ 女みたいに恥ずかしがらずにさあ！ ほら」

次の瞬間に俺の顔に飛んできたのは、メグの殺意のこもった拳だった。あまりの威力と痛さに、鼻血が勢いよく吹き出る。

「ぐほおお……」

「もうっ、ぜってえ脱がねえ！」

メグは言い切ると、腕を組んで座り込んでしまった。おかしいなあ、俺はまともな意見を言っただけなのになあ。

とりあえず、俺はティッシュを鼻に詰める。

「だからほどほどにしろと……」

皆は身体を起こすやいなや、すぐに口を動かす。

「天川さん、最悪です！ 堂々とセクハラしすぎです！」

「俺は自分の意見を主張しただけだぞ」

「天川が素直に顔を伏せてれば、話は簡単に進んだというのに……」

「えー、俺のせい？」

「それ以外に何があるんですか！」

「難義だなあ」

「はあ……」

「むっ、珍しく夕の台詞が」

「脚見たかった……」

「！？」

夕の物憂げな一言に、メグが表情を引き攣らせていた。何だか最近、夕がどんどん百合に目覚めていつている気がする。まあ俺は好物だから問題ないけどな！

とにかく、話を戻す。

「じゃあメグ、何か理由作つとけよ？ 生徒が納得出来るような奴をな」

「おう、任せろ」

親指を立てるメグだが、想像は容易に出来る。どうせ「執行部権限だ！」とか言っただろうな。俺ならそう言うもん。それ以外に何がある？

「で、結局どうすんだ？」

「お前はせっかちななあ、メグ。だから時代遅れなんだよ」
「絶対に関係ねえよそれ！」

「んー、とりあえずは明日に生徒集会でも開いて、適当に警告しとけばいいだろ」

「やる気ねえなあ。もっと厳しく取り締まろうぜ！」

メグは腕っ節を上げながら言うが、

「それが出来ないから困るんだよ、メグのせいだな」

「うっ」

俺の言葉ですぐにそれを下げた。

「まっ、俺に任せとけ。俺の演説を聞けば、生徒はたちまちその場で服装を整えてしまっただろうさ」

「どんな催眠術だよ」

という訳で、翌日。

俺は強引にも朝のHRを生徒集会の時間にした。今体育館は全校生徒で詰まっている。うむ、予想通り生徒の大半は嫌な顔をしている。朝っぱらの生徒集会なんて、俺だって嫌だよ。

しかし、よく考えればお前らのせいなんだ。ほら、そのネクタ

イ忘れ。お前だお前。知らん振りしやがって、自覚して貰いたいね。」「皆さん、おはようございます。生徒会長の小渕です。今回臨時に集まって頂いたのは、生徒会執行部会長である、天川さんからお話があるとの事です。それでは天川さん、どうぞ」

今日の会長は割りと協力的だ。まあ実際は生徒会が担うべき仕事だもんな、少しは協力して貰わないと困る。

会長の挨拶の後、俺は教壇に昇り、取り付けられているマイクをちょうど良い角度に調節する。軽く咳払いして、全校生徒を見据えて、用意しといった原稿を広げて読み上げる。

「皆さん、おはようございます。生徒会執行部会長の、天川三紀です。えー、最近、山高全体の服装の乱れが目立っているという報告を受けました。今見渡す限り、ネクタイ、リボンの付け忘れは勿論セーターを間着として着用していない生徒もまま見えます。この状況を、私は大変遺憾に思います。このままでは、今までの本校卒業生が積み上げてきた伝統が、我々の代で崩れていってしまうのです。そんな事はあつてはなりません。これから山高に入って来る人々に、今の姿を見せる訳にはいかないのです。服装の乱れは心の乱れです。それを山高に残してはいけません。なのでここで、皆さんのご協力をお願いします。今日から二日間、皆さんの服装を個人的に改善して貰いたいです。して貰わなければ、私達が対策を練るようになります。それが皆さんにとって不快なものになるかもしれません。ああいえ、確実に不快なものになります。します。そんなの嫌ですよね？ 私達生徒会執行部も心苦しい限りです。なので、皆さんの自主的な行動に期待したいのです。もう高校生ですよ？ 自らが所属する組織のルールも守れないでどうしますか？ 本来ならばその色鮮やかな髪の色も、社会に出てからは真っ黒にするんですから、せめて服装くらいは規則に則りましょう。私達を指導して下さる教師方に、そして我々を守ってくれているこの学び舎に感謝の意を表す為にも！ いいですか、服装の乱れは心の乱れです。この言葉を忘れないで下さい。それでは、本日はこれで失礼します」

か理解出来ないけど。

「とにかくだ！ 俺達は今すぐにこの問題を解決しなければならない！ 服装の乱れは心の乱れ！」

「またそれかよ」

生徒集会でも言つてたよな、それ。よっぽど重要な台詞らしい。

「けど確かに、生徒全体がたるんだ雰囲気でしたね！」

二ノ宮が先日进行を思い返す。

「ほとんどの人は話聞いてなかったようすし！ きつと、『何だ、生徒会執行部か。しかも天川か。じゃあいいや』って感じになったんだと思います！」

なめられてんなあ、執行部。まあ、まだたいした実績上げてないから無理もないけど。それに天川 of 原稿の内容も内容だよなあ。あんなの聞かされたって今時の高校生の心には何にも響かないし、ちようど良い睡眠時間になるだけだ。

それでも天川は「うおお！」と、憤怒の炎が止まらないようだ。

「畜生！ 許さねえ！ マジ許さねえぞ乱れてる生徒！ 略して乱生徒！ ボッコボコにしてやんよ！」

100%返り討ちにあつて泣く羽目になるぞ。

「もう何でもいい！ この状態を打破出来るならどんな卑劣な手段でもいい！ 何か画期的なアイディアはないのかお前ら！」

あれしか考えてねえのかよ！

「何かアイディアねえ……」

とりあえずオレは考えてみるが、そんな簡単に浮かぶもんじゃない。チャライ奴らはひたすら締め上げるってのは確実に却下されるだろうし。

「おい龍！ お前も何か考えろ！」

考えてるオレ達とは裏腹に、龍は机に突つ伏したままだ。

龍は呆けた表情で、間の抜けた声で返事をする。

「適当に警告すればいいじゃないか」

「もうやったよ！ そして効果無しだったよ！」

「じゃあもう打つ手無しだな」

「やる気を出せ！ お前なら凄い策を捻り出せるはずだ！」

「今の俺にとっては、世界の事なんかはもうどうでもいい……キタロー曰く、どうでもいい……」

「……ふう」

天川はため息を吐くと、ケータイを取り出し、誰かに電話を掛ける。

「あつ、もしもし？ 俺です、俺俺です。 いや、オレオレ

詐欺じゃないですよ。 ええ、天川です」

初めから名乗れよ。

「ちよつと相談がありましたね。 そう、それなんですけど、どうにかありませんかね？ このままだとこちらに支障が出るんですよ。 はい、出来る限りの報酬は払うんで」

どんな相手とどんな電話してんだ？

「そこをなんとか！ いやいや、ホント、損する話じゃないですよ！ 保障します！ え、ホントですか！ マジですか！ いやあありがとうございます！ 明日にでも振り込むので！ はい、それでは」

天川が意味不明の電話を終え、ケータイをしまつて龍を見る。振り込むって……金？

「誰と電話してたんだ？」

「詩織さんとだ」

「……何？」

龍は身体を起こす。って、詩織さんとどんな電話してんだよ！

「どういう事だ？」

「詩織さんに、もし今回の問題を龍が解決したら、没収してるゲームを全て解放するという条約を結びつけた」

「な、何だって!？」

龍があまりの驚きで立ち上がる。

「天川、お前……!」

天川はニコリと笑う。

「なあに、龍の為だったら、これくらい容易い御用さ！」

「……よし、解った！ 俺に任せろ！ 徹底的に対処してやる！ 愚民共が震え上がるような対処法を編み出してやる！」

「おう！ 頼むぜ、龍！」

そう言つて、天川と龍は手を強く握り合う。

でも、天川も天川だろ。こんな事 　　つて言うのも変だけど、わざわざ詩織さんにまで電話して、しかも振り込みまで約束しちゃつて。これじゃあ天川が損するだけ 　　。

「……ああ」

オレはやつと、天川の行動の意味を理解した。

「何だ、恵？」

「いや、何でもねえ」

オレは笑いながらそっぽを向く。

下手すると、龍つてオレより単純だな。

金曜日の朝の生徒集会。

「生徒集会が度重なつてしまい申し訳ありません。文句は生徒会執行部に言つて下さい。つまり、今日も生徒会執行部からのお知らせです。それでは、副会長の城古さん、お願いします」

「ゲッ、城古だ……」「やべえ、ちゃんと聞かないと」「相変わらず変な名字」

「挨拶は省略する。今日は、来週から実施される活動について手短に説明する。どこかの誰かさんでは役不足だからな」

「おい、活動だつてよ」「どうせろくな事しないんだろ？」「名字変じゃね？」

「来週の月曜の朝から、校門にて服装指導を行う」

「服装指導？」「何だよそれ」「何あの名字」

「黙つて聞け」

『……………』

「朝、登校してきた生徒一人一人の服装を入念にチェックする。規則から外れていた者は生徒指導対象となる」

「ただ時間掛かるんだよそれ」「執行部だけでやるとか無理じゃね?」「あんな名字見た事ねえ」

「これを、これから毎日行っ」

「はっ!?」「馬鹿だろ!」「アホだろ!」「朝めっちゃ遅くなるじゃん!」「ありえねー」「調子乗ってんじゃないぞ!」「とりあえず名字変えとけよ」

「黙って聞け」

『……………』

「時間は掛かるだろうが、規則を守らないお前達が悪い。それに期待はしてないが、一応生徒会にも手伝って貰うから、そんなに遅れは取らないだろう」

「ちょ、ちよつと!? そんなの聞いてませんけど!?」

「生徒会も生徒会だ。こういう生徒全体に関わる問題は、お前達が解決するべき。とうとう二ト化か? 少しは働け、予備軍共め」

「酷い言われようですけど、あなた達よりは働いてますよ!」

「さて、話を戻して」

「無視!?!」

「これは、お前達が天川の警告を無視したからだ。あの時点で改心しておけば良かったものの。ここには能無ししかないのか? 規則も守れない奴は生徒である資格はない。よって、もし三回服

装指導で生徒指導対象となった者には、大きな罰を受けて貰っ」

「嫌な予感が……」「言うなよ、言うなよ!」「名字自重ワロス」

「学習能力の無い者が勉学を努める意味は愚か、修める資格すら毛頭無い。よって、三回の生徒指導を受けた者は、強制的に退学して貰っ」

「いやいやいや!」「おいおい!」「それはないって!」「これは酷い」「独裁政治か!」「何でもありかよ!」「横暴だー!」「ふ

「ざけんな名字負け野郎！」

「黙って聞けえ！」

『……………』

「今俺は必死なんだ！ これによって俺はこの先生きていけるかいけないかってぐらいの崖っぷちなんだ！ 文句を言う奴は殴り飛ばすぞ！ ああ！？」

『（死ぬ！）』

「という訳で、土日に服装を改善しておくように。以上」

『（どういう訳……？）』

「どうだ？ 完璧だろう？」

「完璧だろう？ じゃねーよ！」

放課後の生徒会執行部。オレ達は嘆息していた。発想がオレ並つていいのかよ。強引すぎるぞ、あれ。

「あれを実施するには、俺達めっちゃ早起きしないといけないよな！？」

「そりゃあな。朝練の生徒にも対応するから、朝七時に集合だな」
マジかよ…………。

オレ達は更に気分を落とす。天川なんか「うわあああ！」と嘆いている。

「俺早起き無理なんだよ！ どうしてくれんだ！」

「知るか！ 目覚ましを十個セットしておけ！」

「ああー、また切り詰めないと…………」

天川がうなだれる。オレも嫌だけど、早起きが相当嫌らしい。だが龍はそんなのは気に留めもしない様子。

「ん？ でも、龍だって朝は弱いじゃん。いつも教室で寝てるし」

「それは前日…………いや正確にはその日ゲームをしてるからだ。今はやろつにもやれない。よって睡眠時間が劇的に増加するから問題は無い」

「ふーん」

天川がつまんなそうに頷く。毎日その生活をしてればいいのに。

「それで、具体的には何をするんですか？」

二ノ宮が訊ねる。

「生徒の服装を見て、軽度の違反なら注意する。重度の違反なら指導行きだ」

「それは誰が判断するんですか？」

「勿論俺だ」

「……えー」

二ノ宮だけじゃなく、オレ達全員嫌な顔をする。

「異論は認めないぞ」

「ちゃんと出来るんですか？」

「厳しく取り締まるから大丈夫だ。というかそんな事、二ノ宮に心配される筋合いはない」

「なっ、何ですかそれ！」

龍は自信満々に胸を張るが、オレには、いやオレ達には不安しか浮かばない。生徒から多くの反感を買う気がする。いや、もう買ってるけど。

「で、俺達の配置は」

そんな事はお構いなしに、龍は説明を続ける。

聞きながらオレ達は、きっと同じ事を考えているだろう。一体どんな事になるんだか……。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

月曜日・記録者：天川三紀

朝八時過ぎの校門前。

そこは大変な混み具合。まるで、生徒達が渦になっているようだ

った。生徒達はとつても不満そうな顔をしていた。それに、待つている生徒が道路を塞いでしまう為、車両は迂回を余儀なくされていた。生徒に悪気はなくても、これは地域に多大な迷惑を掛けている。ここは致し方ないので、地域の協力を希望する。

校門は生徒一人がやつと通れるくらいの幅が開いていて、生徒は一人ずつその隙間を潜り、構えている生徒会執行部にその姿を晒す。副会長である城古我龍が見て「次」と言えば合格。「直せ」と言えばその場で矯正。「残れ」と言えば指導。

生徒の中にはこれを回避すべく、校門の正反対にあるフェンスから入ろうとした者が居たが、それを待つていた生徒会役員、教師が確保。この場合、問答無用で指導行きとなる。

最初となる今回の服装指導において、矯正対象となつた生徒は、五百九十四人中、三百六十六人。指導対象となつた生徒は百七十二人である。

このデータから、山高の服装の乱れは深刻の域に達していると思われる。我々生徒会執行部及び生徒会は、この問題に全力を挙げて対処していく所存である。

校長注：授業の遅れが甚大だったので、次回は指導の短縮を図る事。

火曜日・記録者：関野恵

前日と変わらずの校門前。車のドライバーがイラついていたのがよく解つた。

一人の生徒がオレに「役員がそんな格好でいいのかよ！」と言つてきたから「文句があんなら自分の服装を整えてから言え！」つて言つてやつた。そいつはすげえ悔しそうだった。気分爽快だった。そういえば、今日はめっちゃ晴れてて気持ち良かった。でも、相変わらず授業は理解出来なかった。テストどうしよう？

校長注：これはあなたの日記ではありません。服装指導の内容を

- - - - -

「これが、執行部の皆さんの記録書ですか」

「はい、そうです」

校長室にて、生徒会長の小淵と、校長の二人が黒いソファで向かい合って座っていました。校長の手には、生徒会執行部によって作成された、一週間分の服装指導の記録書があります。それに校長は注記し、小淵に手渡します。

「天川君に渡しておいて下さい。それと、来週も期待していると伝えて下さい」

「……校長は、この指導法に賛成なんですか？」

小淵は赤い字が増えた記録書を受け取りつつ訊ねました。その問いに、校長は微笑みながら答えます。

「ええ。彼らしいやり方で良いと思いますよ」

「そういう問題ではないです！　こんなやり方は非合法的です！」

「去年はあなたがその側だったではありませんか」

「っ」

校長が皮肉りました。

「あなたも天川君に似てきましたねえ……」

「い、一緒にしないで下さい！」

校長は不敵に笑って、立ち上がります。

「確かに、傍から見ると、人道的ではないかもしれませんがね。生徒達はとても不満でしょう。賛成の有無も問われずにこんな方法を強行されて。おまけに私達教師も巻き込んでしまうんですから驚きです。それどころか、規定以上の違反を犯した者は強制的に退学なんて、普通の考えではありません。勿論、執行部であろうとそんな権限はありませんがね」

「勝手な事をされて、生徒会としても良い迷惑です……」

「そう、？　良い？　迷惑なんです」

校長は窓際に立ちます。

「生徒にとつても？良い？迷惑。私達教師にとつても？良い？迷惑。あなた達生徒会にとつても？良い？迷惑。決して、？悪い？迷惑ではありません」

「それはそうですけど……」

「そして結果はどうでしょう？ 服装の乱れは大きく改善されました。学校内でも積極的に取り締まってくれてるおかげで、目立った乱れも見ません」

「結果が良ければ、過程はどうでもいいんですか？」

「これは私個人の意見ですが、過程を重視するのは所詮綺麗事です。とある国の王が独裁したとして、結果、治安、経済等が良くなれば、国民は文句を言いません。いえ、言えません。人間は結果を見て、初めて過程を評価するんです。現に、生徒から非難の声は拳がっていますか？」

「……当初はとても多くの声が出てましたが、今では嵐が去ったように……」

「でしょうね。生徒も気付いているのでしよう。これは自分達のせいなんだと。彼らによつて、初めて自覚させられたんです。生徒会執行部に、あなた達生徒会に、私達教師に、最後に地域に迷惑を掛ける事によつて。例えそれが強引なやり方でも。正直、あなた達にはこのような方法は思い付けないと思いましたよ」

「だから、要望書を執行部に突き返せって言っただけですか」

「悪口ではありませんよ？ 勿論、あなたも優秀な人材で、生徒会長に相応しいという事に間違いはありません。よつてあなたは、？美？を追求する生徒会を選ぶでしょう。当たり障りの無い、無難で確実な生徒会。極めて一般的で、理想の生徒会です。しかしそれでは、出来る事に限界があります。『こうしたい。でも出来ない。反感を買うから』と。今の生徒会の形を崩したくないからです。

いえ、？これ以上？ですかね」

「それは、悪い事なんでしょうか？」

「とんでもない。今のあなたにはその選択肢しか無いのは解つています。言い方は悪いかもしれませんが、天川君のせいで今の生徒会が信用を失って、生徒会執行部が新たに発足された訳ですから」

「嫌な時期に会長になってしまいました……」

小淵が嘆息しながら嘆きました。

「ふふつ。話を戻しましょう。生徒会と比べて執行部は、？業？を追求しています。こんな老いばれの要望書を安易に受け取り、容易に執行してしまいます。今回のような事も。大変素晴らしい実行力で、救いようの無い迷惑力です。でも、それが面白いんですよねえ……」

「校長は、執行部に何を求めているんですか？」

小淵は立ち上がりながら訊ねました。

「さあ……。私自身、理解しかねます。ただ、とても久しいんですよ」

校長は窓の先の景色を見ながら、再び口元を笑わせます。

「長年教師を続けて、こんなにも楽しいと思える事が」

その頃、龍の自宅にて。

「詩織！ 服装指導で凄い成果を挙げたぞ！ それはもう、もの凄い成果をな！ さあ今すぐ俺のゲームを返せ！」

「？ 何言ってるの？ 来週テストでしょ。勉強しなさいよ」

「天川から電話来たんだろ！ 俺が活躍したらゲーム返すって条約を結んだんだろ！？」

「天川君？ 私、天川君と番号交換してないわよ？」

「……………。天川あああああああああああ！」

第4話：その笑顔には償いを捧げて

某オンラインゲームでのチャットログ

- ・ユウさんが会話に参加しました。

ユウ「こんー」 「こんにちは」 または「こんばんは」の略。

ユウ「帰り道歩いてたら黒猫が前を横切った件」

たこ「死亡フラグk t k r」キタコレの略。

ミヤビ「関東大震災が来るぞ！」

かめ「突然強盗が来たりしてなw」(笑)の略。

ユウ「おいやめろ W 本当に來たらどうする W」

モリゾー「潔く氏ねw」
訳：死ぬ。

ユウ「ひでえ
WWW」

S y o u 「黒猫に罪は無いんだぜ」

ユウ「そうだけど、やつぱは不吉じゃん。ガン見されたよw」

アゲハ「リア充は死ねばいい」
リアルが充実している者。

ユウ「充実してねーよw 楽しいのは今だけだよw」

サキ「大丈夫だって、解ってるから」

ユウ「うわ、悲しいw」

ムシメガネ「俺らってそういうやつただなもんない」

ウッド「なあ、お前らのリア充の基準って何よ？もしかしたら、俺

リア充かもしれん」

アゲハ「死ね」

ウツド「はえーよw まだ決まった訳じゃないって」

[illegible]

ウッド「やめとけw 規制されんぞw」 中傷発言を繰り返すと、

チャットを規制されるシステム。

・アゲハさんは会話から追放されました。

ウッド「ほら見るw」

サキ「ざまあーw」　ざまあみろの意。

ミヤビ「じゃあ、俺がリア充判定をしてやろう。万年引き籠もりの俺がな！」

ウッド「嘆かわしいこと言うなよw　まだ中二だろ？」

ミヤビ「人生、悟ったら最後なんだぜ？　小五からネットゲに走った俺は確実に死に組みさ」

ユウ「もはや負け組みでもないというね……」

you「泣けること言うなよ。俺達がいるだろ！」

全員『いるだろ！』

ミヤビ「thx。ま、お前達がいっても現実是不変じゃないけどな！」

ありがとこの略。

全員『確かにw』

ミヤビ「じゃあウッド、診断してやるぜ。高一だっけ？」

ウッド「おう。かかって来いや」

ミヤビ「ずばり、彼女はいますか？」

ウッド「うん、いる。最近告白されたぜ」

ミヤビ「リア充以外の何者でもねえよ氏ね」

ウッド「マジで？　これだけでリア充なの？」

you「リアフレすらいな俺涙目」　リアルフレンドの略。つ

まり現実の友達。

モリゾー「さすがにそれはねーだろ……。可愛いすぎる」

ユウ「いや、俺もリアフレじゃないわ」

ムシメガネ「俺は妹いるけど、リアフレはいねえなあ」

たこ「話し掛けられないもん」

かめ「ですよねー」

モリゾー「お前から話し掛けろよ……」

ミヤビ「ご覧の通りだぜ、ウッド。どうせリアフレもうじやうじや

いるんだろ？」

ウッド「うじゃうじゃってw まあいるけどさ」

ミヤビ「もう普通にリア充じゃん。むかつくわ」

ウッド「フヒヒw サーセンw」 すいませんの意。

you「よし、半年ROMろうか？」 Read Only M

emberの略。書き込みをしない人の事。

ウッド「待て待て。 例えお前らがリア充だと思っても、俺はそうは思っていない」

you「何……だと……？」

ムシメガネ「彼女いるくせにリア充じゃないとかwww」

たこ「ワロスwww」 訳：笑える。

かめ「殴っていいよね？ よね？」

モリゾー「リアフレはいるけど、彼女はいないんだ。 お前の彼女よこせ、食ってやる」

you「喧嘩売ってんのか？ ああん？」

ウッド「まあまあ。 そもそも本当にリア充なら、ネトゲなんてやらないさ」

サキ「た、確かに……ッ！」

ミヤビ「そんなこと言っても、この中では一番IN率低いけどな」

ログインする率。

ウッド「部活が大変なんだよw バレーやってみ？ 練習超キツイから」

ムシメガネ「手芸部の俺に死角はなかった」

you「いや、帰宅部は最強」

ミヤビ「おい、自宅警備員なめんなよ」

you&ムシメガネ『負けた……』

you「軌道修正希望」

ウッド「だから、俺はお前らと話してる方が楽しいんだよ。 ドユー
ユーアングスタン？」 訳：理解しましたか？

たこ「俺力ッコイイ発言キター」

ミヤビ「ry」

ウッド「略しすぎだろw」

ユウ「www あー、今日はもう落ちるわ」 オンラインゲームの接続を終える。

サキ「今日は早いな」

ユウ「ちよつとやることあるんだよ。んじゃノシ」 その場から立ち去るときのバイバイの意。

全員「乙」 お疲れ様の略。

・ユウさんが会話から離脱しました。

自らの現実から逃れる者、暇を潰す為に利用する者、妄想が肥大化し治まりようのない者……。様々な者達が様々な理由で様々な談話をする場。所謂チャット。

気付けばこれが、彼女の日常と化していた。

学校の中で色の無い彼女は、ここで初めてそれが宿る。

何の意味も無く下らない会話をパソコンを通してする事が、彼女にとって唯一の安らぎであり、生き甲斐であった。

彼女の住む場所は、アパートの一部屋。家賃四万円で、必要最低限の物が揃っている。四畳半の真ん中のテーブル上に自慢の高性能ノートパソコンを広げ、彼女は猫のように背中を丸めていた。安物のメガネを掛け、皺のついた制服を身につけ、安座で潰れた座布団の上に、母の遺産である華やかな美貌を纏う身体の体重を掛けている。

彼女に両親は無い。

中学三年生での味の無い修学旅行の最中、自宅に強盗が押し入り、金目の物を全て強奪された上に、両親が惨殺されたのである。犯人は未だに、指名手配されているにも関わらず逮捕されていない。

学校では、常に纏わり付いてくる嗤いの視線・条理を外れた悦びと戦い 負け続けていた彼女にとって、唯一の身の寄り所だった

両親を失った彼女は、もう見える人間は信用出来なくなっていた。
更に襲い掛かるは、収入源の消失。両親の遺産を頼りにするのも時間の問題。いずれは枯渇してしまう。何とかして、己の生計を立てなければならぬ。

そんな彼女の手元には、父の遺産である、高性能を極めに極めた至高のパソコン。

情報屋を営んでいた父は、あらゆる情報を手にする為に様々な手段を講じていた。その中でハッキングなどは序の序、言わば呼吸に等しい行い。

幸いか不幸か、彼女にもその才能が潜んでいた。

そしてそれは、何の滞りもなく開花した。

オークション詐欺、ワンクリック詐欺、スパムメール等、代表的なネット犯罪を容易に行い、巧みに証拠を残さず、金だけを他人から奪り取る。彼女はその技術に長けていた。

ターゲットは中学時代、自分を見下していた生徒達。中学、高校の時期はネットを扱う事は出来ても、犯罪に対する認識は疎い。増してや、究極的に擬装された彼女の罠を見抜ける訳がなかった。

仕返しだったその行為は、やがて彼女にとって必要不可欠になってしまった。関係の無い人を巻き込み、その人が不幸になる。他者の幸福を貪る非道の行い。人々から忌み嫌われる害虫のような存在へと、彼女は昇華し続ける。

しかしそれでも、彼女は何も罪悪感を感じていなかった。

生きる為だから、致し方ない。

そう自分を言い聞かせ 今この時もまた、人を墮とす。

「 天川君！」

「……………」

「 あーまーかーわー君！」

「 おおっ？」

放課後の生徒会室にて、副会長である小淵稲座に顔を覗き込まれながら、話し掛けられた。鼻の先が触れるのではないかと思うくらいに顔が近い。

「無視ですか！ 悉く無視なんですか！ 私の方が年上なのに、ぶんぷんですよ！」

「年上……ねえ」

俺は会長の身体情報を顧みる。

彼女は成績こそ優秀なんだが、身体に関して色々と残念な傾向にある。チビっ娘だし、ぺったんこだし、腕は短い。結構不便な身体なのである。

しかしその容姿が幸いしてか、男生徒からはなかなか支持されているところがある。顔は美形……というか可愛い系で、そのオレンジ色のツインテールがグッド。目を引くところは多々ある。一見美少女と呼んでも差し支えはないように思える。

だがそれでも、

「背とか胸とかは標準以下なんですけどねえ……」

「らっ、来年には伸びますよ！」

彼女にとってこのステータスは、煩わしい限りのようだ。

「どうですかねえ……。大人しく、女性ホルモンを注入した方がいいんじゃないんですか？」

「そんな事しなくても大丈夫ですよ！ ……きっと」

「人間、素直が一番ですよ。……ププツ」

「笑うんじゃありません！ いい加減にしないと怒りますよ！」

「すいませんすいません。ちょっと、考え事してたんですよ」

「考え事？ 何ですか、それ？」

「とりあえず、顔引っ込めて下さい。息臭いんですよ」

「えっ！」

クルツと後ろを向いて、何度も自分の息を嗅ぐ副会長。そんな必死になんなくてもいいのに。でもそれが面白いんだよなあ。

「冗談ですよ。副会長の息は何の味もしない、リアクションに困る

くらい普通ですから」

「女の子にそんなデリカシーのない冗談を言うんじゃない！
本気でそう思っちゃうでしょ！」

「ははー、やだなー、副会長だから言ったに決まってるじゃない
ですかー」

「どういう意味ですかーッ！」

副会長の叫び声に近い大声に、役員五人全員が反射で耳を塞ぐ。

「ブッチー。気持ちは解るけど、その声は想像以上に迷惑よ」

白く頑丈で綺麗な長机の頂点に座っている、会長の三年生である
きたみさき
喜多美咲さんが注意する。

美咲さんは何と言っても、その美貌が特徴だ。

すらりと長い背に、締まったウエスト。弾けたバストを裏付ける
軽やかなヒップ。そして極め付けは、やはりそのサラッとした金の
長髪。？金髪は人気が出る法則？を創り出したと言っても過言では
ない。

おまけに、授業の時は目の悪さが幸いして、眼鏡を掛けるのだ！
眼鏡好きも飛び付くという訳だ！ 俺はどれも好物だけだな！

あ、ちなみにブッチーっていうのは、副会長のニックネーム。小
淵だから、ブッチー。

「それに、天川君も言葉を選ぶ。解った？」

「はーい……」

「天川君、何？ ジロジロ見て」

「いやあ、やっぱり美咲さんは美しいなあと思ひまして」

「ふふふ。その言葉はもう、聞き飽きたわね」

「それに比べて……」

俺の目の前にちょこんと座っている副会長を見る。

「はあ」

「何ですかその短いため息！ 絶対会長と比べたでしょ！」

「やだなあ。学校一の華と副会長を比べる訳ないじゃないですかー。
比べる意味ないですもん」

「という訳で、教えるぜ」

「どういう訳だ！ 教えねーよ！」

「やれやれだぜ……」

隼は首を振って、腕を組んで黙る。何かに似てるのは気のせいかな？
「でもよお、そこまで仄めかされたら気になるって。教えるよ、なあ？」

俺の左隣にいる、この季節にそぐわないワイシャツ姿の、角刈りの男らしい顔付きの小林大輝こはやしだいきが俺の肩を叩いて強く訊く。

大輝の特徴は、隼と比べると大分多い。

まず、その座り方。足の爪先だけで身体を支えている状態。一番落ち着く座り方らしい。次に、首にぶら下げている黒縁のゴーグル。亡き友人の形見だと言っていた。最後に、スポーツ万能。特にバスケットにおいては、人並み外れた異常なセンスを持つ。普通、片手でハーフラインからシュート決められるか？ 少なくとも、俺には出来ない。

「気にすんなって。大した事じゃないから」

「気にするなって言われたら余計気になるんだよ！ いいから教えるよ、おい！」

「ああ解った！ 解ったから肩を揺するな！」

こいつに肩を揺らされると、頭がぐわんぐわん言うだよ！ 気持ち悪くなる！

「でも、本当に大した事ないって」

「いいから。天川君、教えて？」

「勿論ですよ美咲さん」

「おい teme！ 何で会長には簡単に教えるんだよ、ああ！？」
「納得いかないぜ」

「お前達のような野郎共と違って、美咲さんには誘惑のオーラがあるのさ。彼女に近付いてしまった者は、たちまち自我を失うであろう……。どこかの誰かさんと違って」

「どこの誰の事ですか、それ！」

「やめてあげて、天川君。ブッチーもそれなりに悩んでるのよ、小さいながらも」

「あなた達のせいで相当悩んでいますよ！ それに会長、悪ノリはいけないですよ！」

「あらブッチー、嫉妬？」

「違いますよお！」

「こうやって、たまに美咲さんも副会長いじりを楽しむ。ついつい癖になる、副会長いじり。こりゃあアトラクション化も近いな。」

「さあ、そろそろ観念しろぜ」

「……解ったよ。言うよ、言う言う」

俺が前置きすると、生徒会室は静寂に包まれる。ここら辺はきっちりしているんだよなあ。逆に言いづらい。

「えっと、うーんと……」

「早く言えよ、おい！」

大輝が背中を叩いて急かす。こいつにとっては軽いスキンシップかもしれないが、めっちゃ痛い。

「じゃあ、単刀直入に。今不登校の奴を、どうすれば改心させられるか考えてたんです」

「またそれ？ 天川君」

美咲さんが呆れ気味に首を振る。

「前もそんな事を言って、しばらく業務サボってたでしょ。全員で声が枯れるくらい叱ったのに、まだ懲りないの？」

「ホントだぜ。あの時は辛かったぜ」

「球技大会のしおり作りはマジで地獄だったな……」

「電灯の取り替えが本当に大変だったんですよ！ 手が届かなくて！」

副会長が勝手に自爆しているのはさて置き。

「でも、成果は上げたんだからいいじゃないですか。関野恵、登校するようになつたでしょ？」

「まあ、そうなんだけどね……」

揺ぎ無い事実、俺以外の全員が表情を重くする。

実は、俺が不登校の奴らを何とかすると言い出したら、全員が反対した。

「登校を嫌ってる生徒を無理に説得するのは良くない」

「来たくない人は来なければいい」

「人には人の事情がある」

「余計拒否されるだけだ」

と。

全学年を含めると、不登校の人数は二十を超えていたから、流石にそれは無理があつたかもしれない。だからまずは、同じ学年と、二学年の一人だけを対象にする事にした。

一人は、先述した関野恵。学校一の不良娘で、県一番の不良高の頭と張り合っていたが、何とか説得に成功。まだ注意すべきところはたくさんあるが、今は良い方向に向かっていると考えて間違いは無い。

次に、二ノ宮春香。飛び級だが、それが災いして不登校になっている。クラスの中から「生意気」だとか言われているようだ。典型的ないじめ被害の結果だ。

最後は、廣瀬夕菜。特に目立った事もせず、大人しい性格だと思われる。ネットに関してずば抜けた中毒を持ち、インドアな趣味の持ち主。悪く言えばオタク。それが理由で、一部の生徒から忌み嫌われている。

この三人を、生徒達は良く思っていないのだ。

「正直、関野には来て欲しくないぜ。また殴られるのはやだぜ」

隼は以前、何の前触れも無く殴られた事がある為、恵を恐れている。本人に訊いてみたところ「むしろくしゃしていたから殴った。反省する」との事。

「二ノ宮は外見こそはそこそこだけど、言葉遣いが最悪なんだよ……。それに、態度でけえし。はつきり言って、ウザイわ」

二ノ宮と同じクラスの大輝も、この様子。

「廣瀬さんは、いつも休み時間図書室で自分のパソコンをいじってるんですよ。ちょっと覗いてみたら、アニメの関する事がたくさん……。私、ああいうのは苦手です」

副会長なんか、ちよつと見ただけでこれだ。

「天川君。あなたの生徒への心遣いは良い事よ？ でも、正直意味ないと思うの。その人を嫌ってる人も居るだらうし、本人だって本当は来たくないのかもしれない。学校全体の事を考えたら、この問題は触れない方が賢明だと思っわ」

美咲さんが、持論を淡々と述べる。

「さすが会長だぜ。その通りだぜ」

「天川の気持ちは解るけどよ、触らぬ神に祟り無しって言うしな、うん」

「いくらこの機関でも、出来ない事はありますよ。それよりも、やらなきゃいけない仕事はあるんですから」

「ブッチーの言う通りよ。今度は、冬季山高祭についてのプランを決めなきゃいけないんだから。今はこつちを優先して。解った？」

彼女らは、概ね正しい。

学校の為、生徒の為、自分達の出来ることを全力で行い、尽くす。生徒会の文字のままに。

故に、生徒達にとって障害となる存在は、容赦なく排除する。例えそれが、守るべき生徒であつても。

「ここつて、生徒の為の機関ですよね？」

俺は俯きながら訊く。

「ええ、勿論。今更何を言っているの？」

美咲さんは笑顔で答える。

「だったら、何であんな事したんでしょうね」

俺の低い声に、副会長は嘆息して言う。

「仕方ないですよ。生徒からの願望が、あまりにも多かったんですから」

「そうだぜ。ま、関野の方は自分から来てなかったから、手間は省けたけどぜ」

「二ノ宮は、クラスじゃかなり嫌がられてたからなあ。実際俺も嫌だったし、清々したわ」

「噂じゃあ、廣瀬さんはネットを利用して変な事をしてるとか……。そんな不純な生徒は、山高には必要ありません！」

「善良な生徒の為を考えれば、あれしきの事、生徒会として当然の行為だわ」

今の不登校の生徒の原因は、他でも無い、生徒会である。

通常なら扱わないその手の要望書が異常に多かった為、対処せざるを得なかった。

その方法は、不登校にする事。

？嫌われている生徒は学校に来るべきではない？

これが、生徒会の出した結論だった。

と言っても、世間的にそれは確実に非合法的な考え。俺がどうかすると言ったら、反対はするが止める事は出来ない。俺の考えの方が合法的だから。邪魔立てする道理は無いのだ。

それでも生徒会は、その結論を貫いている。

「やっぱり間違ってますよ。こんな事、生徒会がする事じゃない」
いつもの結論に俺は辿り着く。

「はあ……。天川君には、正常な脳みそは詰まっているのかしら？」

「本当だぜ。いい加減理解しろぜ」

「何度も聞いたぞ、それ。他に何か言えねーのかよ、ええ？」

「私達のおかげで、生徒達は楽しく過ごせるのです！ それに仇名す者は消えるべきです！」

いつもの反論群が俺に返ってくる。

「それに、不登校の廣瀬さん」

副会長の言葉に、俺の心臓は過剰に反応する。
「手を掛けたのは、天川君じゃないですか」

それよりちよつと後のチャットログ

ミヤビ「そういえば、ユウは何で不登校になったの？」

ユウ「そんなこと聞いてどうするの？」

you「質問を質問で返すな」

ユウ「サーセンw」

ムシメガネ「ここの皆はほとんどいじめが原因だけど、ユウも同じ？」

ユウ「んー……。それとは違うかな。俺は空気だったから、逆にいじめられたりはしなかった。まあ、陰で悪口叩かれたりはしてたかもしれないけど」

アゲハ「空気だったから？」

ユウ「それも違う。寧ろ空気の方が良かったし。リアルで話すの苦手なんだよね」

モリゾー「じゃあ何で？」

ユウ「むー。ちよつと変な話になるけど、それでもいい？」

全員「k w s k」 「もつと詳しく教えて欲しい」の意。

ユウ「ok。そんなたいしたことじゃないけどね。生徒会に頼まれたんだよ」 OKの意。

たこ「生徒会？」

ユウ「うん。もう学校には来ないでくれって」

かめ「は？」

モリゾー「訳ワカメ」 訳：訳が解らない。

ムシメガネ「意味不明」

you「生徒会がそんなこと言う訳ないだろwww」

ユウ「生徒会に、そういう要望がたくさん来たらしい。『この生徒がウザインでどうにかして下さい』みたいな」

ミヤビ「だからってそれを叶えるのは、生徒会としておかしくね？」
ユウ「だからたくさん来たんだって。生徒会も已む無く対処したらしいよ」

アゲハ「最低だな、その生徒会」

ユウ「そうでもないよ。それ以外の仕事は完璧と言えるくらいこなしてるし、教師陣からの信頼も厚い。だからこそ、生徒の要望も生徒会に集まる訳。その期待を裏切らない為にも、生徒会は実行せざるを得なかったんじゃないかな」

ムシメガネ「なんと言う深読みッ！」

たこ「で、ユウはそれを受け入れたと？」

ユウ「まあね。正直学校はつまんなかったし、別にいいかなと思って」

かめ「それじゃあ生徒会の思う壺じゃないか。生徒達も笑ってるぞ」
ユウ「そうかもね。でもそれでいいよ」

モリゾー「どうして？」

ユウ「これで皆がいい気分になるなら、それでもいいかなって」

全員『……………』

ユウ「来客。ROM」

全員『いてら』 いてらっしやいの略。

明るさが足りない部屋に、インターホンが鳴り響いた。

主は立ち上がり、チェーンの付いたドアを少し開け、隙間から来客を確認する。

「オッス」

その人物は、現在の原因となった人間だった。

「……………何の用」

少しだけ口を動かして、手短に訊いた。人間は頭を掻きながら言

う。

「あー……。あのさ……。もう一回、学校に来てくれないか？」

少し前、同じ人間から、真逆の事を言われたので、少し驚いた。しかし、心には何も響かない。

「嫌」

今の自分の気持ちを、素直に、とても短く言った。

「そうか……。そうだよな、俺のせいだもんな……」

「……………」

「じゃあさ、どうしたら来てくれる？」

もう、行く気は無い。

このままでも、生きていける自信はあるし、金ならたくさんある。困る事なんか無い。学校に行く理由なんか無い。

主のこの考えは非常に強固で、そう簡単には崩れない。

「もう行かないから」

ドアを閉めようとしたが、彼の足がそれを阻止した。

「謝る！ 何でもする！ だから、来てくれっ！」

「……………」

人間は必死に熱弁する。

「生徒の為だからって、生徒を切り捨てるなんて、間違いだって気付いたんだ！ お前は何も悪くないのに、あんな事を言って悪かった！ 頼むから、学校に来てくれよ！」

訳が解らなかった。

自分が学校に行ってしまったえば、生徒会の信頼がなくなるし、生徒の妨げになる。学校にメリットは無いはずなのに、この男はその逆の行いをしている。

そう考えると、ますます不気味に思えてくる。

「何を、考えているの……？ 学校に戻らせて、何をさせる気……？」

「そんなつもりは無い！ ただ、学校生活を失って欲しくないだけなんだ！」

人間の熱弁は続く。

「そんなの要らない。孤独には慣れてる」

「そんなの悲しいだろ！ 知ってるか？ 人と話すっていうのは、すつごく楽しい事なんだ！ 顔を合わせて口を動かすってだけのことが、どれだけ楽しいか！」

「要らない」

「なあ、俺が楽しくしてみせる！ 陰口叩く奴は俺が何とかする！」

「信じられない」

「ならどうしたら信じてくれる！？ 教えてくれ！」

「知らない」

最早、自分は人を信じられない。信じる根拠も無い。

「もう、来ないで」

足をどかし、ドアを固く閉ざした。

「待ってるから！」

翻した身体が止まる。

「待ってるから、少し考えてくれ」

「……………」

身体が、再び動く。

ああっ、くそっ。

ネットでは簡単に信用されるのに。

何故、現実では信用されないんだろう。

今の俺には、何が足りないんだろう。

ユウ「解除」 ROM状態解除ということ。

ミヤビ「誰だった？」

ユウ「生徒会の奴だったwww」

全員『k w s k』

ユウ「何か知らないけど、また学校に来てくれとか言われた」

モリゾー「臭う、臭うぜ！ それは罠だと俺の第六感が叫んでるう
！」

ユウ「解ってるよ。それに、学校に行く必要なんてないし。どうせ、
また来ないで下さいって言われるのがオチなんですね、わかります」

ウッド「それはちよつと違うんじゃない？」

ユウ「ウッドいたんだ。部活は？」

ウッド「今日は休み。それより、その話。さっき皆から聞いたけど、
その生徒会のやつは、本当に来て欲しいと思ってるのかもしれない
よ」

ユウ「いや、それはないって。生徒会って、生徒のことを考えてる
ようで、一番に考えてるのは自分達のことなんだよ。自分達の信用、
知名度が一番大事。それを利用して、私事も有利に運用出来るんだ
から。特に会長なんか、もうやりたい放題だし」

ウッド「だったら、ユウを学校に誘うなんておかしくね？ 自殺行
為じゃん」

ユウ「そう。だから、逆に怪しい。戻ったところで、何を言われる
か解らない。生徒会にとってメリットは無いけど、俺にもメリット
は無い。だから、応じる必要は無い訳」

ウッド「メリットとか、そういう問題じゃないんじゃない？」

ユウ「どういうこと？」

ウッド「その役員は、生徒会の中では良いやつなのかもしれないじ
ゃん」

ユウ「根拠が無いって」

ウッド「まあ、部外者の俺からは何も言えないけどさ。一回くらい、
学校に行ってもいいんじゃない？ 本格的に不登校になるかは、そ
れからでも決められるし」

ユウ「確かにそうだけど……」

ウッド「リア充らしい俺が言うけど、実際学校には行つていた方が
いいよ。ぶつちやけ、ここでただしゃべってるより、得られるもの

はたくさんある。何より、学歴は重要だしね」

アゲハ「年中荒らしてても、得られるのは虚無感だけだった」

you「叩いても叩いても、結局は自己満足なんだぜ」

ムシメガネ「ここで話すのは楽しいけど、手に取れるものは何もないよなあ」

モリゾー「友達作れよ。そうすれば、見る世界も変わるって」

ミヤビ「俺みたいにはなるなよ、絶対、絶対にな」

たこ「学生でいられるのは今の内だし」

かめ「学校は意外と楽しいかもよ？」

ユウ「……………」

ウッド「最後に決めるのは、ユウだけだね」

ユウ「ろむ」

彼女は再度立ち上がり、チェーンを外して、ドアを半分開ける。

目の前には、冷たい風が吹く中、ワイシャツ一枚で震えながら座っている、先程の人間が居た。待っているという言葉に偽りは無かった。

視線に気付いたのか、彼は今にも死にそうな表情で、声だけで訊ねてくる。

「考えて、くれたか？」

「……………」

とても、とても。それはもうとても躊躇したが、ドアを大き

く開けて、

「入って」

勇気を、出した。

俺が入ると、廣瀬は慌てて奥に走っていった。ああ、やっぱり客を入れるっていうのは初めてなんだな。これは、部屋は散らかって

いると覚悟した方がいいだろう。

俺はドアを閉め、靴を脱いでお邪魔する。 あゝ、暖かい。この寒さの中、ワイシャツ一枚は死ねる。助かったぜ。

そもその原因は、予想以上に寒かったからと、大輝が俺のブレーザーをぶん取ったのがいけないんだ。暴力反対！

廣瀬が入った部屋に入ると、意外にも片付いていて、散らかってはいなかった。そこには木製机の上に折り畳まれたピンク色のノートパソコンが一台と、座布団が一つ。廣瀬がもう一つ座布団を持ってきて、対極側に敷いてくれた。

「サンキュ」

俺は遠慮なく、座布団に座らせて貰う。廣瀬も向かい合うように座った。

「前の事は謝るよ。お前の事を何も知らないくせに、解った様な口利いて、本当に悪かった」

「……もう、いい」

廣瀬は顔を上げずに答えた。

「ハハッ」

「……？」

思わず、笑ってしまった。

「何で制服なんだ？ 学校行ってないのに。私服を着ればいいのに。皺だらけじゃないか」

「！」

廣瀬は自分の姿を顧みて、一気に縮んだ。家の中で自分の姿を他人に見られるなんて、思っても見なかった様子。制服は皺だらけだが、顔は綺麗な顔付きで、制服の上からでも解る位、ナイスバディだ。美咲さんと引きを取らないぞ、これは！

「うーむ……」

「……ジロジロ見ないで」

「むっ。すまん」

美人を見つけると、ついつい見入ってしまう癖があるんだよな。

でもこれは男の本能！ 恥ずかしさ故にチラチラ見る奴より、堂々としていいじゃないか！

さて、そろそろ本題に戻ろうか。

「学校、来てくれないか？」

さつきとまったく同じ質問をぶつける。

「……正直に話すから」

「ん？」

顔を上げて、初めて俺と向かい合う。

「正直に、話して」

廣瀬は淡々と、過去の悲劇、現在の愚行を語った。もう本当、警察って無能だな。

でもこれで、廣瀬が人と触れ合わない理由が解った。そんな出来事があったら、無理も無い。廣瀬は悲劇の産物と言っても過言ではない。それに何より、

「ありがとう。話してくれて」

人を信用しなくなったはずの廣瀬が、こうして話してくれた事が一番嬉しかった。

「でも、だからと言って、ネット犯罪に手を染めるのは駄目だ。それは、犯人と同じ事をしてるって事なんだぞ？ お前のように、悲しむ人が生まれてしまう。今すぐに、その手段はやめるんだ。いいか？」

廣瀬はコクンと頷いた。よし、

「……話して」

「ん？」

「正直に、話して」

「正直も何も、俺は初めから正直に話してるよ。俺はお前にまた学校に来て欲しいんだ。今しか味わえない高校生活を失って欲しくないからさ。今の生徒会はおかしい。あんなの、俺が入りたかつ

た生徒会じゃない」

「登校させて、何をさせる気」

「何もさせる気はないさ！ お前のやりたいようにやればいい。俺はお前を利用して何かしようとか考えてる訳じゃない！ 俺はもう生徒会は辞めるつもりなんだ！ 信じてくれ！」

「信じられない」

「ぐっ」

やはり、一発でそんなすぐにはいかないか……。

「じゃあ、明日俺が迎えに行く！ 休み時間は、ずっと俺がお前の傍にいる！ お前を嫌う奴は、誰も近付かせない！ 何もさせない！ 絶対守るから！」

「……何で、そこまでするの」

顔を俯かせ、低く訊いた。

「これが俺の、償いだからさ」

と言っても、これくらいじゃまだ全部は償えない。まだ、足りない。

「……………」

しばらくの静寂の後。

廣瀬は一度だけ　しかしはつきりと、頷いた。

翌日。アイロンで直された制服を着て、彼女は待っていた。

本当に来るのだろうか。

期待と不安が彼女に満ちていた。既に鞆に必要な物は詰めた。

久々に、髪にブラシを通した。朝シャワーを浴びた。下着をいつもと違うものに変えてみた。眼鏡を拭いた。弁当を作った。シャープンに芯を入れるだけ入れた。

あれ、おかしいな。朝がこんなに楽しいなんて。

いつもは眠いだけの朝が、太陽の光が煩わしいはずの朝が　笑顔でいたはずのない朝に、笑顔があった。

ピンポン。

昨日聞いたばかりの、インターホンが鳴ると、彼女は跳ね上がり、最初からチェーンが外れていたドアを躊躇なく開ける。

「オーッス。……おお、昨日より更に綺麗になってるな」

そこにはやはり、昨日とまったく同じ服装の、思った通りの人間が立っていた。彼女は磨いたばかりの靴を履き、ドアを閉める。

「おいおい、会ったら言う事あるだろ？」

「……？」

そこで初めて、思い出す。

「……おはよう」

気が遠くなるくらい久しぶりの、挨拶を交わした。

電車に乗る時も、学校までの道のりも、休み時間も、昼休みも、帰り道も、ずっと彼女の傍には彼がいた。それを陰で罵る人は少なくなかった。

しかし、二人は気にする事は無かった。それらをBGMに、たくさんのお話をした。好きな物、嫌いな物、将来の事……。

急激な変化で戸惑った彼女だが、徐々に彼を信用するようになって。自分の話を全て聴いてくれ、返答してくれる。顔が見える人間で、それをしてくれるのは両親だけだった彼女にとって、彼はそれに近い存在に近付いていた。

そして間違いなく、彼女は今までで 人生で最もと言っても過言ではないほどに、一番の笑顔を作っていた。

駅のホーム。二人は並んで立っていた。いつもより若干人が多い中、彼は取り返したブレザーを着る。

「じゃあ、俺帰りはあっちだから」

「……うん」

「今日は、どうだったよ？」

「……楽しかった」

俺は満足し、頷く。

「そうか、良かった」

「……ありがとう」

「気にすんなって。 んじゃ、また明日な」

彼はそう言つて、階段に歩いて行く。

？また明日？

この言葉が何度も、頭の中でリピートされる度に、顔が笑う。

こんな楽しい日は無かった。学校があんなに輝いて見えたことは無かった。学校で笑顔になれることは無かった。

いっぱい土産話を胸に詰め、彼女は電車を待っていた。

『二番ホームに、電車が参ります』

アナウンスが鳴り響く。集団の一番前に立っていた彼女は、早く帰ってパソコンを開きたい気持ちで昂っていた。一体どんな反応をされるだろうか、嫉妬されるか。想像するだけで、心が躍る。

『危険ですから、黄色い線の内側まで、下がって、お待ち下さい』

彼女は自分の立ち位置を確認する。足が少し、黄色い線から出ていた為、身体を下げる。

瞬間、風を増して感じた。

一体どうしたんだろう。

そう思った時には、何故か身体が浮いていた。

そして、前から落ちた。

「……え？」

そして、前から何かが迫っていた。

「ん？」

今何かがドサッと落ちる音がしなかったか？ お爺さんかお婆さんが荷物を落としたのかな？

俺は階段昇りを中断し、振り返る。

「……ああ！？」

廣瀬が、線路に落ちてる！？ まさか、足滑らせたのか！？

俺は荷物を放り、慌てて階段を降りる。

「！」

ちよつと遠くに、その場からさつさと離れていく人間が居た。その後ろ姿は、何となくよく見慣れている気がする。それに、何故か笑いを堪えている様子。携帯で面白画像でも見てるのか？

っておい！ 今はそれどころじゃないだろ！ 廣瀬を助けないと！

俺は急いで階段を駆け降りるが、途中で悟る。

無理だ。間に合わない。

それでも、足を早く動かす。

しかし既に 残酷な警笛が、鳴っていた。

彼女の時は止まった。

どうしてこうなった？

何か悪い事をしたか？

久しぶりに、楽しかったのに。

久しぶりに、笑えたのに。

そこで彼女は、己に秘められた枷を悟る。

罪。

これが、償い？

「……嫌……」

彼女の時は動き出した。

「廣瀬え

！」

空しい叫びが聞こえると同時に、彼女は目を閉じた。
電車が悲鳴を上げる。

？俺だつて、こんな事は言いたくないんだけどさ……。廣瀬をさ、嫌がる人が多いんだよな、実際。民主主義的に考えたら、多数派を支持するべきだろ？ だからその……。居なくなってくれないかな？

「嫌……」

鞆と共に追憶を抱きしめ 遺言を呟いた。

暗闇の中で、何か風を感じた。

すると勝手に、身体が持ち上げられる感覚がした。
抗う術も無く彼女の身体は、再び宙に浮き上がる。

「うつ」

尻から落ちた彼女は、目を開ける。

「！」

その線路には 絶対に忘れない顔が居た。

私は大罪を犯してしまった。

己の欲望に駆り立てられ、自我を葬り去り、気付くと、一つの家

族を地獄に墮としていた。

私は何をした？

この血は何だ？ この死体は何だ？ これは何だ？

問い掛けても、答えるものは無かった。

自首しても良かった。償えるものなら、何が何でも償おうと思った。

しかし、それで彼女は満たされるのか？ 孤独を癒す事は出来るのか？ いいや、出来ない。

ならばせめて、陰から彼女を守ろうと誓った。

そして今日、やっとその役割が回ってきた。

これで全てが償える訳では無い。

私一人の命で、彼女の傷が埋まるはずがない。

これは償いでは無い。

だが、これは私の、人間としての、

最期の、生き様。

笑顔の大罪者の血が、線路の一角を染め上げていく。
自分を染め上げていくのは、虚無感に等しい絶望感。

「廣瀬！ 大丈夫か！？」

俺は震えている廣瀬を抱き抱える。

「なんてこった……」

廣瀬を庇って、自分が代わりになるなんて……。

正直、俺じゃ考えられない暴挙だ。車ならまだしも、電車に轢かれるなんて考えるだけで寒気がする。そんな事をしたら、こんな事になるって事だ。絶対に行動には移せない。

それをこの人は、何の躊躇いもなしにやってのけた。英雄と称えられるべき勇気ある行動だ。少なくとも俺は、あなたを英雄だと断

言する。その誇りを胸に、どうか安らかに眠って下さい。

「……………」

それに比べて、何だ、こいつらは？

何だよ、その顔。まるでがっかりしてるみたいじゃないか。

いつまで突っ立てるんだ？ 手くらい差し延べるよ。死の崖っぷちから生還したんだぞ？ しかも、犠牲者を出してまで。お前らは人並みの人情がないのかよ。

……こんな事を思っただけでも仕方が無い。

「とりあえず、駅員のところに行こう。立てるか？」

俺は頷いた廣瀬を立たせ、ゆっくりもう一度階段に向かう。

「どうして落ちたんだ？ 足を滑らせたのか？」

廣瀬は首を激しく振って否定する。

「じゃあ、どうして？」

「押された」

「何？」

「誰かに、押された……………」

俺は止まる。

さっきのは、誰だ？

どんな奴だ？

何だ？

光景の全てが直結し、脳裏に一つの答えが浮かび上がる。

俺は振り返る。視界の端で、そいつは開いた電車のドアの前にいた。

こつちを見て、笑った。

「……………」

俺は言葉を失っていた。

電車に吸い込まれた、グロい笑みを浮かべていたあいつは……………！

（三日後）

・ユウさんが会話に参加しました。
全員『キタ

！！』

モリゾー「三日も待たせるんじゃないよ！」

ミヤビ「待ちくたびれたぜ！」

アゲハ「激しく詳細を希望」

syou「kwsk」

ムシメガネ「報告よろ」

たこ「wktk」　ワクワクテカテカの略。期待しているという意。
かめ「<<頼むぜ>>」

ユウ「落ち着けお前ら。順を追ってレポする」　報告するという意。

ウツド「ok」

ユウ「まず、生徒会のやつは、良いやつだった。すごく、すつごく、
良いやつだった」

ウツド「やはり俺の勘は正しかったという訳だ」

ユウ「そうだね。楽しかったよ。ずっと一人でいた俺に歩み寄ってくれたのはそいつだけだったし、話を聴いてくれたのはそいつだけだった。どんなに陰口叩かれても何も気にしないし。まだこんなやつがいるんだなって見直したよ」

モリゾー「良いやつだな」

ユウ「そう言ったよな」

アゲハ「でもそいつ、生徒会なんですよ？」

ユウ「うん。だけど、もう辞めるんだってさ。こんな生徒会は、俺が入りたかった生徒会じゃないって」

syou「なんかどっかの漫画の主人公みたいなやつだな」

ユウ「それでさ、そいつは新たに別の機関を発足させるって言うてるんだ」

ムシメガネ「何それ」

ユウ「生徒会執行部だって」

ミヤビ「被ってね？」

ユウ「曰く、どんな生徒の力になる機関になるって。活動方針的には、お助け部みたいな感じらしい」

たこ「色んな意味で被ってるね」

かめ「気にしたら負けですね、わかります」

ユウ「俺はその役員にならないかって、誘われた」
ウッド「やるしかあるまい！」

アゲハ「そいつといえれば、もっといいことあるよ」

syou「羨ましいぜ、畜生！」

モリゾー「いくとこまでいこうぜ」

ミヤビ「まさに救世主」

ムシメガネ「そいつなら、大丈夫な気がしてきた」

たこ「くっそ、俺もそっちに行きたい！」

かめ「バーロー、これはユウの勇気が成した奇跡だぞ。良かったな、ユウ」

ユウ「お前らありがとう。でも、やめとくよ」

全員『は？』

アゲハ「何で？ 何で？？」

ユウ「その理由を話すとすると、今のテンションを維持するのは難しくなるし、雰囲気も悪くなるかもしれない。それでもいいなら」

全員『k w s k』

ユウ「おk。簡潔に言つと、殺されかけた」

syou「簡潔すぎて激しく意味不明なんだが」

ユウ「今日駅のホームに立ってたら、電車が来る直前に、誰かに押された。明らかに、故意的に」

たこ「事故じゃないの？」

ユウ「じゃない。タイミングが良すぎるし、周りの人がまったく動かなかつたところを見ると、計画的な犯行だった」

かめ「じゃあお前はユウじゃない？」

ユウ「いや、助けられた。最も憎い人に助けられた」

ムシメガネ「誰それ？」

ユウ「それは、禁則事項」

ムシメガネ「すまん」

ミヤビ「犯人誰だよ。許さん、殺す」

ユウ「だいたい目星はついてる」

ウッド「よし、警察へGO！」

ユウ「いや、証拠もないし、仮に逮捕出来ても、証拠不足で不起訴になるのがオチ。だから通報はしないよ。無駄無駄無駄無駄無駄！　って感じ」

アゲハ「それでいいのかよ」

ユウ「結局、俺が悪かったんだよ。嫌われてるやつは、素直に殻に籠ってるのがお似合いってこと。他の人もそれで良い気分になれる」モリゾー「そんなことねーだろ」

ユウ「もしクラス中が鬱陶しいと思ってるやつがいてさ、そいつが調子乗ってたらイライラするのと同じ。そんなやつ、いなくなった方が清々するだろ？」

たこ「一概にも、それは否定出来ないかもしれない」

ユウ「そう、俺は拒まれたんだ。拒まれたら、受け入れられることはない」

かめ「そんなことないって」

ユウ「いいよ。元々望んでなかったし。俺はこの部屋に籠って、お前らと話してた方が幸せだ」

誰も喜べない幸せを、彼女は幸せだと謳う。

サキ「本当に幸せなのか？」

ユウ「勿論。学校行つたって、ずっと下向いて時間が過ぎるのを待つだけ。充足は得られない」

サキ「三日前は、楽しかったんじゃないのか？」

ユウ「俺が楽しくても駄目なんだよ。周りは楽しくない。寧ろ不愉快。ここなら誰も嫌な気持ちにはならない」

サキ「ユウは、他人の事を考えすぎだよ。自分が楽しければいいじゃないか」

ユウ「良くないよ。俺は悲劇を理由に他人を苦しませてきた。

だから今度は、他人を助けるようなことをしたい。喜劇を際立てる役に立ちたい。俺が不幸せでも、他人が幸せなら、それでいい」

彼女は心を入れ替えた。

優しさ。

故の、哀しさ。

「廣瀬さんが再び不登校になりましたね！ 喜ばしい限りです！」
いつもの生徒会室。副会長が満足そうな笑みを浮かべていた。

「彼女には悪いけど、今の彼女はこの学校に悪影響しか与えないからね。家でパソコンを広げて貰った方が都合がいいわ」

美咲さんは肘をつき、顎を左手の甲に乗せて言った。相変わらず色っぽい。

「にしても、苦情が凄かったぜ。処理するのが大変だったぜ……」
隼が嘆息しながら振り返る。

「それもこれも、全部お前のせいだぞ天川、ああ!？」
大輝がパンツと強く机を叩いて、俺を睨む。すごい威力のメンチビームが俺に注がれる。

「さて、天川君。どうしてこんな非行に走ったのか、説明して貰おうかしら？」

非行って……。美咲さんは戦闘体制に入ったようだ。何だか怖い目付きだ。

「まったく！ あなたには学習能力がないんですか？ 本当に高校生なんですか？ ぶんぶんですよ！」

腰に両手を当てて、憤慨する副会長。残念ながら、まったく怖くない。

「いい加減自重して欲しいぜ……。生徒会の信頼が薄まっていくぜ」隼が未来の生徒会を思い浮かべる。

「黙ってないで何とか言えよ天川、ええ！？」

大輝がもう一度机を叩いて急かす。

俺は息を吐き出し、今日初めて口を動かす。

「何度も言いますが、俺はこんなやり方は間違ってると思うんです」

「何度も言っけど、これが生徒の希望なの。生徒の為に全身全霊を捧げるのが生徒会としての務め。違う？」

「それは間違ってるんですよ。でも、方法が悪いと思うんです。もっと別の方法があるはずですよ」

「例えば？」

「……………。それはまだ解りませんけど」

「そんなんじゃあ、思い付く前に私は現役を引退しちゃっわね」

不敵な笑みを浮かべる美咲さん。畜生。

「はい、天川君の負け」

「会長に口勝負で勝てる訳ないんだぜ」

「スポーツなら負けねえんだけどな、くそ」

他の役員の賛美に美咲さんはふっと笑う。

「ま、そんな考えはとっとと捨てて、生徒会の職務に没頭することね」

美咲さんが呆れ気味に言って、その場を立とうとする。その瞬間、
「！」

美咲さんだけじゃなく、他全員が俺の繰り出した音に驚き、動きを止める。おお……右手痛え……。

俺はジンジンと来る痛みを堪え、美咲さんを見る。

「まだ話は終わってないですよ、美咲さん」

生徒を切り捨てる生徒会。

そんなの、生徒の会じゃない。増してや、生徒会の長が実行すべき行動じゃない。

こんな奴が卒業式の時、卒業生の言葉を言うんだぞ？

そんなの許せねえな、ああ、許せねえ。

好き勝手暴れた挙句、言う事を言ったらとっとと卒業。

ありえないな、ああ、ありえない。

俺は美咲さんに近付き、ブレザーの左ポケットに忍ばせておいた封筒を机に置く。

「……何を考えているの？」

「見ての通りです」

俺は一瞬笑って、はっきり言う。

「本日を以って、俺は生徒会を辞めます」

もう無理だ。あんたには付いていけない。

この生徒会じゃ駄目だ。彼女達は幸せにならない。

だから、俺は闘う。例え無駄でも、四肢がもがれるまで抗ってみせる。

俺の生徒会を、執行してやる。

第8話「進路は唐突に折れ曲がる」

「という訳で、感動出来る話を語り合おうぞ！」

「どういう訳だ」

最後のテスト週間の金曜日。生徒会執行部室は何も変わらない人間が集まって、何も変わらない始まり方をした。

いつもならゲームをして日頃の鬱憤を晴らしているが、テストが終わるまで詩織に没収されてしまい、テストが終わった今日、ようやく俺の手元に帰ってくる。本当は早く帰りたいが、天川がどうしても言うので仕方なくここに居る。

それは皆も同様なのだろう。その証拠に、不満そうな顔が立ち並んでいる。

「何でテスト終わった直後に集まらないといけないんですか！ せっかくの晴れ晴れしい気分が台無しですよ！」

二ノ宮は机を弱々しく叩きながら憤慨し、

「ホントだぜ！ オレ弁当持ってきてねえよ！ 腹減って死んじまったらどうすんだよこの野郎！」

恵は頭の後ろで腕を組んで悪態をつき、

「お腹空いた」

廣瀬は珍しく机に顔を伏せていた。

一方、天川は「まあまあ」と手を振る。

「図書委員から要望が来てるんだ。しかも急ぎのな」

「それは？」

俺が訊くと、天川は資料を一枚取り出し「ほい」と俺に渡す。何だかいつの間にか俺が読む役になったらしい。

「えー……。？ 私達図書委員はこの時期になると、ノンフィクションの出来事を小説にして生徒に配布するんですが、今年はグッと来るネタがないんです。出来れば感動出来る話がいいんですが、図書委員の中ではイマイチな内容しか出てきません。そこで執行部の皆

さんの中で、何か感動出来る話を知ってる方は居ませんか？ 前述通り、ノンフィクションをお願いします。勿論、プライバシーは守ります。ですが、あまりに個人が特定されてしまうような話は遠慮願います。また、この要望の件は公表しない事を望みます。私達を泣かせるような話をお待ちしています。？だと」

そういえば去年、？図書便り？というプリントが配られて、お勧めの本と軽い小説が掲載されていたような。おまけ程度なら、無理に作らなくてもいいと思うんだが。

「去年の今頃には既に配られてましたからね。だから急ぎなんですか」

しかも×切りを過ぎていたときた。だったら尚更止めればいいのに。

「そういう訳だ！ とにかく皆で感動話を発表し合って、その中の一番を図書委員に提供するぞ！ じゃ、まずはメグからな」

「何で当たり前のようにオレからなんだよ！」

「当たり前だからな」

理不尽な理由で、メグが最初に指名された。

メグは「何だそりや……」と呆れながらも、心当たりを脳内検索し始める。

「んー……。急にそんな事を訊かれてもなあ。簡単に思い付かねえよ」

「言つとくけど、ノンフィクションだからね？ 作るんじゃないからね？ ……ていうか、ノンフィクションの意味解る？」

「そんなくらい解るわ！ 実際の出来事とか、実体験の事だろ？」

「まあそんなところだな」

メグは「うーん」と、腕を組んで考え込む。どうやらその手の経験は浅いようだ。

「頭を努めてた時の話なら、ねえ事もねえけど」

「そうでもなかったらしい。」

だが天川は首を振る。

「それは駄目だ。すぐに本人を特定されちまう」

「オレは別にいいぜ。今更隠すような事じゃねえしな」

「いいや、駄目だ。これは図書委員の意向だし、責任問題になるからな。メグが良くても、図書委員は間違いなく却下するだろう」

「そうか。ならねえや」

メグは考えるのをやめて、背もたれに身体を寄せる。

「じゃあ、春と夕は飛ばして、龍は？」

「そうだな……。ん？」

今、何かおかしくなかったか？ 何故二ノ宮と廣瀬を飛ばす？

「おいおい、何でそうなる。ちゃんと順番通り訊くべきだろう」

順番なんてあるのかは知らないが。

「……ん、龍、空気読め」

「久しぶりに聞いたなその言葉。というか空気も何もないだろ」

二人の顔を見てみると、何故か沈んだ表情をしていた。

「おい二人共。ツツコミはどうした？ どう考えてもツツコミ所だろ」

「え？ いや……。別にいいじゃないですか」

二ノ宮に続き、突っ伏してる廣瀬までも頷いた。

「何がいいんだ。スルーされてるのに、それはないだろ」

「龍、マジKY」

「恐ろしく死語に近い言葉が聞こえたな。一体どこがKYなんだか」

不意に隣の恵が、肘を俺に当てて、「いいから、言う通りにしろ」と言ってきた。

「いいや解せない！ 俺なんか悪い事したか？ したならそれを教えて欲しいんだが……。教えてくれる空気ではないな。」

「はあ、解ったよ。感動出来る話ね」

仕方なく俺はこの流れに乗る事にした。

「うん、あるぞ。とびっきりの感動話がな」

「でかした龍！ その心は！？」

「ジョナサンの話だ」

「……お前の好きで止まないあれか、龍」

天川は額に手を当てて首を振る。他も短く嘆息していた。心外だな、まるで俺の意見は聞くまでもないと言わんばかりじゃないか。

「何でそんな顔をする。ジョナサンの話は感動話ばかりなんだぞ。」

いや、正確にはテストロッサの話かな？」

「なんか前に聞いたような気がするワードだな……。まあいいや、とりあえず言うだけ言ってみてくれよ。採用するかしないかは、聞いてからにしよう」

「任せる。そして期待を胸に膨らませながら聞くが良い。これは、

第三章の話だ」

ゴルバチョフに監禁されていたジョナサンは、持てる力を駆使してなんとか脱出に成功。街に身を潜めながら、ゴルバチョフの野望を阻止するため、弟の仇を討つために、仲間を集めていた。そんな時に出会ったのが、火を操る？アーシェン・ヴェイン？一族の末裔、テストロッサだった。

彼女は、最初は自分の目的の為にジョナサンを利用しようとして近付いた。案の定、ジョナサンはそれに気付かずに、テストロッサによって瀕死状態になってしまう。

その直後、ジョナサンを追っていたゴルバチョフが現れ、今度はテストロッサが死の境地に立たされる。ジョナサンには他にも仲間がいたんだが、その仲間達は当然テストロッサを助けようとはしなかった。ゴルバチョフが止めを刺そうと手を挙げようと、仲間は冷酷な目でその様子を見ていた。

しかし、ジョナサンはテストロッサを庇った。何故庇ったと問われたら、「正義の誇りが叫んでやまなかった」と言い遣して、絶命した。

遺体の頬に涙を零したテストロッサは立ち上がり、仲間と力を合

わせて、なんとかゴルバチヨフを振り切った。そしてテストロッサは、「罪を償う」と言って、自らの命を捧げて冥界から魂を呼び戻すという、一族に伝わる秘術を用いて、ジョナサンを生き返らせた。テストロッサの命と引き換えに。

これが、第三章の話。次の四章ははしょって、五章の話だ。

着実に力を蓄えていたジョナサン達の前に、再びゴルバチヨフが現れる。「新たな召喚魔法の肩慣らしだ」と言って、魔法を唱えると、空から幾つもの光粒が降り注ぎ、それらは黒い人の形になった。それは冥界から魂を召喚し、操る魔法だった。こんな魔法は今までは存在しなかったもので、ジョナサン達は苦戦を強いられた。最後に止め要員として召喚されたのは、なんとテストロッサだった。ジョナサン達はテストロッサに呼び掛けるが、応えずにゴルバチヨフの一つの命令を実行しようと動く。

？奴らを殺せ？

単純且つ明確で、非道を極める命令を。

今のテストロッサは召喚獣として地上に居る。召喚獣にとって、召喚主の命令は絶対。逆らう事は許されない。これは逆転し得ないこの世界の理。

彼女の猛攻を受け続けるジョナサンにも、いよいよ限界が近付きつつあった。仕方なくジョナサンは、微弱にも反撃を始める。殺さない程度にテストロッサを弱めていく。

彼女が息を荒げ始めた時、一瞬自我を取り戻した テスタロッサは、「私を殺して」と叫ぶ。しかしジョナサンはそれを頑なに拒否する。それを見かねたゴルバチヨフは、自らの魔法でジョナサンに止めを刺そうとした時、今度はテストロッサがジョナサンを庇って再び死亡した。

その瞬間、消え行くテストロッサを抱えて叫ぶジョナサンのシーンはパッケージにも描かれている、言うまでもない名シーンだ。「二度死ぬヒロイン」このキャッチコピーが、プレイヤーの涙を誘ったのだ。

「 という話だ！ どうだ、泣ける話だろう！」

一息で語り終えた龍は胸を張ったが、俺達はしっくり来なかった。それは無理もない。ここには龍以外のゲーマーは居ないし、それどころかゲームに触れない。夕ですらゲームは範疇外だ。そういうフアンタジーな話に共感を持てる奴は誰も居ない。

「どうした？ あまりに感動しすぎて、言葉も出ないか？」

ゲームを語る龍はとことんポジティブ思考だな。どうやってたらの空気をそう読めるのやら。もしかして、ガチでKYなんじゃないか？

誰も反応してないので、仕方なく俺が反応してあげる事にする。

「まあ、確かに泣ける部類の話だけだな」

「だろっ！？ 俺はこれ程までに涙腺が崩壊した事はなかった！」

「うん、良かったね。でもな」

「これはクロスレビュー四十点満点に間違いないな！ そうじゃなかったら会社に乗り込んで社長をぶっ飛ばしてやる！」

「それは勝手にしてくれ、どうなっても知らないけど。んでね」

「ああ、話してたら無性にやりなくなってきた！ うずうずしてきた！ もう帰る！ 早く帰って、続きをやるんだ！」

「待てえ！ 何勘違いしているんだ？ まだ俺のバトルフェイズは終了してないぜ！ ていうか始まってもないぜ！」

「残念、一番上のカードはマジックカードだ！ だから俺はゴルバチヨフを倒しに行く！」

「行かせねえぞ！ まだツッコむべきところツッコんでないんだ！」

「そんなところはない！」

「大有りだよ！」

俺のツッコミに龍は「むっ」として、椅子に座り直す。

「なら、十文字以内で頼む」

「無理だね！ まず、その世界観！ 現実と掛け離れすぎ！ 次に

その設定！ アーシェンなんたらやらジヨナサンやら訳解らん！
後死に際の状態！ 実際には起き得ない故に共感が持てない！ 寧ろ意味不明！」

「なっ、なんという駄目出し……！ だが、ジヨナサンを侮辱するなら許さんぞ！」

「別に侮辱はしてねえよ！ それ以前に興味ないしね！ そして最後に、一番重大な事！」

「なんだ！ 言ってみろ！」

これは致命的な事だが、俺もさっきまで気付いてなかった！

「ノンフィクションじゃない！」

シーン……。

部屋は静まり返り、皆の視線は龍に注がれる。

その龍はというと、「コホン」と軽く咳払いして、頷く。

「うん、確かにそうだな、うん」

「解ってくれたか」

「仕方ない、今日はこの辺で勘弁してやろう」

「何で上から目線なのかさっぱりだが、まあいいや」

俺は「ふう」と息を吐き、額に手を当てる。

「やっぱこれしかないのかあ……」

「何だよ！ 用意してあんのかよ！」

俺の呟きに、メグを先頭に非難の嵐が巻き起こる。

「また私達は暇潰し要員ですか！ 冗談じゃないですよ！ こっちはとっとと帰ってゴロゴロしたいのに！」

「もう許さん、殴る」

「お腹空いた」

「待て待て！ 確かに用意……というか知ってはいたけど、これはあまり使いたくないんだ。だから集まって貰ったのは悪ふざけじゃない！」

「納得いかねえ！ だったらそれをオレ達に話せよ！ それで天川が窒息死か打撲死か決まる！」

「どの道死ぬのか俺！ いや、これを話すのは手厳しいっていうか……」
「なるほど、この状況でそんな戯言を言えるのか。素直に尊敬しよう、俺には出来ない」

遂にメグと龍が立ち上がり、拳を鳴らし始めた。やばい、この鬼気迫る様子はヤバイ。

「二人とも鬼の形相で俺に歩いてくるな！ マジで怖い！ 何でもするから許して！」

「じゃあ私達が納得出来るようにして下さいよ！」

「ぐっ……しかしっ！」

「お腹空いた」

「よし、まずは購買に行ってくる！」

五分後。俺は購買で全員分のメロンパンを買ってきて、机の上に置いた。くそ、無駄な出費をしてしまった。最近どんどん厳しくなっかっていってるな……。

ビニール袋には一応、俺の分のメロンパンも入ってたんだが、夕に分捕られてしまった。これ以上抵抗したら酷い目に遭いそうだから、何も言わないでおくけど。

皆はメロンパンを手に取り、「いただきまーす」と声を合わせて頬張り始める。

「ふう……。とりあえず、後は俺がやとくから、食い終わったら帰っていいよ」

「はひひっへふんへふは？ はんほははひへふははひほ」

「物を口に入れながら喋るんじゃない、行儀悪い。出来るなら誰か訳してくれ」

「何言ってるんですか？ ちゃんと話して下さいよ。と言ってるぞ」

「よく解るな龍！ いや、もう奢ったんだからいいだろ」

「はへへふほ！ はっほふひひはへん！」

「駄目ですよ！ 納得行きません！ って言ってる」

「そんな事を言われてもなあ」

「どうせ皆に知り渡る話ならいいじゃねえか。無理に言えとは言わねえけどよ」

「むっ」

そうは言ってもなあ。俺自身の話って訳じゃないから、勝手に暴露するのも気が引けるんだよなあ……。

「俺は没でも意見を公表したんだ。聴く権利はある」

「そりゃそうだけどさ」

「お腹いっぱい」

「もう食い終わったのかよ！？ 早っ！」

夕はタヌキのようにお腹を叩き、笑顔で満足そうだった。……お、何か純粹に可愛いと思ってしまった。

「ひひははひへへふははひほ！」

「いいから教えて下さいよ！ とさ」

「ん……………」

このまま無理矢理終わらせてもいいけど、それだと後味悪いし……。

やっぱり、皆と決めるのが流儀だよな。

「解った。生徒会執行部として意見を出すんだからな。皆に吟味して貰う必要もあるよな」

「ほふへふほ！」

「春はいい加減飲み込め！」

にしても、何でもここまで興味津々なんだろう。別に楽しい話でも、腹が膨れる話でも無いんだけどなあ。

「んじゃあ解った、話そう。これはある男子生徒の」
コンコン。

俺が話そうとした時、偶然にもドアがノックされた。

こりゃ良い、絶好のタイミングだ。これを利用して、今回の話は揉み消そう。

「龍、出て」

「何故俺なんだ……」

いや、何となく。メグは立ちそうにないし。

龍は渋々立ち上がり、ドアを開ける。

「んっ。岡村じゃないか」

するとそこには、ピンクの髪の小柄で大人しそうな岡村さんが居た。

「……その節ではお世話になりました」

「ご丁寧なお辞儀に、俺達も頭を下げる。」

「どうしたんだ？　まさか、また恐喝を受けたんじゃないだろうな？」

「えっ、と……」

岡村さんは言い淀む。

ああこりゃあ、どう見ても厄介事だな。

「とりあえず岡村さん、座って」

「はい……。失礼します」

「そこは俺の席……。まあいいか」

岡村さんが座ったところで、早速事情を伺うとする。

「それで、岡村さん。今日はどうしたんですか？」

「あの、また厚かましいお願いになるかもしれないんですけど……」

「大丈夫ですよ。気にせず、話してみてください」

「……はい」

岡村さんは、苦虫を噛んだような表情をしながら話し始める。

「昨日、私が犬……ペチと散歩をしていたら、ペチが人の足を噛んでしまったんです。私は必死で謝ったんですけど、相手が治療費と慰謝料を払えって凄いい剣幕で言ってきて……」

なんてこった。苦虫ではなく、まさか人様の足を噛んでいたとは。とりあえず、話の大筋は見えた。

「それで岡村さんはそれを了承した、と？」

「……そういう事です」

まあそうせざるを得ないだろうな、当然の事ながら。

しかしそれはそれで、こちらとしては困るものがあるぞ。

「いくら何でも岡村、それをここに相談するのはお門違いというものではないのか？ 法律相談は専門外だぞ」

俺が言おうとした正論を、龍が代わりに言った。

確かにここは生徒の要望を司る機関ではあるけど、ここまで個人的な事を相談されても困る。せめて学校に関係する事なら、こっちもそれなりの対処は出来るんだが。

「それは解ってるんだけど……一応、言った方が良くかなと思って」
「どうして？」

「その相手が……大高生だから」

おおふ……。こんなところまで出てきますか、大高。

龍は納得したように頷き、推察する。

「なるほどな……。素直に金を渡すだけで済む話だとは思えない。
もう一添え盛ってきそうだ」

龍の言う通りだ。下手をすると、強姦事件にもなり得る。何だか知らないけど、宣戦布告された直後でもあるし。出来れば大高生との接触は避けたい。

けど今回ばかりは、完全に岡村さんに非がある。どう頑張っても、謝罪する道は避けられない。そうになると、確実に大高生と接触する事になる。

「これは困ったな……」

龍も同じ考えをしているようだ。

メグが龍を護衛につかせるというのが安易な策ではあるのだが、また変な騒ぎに発展し兼ねない。願わくばより穏便な解決を望みたいのだが……。

「？ どうしてそんなに考え込んでいるのですか？」

怪しい雲行きの中で、ただ一人春はキョトンとしていた。どうにも、事の複雑さが理解出来てないようだ。

「春……。お前はどこまで能天気なんだ」

「その言い方は心外です！ 私は常にお金の事を考えていますよ！」

「余計悪いよ。いいか、春。今回はお前の思ってる以上に面倒なんだよ。相手が一般人ならまだしも」

「いえ、それは解っていますよ。相手が大高生だから、皆さん考えあぐねてるんですよね？」

「何だ、解ってるのか。だったら何だ、何か劇的な解決策でもあるつてのか？ 春がそんな画期的で大胆な意見を言えるはずがないだろう、春なんだし」

「どうして私はそこまで悉く酷い言われようなんですか！ 私だつてたまには素晴らしアイデアを出しますよ！」

「んじゃあ言ってみろよ、春の意見（笑）を」

「いちいちむかつかます、その言い方！」

春は興奮気味に憤慨していたが、やがて落ち着き、自分の考えを言った。

「ですから、素直に謝罪すれば良いじゃないですか」

単純至極、しかし何の解決にも繋がらない愚策を。

「だからそれが出来ないんだって。相手は大高だぞ？ 何の警戒もなしに近付いたりしたら、何かされるに決まってる。しかもそれが弱い乙女なら尚更だろ？」

「ですから、そういう考え方がもう筋違いなのですよ」

「ん、どういう事？」

「怪我をさせたのはあくまでこちらなんです。誰がどう考えてもこちらが悪いじゃないですか。なのに相手側の非を探るなんておこがましいですよ。大体、皆さんは大高というワードに過敏すぎです。」

もしかしたらその人は、大高でも善良な生徒かもしれないじゃないですか。少なくともまともな要求をしていますし。それに大高生全員が、乱痴気騒ぎを起こす輩とは限らない訳ですし」

「むっ。春にしては随分とまともな意見だな」

「ですから、素直に謝罪するのが一番ですよ」

「しかし、あちらが何もしないという保障は無いだろう」

それでも龍は、春に噛み付く。

「お前の正論が千歩譲って妥当だと譲歩しよう。だがそれで馬鹿正直に謝罪に行つて、その結果身体を貪られましたと来たら、お前は責任が取れるのか？」

「うーん……。ちよつと残酷な言い方かもしれませんが、それはもう自業自得なんじゃないですか？ 先に怪我させたのはこっちなんですし、報いを受けるのは仕方の無い事だと思います」

「極論だぞ、それは。何の為に謝罪すると思つているんだ。わざわざ相手の条件を呑んでいるのに無駄な叱責を受けては堪つたものじゃない」

「あの……結局、私はどうすれば……」

岡村さんは不安げな表情を崩さない。何だか今までの話は、岡村さんの不安を煽つているだけの様な気がしてきた。

「ていうか春よ。そこまで豪語するという事は、当然何か決定的な要因があつての事なんだろうな？」

「岡村さん、要求された金額はいくらなのですか？」

え、無視？

「全部で、二十万円です……」

「うむ……。犬に噛まれたんだ、何か菌が移つたりするかもしれない。しかも相当痛いだろう。更には飼い主の躰の度合いが問われる問題だ。そういうのを考えていくと、割りと妥当な金額と言えるかもしれない。」

「おい岡村。そんなに払えるのか？」

「結構厳しいかな……。けど、親戚に事情を話せば貸して貰えると思うから、何とかかなると思う」

「そうか……」

こればかりは、カバーしようがないな。けどそれだと後々面倒な事になりそうだが……。

ますます雰囲気が重くなる。何せ岡村さんは、貧乏が故に前科を踏んだんだ。これじゃあまるで報われないじゃないか。折角一つの

問題を解決出来たつてのに、またこんな仕打ちじゃあ……。

「大丈夫です！ 任せて下さい、岡村さん！」

「え？」

立ち込めた暗雲を吹き払うように、春はドンと胸を叩き、立ち上がる。

「そのお金は、私が工面します！」

「えっ……。ほ、本当ですか！？」

「工面も何も、お前ならもう手元にありそうだな」

龍が吐き捨てるように言ったのを聞いて、春は金色の財布の中を確認する。

「いえ、今は百万円しかありません！」

「五倍かよ！ せいぜい二倍を考えていたが、やはり格が違うな、二ノ宮財閥！」

「岡村さん、支払い日時はいつですか？」

「えっと、二日後の昼時、駅前の喫茶店です」

つまり日曜の十二時、あのお洒落な喫茶店でって事か。

驚いたな、また工場とか路地裏とか、人目のつかない場所を指定するかと思った。大高にしてはおかしなチョイスだ。

「では、その日に現地集合しましょう！」

「でも……本当に良いんですか？」

「大丈夫ですよ！ 私に任せて下さい！」

「やれやれ、どうだか。どうせ二ノ宮には猿知恵しか無いだろうに……」

「むっ！ そう言う龍さんには、ゲームで培った感動話（爆）しか無いじゃないですか！ 二次元に溺れた哀れな男子高校生ですよ！」

「何だとお！？」

「何ですかあ！？」

バチバチと火花を散らす二人。面白そうだから誰も止めに入らないが、岡村さんはヒヤヒヤしている。

にしても、やけに張り切る春に、何だか違和感を覚えた。けどま

あ気のせいだろうとすぐに無くなった。金銭問題なら春が全て解決出来る。この事象が初めてだから妙な感じだったんだろう。

しかし後日。春の思惑は何だったのかを知った時、俺は度肝を抜かれる事になった。

日曜の十二時前。駅前の喫茶店、？フラテツロ？は、お洒落な外見と内装が人気で、特にこの時間帯は人が大変賑わっている。待つ人が列を成すほどに、この店は信用が高い。

俺は天川に命じられ、二人を影ながら見守る事となった。正直二ノ宮なんかを見守るのはかなり抵抗があるのだが仕方ない。二ノ宮はともかく、岡村は弱い。暴力には屈してしまう。その時は、俺が身を挺するしかないのだ。

さて、四人テーブルに座る二人は当然の如く私服姿。岡村は俺と同じような、地味で控え目な服装だ。肌も露出していない、大人しい印象を放つ容姿。

しかし二ノ宮の私服は、とんでもない成金のような姿だ。

高価そうな毛皮のコートに金箔が塗られた上下。純白のマフラーを首に巻き、金色の中折れ帽を被ったその姿は、明らかに周囲から浮き、異質の存在感を放ち続けている。

小柄な女子高生が一変。全てを金で掌握しているかのような、華やかで傲慢そうな富豪に成り果てている。

俺はと言うと、声と様子が覗ける程度の距離の席に座り、コーヒーを飲みながら辺りを観察している。顔が割れているので、一応サングラスを掛けてきた。普段と違う服装だから、バレる事はないだろう。

しかしまあ、随分と人が多い事だ。これじゃあ相手がやって来ても、待ち時間のせいで余計に時間が掛かるな。休日はこんなに人が

多いとは、知らなかった。

「よお、待たせたな」

噂をすれば何とやら、か。

そう思っていると、二人の下に、如何にもチャライ格好の若者が二人やって来た。どうやらこれが相手のようだが、一人余計なのがついている。やはり何か善からぬ事を考えているのかもしれない。

岡村は会釈し、二ノ宮もそれに倣う。

「何だよこの成金女、お前の友達？」

「え、えつと……」

「はい。たまたま会ったので、お話してたところです」

「ふーん。悪いけどさ、俺達大事な話するんだよ。だからちよつとどいてくんねえかな」

「いえ、実は私もそれに関わっているのですよ」

「は？ どういう事？」

「まあ立ち話もなんですから、まずは座ってはどうですか？」

二ノ宮がそう促すと、二人はとりあえず座り、店員に水を注文した。同じ執行部だから顔は割れているはずなのだが、普段と掛け離れているからか、まったくそうだと気付いていない。流石に声までは把握してないようだな。

「で、あんたはどう関わってんの？ 俺が噛まれたのはこいつの犬なんだけど」

「はい。……実は、その犬は私の犬なんです。私が旅行中に家を留守にするからと、彼女に預けたんです。聞けば、何とあなたの足に噛み付いたと言うではありませんか。完全に私の躰不足です。なので、彼女の払う代金は、全て私が払います」

完全なでっち上げだが、相手からすれば納得してしまう程に自然な理由だろう。どうやら、何の考えもなしに来ていた訳でもないようだ。

「はあん、そういう事ね。いやまいったよ、ホント。すっげえ痛かったからね、マジで。ホントどうかしてんじゃねえの、お宅の犬っ

ころ」

「すみませんでした、お金は支払うので」

「当たり前だっつの。……あー、この後、空いてるよね？」

「？　どういう意味ですか？」

「折角二対二なんだからさ、これからダブルデートでもしようや。それで少しは勘弁してやるから」

そう言つて、口元をやらしくニやつかせる二人。

やはり愚劣な事を考えていたか。そんなの応じる意味は無いぞ、二ノ宮。お前には数多の財産があるんだからな。それで話はつくんだ。

「勘弁も何も、あなたの提示する金額は全て用意しました。これで謝罪は終了するはずなんですけど」

その通り。こんな男達に費やす時間など、あるはずがない。

「おい、あんま調子にノんじゃねエぞ、成金女」

先程までの調子の良い声とは打って変わり、低くドスの利いた声で脅すように男は言う。

「こん中には俺の仲間も居るからな、逃げようなんて出来やしねえよ。大体よお、被害者はこっちなんだぜ？　言う事はきつちり聞いて貰わねえとなあ」

下卑た笑みを浮かべながら、チロチロと舌を覗かせる大高生。

まさか、この人だかりの中にこいつらの仲間が　？

「……………」

確かに、似たような格好をして、妙にあのテーブルを注視している連中が居る。数にして四人。それぞれが二人に別れ、別々のところから監視しているようだ。いざ逃げようってんなら捕まえて、無理矢理にでも拘束するつもりなのだろう。

あっちも何の考えもなかった訳ではない、という事か。さて、どうやってこいつらを片付けようか。困ったものだ……。

「何を馬鹿な事を言ってるんですか？」

「……………」

「謝罪は、この場にておしまいなのですよ」

「あんだと、ええ？」

何を挑発的な発言をしているんだ！ 相手を怒らせてどうする！
俺一人じゃ、対処しようがないんだぞ。

「ですから、謝罪はこの場でおしまいだって……」

二ノ宮はゆつくりと、右手を頭上を挙げていく。何だ、その挙動には一体何の意味が。

「言ってるんだよ、下種野郎」

棘のある言葉と共に、パチンと指の鳴らす音が響いた、その瞬間、
店内の喧騒が、一斉にピタリと鳴り止んだ。

「……？ 何……？」

次には、店内の人が一斉に立ち上がり、二ノ宮の居るテーブルに
視線を向け始める。

「は……？」

いよいよ、大高生の二人は訳が解らなくなったようだ。別所で待
機している仲間も動揺を隠せずに居る。かく言う俺もなのだが。

「ここはあたしのテリトリー。生意気かます事は許さないつつて
んだよ」

まるで別人のような口調と仕草で、二ノ宮は相手を威嚇する。最
早、慇懃なんて言葉は二ノ宮には無い。無礼の一言に尽きる態度だ。
「あんたらは金が欲しいんだろ？ だったらくれてやるから、二度
とそのグロテスクな面を見せん。気持ち悪くて吐き気がすんだよ」
「なっ……。何だとテメエ、ゴラァ！」

相手も負けじと精一杯の威嚇をするが、二ノ宮はまったく動じな
い。

「ギャーギャー五月蠅いんだよ、ボンクラ。まさかあんたら、自分
達が優位だとも思った訳？ だったら残念でしたー。この店は、
あたしが買い取っちゃったから」

「はっ……？」

さらっと言われた衝撃の事実に凍り付く大高生達と俺。

「しかも今ここに居る人は、全員二ノ宮財閥の関係者です。アウエーなのは、あんただけだから。間抜けも大概にしるつてーの」

「二ノ宮!? テメエ、生徒会執行部の……!」

「ぶっ! まさか今気付いたの? 馬鹿にも程があるでしょお!」

面白おかしく「キャハハ」と笑う二ノ宮に、俺も岡村も、大高生も言葉が出ない。果たしてこんな姿の二ノ宮を、普段から想像出来るだろうか。いいや出来ない。もし演技だとすれば、とんだ名演技だが……。そうであると願いたい。

「で……。ああ、そうだ。金、金」

二ノ宮が左手で手招きすると、一人の店員がアタツシケースを持ってきた。それを机に置き、その場に留まる。

「はい、そんな中に入ってるから、一応確認しといてね。間違ってないとは思っけど」

「……ちゃんと二十万、入ってるんだろうな?」

大高生の言葉に、二ノ宮は間の抜けた声を上げる。

「え? ……やっべ、間違えちゃったあ」

「はあ!? テメエ、ここまで話持ち上げといてふざけんじゃねえぞ!」

「あー……。まあいいや。それ、全部持ってっちゃって良いよ」

「何言ってやがるテメ」

大高生がアタツシケースで二ノ宮を殴ろうと持った瞬間　その動きが、重力に従うように止まった。

「……おい。こん中、いくら入ってんだよ……?」

「えーっと……。いくらだっけ?」

二ノ宮が店員に訊ねると、何食わぬ顔で答える。

「現金、二千万円でございます」

「二千　!?」

その金額に、大高生達は度肝を抜かれたようだ。俺はこんな事でもあるだろうと思って、あまり驚いてはいないが。

「念の為、ご確認下さいませ」

「……………」

大高生は恐る恐るケースを開け、その中を見る。

「……おい。お、おい！」

すると、大高生は突然気を動転させ始める。

「何？　しつかり入ってんでしょ？」

「お、お前これ……これ……！」

大高生はケースを回し、二ノ宮にも見えるようにしてから言う。

「これ、ドル札じゃねえか！」

……………」

言葉を失ってしまう。確かにその中には、ドル札が詰まっている。言葉通りならば二千ドル。つまり日本円にして約百倍の価値……二十億円もの大金が詰まっているのだ。

百倍どころの騒ぎではない。まさかの、まさかの万倍。想像もつかないくらいのお金。宝くじで一等賞を取っても貰えやしない、夢の夢のそのまた夢の超大金。それが、目の前にある。

嬉しいどころか、逆に恐ろしい。触れることすらも恐れ多い。唐突な一攫千金に、大高生は興奮気味にも恐怖を覚えているようだ。

一方の二ノ宮は、冷静にその札束の塊を見つめ、

「あつ。ホントだ」

実にのほほんとした感じを崩さない。

「もー、何やってんのよー。面目丸つぶれじゃない」

「申し訳ございません」

「まあいいや。それ、全部持つてって良いから」

「はっ、はっ……はあっ！？　お前、金を何だと思って……！」

「何言っちゃってんの。金要求したのあんたじゃん。あんたこそ金を何だと思ってんの？　ちゃんと責任持つて、受け取りなさいよ」

「お、俺が要求したのは二十万だぞ！　こんなに、要らねえよ！」

「二十万も二十億も、単位が変わるだけで特に何でもないじゃん。それに犬に噛まれたんだから、狂犬病にでもなっちゃったら困るじゃん。それで死んだら遺産とかにも困るでしょ？　謝罪する側とし

ては、ちゃんと受け取って貰わないとね」

「ふっ……ふざけんなって！　こんな大金、どうしろってんだよ！」

「とりあえず、マイホームでも買えば？」

「で、出来るかな事！　とにかく、こんなに要らねえんだよ！」

イカれた成金女の金なんか信用出来るか！」

「……あんたさ、自分の置かれてる立場、理解してる？」

二ノ宮が低い声で言うと、大高生は肩をびくりと震わせた。

「こっちや精一杯贖罪しようとしてんのにさ、それを蔑ろにするとかないでしょ。何様のつもりなの？　　いつその事、あんたらの

存在、元から無かった事にしても良いんだよ？　あんたらみたいな虫けら、居ても居なくても世界にとっちや何も関係無いんだからさ」

二人には、一体どう見えているのだろうか。

二ノ宮だけじゃない。店内に居る人間のほとんどは、一体どんな目をして、二人を追いつめているのか。……想像したくもない。きつと、無数の目玉が放っているんだ、権力という名の眼光を。

そして二ノ宮は、先程の脅しとは比べ物にならない、本当の脅し文句を、二人　いや、六人に投げ掛ける。

「二ノ宮財閥、なめんなよ」

「いやー、何事も無く終わって良かったです！」

事が治まった喫茶店内。大高生は金を手に逃げ去り、今は穏和な空気が店内を漂っている。

そんな中で二ノ宮は、一仕事終えたと言わんばかりにミルクを飲み干す。俺は二人と合流し、同じテーブルで後談をしているところだ。

「あの、二ノ宮さん。本当にありがとうございました」

岡村が礼儀正しく頭を下げると、二ノ宮は首を振る。

「いいんです！　この程度の事、何て事はありませんから！」

「でも……私の為に、何億も……」

「大丈夫です！ あの程度のお金、大した事はありませんから！」
先程のキツイ口調と態度の二ノ宮とは変わり、もういつもの二ノ宮に戻ったようだ。正直あの姿を見てからだ、見る目が変わる。
「だが二ノ宮。いくらなんでもあんなチンピラに二十億も無償で渡すなんて、無茶苦茶すぎるだろう。これではあっちが得をするだけじゃないか。……いや、確かに被害者はあっちだが……」

「いえ、それはないと思いますよ」

俺の推論を、二ノ宮は否定する。
「あの人は、あのお金を手にした時、凄く怖い顔をしていました。当然ですけどね、もう一生分以上のお金を突然手に入れたんですから。逆を言えば、もうあの人達に生きる意味は無いのですよ。人生はお金を稼ぐ為に生きるようなものなのですから」

「まあ……そうかもな」

「ケースには私んちの住所を入れておきました。きっとあの人達はお金を返しに来ると思いますよ。あの人達には、あれ程のお金を支配するだけの力はないでしょうし」

金を支配する……か。

今の人類は、金に支配されているのかもしれない。だからこそ金に固執し、金を求め、金を得る。流通の原理だとしても、人間が生み出した最大の病原菌。それが金というものなのかもしれない。

「お金は……人を変えます」

急に二ノ宮が、暗い表情で呟き始める。

「お金に支配されたら、最後なのです。人はお金の亡者になって、人を喰らいます。そして人を乗っ取るのです。お金を得る為に……。人を殺すのは、人ではなく、お金なのですよ……。お金こそが、一番憎むべき宿敵なのです」

物憂げな顔で、二ノ宮は声を震わせながらそんな事を言った。

金曜日に、何故天川が二ノ宮に話を言及しなかったのか。今それが、何となく解った気がする。

二ノ宮にも何か、心に憑いて離れない、深く忌々しい記憶がある

の
だ
ろ
う。

あの時の二ノ宮はその権化なのか、あるいは逃避行の姿なのか。
俺には皆目、見当がつかない。

第・3話：その言葉には企てを持たせて

〽三ヶ月前・九月終盤のとある日〽

「　　やあ、天川君。久しぶりだね。また会えて嬉しいよ」
駅前の喫茶店？フラテツロ？。イタリア語で、兄弟という意味がある。

お洒落な外見と内装が人気で、オリジナルのハチミツブレンドが美味しいと、巷じゃ評判の喫茶店だ。丁度おやつの時間だからか、客は意外と多い。主に駄弁ったりしている人が大半だ。俺もその中に入るだろうが。

端っこの席に座っていた俺に、一人の男が恭しく挨拶し、対面の席に座る。

「んっ。天川君、学校帰りか？　にしてはちょっと早い気がするけど」

制服姿から、そう思ったのだろう。

「今日は午前授業だったんです。いちいち着替えるのは面倒なので、このまま来ちゃいました」

「ははっ、解るよ。昔は俺もそうだったなあ」

彼は懐かしそうに笑った後　手を組んで、その上に顎を乗せる。
「それで……一体俺に何の用かな？　ただの座談会、という訳じゃないだろ？」

「はい……。鬼神さんおにがみに、相談したい事があるんです」

「へえ、それは興味深いな。俺に出来る事なら、何でもするよ」
厚かましいお願いかと思ったが、鬼神さんは優しい笑顔でそう言ってくれた。

「ありがとうございます」

「それじゃあ……話を聴こうか」

俺の話を聴いた鬼神さんは、納得したように何度も頷いていた。
「なるほど……。学園内の独裁者をどうにかしたい……。そういう事か」

「あの、まったく関係のない鬼神さんにこんな相談はおかしいかなとは思ってたんですけど……。俺に身寄りはいないし、鬼神さんしか頼れる人が居なくて……」

「解ってるよ、天川君。君の事情は、全て理解しているさ。だからこそ、俺は君に全面的に協力するんだ。そう縮こまらなくて良い」
嫌がる素振りを一切せずに、鬼神さんは変わらぬ笑顔を見せてくれた。

「……ありがとうございます」

「とりあえず……。まずは天川君。よくやったと言っておこう」

「はい？」

突然の褒め言葉。何に対しての褒め言葉なのか、理解に苦しむ。

「その状況を、よくおかしいと思ったね」

「いや、そりゃおかしいですよ。いくら嫌われ者だからって、登校するのを学校側が拒否するなんて……。本人ならまだしも、歓迎すべき学び舎にとってはあるまじき事です」

「うん、それはその通りだ。例えばこの店内に居る人々にそれを問えば、大方の答えは天川君と同じだろう。けどね天川君。君の話に虚飾が無いのなら、その正常な判断が、今の君の学校じゃ難しくなってるって事なんだよ」

「え……？」

鬼神さんはコーヒーを一口飲み、目を閉じながら推考する。

「その生徒会長は、相当なカリスマを誇っている。そんな理不尽な規則を作ってしまう程にね。そしてそのカリスマは支配力として具現化し、学校全体を抱擁している。まるで生ける掟のような存在と化しているんだ。現に君の同僚は、何も異を唱えてないんだろう

？」

「ま、まあ……」

「凄い事なんだよ、それは。きっと君の会長は、理屈などでは説明出来ない、底知れない強い魔力のようなものでも持っているのだろう。まさしく、魔女とでも呼ぶべき資質の持ち主だ。そんな誘惑にも屈する事無く、我を突き通した君の精神力は、素直に評価に値するんだよ」

「は、はあ……」

何か凄く褒められちゃった……。俺は当然の心理だと思うんだけどな。

「それで、鬼神さん。この状況を、どうにかする事って出来ますかね……？」

「大丈夫、俺も似たような人物を知っている。だから、対処法も理解してるつもりだよ」

鬼神さんは目を細め、どこか懐かしそうな眼差しをコーヒーに投げ掛ける。

「ホントですか！」

「その人に通じるかは解らないけどな。ていうか天川君。賢い君なら、本当はもう気付いているんじゃないのか？」

「……え？」

「彼女を救う方法。そんなのは、一つしかないだろう？」

「ちょ、ちよつと待って下さいよ、鬼神さん。俺の話だけで、彼女の全てが解ったとでも？」

「まあ、大体はね」

囁く様子もなく、鬼神さんは淡々としていた。

「そんな馬鹿な……」

「疑いたい気持ちも解る。でもね、これくらいの技量がなければ、あの街？では到底生き残れなかった。だからこそ俺はここに居るのだから」

「あの街？」

この言葉が出た瞬間、鬼神さんの表情はどんよりと曇った。

「小田原……ですか」

「ああ。酷い街だったよ、本当に。世界との境界線を引かれたように、完全にこの辺とは別世界だ。異世界と呼んでも差し支えはないだろうね。　　っと、話を戻そうか。天川君、今君の考え得る限りの策を、話してみなよ」

「ええ？　……そうですね、まずは生徒達の声を聞きます。きっと反対の人も居るはずですから、その人の意見を聞かせて考えを改めさせます。それで　　」

「天川君」

鬼神さんの鋭い声に、思わず身体がビクツと震えた。

「俺の前で嘘を吐くとは、相変わらず良い度胸をしている。俺に嘘は通じないのは、知っているだろう？」

「い、いや！　嘘なんか吐いてないですよ！」

「なら君は気付いていないだけだ。君の本当の気持ちに」

「本当の、気持ち……？」

鬼神さんは人差し指を立て、これこそが俺の気持ちだと言わんばかりに語り始める。

「君の考えていた答えはこうだ。　　彼女は泥沼に嵌り過ぎた、もう引きずり出す事は出来ない。もしそうしようとすれば、自分さえも呑み込まれてしまう。ならばその泥沼自体を払拭するしか、彼女を救い出す術は無い」

「……ッ」

「もつと端的に言おうか？　いいか、天川君。彼女を救う方法はただ一つ。古典的で、しかし最も効果のある一撃必中の方法だ。故に諸刃の剣でもある。　　彼女を救うには、彼女を殺すしか無い」

「そんなの、俺には出来ないです！」

「安心しろ、天川君。言つたら、俺は全面的に君に協力するって。そして幸いな事に、君の学校に俺は興味を持った。俺が心身を削るには、充分な理由だよ」

「手伝つてくれる、と？」

「そうさ。一人じゃあ、とても無理だろう。彼女を殺すには、一つずつ段階を踏まなきゃならない。その為の第一歩は……。味方を見つける事だな」

「味方……？」

「そうだ。彼女の法案が発動する前に、あたかもその法案を予期していたかのように自ら身を退いた者、または既に存在を否定されていた者。はたまた、学校という箱庭にそぐわない印象をもたらしている者。それが君の味方となり得る者達だ」

「つまり、会長の息が掛かっていない生徒、という事ですか？」

「そう考えてくれて構わない。味方を作ったら、観客を調達しなければならぬ。多ければ多い程良いから、これは君の頑張り次第だ。後は殺す為の道具と、彼女を限界まで育て上げる事だが……」

鬼神さんの話は高次元過ぎて、俺には片鱗しか理解出来ない。

どうしてこの人は、その現場を見てもいないのに、まるで本当にそこに居るかのような感じで居られるんだろう。間違いなくこの人は無関係。俺が話すまでに、こんな裏事情は知る由もないはずだ。なのに、それでも、鬼神さんは記憶に介入してきたかのように、ズスズカと話に割り込んでくる。

そうでもない、あの街……小田原では生き残れないって事なのだろうか。俺は実際に入った事は無かったが、あの街の狂気に触れた事はある。俺が奇跡的に生き延びたのは、鬼神さんのおかげだ。やはり生き方が違う。死と隣り合わせで生きてきたこの人と俺とは、何もかもが別次元なんだ。

「天川君？ 聞いていたか？」

「あつ、すいません！ 何ですか？」

「一応俺は、彼女と一度会ってみるよ。百聞は一見に如かずだからね。君はまずは仲間を作るんだ。そしてその仲間で、何か組織でも作ると良い」

「組織……ですか？」

「うん。……そうだなあ、生徒会に対抗する組織……」

鬼神さんはブツブツと呟き、やがて閃いたように両手を合わせる。
「生徒会執行部！ 真の生徒会を執行する部！ そうだ、これが良い！ いいか、天川君。今日から君は、生徒会執行部長だ！」

そして時間は、現在へと戻る。

寒さが極まりつつある十二月の夜。街はじきに来るクリスマスに向け、装飾に磨きが掛かり、音楽に弾みが乗っている。一足早いサントが風船を配ったり、ファーストフード店ではそれに因んだサービスが始まっていた。

それらとはまったく関係の無い部屋に、希望色のインターホンが鳴り響く。少し軽くなっている眼鏡を掛けた主がそれと同時に部屋に明かりを点け、ドアに向けて駆けて行く。

嚴重に掛けられたチェーンを慣れた手つきで外し、鍵を開け、ドアを開く。

そこにいた人物は、思った通りだった。

「オッス おお！？」

茶髪の男前のオールバックの男子高生は紫の癖のあるロングヘアの女子高生を見て驚き、少し顔を赤くした。

「廣瀬、何だ、その格好……」

「？」

廣瀬と呼ばれた女子高生は首を傾げる。

「あ、ああ……。家の中では、そうするようになったな。それはいいんだけどさ……」

目のやり場に困っている男子高生を余所に、廣瀬はブルツと寒さに身体を震わせた。その反射で両手で二の腕を掴み。
「！」

そして、ようやく気が付いた。

廣瀬はドアをボタンと閉め、部屋の奥に逃げていく。

「やれやれ」

男子高生は頭を振って呆れる。しかし今見た光景を思い浮かべて、

「いいものを見たなあ……」

口元をやらしくニヤつかせた。

ドアが開くと、黒のジーンズに青のＴシャツを着た廣瀬がいた。

未だに顔を赤らませながら、中に男子高生を招き入れる。

「邪魔しまーす」

男子高生は丁寧に言って、靴を脱ぐ。

廣瀬は一足早く部屋に入り、パソコンを閉じて座布団を敷いた。

男子高生が遠慮なく座ると、廣瀬もそれに倣う。

「悪いなー、夜に。お楽しみを邪魔しちゃったかな？」

廣瀬は首を振る。

「なら良かった」

「何の用」

素っ気無い廣瀬の言葉に、男子高生は呆れたように息を吐く。

「いい加減、名前覚えてくんねーかな？」

「……天川」

天川と呼ばれた男子高生は満足気に頷くと、表情を変えて切り出す。

「もう一回、学校に来てくれないか？」

「……………」

楽しかった。確かに、生の充足を得られていた。

故の報復　死の宣告が与えられた彼女は、己の置かれた立場、

状況を省みた。それによって、自身の運命を悟った廣瀬は、

「行けない」

「行かない？ではなく、？行けない？。不可能系の状態に陥っていた。

「ああ、あの駅での事故を気にしてるんだよな。安心しろよ、もう犯人は解ってる。それを校長に言えばそいつはおしまいだ。その名

前は」

天川は息を一回吸って、忌むべき者の名を口にする。

『喜多美咲』

自分に合わせた廣瀬に、天川は驚いた。

「何だ、知ってたのか。だったら話が早い。被害者が言えば説得力は高いからな。一緒に校長にこの事を報告しよう。何、あの校長は結構行動力は大きいからな。動いてくれるだろ」

「駄目」

「ん？ どうして？」

「証拠が無い」

「あー……」

天川はばつが悪そうに頭を掻く。

「あの人は証拠残さないもんなあ。目撃情報だけじゃ、言い逃れられるのがオチか」

廣瀬は残念そうに頷く。

「だったら尚更、学校に来てくれないかな？」

「だったら？」

天川の言葉を理解出来ない廣瀬は、首を振るしかなかった。

「このまま学校に来ないって事は、あいつに降伏したって事だ。それだけは何としても避けたい」

「何でそんな事するの」

「あいつはこのまま私利私欲の命ずるままに独裁し続けるつもりだ。そんなの許せるか？ 好き放題暴れて後は何事もなかったかのように卒業してくんだ。大きな爪痕を残してな。俺はそんなの、許せない」

「……………」

天川の気持ちは理解出来る。

しかしそんな独り善がりの考えは、廣瀬の登校するそれに帰結しない。再度否定しようと首を振る直前。

「それに何より、廣瀬を殺そうとしたんだ。それが一番許せない！」

「！」

その言葉に廣瀬は一瞬揺れた。だが一瞬で本能がそれを抑える。即ちそれは、無限回廊を意味していた。

自分が登校すれば、再び殺され掛ける。これは犯人が変わらない限り、覆る事の無い理不尽な条理。天川の気持ちに応えてはやりたいが、命には代えられない。

例に倣い 畏れて、首を振った。

「あ、もしかして、何か勘違いしてないか？」

「……？」

「うん、言い方が悪かったな。俺は毎日、学校に来てくれとは言つてねえよ」

「？」

「廣瀬の場合は、不登校で留年って事はないだろ。そこら辺は校長に頼めばなんとかなる。何、俺って結構校長には好かれてるから大丈夫だ」

自分の為に進言してくれる事ありがたい。しかし一体何の為に、その進言をするのか。彼女は想像も出来ない。

「どういう事」

「ある一日だけ、登校して来て欲しいんだ。一日だけでいい。」

まあ本当は毎日来て欲しいけど、それは危険だからな。何をされるか、解ったもんじゃない。だから、一日だけでいい」

「？」

たった一日だけの登校に、どういった魂胆があるのか。何の意味が実るのか。彼女は想像もつかない。

「何をする気」

「簡単な事さ」

天川は背伸びをして、「ふう」と息を吐いて、言つ。

「俺の生徒会を、執行するだけだ」

生徒会室。

そこは、学校の行事や生徒の要望を司る、学校内でも重要なポジションにある。だからそれに組する者は、日々生徒により良い学校生活を提供する為に、常に粉骨碎身の努力で臨んでいなければならぬ。

はずなのに……。

「ああ、そこそこ、いいわあ……」

会長が大島君に、色っぽい声を出して指示した。

「はあ……もう、勘弁して下さい、ぜ」

大島君は息を切らせながら、会長の背中を指で圧す。

「まだマッサージ券は有効でしょ？ ほらほら、もっと気合入れて」

「はあ……っ、ぜ」

会長はブレザーを脱いだブラウス姿で机に俯せて、大島君がせつせとマッサージをしている。おかげで要望書の処理が出来ない。

マッサージ券というのは、以前大島君がへまを犯した際、会長にお詫びの印と言って作ったものだ。本当は一枚しか作ってなかったが、案の定会長はそれをコピーして、大島君を良いようにこき使っている。

私はそんな事どうでもいいけど、仕事を出来ないのは困る。

「ああん、そこそこあ」

「はあ、ふうっ、ぜっ」

大島君の額から汗が零れ落ちようとして、それを手で拭き取り、休む暇もなく動かし続ける。そんな努力を傘に、会長は実に気持ち良さそうな顔をしている。もしかしたら、大島君にはマッサージの才能があるんじゃない……。

そんな事はどうでもいいか。そろそろどいて欲しい。もう一時間もこれだもん。

「会長、もう十分ですよ。要望書の処理したいんで、どいて下さい」「いやねえブッチー、そんなんだから背が低いのよ」

「絶対関係ないですよ！ とにかく、机からどいて下さい！ だい

たい行儀が悪すぎです!」

「何言ってるの。会長は私なんだから、私がルールなの。私が模倣なのよ」

「は、まったく……」

今の会長には何を言っても聞く耳を持たないだろう。仕方ない、諦めるか……。

とは言っても内容が気になるので、私はパラパラと要望書をめくり見る。

「ふう……」

思わず溜め息を吐いてしまう程に、うちの生徒は短絡的だ。

確かに、生徒会はあまりに多かった要望の為、不要な生徒は学校に来させないという、非合法ではあるが学校にとっては合法的な処置を取った。

ただ、それに便乗する生徒が多すぎる。

一目見て「こいつが鬱陶しいからどうにかしろ」だの「鼻息荒くてマジウザい」だの、個人的な理由でそれを申請してくるのだ。そんなの生徒会が知った事じゃないし、それくらいなら注意すれば直るだろ! と言ってしまうような事ばかりだ。

それに会長も会長だ。この立場 地位を悪用しすぎている。

生徒会室には、会長の要求で空調完備は当たり前。それどころか、会長の趣味であるアクアリウムがあるし、中庭には勝手にガーデニングをしてしまっている。当然異議を唱えた生徒は居たが、後に登校しなくなった。理由は言うまでもないだろう。

今登校している生徒達にとっては、この生徒会を悪いように思っていないかもしれないが、忌み嫌っている生徒も多く居る。不登校生徒は前は二桁だったのに、遂に三桁にまで突入してしまった。このままの体制を続けて行つて大丈夫なのだろうか……。不安がしこりとして胸に残る。

「あら、ブッチー」

「はい?」

「天川君が居ないのが、そんなに寂しいのかしら？」

「これっぽっちも考えてませんでしたよ！　そういえば居ましたね、そんな人！」

本当に考えてなかったから、私自身も驚き！

「ま、あの子は相変わらず何か暗躍してるみたいだけど、どうでもいいわ。どうせ結果には繋がらないでしょ。もし何かあったらなんとかしといてね、小林君」

「へーい」

彼独特の座り方で漫画雑誌を読んでいる小林君は、目を中身に向けたまま右手で応答した。ていうかワイシャツで寒くないのかな……。見てるこっちの方が寒くなりそう。

天川君か……。

天川君の言う通り、今の生徒会は間違っているのだろうか？

今の山高は、とても住みやすい学校にはなっている。しかしそれは一部の人間だけだ。それから外された人間は、快く思っているのだろうか？

会長は代価を添えて置いたから大丈夫と言っていたが、実際のところはどうか。私がもし、そっちの立場だったらどうなのか……。考えているだけで、胸が重苦しくなっていく。

「！？」

いきなり私の頭に何かが飛んできた。床に落ちたのは、丸まったティッシュ……。？

私はそれを拾う。一体どこから……。

「？」

ふと小林君を見ると、ドアを指差していた。何をやっているんだろうこの子。

すると雑誌を閉じて机に置いて立ち上がり、更に顎でも方向を示した。小林君に気付いた会長が顔だけ向ける。

「どうしたの、小林君？」

「便所っすよ。頑張れよ大島ー」

「そんな事言うなら手伝え……」

他人事のように言っていると、小林君は生徒会室を出た。

さっきのは、表に出るということ？ 何で小林君が私を？ 意図は読めないけど、とりあえず従ってみる事にしよう。

「ちよつとトイレに行つて来ます」

「ブッチーも？ いやねえ、二人揃つて。変な事しちゃ駄目よー」
「会長に言われたくないですよ！」

私は重なつた要望書を机に置き、後を追うようにして生徒会室を出る。

廊下に出てみたが、小林君の姿が見えない（それどころか誰も居ない）。自分で誘つておいて待たないなんて、男子としてどうかしてるんじゃないの？ 女の子はね、待たされるのが嫌いなもの！
「おーい」

声のした方向を見ると、小林君が昇降口に外履きで居た。私は駆け足で下駄箱に向かい、靴に履き替える。小林君が外に出たので、私もそれを追う。小林君は出てすぐの自販機の前で財布を開ける。

「何がいいよ」

「え？」

「奢つてやるよ、何飲む？」

め、珍しい。小林君がこんなことをするだなんて！ 実は優しい子だったの……？

「じゃあ、莓力フェオレ」

遠慮なく甘えさせて貰う事に。ガコンと出てきたアルミ缶を私に投げて、私はそれを受け止める。

「あ、ありがとう」

「明日二倍にして返せよ」

やっぱり私の知ってる小林君だった。

小林君が青いベンチに座ったので、私も距離を置いてそれに倣う。貰った物は仕方ないので、私は莓力フェオレを喉に通す。

「……はあ」

この美味しさはプライスレスね！ やっぱ飲み物はこれに限る！ 風呂上りも食後も寝る前も！ 百円じゃ到底釣り合わない！

「あ、そういえばこれは？」

先程拾った丸まったティッシュ、というか投げられたティッシュを小林君に見せる。

「ああ、それは俺の鼻水を吸い込むに吸い込んだ、ばっちいティッシュ」

「な」

私は莓カフェオレを一旦椅子に置き、すぐさまティッシュをゴミ箱にダストシュートし、水道水で両手を入念に洗う。

「最低！ 本当に最低！ 信じられない！」

「冗談だよ冗談。ホントは大島の鼻水な、うん」

「信じられない！」

小林君だろうと大島君だろうと変わらないでしょ！ 馬鹿なのこの子は！？ ていうか何で大島君の鼻水ティッシュを小林君が持つてるの！？

私は濡れた手を赤のハンカチで拭きながら、再度椅子に座る。

「まあ怒るなつて。それで許せよ」

「じゃあお金返さないから」

「……ああ？ いくら先輩だからって驕ってんじゃねえぞ、おい？」

「う……」

言い返せない自分が悔しい。だって小林君の凄み方怖いんだもん……。もういい、こうなったら自棄飲みしてやる！

「おお、おお。そんな一気に飲まなくても、よお」

「ぷはあ！」

飲み干した莓カフェオレの残骸を、ゴミ箱に向けて放つ。外れた。下手糞だなあ、おい」

小林君が落ちた缶を拾い、確実に捨てる。俺は優しいぞアピールをしてるつもりなんだろうけど、もうそうはいかないから！ 私の小林君はもう揺らがないから！

「会長、どう思うよ？」

「え？」

座って、私の顔を見る。

「今の会長、今の生徒会。最良だと思うかよ？」

今更だけど、何でこの子はタメ口なの？ 私、先輩なんだけど。

「聞いてんのかよ、おい」

「そもそも私って、何で後輩にナメられてるんだろう……。成績は良いはずなのに」

「背が低いからに決まってるんだろ。今更何言ってるんだ、ええ？」

「ガーン！」

やっぱりそうなんだ……。チビはそういう運命なんだ……。毎日牛乳飲んでも、頑張ってる腕立て伏せしても変わらないんだ……。嗚呼、なんて残酷な現実なんだろう！

「話、戻していいですかねえ」

まあ、いくら呪ったところで意味はないからもう止めておこう。

小林君が話したいらしいし、付き合っただけよう。

「ふう、仕方ないわね、話してあげてもいいわよ？」

「会長の真似しても意味ねーよ。いい加減諦めろって」

「ふんだ！ いつかスラッとしたナイスバディになってやるんだから！」

「へいへい。んじゃ続きな」

脱線した話がようやく戻る。まったく、誰のせいだか……。

「正直、俺は今の生徒会は嫌いだ。吐き気がする」

「そこまで言っちゃうの？」

「何なら吐いてやろうか、ん？」

「やめて」

この子なら本当にやりかねない。

「嫌いなのは解ったけど、どうしたいの？」

「そう訊かれると困るんだよな。確かに俺は今無性に腹が立ってるけど、具体的に何がしたいかは解らない。けど、今のままじゃ駄目

な気がする。なんつーかなあ……」

小林君は頭をぼりぼりと搔く。伝えたい事がまとまってないのに、何で呼び出したりするんだろうか。本当に無計画な子。

「あんたはどう感じてる？ 今のここ」

「？ここ？とは、生徒会と、学校の事を指しているのだろう。」

正直、今のここは機能していない。教育委員会が見たら何て言うのか、だいたいの予想は付く。明らかに学校の印象を悪くしている。これじゃあ来年の新入生に期待が持てない。

それでも、

「私は、私達は、正しい事をしてる。そう思う」

「何でだよ、おい」

「だってそうでしょ？ 私達は生徒の要望を叶えたんだもの。先生達だって何も言ってこない。暗黙の了解を貫いてる。つまり、今の？ここ？が生徒の、先生達の望んだことって事」

「そーかねえ……」

納得がいけないと言わんばかりにしかめっ面をする。

「文句があるなら会長に言ったら？ 天川君みたく」

「いーや。そんな勇氣はねえ」

こんな小林君でも、怖いものはあるらしい。

そう言う私も、会長は怖い。普段は温厚だけど、自分の気に障ると、途端に変貌する。私の右足の傷は、会長によるもの。投げたコップの破片で痛い目に遭った。だから会長には逆らいたくない。しつぺ返しが伴うから。

「それに、今不登校の二ノ宮さん」

私の言葉に、小林君がピクツと震える。

「手を掛けたのは、小林君でしょ？」

「……あーそうさ、俺が追っ払った。ウザかったからな。クラスの皆もそう思ってたし、俺は特にそう感じてた。だから抵抗はなかったよ、けっ」

「なら」

「けど、なんか駄目だ。今のままじゃ、駄目なんだ」

「はあ……。一体何が言いたいのか？ 何がしたいのか？」

小林君は「ああっ！」と苛立ちの声を上げ、立ち上がる。

「畜生、俺が何をしたいか、頭の隅っこで解りかけてるのに、また本能がそれを畏れてやがる！ 何なんだよ、俺は！」

「それって？」

「それはな！」

小林君は空に向けて吠えた後、私の顔を見て 言うてはならぬことをはつきり言った。
言うてしまった。

「ここか」

時刻は夕刻の四時過ぎ。寒い中、ある生徒の自宅の玄関、というか立派な門の前に俺は着いた。目の前の建造物を顧みる。

「……マジかつ」

廣瀬に貰った資料を確認するが、間違いはない。しかしとても受け入れがたい光景だ。

門を通して見えるそれは、金色に輝く超豪邸なのだ。右手には大きな池があり、左手には滑り台やブランコがある。正面には噴水が吹き出っていて、その先に本当の玄関があるようだ。世界は広いと言うが、日本だけでも十分広いんだな。こんなところに高校生が住んでるなんて信じられない。

さて、いつまでも驚いてる訳にもいかない。この豪邸に潜入しない事には始まらないからな。かなり気が引けるが、いよいよインターホンを押すことにする。

門の右端に小さな四角いモニターがあり、その下の赤いボタンを押してみる。多分、これがインターホンだと思っただが。

「はい、どちら様ですか？」

モニターに……誰かが映る事はなく、声だけがモニターから聞こ

えた。ハスキーな女性の声だ。お母さんだろうか。

「えと、天川という者です。二ノ宮春香さんにお会いしたいんですが」

「……あれとはお知り合いですか？」

「あー、知り合いという訳ではないんですけど、浅くもなければ深くもない、しかし関係のある者です」

「……？ 少々お待ち下さい」

うーむ、自己紹介をミスった気がする。浅くもなければ深くもな
いって何だよ。相手からしたら意味不明だろ。間違いではないんだ
けど。てかモニター壊れてんじゃない？

「どうぞ、お入り下さい」

先程の声が言っと、ひとりでに門が左右に開いた。一瞬怪奇現象
かと思って飛び退きそうになった。オートマチックとは、いい時代
になったもんだ。

俺は芝生で仕切られた道を辿り、噴水を過ぎて玄関に到着した。
ガチャツと錠が外れる音がして、玄関が開く。

お出迎えしてくれたのは、艶やかな白髪を優雅に伸ばしている麗
しい女性だった。いかにも高価そうな白のドレスを纏っていて、と
ても魅力的だ。

「どうぞ、お入りになって？」

「あつ、どうも」

ついつい目が留まってしまう程に美人だ。年齢は四十を超えてる
だろうが、それより十歳は若く見える。八方美人のような印象がす
る。

俺は差し出された赤色のスリッパを履き、橙色に塗られた広い廊
下を奥さんに付いていく形で歩く。右を見ても左を見ても必ず何か
の写真や肖像画がある。きつとどれもこれも高い絵画なんだろうな
あ。

「むっ」

俺はその内の一枚に身体を止めた。

写真の中には、生まれ継いだ白髪をショートカットに切り揃えている一人の女性が、女神のように微笑んでいる様が鮮明に写っていた。その笑顔に、俺は思わず自由を奪われた。

「どうかしましたか？」

「えっ。ああ、いやー、この人綺麗だなと思ひまして。あ、勿論あなたですけど」

「それは光栄ですわ。とりあえず、居間でお話ししよう」

奥さんがさっさと歩き出したので、俺も慌ててそれを追う。

大きいドアを開けると、とっても長い茶色のテーブルが一つあって、周りに白い椅子が並べられていた。あれだよ、よく漫画やアニメで見る金持ちの家の中での食事シーン。まさにあれだ。その場面に遭遇することは未来永劫ないと思ってたが、まさかのこれだ。正直、かなり緊張している。

「そちらにどうぞ」

促された一番端っこの席に俺が座ると、奥さんも右手に座る。うわ、すっげえふつかふか！ こんな椅子欲しいなあ。

「それで、ご用件というのは？」

「あの、今、娘さんは不登校ですよね？」

「ええ、その通りです」

奥さんは何故か嬉しそうに言った。

「娘さんを……春香さんを、説得しに来ました」

「はい？」

「春香さんにもう一度学校に来て欲しくて、お訪ねした次第です」

「……聞くべき事が、ありそうですね」

「はい。話します」

だいたいの筋を話したところで、奥さんが頷いた。
「つまり、あなたは元々生徒会の役員で、今は不登校の生徒を学校に来るように説得していると」

「まあ、そんなところです」

奥さんは吸い込まれそうな笑顔を浮かべ、言う。
「身勝手ですね」

「否定はしないです。出来たら、春香さんに会わせて貰えませんか？」

俺の要求に、奥さんはばつが悪そうな顔で言う。

「あんな出来損ない、放って置いて結構です」

「出来損ない？」

奥さんは「ふう」と息を吐く。

「あなたも話しましたからね、私も話す事にしましょう」

「いや、そんな無理には……」

「いいえ。あなたにあれの事を知って貰う良い機会です。是非お話をさせて下さい」

「……そう言うなら」

奥さんは頭を軽く下げ、話を始める。

「私の名前は秋奈^{あきな}、夫は冬人^{ふとひ}と言います」

「え？ ああ、秋奈さん、ですか」

何で急に自己紹介なんか。俺はさっき名前を言ったからいいよな。

「娘は春香、夏美^{なつみ}です」

「夏美？ あー、姉妹だったんですか」

「ええ。最近までは」

なるほど、春夏秋冬が揃った家族か。面白いな。

「夏美は、大変素晴らしい子でした。私達の言う事に全て従って、勉強にも努めて、難関校にも合格して。正しく才色兼備をその身で示していました。将来は、夫の会社を継いで、より多くのお金を稼いで、私達を養ってくれると思っていました」

……ん？ 何でさっきから過去形なんだ？

「でも……うつ」

「！？」

な、何だ？ 急に泣き出して。俺なんかしたか？ いや聞いてた

ただだよな……。何て言ってた？ 姉妹だったと俺が言って、秋奈さんが肯定して。

なるほど、把握した。

「ご愁傷様です」

先程の写真は遺影だったのか。だからすぐに居間に行ったんだな。

「本当に、勿体無い子を亡くしました……」

「死因は、何だったんですか？」

「階段からの転落です。頭部を強打して……」

「……辛い事を、すいません」

「いえ、いいんです。夏美が帰らぬ人になって、残ったのはあれだけです。おかげで二ノ宮家の未来は、お先真つ暗になりました」

「どうしてですか？ 春香さんって、飛び級するほど優秀なんですよ？」

「とんでもない。飛び級したのは、夫が校長に口を利いたからです。自然豊かな学び舎に、早く通わせてあげたいと言いましたね。

あれは怠惰の象徴と言っても過言ではありません。夏美と違って、私達の言う事は聞かないし、勉強は放り出すし、口答えはするし。だから、私達はあれに構うのはやめました。全ての愛情を夏美に注いだのです。……なのに、あんな事になってしまったのです」

「なら何で」

「ああ！ 神様は何でこんな残酷な事を！？ 私達は一体、どうなってしまうというのですか！」

完全に感情に支配された秋奈さんは、仰々しく天を仰ぐ。それほどまでに夏美さんを愛しているのは解るが、何故二ノ宮は、親にまでこんなに嫌われているんだ？

「……春香さんに、会わせてくれますか？」

「気分を悪くしない自信があるのならどうぞ。右手の階段を上り切ったところにある扉の先が、あれの部屋です」

「どうも」

俺は立ち上がって、言われた通りに歩を進める。辿り着いた扉に

は、「春香の部屋」と掛け軸が掛かっていた。

ていうか、全然二ノ宮の事わかんねえ。奥さんが良く思っていない事しかわかんねえ。名前も呼びたくない程までに嫌われるって事は、相当なじゃじゃ馬なんだろう。大輝曰く、生意気で言葉が汚いらしいが、そんなの慣れっこだ。でも、油断せずに行こう。

コンコンツと二回ノックすると、

「誰？」

ツンとした声が、右耳方面から聞こえた。うお、ここにもモ

ニターがあつたのか。だが門のと同じく、画面には何も映らない。何なんだこの、微妙な欠陥。

「えっと、元生徒会の天川なんだけど……解るか？」

「生徒会？」

「そう。あいや、もう辞めたけど」

「帰れ！ 今すぐ帰れ！ 生徒会なんか会いたくない！」

「いやだから辞めたんだって」

「消えろ！ 死ね！ 氏ねじゃなくて死ね！」

「ちよつと話を」

「象の に埋もれて死ね！」

「それ伏せ字になるぞ。いいから少し落ち着け」

「無限の彼方に飛んでっちまえ！」

「何？」

「とにかく帰れ！ 顔も見たくない！」

ブツツという音がモニターから聞こえた。

「お、おい！ おーい！」

ノックしながら呼び掛けるが、応答が無い。どうやら一方的に打ち切られたらしい。むうう、今日はもう駄目っぽいな。

仕方ない。今日のところは諦めよう。とりあえずは俺の存在を、しっかりと二ノ宮に植えつけておかなければ。

「また来るからな！」

捨て台詞を残して、俺は階段を下る。

何、一日でどうにかなるなんて思っちゃいない。そんな前例は今までになかったし。粘り強く交渉してこうじゃないか。まだ時間はある事だし。

「如何でした？」

座っていた奥さんが立ち上がり、怪訝そうに訊ねてきた。

「なるほど、と言わざるを得ませんね」

俺が首を振りながら答えると、

「申し訳ありません」

とてもじゃないが、そうは思っていない表情で頭を下げられた。完全に教育を放棄しているようだ。俺がこの立場じゃなかったら、説教してやりたいくらいだ。自分の子供に責任は持てて言いたい。

まあそれはさて置き。

「明日も来てもよろしいですか？」

「物好きなお方ですね。同じ結果で良いのなら、お好きにどうぞ」
意外にも、あっさり了承された。二ノ宮（春）に関しては本当にどうでもいいらしい。若干の怒りさえも覚える態度だが、ここは抑えて……。

「ありがとうございます。……それと、もう一つお願いがあるんですが」

「何ですか？」

俺が用件を言うと、奥さんは少し驚いた。

「別に構いませんけど……何故ですか？」

「純粹な、好奇心です」

翌日。

「では、後は好きにどうぞ。私は部屋にいますが、お帰りの際は何も言わなくて結構です。……最後に一つだけ訊きたいのですが……」

昨日と変わらないの広い居間で、俺は秋奈さんと面向かっていた。

広すぎて声がよく響く。

「はい、何ですか？」

「どうして、夏美の事件や部屋を？」

「言ったじゃないですか。純粋な好奇心ですよ」

「……そうですか。ならいいです。しつこく訊ねてごめんなさい。では、ごゆっくり」

俺が笑いながら返答すると、秋奈さんがお辞儀をしたので、俺も軽く頭を下げた。秋奈さんは階段を上がり、あの部屋とは正反対で遠くの部屋に入っていた。

俺はそれを見送り、あの部屋へと歩を進め、すぐに到着する。

思った通りではないが、意外にも俺の手中には大きな武器が手に入った。これを使えば、この重く頑丈な扉を抉じ開ける事が出来るかもしれない。

いや、開けるんだ。錠前が下ろされなくても、無理矢理にでもそれを壊す。言葉の壁が何だ、心の門が何だ。どんな手を使っても、俺はぶち破って見せるぞ。

深呼吸し意を決し、右手で。

「またあんだ？」

「うをつ」

インターホンを押す前に声がしたので、俺は身体を仰け反らせて驚いた。

「また来るって言っただろ？ 話がしたいんだけど」

「誰があんだと話なんてすると思ってるのよ！ あんたなんかブラックホールに呑み込まれちゃえばいいんだから！」

「随分と重い死刑だな」

やはり、頑なに俺との対面を拒否するか。だが俺は昨日の俺じゃない。酷なようだが、これを訊かない訳にはいかない。

「じゃあ、一つだけ教えてくれ」

俺は真っ黒なモニターに向けて人差し指を立たせながら言った、見えてないだろうが。

「何？」

秋奈さんが居間から居なくなっている事を確認し、質問する。

「どうして、殺した？」

「……は？」

「聞こえなかったか？ それとも反射的に耳を塞いだのか？ よし解った、もう一度だけはつきると言うから、耳クソをかつぽじってよく聞けよ？」

俺はもう一度、同じ質問を。いや、より明確に質問する。

「どうして、夏美さんを殺した？」

第9話「涙は過去から滴り続ける」

曇天が見下すと、そこには荒れ狂う海があった。

まるで豪雨と踊るかのように不規則なりズムで波が立ち、激しく壊れて轟音を辺りに響かせる。たった今、悲鳴と共に一つの漁船が呑まれて消えて行ったところだ。

陸からその海を泳いで渡り、身体が疲れ果てて気が遠くなり、自分はまだ死んだんじゃないかと錯覚する程になると、それは見えてくる。

雲を突き抜ける、黒く擦れて聳える塔。所々に四角い窓があるが、真っ暗でその中を確認する事は出来ない。悪魔のように高い波が壁を削り取らんと激突するが、塔はビクともしない。寧ろ軽い水浴びをしているようだった。

高さにちようど中間辺りの鉄越し窓の向こうは部屋　というより牢屋だった。光は窓から漏れたそれしか受けれず、しかも晴れの日は皆無に等しいので、光は無く、暗黒の極みで何も見えない。ここはどこなのか。どこに壁があるのか。どこに自分が居るのか。全てが解らなくなってしまう。

そんな中で、金属が合わさって発される音がした。更に、硬い石に当たった時の音がして、引き摺る音も聞こえる。もっと耳を澄ませれば、人間の呼吸も聞こえてくる。

瞬間　足音が聞こえた。部屋の中からでは無い。外から一定の合間を保ちながら、音は徐々に近く、大きくなっていく。足音と心臓の鼓動が、面白いように同調していた。

最後の足音が内部全体を廻り終わると同時に重い扉が軋みながら開き、部屋に光が射した。久しぶりの眩しさに目が眩んだが、すぐに慣れ、自分に差す者を見上げる。

「……ゴルバチョフ」

初めて聞こえた声は、若い男性の声だった。

黒いローブを羽織った人間が、裸で短い金髪の人間を見下ろしていた。裸の人間は、後ろで両手を手錠のような金属の拘束具で固められ、横たわっていた。

「随分と、長い放置プレイをありがとよ。やっと構ってくれる気になったか？」

「下らん事だけは変わらず達者だな、ジョナサン」

帰って来た声はさっきの声より洪く、低い声だった。

「老けたな。何かどこかい魔法でも唱えたのか？ それとも、もう寿命？ オールド・ゴルバチョフってか？」

ゴルバチョフと呼ばれた人間がジョナサンと呼んだ人間の股間を蹴り上げると、言葉の無い悲鳴を上げ、俯きながらプルプルと身体が震え始めた。

「デメエ……」

「ノヴァを起動してきた」

「！」

ジョナサンは再びゴルバチョフを見上げた。

「お前の弟に邪魔されたよ。兄の仇だと、事実無根の事象を抱えながら、無謀にもこの私に剣を向けて来た。まったく、愚かだ、実に愚かだ。愚者の血縁も、所詮は愚者か。言葉に振り惑わされた拳句、無様に絶命する道を選ぶとは」

「デメエ！ まさか、アルを！」

「安心しろ。骨の欠片も残らぬよう、木っ端微塵に帰した。まあ、いらぬ買い物をしたが……」

「この野郎オツ！」

怒りに身を任せ飛び掛ろうとしたが 身体の中から抑制の力が働いた為、動けなかった。

『馬鹿。今動いてどうする。自棄になるなよ。怒りで我を忘れるんじゃないねえ。それに元々、この事態は覚悟してた事だろうが。弟の犠牲、無駄にするなよ』

「……………」

頭に響く声をしかめっ面で聞いて、野良猫のように息を吐き続け、やがて冷静になった。怒りの籠もった瞳をゴルバチヨフに向ける。

「このクズ野郎！」

「今日はお前に、訊きたい事があつて来た」

無視かよ、とジョナサンは思った。

「何だ何だ。私は全知全能だとか、神に選ばれし者だとかぬかしてたのが何だ？ 愚者に頼るとは、お前こそ真の愚か者だな！」

「……今度は蹴り飛ばしてやろうか？」

「冗談だ。ちゃんと答えるから、もう蹴らないで」

そう弱々しく言つて、股で股間を押さえた。ふんと鼻を鳴らしたゴルバチヨフは、用件を切り出す。

「ノヴァが発動しないのだ」

「ああ？ ついさつき起動してきたとか言つてただろうが」

「言葉の通りだ。起動は出来た。大地が揺れ、大気がうねった。

しかしそれだけだ。それらが一時的に発生しただけ」

「そういう魔法なんじゃ？」

「違う！」

ゴルバチヨフは声を荒げた。

「神の遺書によれば、天神地祇が降臨し、天地開闢の鐘が鳴り響く！ その事實は、何一つ起こらなかつた！ つまり失敗したのだ！

何かが欠けていた！ それは何だ、ジョナサン！」

「知るか！ 残念ながら俺は全知全能じゃないんでね！ どっかのRPGみたく都合よく答えを持ってると思つたら大間違いだ！ それに」

余韻を残しながら、ジョナサンは足だけで立ち上がった。

「……それに？」

ゴルバチヨフが訊くと、ジョナサンはニヤリと笑い、

「もうこのシチュエーションは、おしまいなんだよ！」

刹那 古びた拘束具が音を立てて千切れ、ジョナサンは自由になった。

「貴様　ッ！」

ゴルバチヨフが身構えるのと、ジヨナサンが指を鳴らすのが同時だった。

甲高い音と共に、両者を突然地面から噴き出た轟炎が隔てた。ゴルバチヨフは思わず後退りし、右袖で口を覆う。

（仕込み魔法か……！）

ジヨナサンは直ぐさま後ろに振り向き、右腕を横に伸ばす。

「ヴァイス！」

言つと、右腕から白く巨大な腕がスウツと浮き出た。そして大きく振りがぶつて、黒い壁に正拳突きを放った。凄まじい音と共に壁は砕け崩れ、未だに荒れ狂う海が見える。

「うおう……。大丈夫かよ、これ」

「ブラスト」

「ん？」

唱読と同時に、先程の音とは比べ物にならない轟音が周辺に響いた。その牢屋の断片らが宙を舞い、やがて法則に従って海に強く落ちる。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

ジヨナサンの雄叫びがしばらく続いていたが、やがて途絶えた。

ゴルバチヨフはその様子を見ていた。風がロープを靡かせる。

『良いのか？』

唐突に、声が辺りに広がったが、ほとんどが海によって打ち消された。

「ああ」

短く答えて、ロープを後ろに下げる。

「どうせ、また会う事になる」

そう言つて、踵を返した。

「りゅーにい！　りゅーにい！」

何処からとも無く、声が聞こえた。幼い女の子の声だった。

「あさだよ！　おきるんだよ！」

バフバフと、布団を叩く音も一緒に聞こえる。

……嫌だ、起きたくない。俺はまだ、睡眠を貪り尽くしていない……。

「おきるの

」！

「んー……」

重い瞼を開けてみると、広がっていたのは真っ白な天井だった。勉強机にテレビにゲーム……。紛う事ない俺の部屋の光景があった。あれ、おかしいな。ついさっきまで、ジョナサンとゴルバチョフが激しい戦いを繰り広げていたはずなんだが……。

「苺……。ジョナサンはどうなった？」

「知らないよ！ いいからはやくおきるの！ ちこくしちゃうよ！」
そう言つと苺は、下の居間まで駆け降りて行つてしまった。

……ああ、そうか。夢か。俺は夢を見ていたのか。

内容的に、先日発売したジョナサン最新作の序章だ。つい昨日そこをやったばかりだから鮮明に記憶に残り、それが夢の中にまで投影されてしまったのだろう。つまりそれ程面白かったという事だ。流石は密林ランキング一位の作品！ 夢にまで出てくるゲームと、新たなキャッチコピーが出来たな！

冷静に振り返ると、即ち俺は寝ていたという事だ。なるほど、未だに身体がダルく、視界が狭くなっている理由が解る。まだ眠いんだ。そりゃあ深夜二時まで起きてればこうもなる。

仕方ない、もう一度眠つて、睡眠を取ろう。

俺は再び身体を寝かせ、布団を被る。途端に睡魔が襲つてきて、俺を夢の世界に誘う。

「おきるの

」！

と思いきや、それは苺によって阻まれた。

無慈悲な苺は布団を放り上げ、無理矢理俺を起こし、居間に連行する。階段の段差に揺らされて気持ち悪い。

「やめてくれ、苺。俺はまだ寝足りないんだ……」

「よるおそくまでおきてるからいけないんだよ！ まいにちくじにねてるいちごをみないなさい！」

「小学二年生にもなつて、まだ一文字も漢字を覚えてないお子様を見習えと？」

「！ い、いいんだよ！ いちごはさんすうできるもん！ しょうらいは、しおねえみたいにすうじたくさんやるんだもん！」

「高校の数学なんてな、使い道はないんだぞ」

「そんなことないもん！」

苺に現実を教えてる内に、光に満ちたりビングに着いた。テーブルには既にパンの乗せられた皿が二人分並べられている。

「龍、おはよう」

キッチンからブラウスにエプロンを重ねた姿で詩織が、黒い長髪を揺らしながら出てきて挨拶をした。俺は目を擦りながら座つて、更に欠伸をする。

「おはよう。そしてお休み」

「何言つてるの。今日は学校でしょ。早くパン食べてよ」

そう言つて、さつさと上へ上つて行つてしまった。おそらく俺の部屋の布団を干しに行つたのだらう。毎度の事ながら、頭が上がる。詩織様々である。

「ふう……」

ふと目を瞑つたら、自然と睡魔が襲つてきた。……いかん、このままではまた本当に眠つてしまふ。駄目だ、寝ちゃ駄目だ。ここで寝たらまた怒られる。

駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ……ああ……。

「……まあいいかあ」

私が龍の布団をベランダに干し終えて居間に戻って見ると、なんと龍は机を枕にすやすやととても心地良さそうに眠っていた。一方

の母はもう食べ終えて、食器を台所で水に漬けていた。流石は私の妹。一度教わった事は絶対に忘れない。なんて有能なのかしら！

それに比べて兄と来たら。折角のパンが冷めちゃってるじゃない。愛情を込めて焼いたっていうのに。本当ならこの可愛い姿を愛でたいけれど、今は朝。学生の朝は規則正しくなくてはならない。

私は心を鬼にして、テーブルのティッシュ箱を手に取り、龍の頭をそれで叩く。母なら間違いなく泣いてる強さだろうけど、龍はやはりこの程度じゃ起きない。往復ビンタを何回も叩いてると、

「んー……」

龍が唸った。私は龍の頭を右手で持ち上げ、パンを口の中に放り込む。

「んーっ！」

「んーじゃないの！ 毎日言ってるでしょ？ 朝はシャキッと起きてっつて！ 龍のせいで、いつもギリギリの電車なんだからね！

ほら、噛み噛みごつくん！」

何でこんな事を高校二年生に言わなきゃいけないの！ 毎回こう言わないと飲み込んでくれないから困っちゃうんだよなあ。けどそれが可愛くていいんだけど！

「はい、次は歯磨き！ ちょっと母、龍の分も片付けておいて！」

「はい」

龍を洗面所に連れて行き、ブラシに歯磨き粉を付け、磨かせる。うとうとしながらゆっくり龍が歯磨きしてる間に、私は龍の髪の手入れをする。今のままで外に出るなんて、とてもじゃないけど無理。大爆発してる髪にブラシを通し、ワックスでいつもの髪型に矯正し終わると同時に、龍も歯磨きを終わったので、私が口臭をしつかりチェックして、部屋で制服に着替えさせる。残念ながら、ここにまで立ち入る段階には進展していない。以前脱がせようとしたら、あの状態でも拒否されちゃったし。

そうね、まだ龍は心の準備が出来てないのよね。大丈夫、私はもう出来てるから！

部屋から出てきたところで、未だに首を揺らしている龍を外に連れ、苺も外に出たら玄関の鍵を閉めて出発。

八百屋さんや銀行等が立ち並ぶ街を通り抜け、駅で苺と別れたら、急いで改札に向かう。何故ならこの時間だと電車はもう止まっていて、今まさに乗客の入れ替えの最中だから。これを逃すと二人とも確実に遅刻なので、なんとしてもこれには乗らなくてはならない。

どうしても起きようとしないうちに龍を右手で引つ張って、ドアが閉まる直前に無理に突っ込み閉まるのを阻止。ふう、今日もなんとか電車に乗れた……。

ドアが閉まると、

「駆け込み乗車は大変危険ですのでおやめ下さい」

と駅でアナウンスが掛かっていた。毎度の事だから、駅員も呆れる事だろう。

この時間のこの車両は常に席の空きはないので、必然的に立つ事になる。私の位置にはちょうど手摺りがあるが、龍には掴める場所がなく、更に頭はガクンと下がっている為、電車が揺れると一緒に揺れていてとても危ない。私が龍の手を掴もうとしたその時、電車が大きく揺れ、龍もそれに釣られる。そして

「んあッ!？」

私の豊満な胸に、龍の顔が埋もれて来た。いけない、私、胸の感覚が強いから思わず嫌らしい声を上げてしまった。ああ、私としてはこのシチュエーションはドンと来いなんだけど、場所が悪いわ。周りの人がチラチラとこちらを見ているのが解る。やっぱりこういうのは、家の中じゃないと駄目ね。TPOは重んじるべきだわ。

「ちよつと龍、頭どけて、んっ!」

また電車が揺れて、龍も揺れて、なんと今度は龍の右手がダイヤレクトに胸を鷲掴みにしてきた。きつと寝惚けて手摺りだと思ったんだろっけど、このままじゃこの時間中ずつと感じちゃう……!

「違うわ、龍。それは手摺りじゃ、んっ」

私は必死に龍の背中を叩き続けるが、一向に反応が無い。もしか

して、寝入っちゃってるのかしら。私の胸で。そ、それはそれでいいかも……。

いや駄目よ！ このままじゃ、龍が痴漢だと思われちゃうかもしれない！ もう思われてるかもしれないけど、最悪のケース……即ち警察のお世話になるって事だけは避けないと！

「龍！ いい加減にしなさい！ この続きは家でたつぷりと、んあぁっ……」

も、もう駄目かも。身体が熱くなってきちゃって……！

「はぁ、龍、落ち着いて、んっ！ まずは、その手を離して、あっ！ ちょっと、左手も触っちゃってどうする、んあぁ。解った、解ったわ。家で好きなだけ触らせてあげるから、ここではもうやめて、あぁっ！ はぁっ、龍、私、もう……！」

「……はっ」

周りのガヤガヤとした雑音に気付き、俺は目を開けた。

場所は見慣れた教室で、夏色の生徒達が教材を持って移動したり、角でプロレスを始めたりと、動き回っている。今は休み時間のようだ。

しかし、俺は今まで何をしていたんだ？ 定例通りなら、電車の中で寝入ってしまったって、終点に着いたら意識が朦朧としつつもなんとか電車を乗り継ぎ、時々倒れながらもなんとか学校に入って、教室の席に座った瞬間に再び寝た。こういう事か。

時計を見ると、十時四十分を針が過ぎた。つまり授業二時間分も寝ていたのか。ちゃんと出席扱いにされてるのか不安だな。窓際が一番前は気持ち良すぎて寝やすいから困る。

「おう、やっと起きたか」

不意に肩が叩かれたと思った方向を見ると、男子生徒が居て、すぐ右隣の席に座った。そこは彼の席では無い為、本来の座席主が煙たがる。

「おいザキ、あたしん席座んなよー。汚れるー」

「ああん？ てめーの身体を俺のカルピスで染めてやるつか？」

「うえっ！ 死ね！」

女子生徒が舌を出しながら退散すると、山崎は「かかか」と愉快そうに笑った。

「いやあ、ツンが多いねえ、この学校は！」

やまだきまひる

山崎将。女子が羨ましがってしまう程サラサラした黒髪は肩まで

伸びていて、前髪で右目は覆われている。顔には火傷が痛々しく残っているが、本人はあまり気にしていない様子。主に下ネタを連呼する為、一部の女子からは軽蔑されている。今が良い例だ。あだ名は「ザキ」。決して成功確立の低い即死魔法ではない。が、その意を込めてそう呼ぶ女子も中には居るだろう。

「にしても、二時間ぶっ通しで寝るなんか普通ありえねーだろ。昨日どんだけ起きてたんだよ？」

「ああ。深夜二時までゲームしてたから、仕方ない。ちょうど今日はその夢を見たんだ」

「……それ、結構な中毒なんじゃねーの？」

表情が引き攣ってる。別に疚しい事は何も無いんだが。

「そういうお前は、昨日何してたんだ？」

「俺か？」

すると、山崎は右手でガッツポーズをして高らかに言う。

「勿論、エロ画像を集めてたに決まってるんだろ！」

「なるほど、つまりお前に俺を貶す資格は無かったという事だ」

「あつ、ちなみに昨日は二次元の方な」

「訊いてない」

「昨日見つけた中でベストなのは……これだな！」

「寝起きに変な物を見せるな！ 目が腐る！」

「おいおいその言い方はねーだろ。世界中のロリコンに殺されるぜ？」

ロリコンって、幼女や少女に欲情してけしからん事をする奴らの

事だよな。それだと噂は間違いなくターゲットに入ってしまうな。ぬぬっ、今すぐロリコン絶滅条例を制定しろ。ロリコンは死ぬべきだ。

「だいたいさあ、皆大量にエロ画像持つてる俺を軽蔑するけど、男子なら絶対ケータイの中に一枚はエロ画像あるから！ シークレット設定にして隠してるから！ そうだろ議長お！？」

山崎は後ろでケータイをいじってる男子生徒に急に訊く。本人はビクッとした後戸惑って「えっと……」と言葉を詰まらせている。

渡辺周平。わたなべしゅうへい 平均的に見ると低い身長に、もっさりしているアフロがクラス、いや学校で一番目立つ。アフロの中には日常具が詰まっているという噂がある。しかしその頭とは対照的に、引っ込み思案で泣き虫。今年の生徒総会で議長を務めた事から、あだ名は「議長」。間違えやすいが、決して某特戦隊ではない。また、それでの失敗が原因で、普段より余計に引っ込み思案になっている。

「それは……どうかなあ」

「いやそうだね！ 議長なんか特に持ってそうだね！ そのアフロの中とか！」

「し、失礼な！ この中には普通にハンカチとティッシュしか入ってないよ！」

それはポケットに入れるだろう、普通。

「どーだかねえ。明らかに議長からはむっつり臭がするぜ」

「そ、そんな事ないよ！」

渡辺は立ち上がって抗議するが、山崎は汚く笑いながらあしらっている。散々ないちやもんをつけられた渡辺は今にも泣きそうだし、しかしそれを見て面白そうに山崎は笑っている。

そんな山？に、人影が差し掛かる。

「こーら！ ザキはまた修平をいじめて！」

「うおっ、姫か」

唐突に高い声が聞こえた方向には、長身の女子生徒が居た。渡辺に近寄ると、もさもさの頭をぼんぼんと撫でるように優しく叩く。

「よしよし、泣かない泣かない」

「うう、やっぱり僕は駄目な子なんだあ」

そう言って渡辺も、姫川に身を寄せて頭をグリグリ動かす。傍から見れば明らかに姉弟である。

姫川理紗^{ひめかわりさ}。茶色い髪を後ろで左右に団子結びしている。女子にしては背が高いのが特徴で、百八十を超えている。また、才色兼備かつ文武両道で、妬みの対象になってるかと思えば、その性格が幸いして、彼女を敵視する生徒はとも少ない。何でも中学では、大量のアプローチがあったとか。しかしそれは蹴ったのか、この通り渡辺と親密な関係にあるようだ。あだ名は「姫」。決して黄昏の姫君ではない。

「で、何でこうなったの？」

鋭い声で問い詰められた山崎は「うつ」と身体を反らした。

「いやいや。いじめる気は無かったんだって。ちよつとした出来心でだな」

「ザキの秘密、ばらしちゃお」

「僕が悪かったです。お許し下さい、姫君」

瞬時に土下座して許しを請う。何やら、山崎は秘密を握られているらしい。その姿に姫川は「あはは」と笑って、

「冗談。でも、泣かせちゃ駄目だよ？」

「へーい。てゆうかお前もメソメソ泣くなよな。議長だろ」

「それは関係ないよお」

渡辺が涙を拭って席に座ると同時に、チャイムが学校内に鳴り響いた。

「次は……。ゲッ、英語かよ。なあ龍、ノート見せて。順番的に俺当たるからさあ」

「言つのが遅すぎだ。それに、俺が予習やってると思うか？」

「思わねー。くそつ、使えねーなー！」

悪態をつきながら立ち上がり、次は渡辺、今度は姫川と、虱潰しあたっていくが、全て断られていた。性格の悪さがここで災いして

いる。拳句の果てには、先生が入室した途端に頭を抱える始末。

えっと、こういう場合はなんて言うんだっけな？ 前に廣瀬に教えて貰ったんだが……。ああ、思い出した。

「ざまあー」

戒めの意を込めて、誰にも聞こえないように呟いておいた。

「要するにだなあ、パンツってのは見せ付けるもんじゃねーんだよ。チラッて見えて初めてグツと来るもんなんだよ！」

昼休み。やはり五月蠅い教室で、俺の席の周りにいつもの四人が集まって、弁当や購買のパンを食しながら雑談をしている。今は山崎のターンで、「女子のパンツの有用性」について中心で語っている。場違いな話題のおかげで、女子陣は若干引きながら黙々と箸を進めていた。

「俺としてビンと来る場面ってのは、大人しそうな女子のパンツが見えた時だな！ 普段は縮こまつてる女子の中身を見れた瞬間は至福の時だ！ なっ、岡村！」

「や、やつぱり私なんだ……」

俺の右隣で小さな弁当箱を開いていた岡村が苦笑いした。

おかむらあゆみ

岡村あゆみ。ウェーブの掛かったピンクの長髪が、綺麗な顔を包みように伸びている。以前はメガネを掛けていたが、コンタクトにしたらしい。小柄な身体の服装は皺一つなく、スカートは膝丈より長く履いている。あだ名は「あゆ」。決して魚ではない。

「きつと岡村は白かピンク辺りが妥当だと思うんだけど……。どーよ？」

「どーよって、僕に訊かれても」

山崎の隣でパンを食べてる渡辺は苦笑しながら首を傾げる。

「いーや、あゆは意外と派手な下着だと思っな」

姫川が右手の人差し指をピンと立たせながら推測した。

「そうか？ 確かにそういうパターンもあるっちゃあるが、岡村は

それに当てはまらなと思うぜ。まったく想像がつかん」

「甘いな、ザキは。あゆってね、普段は大人しくしてるけど、やる時はやるんだから。大胆な一面も結構あるんだよ」

それは俺が一番経験している。何せ被害者だからな。金の欲しさが故に、盗みをするくらいだ。それにはどうしようもない理由があったから、今はもう気にしてはいないが。

山崎は「ほお」と鼻の下を伸ばし、
「なるほど。……………」

しばらく黙った後、いきなり山崎は地面に顔を付け、岡村のスカートを観こうと試みた。

が、察知していた岡村が股を閉じてそれを防いだようだ。

「チッ！」

「チッ！　じゃないよ！　女子のスカート覗くなんて最低だよ！」

渡辺が正論を言つて、全員頷く。

「最低なのは百も承知さ。でも岡村つてスカート長いんだもん。神風吹いても見えねーんだもん！　だったら覗きたくなるのも仕方ねーよ！」

「そりゃあ、見えないように履いてるからね？」

「いやいやいや。岡村はスカートの意味を解つてねーよ。いいか？　そもそも何で制服がスカートだと思う？　可愛いからだよ。何で可愛いと思う？　フリフリしてるからだよ。何でフリフリすると思う？　パンツが見えるようにする為さ！」

「違うでしょ」

姫川が呆れ気味にツッコんだ。

「いや違わないね！　昔の偉い人がそう言っただよ！　昔の人もエロかったんだよ！」

「エロとかは関係無いと思うよ」

渡辺も首を振った。

「もうね！　いっその事スカート捲りを日常茶飯事にしちゃえばいいんだよ！　そうすりゃあ現代の性欲不足も解消されるはずだ！」

「それはありえないよ……」

岡村も嘆息して否定した。

「じゃあもういいよ！ スカート廃止しまえよ！ 女子は全員パンツで登校すりゃいいんだよ！ これで万事解決だよ！ よし、要望送っとくから考えてくれよ、執行部！」

「やめろ、紙の無駄だ」

そういえば以前、「水着コンテストならぬ下着コンテストをしよう！」とかいう要望書があったが、こいつか。問答無用で恵に破り捨てられていたが。

「じゃあさ、皆でパンツの魅力について語り合おうぜ」

「一人でやってろ」

「ん？ 龍はもしかしてティーバック派？」

「どこにそんな伏線があった？ とにかく、パンツの話題はもういい」

「はは。解ったぜ、龍はおっぱい派か」

「何でそうなる？ とりあえず、お前はもう喋るな」

「大丈夫だって。俺はDくらいがいいかな」

「一体どう大丈夫なんだ？ というか、話を進めるな」

「巨乳もいいけど、やっぱりバランスだよな。ロリで巨乳とかは、絶対に認めないね」

「おい、誰かこいつを止めろ」

『無理無理』

「そっぴやロリも捨て難いよな。一度でいいから抱いてみたい！」

「頼むから、飯を食わせろ」

「確か龍の妹って小学生だよな……。今度会わせてくれ！」

「兄として全力で阻止する！」

帰り道。今日は天川の意向で執行部は無しなので、駅から街の通りを歩く。にしても、結局山崎は止まらなかったな。いつもの事だ

が、いい加減度が過ぎる。執行部としてどうにかした方が良いのかもしれないな。「下ネタ禁止法」というのを作った方がいいかもしれない。

久々に五時前に玄関の前に辿り着いた。よし、これなら夕飯までずっとゲームが出来るぞ！

俺は気分上々で玄関を潜ると、居間から苺が駆けってくる。

「りゅーにいい！　たいへんだよー！」

「ん？　どうした、苺？」

「しおねえがたおれたの！」

「な、何！？」

「はあはあいつてる！」

「それは大変だ！」

まさか、働きすぎで風邪を引いたのか！？　俺が、家事をろくに手伝わずにゲームばかりしていたせいで……？

俺は苺を除け、鞆を放り、無心で駆け出す。

いや。無心ではない。心の底から、後悔の渦が巻き上がっていた。俺がいけないんだ。ゲームなんかやってる余裕は、本当は無いのに。詩織は学校もあるのに、自分の自由時間を全て切り捨てて、家事に汗水流してくれているのに。当の俺はと言えば何だ？　毎日毎日ゲームばかりやって……。随分前に恵に言われた事だが、正にその通りだ。電気泥棒以外の何者でも無い。

ならば、ここで清算しよう。全てが、という訳ではないが、せめて十分な介抱をしないと。

詰まる想いが一瞬で爆発して、気付けば俺は居間のドアを開けていた。すると、ソファーには顔を紅くして横たわっている詩織がいた。

「詩織！」

近寄って膝を折り、すぐさま額に手を当て、自分のそれと比較する。

「……？」

もう一度、しっかりと手を当て、体感する。

「熱ないじゃないか」

だとしたら、この症状は一体……。

「！ まさか、未知の病気！？」

思わず俺は声を上げ、虚ろな目をしてる詩織の身体を揺らす。

「おい、詩織！ どうしたんだ？ どこが痛いんだ！？」

「うー……ん……。龍……？ おかえり」

「ああ、ただいま。 じゃない！ どこか痛いところは無いか！？」

「え？ …… ああ、そういえば今日はずっと、ここが痛いわね。
誰かさんのせいで」

身体を起こして、両手で胸部を持ち上げた。

「胸が痛いのか？ …… そんな！ まさか心臓の病じゃっ……！」

「さつきから何言ってるの？ 痛いだとか、病だとか」

「は？ いやだって、苺が倒れたって……」

俺は後ろで立ってる苺を見て、「な？」と確認すると、大きく頷いた。

「しおねえ、はあはあいつてたもん！」

「そんな事 。 ああ、そういう事ね」

詩織は一人で納得して、「うんうん」と首を振る。

「？ どういう事だ？」

「苺が勘違いしたのよ。確かに、私は帰ってすぐにここで寝たけど、別にそれは具合が悪いからって訳じゃないわ。 ちょっと眠かったから、仮眠を取ろうとしただけよ」

「だったら、何でそんな声を……」

「夢を見てたのよ。 ちょっと過激な」

「な、なんだ……。 そうだったのか」

俺は一先ず安堵する（正直言って、過激な夢を見る時点で脳内に問題があるのかも危惧するが、詩織に限ってそれはないだろう、いつもそんな感じだし）が、先程の言葉を思い出す。

「じゃあ、さつきの胸が痛いっていうのは？　もしかしたら、病気かもしれないぞ！」

「……ひよつとして、覚えてないの？　朝の事」

「朝？　起きて、テーブルに座って……。教室で目を覚まして……」
「覚えてないのね」

詩織は深く嘆息して、もう一度自身の胸を持ち上げる。

「あんだだけ揉みしだいというて、白々と……」

「何？」

「酷い羞恥プレイだったわ……。電車の中で、あんな事を！」

急に天井を見上げて吼える詩織。

「な、何を言ってるんだ？」

「しおねえ、まさか！」

「そのまさかよ、苺」

赤面した詩織が答えると、苺は「むーっ」と頬を膨らませ、俺に向き直り、

「さいてー！」

「はあ？」

突然の非難に、驚く他無かった。

「これだけで意思疎通が出来るなんて……流石は私の妹ね！　それに比べて……」

今度は詩織が鋭い目付きで俺を睨む。

「この変態！」

「なっ」

衝撃の一言！

「家の中でなら許せたけど、電車の中でするだなんて！　公共の場よ？　何を考えてたの！？　度し難いにも程があるわ！　陵辱よ！　正しく陵辱だわ！　私はね、美少女ゲームのキャラクターじゃないの！　お門違いよ！」

「は、はああ？」

何で俺は怒られてるんだ？　こっちは心配していたというのに！

それこそお門違いだ！ さっきまでの俺の後悔はどうなる？ ま
ったく無駄な感情だったじゃないか！

とでも言ってやりたいが、鬼の形相をしてるお姉様にそんなこと
は言える訳がない。

「さいてー！ ありえないー！」

妹様まで大変ご立腹のようで。

「今日という今日は、たっぷり説教だからね！」

「……………」

いつの間にか俺は正座して、仁王立ちの詩織とそれを真似てる尊
にガミガミ一方的に罵倒される始末になった。時々反論を試みるが、
「お黙り！」とハモられ失敗する。

折角ゲームが出来ると思っただのに……。この調子じゃ無理だな…
…。

どこにでもある日常。

それは、穏やかな波に揺らされ、一定の周波数を発している。
しかしそれは時に、不穏な波紋によって打ち碎かれる。

それこそが、日常なのだ。

翌日の朝。前夜にこつてり絞られたせいで、不本意にも瞼はばっ
ちり開いている。

結局あれから三時間みっちり扱かれた後、夕飯と風呂を挟んでそ
こから更に三時間だからな。ゲームなんかやる気が起きなかった。
ついさっきも電車の中で愚痴を絶え間なく言われたし。もう何がな
んだか、理解不能だ。

昇降口で靴を履き替え廊下に出てみると、異様な光景が広がって
いた。

掲示板の前に人だかりが出来ていた。主に男子生徒がケータイを

手に背伸びしたり、言葉を交わしながら騒いでいた。ああいう五月蠅い場所は嫌いだから、いつもなら横目にするだけなんだが、最前に腕を組んだ山崎が居たので、声を掛けてみる。

「おい、山崎。何だこの騒ぎは？」

「おお、龍。いやな、掲示板に貼り物がされてるんだよ」

「そりゃそうだろう」

「見りゃ解る」

俺は背伸びして確認しようとするが、前の生徒の頭が邪魔で見えない。だがたまに掲示物がチラツと見える。写真か？大きく現像されていて、何枚も重ねて貼り出されている。その内容は……。

「これは……」

女子生徒のスカートの中身がはつきりと晒されている類の写真。即ち、盗撮写真だ。それが様々なアングルから撮影されていて、大量に貼り出されていた。制服を見る限り、うちの生徒だ。顔は写されてないが……。

「何だこれは」

「盗撮写真だろ。ま、もしかしたら合意を得た上での写真かもしれないけどさ。写ってるのは間違いなく山高の女子生徒だな」

「それは解る。解らないのは、何故わざわざ掲示板に貼るかだ。個人的な願望で撮ったのなら、それを羞恥に晒す理由が解らない。自分だけで楽しめばいいだろう」

「だとしても、許される事では無いが。」

「愉快犯だろ。どうしてやろうと思ったかは知らねーけど、こうやって男子が喚くを見て、ほくそ笑んでるんじゃないの？」

「やけに浮かれない表情をしてる山崎を見て、俺は思わず笑ってしまった。」

「なるほどな。つまり、お前が一番の観察体ということか」

「……いや。わりーけど、それは違うな」

「どうして？ 普段はあんなに下ネタを連発して、仕舞いにはスカートを覗き見ようとするくせに」

「ああ。そりゃ見てーからな。自分の見てー物は全力を尽くして見るさ」

その？全力？に問題があるんだがな。

「けどな、これはちげーんだ。仮にこれが盗撮だとしたら、今ここの彼女達の望まない形で、自分の恥部が嘗めくり回されてる。とんでもなく非道だと思わねーか？」

「お前が言えた口か？」

「俺は正々堂々と勝負してるんだ！ 陰気な奴と違ってな！ 寧ろ褒めて欲しいもんだ」

言ってる事とやってることが食い違いすぎだ。何様だ、こいつ。

……だがよく振り返ってみると、岡村や姫川は山崎のこの行為を批判し嫌がってはいるが、今の関係を崩そうとはしていない。そのアイデンティティを認め、友人として付き合い続けている。いや続けたいと思っているのかもしれない。山崎はその部分を抜けばムードメーカーのようなもので、クラス内の笑いの半分は山崎が作っているといっても過言では無い。

だからって訳じゃないが、多少の無理も通る事が多い。割と中心人物だという事実には間違い無いだろう。

いやだからって卑猥な行為が許される訳でもないが。

「気持ち悪いんだよ」

突然の鋭く大きな声が廊下に響いて、静寂が訪れた。山崎の表情を見てみると、今までに見たことの無い表情、怒りがひしひしと伝わってくるものだ。

「盗撮してる奴も。それを見て喚いてる奴も。その写真も。全部醜い。吐き気がするっつーの」

山崎は一步前に出て、「いいかてめーら！」と声を張ると、塊が震えた。

「自分の見てーもんはな……てめーの目で！ てめー自身で！ てめーの身体で見やがれ！ 紙っぺら越しなんかで見るもんは偽物だ！ 実物を！ 肌で感じやがれ！ そんなんで精力使ってんじゃね

「よ！ それでもてめーら男かあ！」

山崎の熱弁が終えると、静寂が徐々に打ち砕かれて、生徒達は列を成して教室に向かって行つた。耳打ちする生徒が多々見える。

「ははは！ ねえ龍聞いた？ 今の俺の！ あいつらのハートを見事に貫いたぜ！」

高笑いしながら悦に浸っているが、きっと生徒達はそんなんじゃないで、単に引いただけだと思うが……。まあ、追い払つたのは上出来だから何も言わないでおこう。本来なら、それは俺の役目だったんだから、感謝したいくらいだ。それは屈辱だから、言葉には表さないが。

「あれ？ ザキにジヨー、何してるの？」

後ろから、ちようど登校してきた姫川が「やつ」と挨拶してきた。俺達は簡単な会釈で返す。ちなみに、ジヨーというのは俺の事。苗字の城古から取つたらしい。決してなんとかのジヨーではない。

「つて、何これ！？」

姫川は掲示板の物を見て、口を手で覆つて驚く。

「うちの生徒の盗撮写真だよ。どんな手を使ったかは知らねーけど、こんなに撮られて、貼り出されてる」

山崎が説明すると、姫川が身体を震わせる。

「どうしてこんな事を……。信じられない！」

普段温厚な姫川でさえ憤怒している。やはり、女子のスカートには秘密が詰まっているようだ。

そう思つた途端 不意に山？が声を上げる。

「ああっ！」

すると山崎は、いきなり目をやらなかつた盗撮写真を一枚ずつ真剣に見始めた。まるで何かを探すように。

「ちょ、ちよつとザキ！ まさかザキまでこんな物を！？ ザキはそんな奴じゃないって、信じてたのに！」

何故信じられるんだ！？ どうやったら信じられるんだ！？
「違う！」

頭を振って、目を凝らして漁る様に見続ける。

「もしかしたらこの中に、姫川があるかもしれないーじゃねーか！」

……………。

姫川同様、思わず息が漏れる。もう呆れる他無かった。

「山崎。さっきの熱弁はどうした？」

「ああん？ 知るか、んなもん！ 俺はな、今晚のオカズ探しで必死なんだよ！」

それは親に任せておけ！

「ザキ………… そんなに、私のここが見たいの？」

姫川の声が小さく聞こえると、本人はスカートの端を摘み上げていた。中身はまだ見えてないが、山崎は不意を突かれた様に硬直し、口をぽかんと開けている。それは俺も同じだが。

「だったら、見せてあげる」

「………… マ、マママ、んマママママジでええエ！？」

高速で這いずって拝むように膝を突く。姫川は顔を紅くしながら、徐々にスカートをたくし上げていく。

………… いやいや何だこれは。何故こうなった。いくら姫川がお人好しだからといってもこれはおかしい。

「おい、何をやって」

俺が言いかけると、姫川がウィンクしてきた。いや意味が解らない。まさか、俺も見ろって合図じゃないだろうな？

俺は首を振ると、軽く笑って妖艶な微笑みを浮かべ、山崎を見下ろす。あれ、変だな。姫川ってこんなキャラだったっけ…………。設定ミスか？

山崎が鼻の下を極限まで伸ばし切り、今か今かと待ち侘びてる最中、姫川が突如吹き出し、「あはは」と笑った後、スカートを思いっきり上げた。

「………… はあ？」

中身を見た山崎は間の抜けた声を上げて、しばらく呆然としていた。やがて我に返って立ち上がる。

「て……てめー！」

「ザキッたら真剣に見てるんだもん！ 馬鹿っでー！」

「このやるー！ 男心弄びやがって！」

姫川が逃げ出すと、山崎はそれを汚い言葉を吐きながら追いかける。あの速度差だと、追いつけることはないだろうが。ていうか結局、あの行動の意味は何だったんだ……？ あの様子だと、本当にパンツを見せた訳じゃなさそうだし……ッ！

「ま、まさかつ……！」

最悪の光景が脳裏を過ぎり、反射的に頭を抱える。

「廃れてるっ……！ 圧倒的にっ……！ 性がっ……！」

今日の議題は決まったな……。

その日の放課後、執行部内でこの問題について話し合ったが、特に成果を挙げられる事は出来なかった。

犯人を特定するにも、時間帯が時間帯で、断定する事が出来ない。一括りで夜と言っても、それがどの深さの夜なのか。それに、動機すら検討も付かない。ただの悪戯にしては度が過ぎるが、それ以外と言われても何の想像も出来ない。

犯人像は、内容的に男子ということは推測出来るが、この学校の生徒なのかどうかも確定的では無い。こんな匠な盗撮技術を持つ者が学生とは思えないからだ。

かと言って大人だしたら、必然的に教師を疑わなければなら無い。更に、この学校に出入りする人間を洗い出し、その中からも候補を絞り出す。

無理かつ果て無き話だ。我らが誇る優秀な情報アナリストである廣瀬ですら、これにはお手上げなのだから。

なら、対策？ それも難しい。

実際、掲示板には時折重要な知らせが貼り出されることがあるし、それを制限されると困る人間がたくさん居る。？ 写真だけを貼らせ

ない掲示板？なんて、都合の良い物が作れる訳でもない。

解決するにも、一日では不可能な事の為、天川が作戦を練り直して明日もう一度この問題に当たる事になった。

これは俺の考えだが……。はつきり言って、犯人を特定なんて出来ないと思う。

犯人だって、こんな大胆な事をやるからにはそれなりの策略があるはずだし、事実証拠も発見出来ていない。あんな盗撮写真を本当に撮ってる奴なら尚更だ。また生徒集会を開いて注意を呼び掛ける程度で終わってしまう問題だ。

それに極端な話、正直どうでもいい。今回ののは全然怒りが湧いて来ない。意欲が掻き出されない。最早やる気の問題にまで至る。俺個人としては、女子の下着には興味無いし、それが晒されていようと何も関係の無い事だ。寧ろ性欲が尽きない男子に物を提供してるから悪い話ではないんじゃないか？　なんて考えてしまう。

とりあえず今日はもう寝て、天川の？作戦？とやらに期待しよう。

次の朝。昇降口で靴を履き替えて見ると、また掲示板で人がうじやうじや沸いていた。今回は女子も多く混じってるようだ。

まさか、また掲示板に何か貼り出されてるのか？　流行ってるのか、この方法？

今回は興味本位でその中に混ざってみる。

「酷いよねー。何これ」

近くの女子が囁いてる声が聞こえた。

「うわぁ……。最悪だろこれ……」

所々から声が聞こえ、それらは全て批判の類だった。どうやら今回は、昨日のような物では無いようだ、良い物では無いようだ。何だかなあ……。

「！」

俺は掲示物の一つを視界に捉え、それが真がどうかよく目を凝ら

す。

「あぁっ……」

遮る頭が無くなって、その全貌が頭の中に一気に入り込んでくる。数ある写真。散乱している写真。それらに写し出されているもの。全ての情報が脳内で処理され、結論が出る。

一人の山高生だった。茶色い髪を後ろで左右に団子結びしているキュートなヘアースタイルが特徴で、背が高く端麗な顔立ちで、誰にもでも接し、優しい人格を持ち、才色兼備かつ文武両道に長ける人間として充分過ぎる素質を身に宿した、姫君。

一枚は、着替えの瞬間。一枚は、乳頭が露になっている様。一枚は、排泄行為を正に行っている姿……。

「……うっ！」

喉の底から吐き気がして、直前まで迫ったので、右手で口を覆って必死に押し戻す。嘔き出し掛けたパンの残骸を再び飲み込み、大きく深呼吸する。顔を上げると、見たくも無い物が何も掛からず堂々と映っていた。

流石にこれらを見て、わいわい騒ぐ奴は居なかった。皆俺と同じ感情のようだ。しかし、排除しようとはしない。珍しい物は気の済むまで見ておきたいという利己心が正義心を邪魔するのだろう。

……もう、限界だ！

「どけ！」

俺が言おうとしたら、左から用意した台詞が荒々しく飛んできた。生徒達が道を作るように割れていく。

「山崎……」

そこには、昨日とは比べ物にならない程怒りが表面に出てる山崎がいた。齒軋りを鳴らしながら掲示板に近付き、写真を乱暴に剥がしていく。

「……龍」

「俺も手伝う」

俺は剥がした一枚を見た途端、怒りが込み上げて来て、思い切り

写真を握り潰す。

「あつ！ これを、姫川は……？」

俺が訊くと、山崎は表情を暗くして、脱力しながら首を振った。

「……今は？」

「屋上で、議長と居る」

「解った」

俺が背を向けると同時に、山崎が掲示板を叩いた音が聞こえ、振り返る。

「糞がつ！ 姫が何をしたってんだ！ あいつは、自分なりに！

前向きに生きようとしてるだけなのに！ 何でこんな仕打ちを受けなきゃなんねーんだ！ ああ！？」

「山？……」

あんな風に苛立ち、怒る山崎を見るのは初めてだ。それ程までに姫川が山？にとつて大切な人物であるという事は明確だが、それは俺にとつても言える事なのか……。

後悔が、滲み出る。

こんな事になるのなら、昨日もつと尽力するべきだった！
どうでもいい。

この感情が、こんな惨事を導くなんて！
くそっ！ くそっ！

だが、こんな俺の懺悔は関係無い。

既に、俺も同罪なのだから。

屋上に着くと、そこにはフェンスに体育座りで顔を埋めてる渡辺だけが風に当たっていた。

「渡辺、姫川は？」

「気分悪いから、保健室に行ってくて……」

「そうか……」

俺は渡辺の隣に座る。

「ねえ、龍」

「……ん？」

「どうして、理沙なのかな……」

「……さあな……」

「理沙ってね、昔は泣き虫だったんだ」

渡辺が顔を上げる。見ると、泣いた後が残っていた。

「……へえ。それは意外だ。今の姫川からは想像出来ないな」

「でしょ？ でも本当なんだよ。小学生の頃、理沙はよく一人で居る事が多かったんだ。人見知りで、本を読むのが好きな、目立たない陰気な女の子だったんだよ。それが原因で、よくからかわれたり、時にはいじめられたりしてたんだ」

「ますます想像し難いな」

「そんな理沙を慰めてたのが、僕なんだ」

という事は、つまり……。

「幼馴染、なのか？」

「うん。今とは、真逆の立場だけだね」

笑いながら言った。

「じゃあ、付き合ってるっていうのは？」

「そんなんじゃないよ。けど、最近は少し気になったりしてるけど

……」

若干頬を紅葉させていた。

「それで？」

「理沙は中学校に入ってから、今みたいになつていったんだ。なるべく明るくして、他人には優しく接して、友達を多く作つていった。正直驚いたよ。あの理沙がつて感じでさ。んで、僕と言えば全然友達が出来ずに、日頃でも失敗続きで……。それからかな、泣き虫癖がついたのは。その頃から今度は理沙に励まされるようになって、今みたいになつてんだ」

そんな秘話があったとは……。山崎が言っただのはこの事か。

「だからね、理沙がこんな目に遭う理由は、無いんだよ」

「……そうだな」

「だからね、理沙が泣く必要は無いんだよ」

「ああ」

「泣くのは、僕だけでいいんだ」

「……………」

涙が、煌きながら零れ落ちた。

「だから……うっ」

涙の雨が、降り出した。

「その涙は、俺が清算しよう」

「……え？」

俺は立ち上がって、よどんだ雲を見る。今にも泣き出しそうな雲だが。まだ零してはいない。

「姫の涙が、伝わらない内にな」

まだ、堪えていてくれ。

清算が終わるその時まで。

第10話「告白は人生を黒く濁す」

「八」

緊張が空気を支配している、部室（と言つべきなのは解らないが）の中。天川が一つの数字を宣言した。だからと言って、俺は「どういう訳だ」などとツツコミをしたりはしない。そんなのはあまりにもナンセンスすぎるし、筋が通らないだろう。

六月に入り、学校は衣替えの移行期間。俺と天川は長袖のワイシヤツだが、まだ他はブレザーを着用している。まだ暑くはないが、次第に暑くなってくる時期だ。幸いにも、この部屋にはまだ熱気は無い。

そんな中、天川は金色の手札から二枚を選び、机の中心に出す。次に二ノ宮が一枚を頭上に突き出し、

「九です！」

高らかに宣言し、重ねるように出した。

それに異を唱える者は誰も居ない。

……ふむ、皆慎重だな。いや、チキンと言つべきか。一体いつになつたら言つつもりなんだろうか？ この場に勇気のある奴は居ないのか。

「……………」

廣瀬は何も言わずに二枚を出した。順番的には十だ。だが廣瀬は固く口を閉ざしたままで札を捨てた。つまり、何も言わないという事は、嘘の証拠に違いない！

と馬鹿な奴は思つだろう。

しかしそれは違う。問題は出したのが廣瀬という事だ。無口という設定が故に何も言わないだけで、嘘か本当かどうかはそれだけじゃ判断する事は出来ない。よって、この場合は沈黙に徹するのが定石だ。

「十一」

恵はパラっと一枚を被せた。当然とでも言いたいのか、これに反発する者は居ない。

机の中心には、金色に輝くカードが六枚積まれている。俺はその塊に最低でも一枚、十二を出さなければならぬのだが……。

「……………」

無い。十二が一枚も無い。どうやらクイーンには好かれてないらしい。よって、必然的に嘘を吐かなければならないという事だが……、なあと、そんな簡単に嘘だとバレるはずがない。いつも通り、普通にカードを提示すればいい。

俺は右端のエースを手に取り、ゆっくりと手を伸ばし、たつぷり時間を掛け、置いてから宣言。

「十二」

『ダウトお！』

「！」

廣瀬以外がハモリ、俺を指差す。いや廣瀬も指差しているから、全員俺が嘘を吐いていると思っっているようだ。しかもその自信満々の顔！ 何なんだそれは！

ダウトされた以上、札を公開せざるを得ない。俺は静寂を以って札を裏返す。

「おい見ろよ七だってよ！」

「ラッキーセブンですか！ ラッキーセブンのつもりなんですか！」

「（馬）」

「弱えなー龍！」

「くっ……………」

四人（厳密には三人だが）の笑い声の中、俺は渋々七枚を手札に加える。

ていうかなんだこれ！ 全員嘘つきじゃないか！ そのおかげ（という訳でもないが）で、手札が十六枚になってしまったじゃないか！ なんて白状な奴らなんだ！

「ふふふ」

一方、俺の次の天川は三枚。二枚残りで上がりらしいので、俺は絶対に二枚を出さなければならぬ（三枚からダウトが可能な為）。しかも、俺の出す札次第で天川が上がってしまう。これはとても責任重大な状況だ。一体何を出せば……。

「龍さん、解つてますよね？」

「ああ、解つてるから黙つてろ」

二ノ宮に忠告されてしまうとは、何たる屈辱！ その生意気な顔を捻り千切つてやろうか！

「……ふう」

まあ、落ち着け、俺。今は天川を上がらせない事を考えるんだ。他の邪念を全て捨て去り、蹴落とすことだけを考えろ！ 周りの嫌な視線はシャットダウンするんだ！

そして冷静になれ。今の状況を顧みて見る。一見すれば、俺はとても不利で弱いと思われるだろう。

だが手札が多い分、持ち得る情報が他より多いという事だ。これはダウトに置いてとても重要。つまり見方によつては、俺は有利な状況という事だ。手札を見る。必ず、可能性はあるはずだ！

「……！」

ほら見てみる！ 俺の手中には、キングが三枚収まっているじゃないか！ クイーンは振り向かないが、キングには好かれていられない。残念ながら、四枚全てを掌握してるものはないが（ジョーカなしの為、これで事は足りたんだが）。

もうこれで行くしかない。この四人の内一人がキングを持っているが、それが天川という可能性は非常に低い！ しかしそれと同時に、天川という可能性も否めない。

確立の勝負。四分の一の駆け引き。俺は先程貰ったハートの二と三をセツトし、

「十二！」

因縁の数字を宣言！

部屋全体に、不穏な空気が漂う。火花は切つて落とされた。さあ

天川、出してみる！ キングなら

「キングなら、俺が三枚持っている」

「！」

俺の考えている事を、天川が代弁した……？

「と、お前は思っている」

ドクンッ。

と、心臓が高い音を鳴らしたのがよく解った。

「まさか、天川、お前……！」

俺が零した瞬間、ニヤリと笑った天川は一枚をバンと叩き付け、
「絶対王者^{キング}」

不敵に言った。二ノ宮が「丁寧に扱って下さい！」とかほざいていたが、そんなのは雑音に過ぎない。周りのざわついてる擬音を背後に、ダウトを言うまでもなく、その札に手を伸ばす。一度目を瞑った後、見開いて真実を見極める！

「馬鹿な……ッ！」

俺の手から、一枚がヒラヒラと舞い落ちる。表で落ちたそれを皆が確認して、一斉に嘆息。

「イエーイ！ 俺の勝ちー！」

右手でガッツポーズを掲げながら、天川は喜びに浸る。

「くっ！」

「おい龍！ 何やってんだよ！」

「俺なりに努力はしたんだが……」

「はっ！ これだからゲームオタクは！」

「黙れ二ノ宮ア！」

「……はっ」

「すいませんでした」

廣瀬に鼻で笑われると、結構来るものがあるな……。

全員ランプを机に放り捨てると「だから丁寧に扱って下さいよ！」と二ノ宮が言ってた気がするが、多分幻聴だろう。

「けどやられっぱなしは好きじゃねえな。もう一回やろっぜー！」

恵が意気揚々に再戦を持ち掛けるが、天川が手を振る。

「いや。今日遊んでる暇はもうない。やる事がある」

「はあ？ 勝ち逃げかよ！」

「そんなつもりはないさ。大体、このメンバーに負ける要素がないしな」

「何ですって！」

二ノ宮までもが、机を弱々しく叩いて憤慨する。

「おい、調子乗んなよ天川！ 今のは龍が馬鹿やらかしたただけだ！」

「そうですよ！ 私ならもつとマシな選択をします！」

何か反論したいところだが、生憎その立場じゃない。でも最善の策だったと思うんだがなあ。結局、ダウトなんて運勝負だし。

「頭の出来が違っただって。諦めろ、お前らじゃ無理だ。そもそも会長に勝る役員なんて、今時ウケないんだよ」

「何ですかその根拠の無い憶測！ こんな会長こそ今時ウケないですよ！」

「ホントだぜ！ 男の会長なんかむさ苦しいだけなんだよ！」

「むっ。お前ら言わせておけば言いたい放題言いやがって！ 一体誰のおかげで執行部が発足したと思ってるんだ、ええ！？」

何か親子喧嘩みたいな光景が広がっている中、廣瀬はパソコンを開いてキーボードを打ち始めた。「何してるんだ？」と俺が訊くと、「ブログ」と答えた。

「やっぱりこのご時世、女の子じゃないと今の時代じゃ生き残れないですよ！ ピッチピチで脂の乗った若くて新鮮な女子が一番ですよ！」

俺が「もう更新するのか、早くないか？」と訊くと、「第7話参照」と答えた。

「いいや！ それがそもそも間違ってる！ 美少女を出しとけば売れるのがおかしいんだ！ どう考えても内容は薄っぺらいのに、美少女がたくさん出れば売れるなんて変だろ！ 極端な話、今の時代ではエロければ何でも売れてしまっただけだから！ まったく度し

「難い！」

「確かにそうだぜ！ もっと熱くなるべきだ！」

「何だか論点がずれてないか？ それに内容が薄っぺらいというのは、これにも当てはまると思うが……」。

「少なくとも、お前達じゃ世の中の？ 美少女？ にははまらないだろ！ 夕は除いて。つまり、お前達にはもっと美少女っぽくなくても、春なんか駄目だよな！ 色っぽさが何一つないんだもん！」

「女の子にそんなデリカシーの無い事を言うなんて最低です！ それでも会長なんですか！ そもそも何で勝手な都合で――」

「もうその辺でいいだろう。それより天川、やる事があるはずだ」
俺が仲裁に入った後、天川は「あつ、そうだった」と思い出したように声を上げ、机を強く叩いて視線を集めた。

「こんな戯言を延々とぬかしてる場合じゃない！ 俺達には今すぐに解決しなければならぬ問題があるんだぞ！ 解ってるのかお前ら！」

ダウトの主催者が何を言うか。

「あー、今日のあれか……」

恵が腕を組んで深刻そうに言うと、他の皆も難しい表情になった。それもそのはず。俺達には、真摯に対処しなければならない難題が手元にあるからだ。

ある一人の女子生徒を執拗に狙った盗撮。更に、それを掲示板に何枚も貼り出された事件。その女子生徒にそんな事をされる理由は一切無いが故に、犯人の動機すら検討が付かない。内容だけを見れば男子によるものだろうが、私怨によるものだったらそうとも限らない。

どころか、大人の可能性だつて出て来る。あれだけ巧みな手を使っているのが、高校生だと言いたい。更衣室やトイレを隈なく調べたが、カメラの類は発見出来なかった。相当なやり手だと思われる。

しかし！ 我らが天川がそれを打ち破る作戦を考案してきているはずだ！ 自らの頭脳を執拗に自慢するくらいだ、犯人を見つけるなどお手の物！ これなら犯人もお手上げのはず！

「そういえば、作戦を練り直すとか言っていましたよね。ちゃんと考えてきたんですか？」

「すまん。すっかり忘れてた」

「それでも会長ですか！」

期待した俺が馬鹿だった。なら何故ダウトなんかやったんだ……。

「けど、今回のこれで解った事が一つだけあるぞ」

「一つだけかよ」

メグが吐き捨てると、「まあ聞け」と天川が促す。

「昨日の意味不明な盗撮写真の貼り出し。あれは、今日のこれの為にやってたんだ」

「？ どういう事ですか？」

「相乗効果を狙ったんだろう。その方が、より多くの目に効果を与えられるからな。どうやら犯人は、よっぽどあの子の写真を見て欲しかったらしい。えっと……」

「姫川理沙」

俺が言つと指を鳴らして、

「ああ、そうだ！ にしても、ナイスバディだよなあ……ジュルリ」

「天川。まさか会長たる者が、あの写真を見てニヤついていた訳じゃあるまいよな……？」

「H A H A H A！ そ、そんな事ある訳がないじゃないか！」

なんて典型的な反応。まあ男である以上、興味がそえられるのは仕方の無い事だろうが……。

「で、犯人はどう捕まえる？」

俺が訊くと、天川が腕を組んで「うーん」と首を捻る。

「あの写真、一階だけじゃなくて、全部の階の掲示板に貼られてたぜ。しかも全部同じ内容。ご苦労なこったな」

恵が呆れ気味に言つて、二ノ宮が頷いて賛同する。

「まったくです！ 他にやる事が無いんですかね！ これだから暇人は！」

お前にその台詞を吐く資格は無い。

「暇人の犯行にしては、随分と巧妙なんだがな」

俺は感心を含んだ息を吐きながら首を振る。

「うーむ……。現場を押さえられれば事は済むんだがな……」

天川が呟くと、恵が「それだ！」と身を乗り出して賛同した。

「どうせ今日も犯人は性懲りも無く写真を貼りに来るだろ！ それを待ち伏せしてとっ捕まえりゃいいんだ！」

これまた古典的な作戦を思い付いたものだ。それが出来れば誰も苦労はしない。そう言わんばかりに、天川が意見に駄目押しをする。「その？ どうせ？ ってのに信憑性が無いだろ？ 所詮俺達に犯人の心理なんか理解出来ないんだから。本当にまた貼りに来るか解らない。今回のこれで身を隠すかもしれないじゃないか。 第一、それがどんなリスクあるか解ってんのか？ 夜の学校だぞ？ 学校の怪談だぞ！？ 幽霊が出たらどうすんだよ……」

そこなのか！ 着眼点が明らかに俺達とは別だった。意外だな、天川なら自ら喜んで心霊スポットにも行きそうだが。

「そりゃそうだけどよ、可能性はゼロじゃねえだろ？」

「まあな。でもそれ言い出したら全部の意見通るからね？ どの想定も可能性あるって事だからね？ そいつはあまりにも粗末な話だぜ」

恵が軽く舌打ちして引き下がると、今度は二ノ宮が元気よく「はい！」と声を出して挙手した。

「はい、二ノ宮さんは元気、と……」

「はい！ って違いますよ！ 私も意見を考えたんですよ！」

「そうですかー。よく出来ましたねー。という訳で、他に意見がある人？」

「どういう訳ですか！ いいんですか？ この私の意見を、貴重な意見を無視しちゃっていいんですか！？ 革命的だと言うのに！」

「最近暑いだろ？ だから華麗にスルーな」

「理由がまったく理解不能です！ 食い下がりませんよ、私は！」

「あつ！ 暑い……熱い……カレー！ 華麗！ やば、俺うま！」

「何がですか！ この下らない応酬の時間が無駄なんです！ MO

TTAINAIですよ！」

「必死すぎワロリッシュ」

「ワロリッシュ！？ 何ですかその笑い！」

「……はあ、解ったよ。聞くよ、聞く聞く。だから解りやすく三

行で頼む」

「不遇すぎです！ いい加減にしないと怒りますよ！」

「さーいえっさー」

やる気の無い返事をした天川を尻目に、二ノ宮は「コホン」と咳払いして、その革命的とやらの意見を高々と発表する。

「私のボディーガードを総動員させて、学校に二十四時間体制で配備させます！ そして何も知らずに貼りに来た犯人を確実に捕らえるのです！ どうです？ 番町なんかより遥かにまともな意見でしょう？」

恵が額に手をやり「まだそれ言うかよ……」と赤面しながら言うていた。天川はと言えば、深くため息を吐いて首を振る。

「原理的にはメグと変わんねーだろ！ それにそんながつちり防衛されてるとこにわざわざ踏み込むやつ居るか！？ 居ないだろ！」

「だからこそ、二十四時間体制なのです！ これなら犯人はもう二度と犯行に及べません！」

「……ああ、そういう面で言えばいい策かもしれないが、今俺達は犯人を捕まえたいんだ。防止じゃなくてな」

「うーん、捕まえたい気持ちは解りますけど、無理にそうしようとして自爆したらどうするんですか？ そもそも、どうしてそんなに捕まえたいんですか？ それは警察の役目だと思います！」

「それは龍に訊いてくれ」

天川が手を振って俺を見る。二ノ宮は「いや、別にいいですけど

ね」と引き下がった。

二ノ宮の意見は概ね正しい。その策ならば、今回の問題だけでなく、別の細かな問題も解決出来るだろう。とても治安の良い学校になる事は間違い無い。

だが、今回はそれでは意味が無い。

「清算すると、約束したからな……」

俺は天井を見上げながら言った。まだ雨は降っていない。別のところの雨はまだ止んでないだろうが、その雨粒を、俺が犯人に付き付けてやる。

「まっ、捕まえるに越した事は無いさ。それが一番の再犯防止なんだからな。つつー訳で夕、何とかなりそう？」

「……………」

しばらくパソコンを睨んだ廣瀬は、首を振った。

「そうかぁ……。早速詰んだなあ」

部屋全体が沈黙する。元々答えが出ていた事だし、想定し得る状況だ。これが必然の有様。

しかし、諦める訳にはいかない。何としても捕まえる。もうあんな姫川は見たくない。

かと言って、何かアイデアがあるのかと訊かれれば困る。いつその事、嘘探知機を全員に掛ければ済む話なんじゃないか……？ いや、それだと郊外の可能性を探索出来ない。うーむ……。

「ん？」

突然恵が、ドアを見ながら声を上げた事で、全員が視線を恵に向ける。

「どうした？」

代表して俺が尋ねると、ドアを指差しながら言う。

「今誰かが、ドアの前で何かしてたぜ」

「意見箱ですかね？」

「龍、ゴー」

何で俺なんだと思いつつ、天川の指示で俺は立ち上がり、ドアを

開けて廊下を確認する。長い廊下には、誰一人として居なかった。見間違いないんじゃないか？ 一応、意見箱と貼り紙されてる小さなダンボール箱を揺らしてみる。

カサカサと、紙の音がした。挿入口のある蓋を開け、中にある一枚の紙を確認する。白紙の紙に三行だけ綴られていた。

「……！」

その内容に、俺は驚いた。部屋に戻って、机に紙を突き付ける。

「どれどれ」

皆が覗き込んで見る前に、天川が手に取って読み上げる。

「今回の事件について、話したい事があります。屋上で待ってます。

……？」

天川は怪訝な顔で紙を机に置く。

「何だこれ……？」

「よし、屋上に行く」

俺が回れ右して部屋を出ようとすると、「待て」と天川から止めが掛かった。

「何だ」

「都合が良すぎないか？ 俺達が手詰まった時にこんな紙。言い過ぎかもしれないが、畏な感じがする」

「何であろうがいいだろう。実際これで有力な情報が得られればそれはそれでいいだろう！ 他に何かあるなら、それはそれで適した対処をするだけだ！」

「むー……。まあいいや。とりあえず、俺も付いてく」

「オレも！」「私も！」

「お前らは留守番」

天川が命令すると、二人は悪態をつきながら渋々従った。

「さあ、行こ行こ」

こうして俺は天川に押されながら、執行部を後にした。

どんよりとした雲が空を支配している下にあるコンクリートで固められた屋上。冷たい風が小さな音を立て、その場にいる人間の体温を奪う。初夏とは思えない気温だ。

一人の男子生徒が、見えない太陽の方向に身体を向けていた。後ろ姿から察するに、背は平均的より少し低めで、短い黒髪をしている。

「お前が、意見箱に投書した生徒か？」

龍が問い掛けると、その生徒は身体を回転させ、前身をこちらに向ける。生徒は小さな顔に丸い眼鏡を掛けていた。一見すると、地味で目立たなさそうな印象。

俺達は生徒に近付き、早速龍が話を切り出す。

「今回の事件について話したい事があると書いてあったが？」

「君が、城古我龍君」

初めて聞こえた声は、男子のものとは思えない程にか細い声だった。

「ああ。執行部の投の内容を確認に来た」

「君はよく知ってるよ。この前の全校集会で凄い事、言ってたもんね。他にも、大高との乱闘とか。あの傷はただじゃ済まないと思うけど、もう大丈夫なの？」

「余計な心配はしなくていい。さっさと情報を教えろ」

「情報……ね」

生徒は視線を外し、俯く。短い髪が風に揺らされる。

……いかな、また変な考えが浮かんだ。もしこの通りなら、この事件は即時解決なんだが、これはあまりに短絡的過ぎる。無い。そんな手抜き漫画のような展開は無いはず。無いと信じたい。信じたいが……。

「もしかして……」

俺は思わず口走る。もう止まらない。

「お前が、犯人？」

「何っ！？ 貴様ッ」

「だー、待て待て！ ただの憶測だ！ 悪いな変な事言つて！ 癖
なんだよ、許してくれ、はははっ」

「うっん」

生徒は首を振って、顔を上げる。

「……は？」

思わず喉から間の抜けた声が発された。

「その通り。僕が、犯人だよ」

……。

一瞬、俺と龍は呆気にとられた。龍だって、本当にその通りだとは思わなかっただろう。それは言った俺も同じだ。ただの思い付きだったんだから。

しばらく硬直していた龍だが、次第に表情を強がらせ、生徒の胸倉に掴み掛かる。

「よくも白々と、貴様ッ」

「そんな……」

不意に、入り口から女子の高い声が聞こえてきた。

振り向いて見ると、そこには事件の被害者である姫川理沙がいた。写真の通りの端麗な格好だが、心なしかげっそりとやせこけた表情をしているように見える。これまでに、身体の中の物を大量に吐き出したに違いない。

「姫川、どうして？」

龍が訊ねる。

「保健室に手紙が来たの。屋上に来てつて。それで来てみたら……」
バッチグーなタイミングでこ来場つて訳か。

「それより、今のは本当なの、兵藤君……？」

どうやら知り合いらしい。兵藤と呼ばれた生徒は龍の手を振り払い、姫川に身体を向け、しかし依然として下を見ながら口を動かす。
「そうだよ。僕が、あの写真を撮ったんだ。最初のも、今日のも。」

全部、僕が、一人で。……一人で」

「……そっか」

特別怒る気配も無く、姫川は兵藤に歩み寄り。

何を思ったのか、兵藤を思い切りに抱き締めた。

「!?!」

突飛な行動に俺と龍は思わず口を開いた。巨の付きそうなバストに顔が埋もれた兵藤はもがいて顔を上げる。

「な、何を」

「犯人にそう言えって脅されたんでしょ？ 可哀想に……」

「そ、そんなんじゃ」

「姫川、それは一体どういう？」

「兵藤君とはね、中学校から一緒なんだけど、とても内気なの。修平といい勝負なくらいに。だから、いじめられる事が多かったんだ。その時よく、悪戯の代行役にされてたから。今回のもそうなんですよ？」

「ち、違う！ 僕は、自分の意思で！」

「そんなはずないよ。兵藤君はそんな事する人じゃないもん。他に悪い人が居るんだよね？」

「僕は、一人で……！」

「そういう事なの！ 兵藤君は悪くないから、怒らないであげて！」

「うむ……。確かに、盗撮なんて出来るようには見えない。もし他に犯人が居るなら、それこそ許すまじき事態だ」

龍が顎に手をやり推考する。

その意見には俺も賛同だな。大体、仮に兵藤が犯人でも、俺達を呼び出してわざわざ自首する理由が解らない。それこそ不透明だ。別の犯人が居るならなるほど、納得が行く。目に浮かぶ、兵藤君に罪を着せて、事件を解決させようとするあくどい魂胆が。

下劣な奴だな……。許さんっ！

「また、そうやって……」

「ん？」

姫川が笑顔で首を傾げると、

「またそうやって、信じない！」

対照的な兵藤が怒鳴って、姫川を押し退けて身を離す。ああっ、なんて勿体無い事を……！

「君はそうやっていつも僕を信じなかった！ 僕がどんなに言ったって笑って信じようとしなかった！」

「兵藤君……？」

「姫川さん、覚えてる？ 中学三年生の頃、卒業式の日。僕が中庭に呼び出した時の事」

「え？ そういえば、そんな事もあったような……」

「ッ！ その時姫川さん、何て言っただか覚えてる？」

「ごめん、覚えてない」

少しは考える素振りしろよ……。

「……姫川さんはね、最初『卒業おめでとっ』って言っただよ」「へえ」

「立て続けに、『また同じ学校だね』って言っただよ」

「そうだった……」

「その後も、『また一緒に話出来るね』とか『眼鏡変えないの？』云々……。マシガンの如くしゃべってたんだ」

「ああ……」

姫川が察したように、顔に手を被せる。俺も大体の筋は読めた。兵藤のこの様子に、卒業式当日に男女で話すような事。思い出話の類じゃなければ、もう一つしか無い。

「こくは」

「告白しなかったのか」

俺の言葉を遮って、龍が言った。兵藤は一瞬頬を赤らめた。

「そうだよ。僕は、姫川さんに告白しようと思ってたんだ。でも……」

「……」
「今度こそっ。」

「つまり」

「つまり私が、その機会を潰しちゃったんだ……」
「うおおっ！ 悉く俺の台詞が奪われて行く！ 何だこの流れは！」

「君にはまったくその意識が無かっただろうね。当然さ。その前だって、僕が言った事はさらっと流すんだから。そりゃそうだよ。僕はクラスじゃいじめ大将の格好の餌食さ。付き合いたくないのも解るよ」

「そ、そんなんじゃないよ！」

「あるよ！ 所詮君は猫のふりをした狼さ。自分の評判を気にして、一緒に居る人を選ぶんだからね。とんでもない魔性の女だよ」

「それは偏見だ。姫川は渡辺を何度も慰めたりしてる。決してそんな奴じゃない。渡辺だってお前と同じような境遇なんだろう？」

龍が仲介に入ると、兵藤君は鋭い目付きで龍を睨む。

「君に何が解るのさ？ この件では部外者だろ！」

「……………」

何か言いたそうだったが、ここは大人しく引き下がった。まあ確かに、龍には兵藤の過去に介入する道理は無いからな。

「確かに、渡辺君も僕と同じような雰囲気だったよ。クラスからもからかいを受けていた。でも、渡辺君のそれは？ 笑い？ を生むんだよ。僕のは？ 嗤い？ さ。消しゴムのカスを投げるのと、黒板消しを投げるのが違うのは解るでしょ？」

そいつはえらい違いだ。前者は痛くなくても、後者は痛い。

「あの時、僕は思ったのさ。高校で、もう一度告白しようって。

忘れられない形だね」

皮肉った言い方をすると、龍は再び胸倉を掴む。

「そうだからってこんな悪質な方法を選んだのか！？ 馬鹿げてる！」

「君に何が解るのさ！ 僕の気持ちなんか解らないだろ？ 強者の君に、虐げられる弱者の気持ちなんかさあ！」

「そんなのは関係無い！ お前がやった事はお前を虐げた奴らと同等の事」

「ジョー待って！ 離してあげて！」

姫川が言つと、龍は不満そうに兵藤を突き離す。 てか何、龍

ってジョーって呼ばれてるの？ センスねえなあ……。

「私の写真ならまだいい。でも、他の女子の写真を撮ったのはどうして？ そんな事しなくても、目的は遂行出来たでしょ？」

「相乗効果だよ。食事する時、前菜があると主食が進むでしょ？ それと同じだよ」

「だからって、そんな事を」

「痛かったでしょ？」

「……え？」

兵藤は声を薄らげて、魂が抜けたような表情で続ける。

「凄く痛かったと思うんだ。心に、強く突き刺さったと思うんだ。そして今もそれは、癒されてないと思うんだ。どう？」

「それは……」

姫川は苦しそうに胸を押さえる。

「僕もだよ。あの時、僕も同じくらい痛かった。苦しかったよ。？ どうして？ どうして？ って、何度も叫んだよ。僕の思ってた姫川理沙は、こんな人だったのかって」

「だからって、何故そんな酷い事を……」

龍が零すと、兵藤君は鉛色の空を見ながら言う。

「？人を罰するには、痛みが必要です。何故なら人は、痛みで初めて目を覚まし、己の罪を認識するからです。人を赦したいなら、与えるのです、痛みを。その痛みこそがあなたの痛み。痛みを分かち合う事で、人は生まれ変われるのです？」

宗教の教えなのか、どつかの受け売りなのか。感情のこもってない言の葉で羅列した後、姫川を指差す。

「君は罪人だ。罰せられるべきなんだ。僕に。だからやった。僕が執行人だ。でもこれくらいで赦されると思わないでよ。僕の今まで受けた痛みは、この程度じゃないんだからね」

「おい！ 中学校でのいじめと姫川を摩り替えてないか！ それはあまりに横暴だぞ！ 勿論、お前の気持ちをちゃんと聞こうとしなかった姫川にも若干の非はある。だがそれだけだ！ お前は今まで

の苦しみをその理由で姫川にぶつけようとしてる！ それは痛みを分かち合う事でも何でもない！ ただの非行だ！」

「五月蠅いなあッ！」

兵藤君は唾が吐き出されるくらい大きく怒鳴った。

「さつきから口出ししないでよ！ 僕はね！ 姫川さんが赦せないんだよ！ 心の底から憎悪が湧き出してくる！ 止まらないんだよ！ だから僕は――」

熱弁の刹那、時が遅くなった感覚に囚われた。

雨と共に涙を流してる姫川が再び兵藤君を強く抱き締めたからだ。

「……え？」

兵藤君の震えた声が細く響いた。

「ごめんねっ。私が悪いんだよねっ。兵藤君の気持ち、ちっとも気付かなかったっ。本当につ、本当にごめんねっ……！」

「……！」

虫唾が走ったように兵藤君は姫川を押し退ける。姫川が尻餅つく。「これだから嫌なんだっ……。君は優しすぎるっ！ 全て自分で背負おうとする！ 全てに赦されようとしてるっ！ 欲張りなんだよ、君はっ！ いいかい？ 僕は何があっても、この先どんな事があつたとしても、君を赦さない！ 君を好きにならない！ 嫌いだ！ 僕は君が大っ嫌いだ！ 例え全人類が君を愛したとしても、僕は絶対に愛さない！ 一秒たりともそうは思わない！ 僕はっ、君をっ、恨み続けるッ……！」

一気にしゃべって息を切らしてる兵藤君の肩に、龍の右手が乗った。

「もう、いいだろう」

兵藤君は野良猫が威嚇するような感じで倒れてる姫川を睨んだ後、ぷいと背く。

「天川、頼む」

ここで俺に持ってくるのかよ。嫌な役ばっかだな、俺。けどそれが仕事だから仕方ない。俺は兵藤君を手招きして、ドアへ導く。

「最後に訊きたいんだけど」

「何？」

「これだけなら、姫川一人を呼べば良かったはずだ。何で俺達まで呼んだ？」

「……傍聴人が欲しかったんだよ。この裁判のね」

「裁判……ねえ」

俺が裁判長なら、姫川は無罪にするところだが。

俺は肩を叩いてやって、宣告する。

「なら今度は、お前の有罪裁判だ」

次はお前が被告だぜ、執行人。

重い空から、誰かの雨が滴って来る。とても弱く、儚く、冷たい。俺の身体を濡らし、コンクリートに吸収される。

「……あはは……」

体育座りして膝の間に顔を埋めて、姫川が小さく笑った。こう見ると、渡辺とそっくりだ。

「告白されちゃった……。嫌われちゃったな……。どうしよ……」

「姫川……」

俺は膝を付いて屈み込む。

「頑張ったのにな……。私なりに、努力したつもりだったのにな……」

「聞いたよ、渡辺から」

「……修平、そんな事言ったんだ……。余計な事、言わなくて良かったのに。……ねえ、私、どうするべきかな……」

「どうって……」

「嫌われてるんだもん、私。このまま普通に生きていいのかな……」

「……」
「いいさ、いいに決まってる。姫川は、姫川らしく生きればいいんだ。さっきの事は気にするな。誰だって、嫌な時はある。それを乗

り越えて行くのが、生きて行くという事だろう。めげるな」

「……ふふつ。ありがとつ」

姫川はぴょんと立ち上がり、目を擦る。

「兵藤君には、赦して貰えるように頑張る。皆にも認めて貰えるように頑張る。我が儘かもしれないけど、それが私だから」

「……いいんじゃないか」

俺も立ち上がり、肩を叩く。

「応援してるよ」

「へへっ、ありがとっ！」

我が儘でいいさ。

それこそ、姫の生き様だ。

くその日の深夜く

街灯が照らす一筋の道があります。それを挟む建物は全て灯りが消されていて、誰も起きていない事を意味します。

そんな街中に一つの車が止まっていて、そこで三人の黒服の人間が怪しく物々交換をしていました。一方の鞆の中には白い粉が。一方の鞆の中には札束が詰まっています。俗に言う、薬物売買の実態でした。

その傍を、一人の青年が通り過ぎました。

それを見逃さなかった一人が「おい！」と声を掛けました。人間は止まり、顔だけで振り向きました。

「兄ちゃん、見ちまつたな」

スキンヘッドの男が言つて、

「ああ、これはいけねえ」

モヒカンの男が頷きながら繋いで、

「こんな時間に歩き回るなあ、どこの悪餓鬼だ？ あー？」

ドレッドロックスの男が顔を近付けながら言いました。
すると、青年は如何にも気分を害したような表情をし、言い放ちます。

「汚い顔を近付けるな。臭いだろ」

「あんだとこの餓鬼い！！」

ドレッドロックスの男が殴り掛かると青年は素早く下がって避け、目にも留まらない速度で男を蹴り上げました。少量の唾を吐いた男は地面にうつ伏せで崩れました。

それを見ていたモヒカンの男が口笛を吹いて称賛します。

「やるねえ！ 今の蹴りは素晴らしいねえ！ でも残念だったなあ、俺達はその辺のヤンキーとは訳が違うのよお」

そう言つと、胸ポケットからサバイバルナイフを取り出し、構えます。

「ほお」

青年は短く感嘆しましたが、表情に色は乗っていません。

「俺達は人を殺す事は慣れてんのよ。それが本業だからなあ。今なら許してやるぜ？ 素直に財布とケータイを置いてけよ」

「お前らに渡す物は無い。悪いが、粉を吸う趣味は無いんでね」

「……この糞餓鬼が。高石組を敵に回した事を後悔しな！」

男はナイフを青年の腹に向かって突き放しましたが、青年は軽やかにサイドステップしてそれを避け、右手で頭を掴み、思い切り地面に叩き付けました。男の頭からは多少の血が流れ出て、やがて気絶しました。

その様子を見ていたスキンヘッドの男は、表情を引き攣らせます。

「なっ、何だてめえっ……。くっ、これを見るっ！」

スキンヘッドの男はコートに隠すように吊るしていた自動式拳銃を引き抜き、青年に向けました。

「玩具だと思つなよ？ 本物だぞ？ 撃つたらお前の身体に風穴開くぞー！」

「高石組、ねえ」

青年はユラリユラリと身体を揺らしながら、スキンヘッドの男に近付きます。

「な、何だ！」

「まだその名を名乗ってたのか」

「……はあ？」

「親父が死んでから、衰退したと聞いたんだがな」

「お、親父っ……？」

あ、あ、あ……。まっ、まさかつ、ああ

っ、あんた」

男が驚いてる間に青年は懐に入り込み、腹に一発の拳を放ちました。男は小さな悲鳴と一緒に血を吐き出し、意識を失って後ろに倒れました。

「脆いな」

青年が呟いたその背後には　ドレッドロックスの男が両手を合わせて振り被っていました。力を思い切り溜め込み　青年の後頭部を碎かんと振り下ろします。

しかし、青年はそれを背に向けたままで、いとも簡単に左手で受け止めました。

「ぐっ！？」

「俺が餓鬼の頃は、まだ手応えはあっただろう」

残念そうに言って、右手を加えて力を入れて、背負い投げました。後頭部から落ちた男は嗚咽を漏らす暇すらなく一瞬で気を失い、その場に埋もれました。

「……話にならないな」

青年は動かない三人向かって言葉を吐き捨て、その場を悠然と立ち去りました。

「生徒会執行部……。お前達は、これより手応えがあるのか……？」
期待と失望を混ぜ込んだ、不穏な余韻を残しながら。

第11話「勲章は傷跡とは限らない」

[illegible]

服装が完全に夏服に移行したこの六月。窓が空いた執行部室の間達は、ワイシャツ又はブラウス姿で、夏に相応しい格好をしている。まだそこまで暑くはないが、もうしばらくすれば鳴咽を漏らす程になるだろう。天気予報によれば、今年は猛暑になるらしい。

そんな生徒会執行部にて、メグがケータイを見ながら叫んだ。ちなみにこのケータイ、以前俺にネタにされて腹が立ったから買ったそうだ。悪く言えば俺のせいだが、良く言えば俺のおかげだよな。にしても、やはりピンクはメグには似合わない。指摘するべきだろうか。

とりあえず、何で叫んだのか訊いてみる事にしよう。

「どうしたんだ、メグ？　まさか請求とかじゃないよな？」

「まだどこにも登録してねえよ！ それよりこれ！ 第0話だ、0話！ おかしいぞこれ！」

「はあ？　０話？　所謂プロローグ的なあれか？　あの手抜きなの？」

「言っ
ていい
のかそ
れ！？
いやそ
んな事
よりも
、役員
紹介だ
！」

皆も見てみるよ！」

一体何を騒いでるんだメグは。あんなのに大した情報は載つてないはずだが。

俺達は一斉にケータイを取り出し、プロローグのページに飛ぶ。

一応言うておくが、決して工作ではない。

俺は役員紹介の部分を見ているが、特に変わったところは見られない。一般的なデータを公開しているだけだ。他の皆もメグの言う事を解せない様子だ。俺はさっきと同様に言う。

「普通の手抜きプログラマーだと思っけど？」

「どうしてそんなに手抜きって言いたいんだよ！ いや、おかしい」

だろ！ オレのところ見てみるよ！ なんか変だと思わねえか！？」
言われてみると……。うん、確かに変なところはいくつかあるな。
ちゃんと推敲するべきだったか。

俺は言う。

「確かに、歯向かう奴はしばくっていうのはどうかと……」

「そこじゃねえ！」

春が言う。

「男っぽい女っていうのは、ちょっと変かもしれません！」

「そこでもねえ！」

龍が言う。

「留年生って公開されてるのは恥ずかしいな」

「そうじゃねえよおお！」

夕は言う。

「……プッ」

「笑ってんじゃねえ！」

「じゃあ何だよメグ」

俺は呆れながら訊いた。すると、メグは顔を真っ赤にして訴える。

「何でオレだけ体重が載ってるんだよ！」

ん？

……あ、本当だ。47kg。はつきり書いてある。ていうか俺が
書いたからな。当然ではあるが。

……だから何？

「そんなのは俺だって載ってるぜ？」

「そりゃ男はいいだろ！ でもオレは女だぞ！？ 二ノ宮と廣瀬は
秘密と機密なのに、何でオレはどっちでもないんだよ！」

「やれやれ何かと思えば……。メグは一体何を言っているんだ。最
早、思想と言動が支離滅裂だな。」

俺は「はあ」と息を吐いて、首を振りながら言う。

「何度も言った気がするけど、メグは女を棄てるって言ってたじゃ
ん。だったらまずは、女らしい羞恥心を棄てる事から始めないと駄

目だろ？」

「そういう問題じゃねえだろ！　なんつーか、モラルがなってねえだろうが！」

「まあ女子にしては、ちょっと太ってるかもな。今は50いつてるのかい？」

「笑いながら言うんじゃねえよ！　それにそんな太ってねえから！　ていうか悪化してねえから！」

「解った解った。文面上はそうしとこうな」

「解ってねえだろ！」

「という訳で、皆のテスト結果を見せて貰う！」

「どういう訳だああああああああああ！」

流れるに、龍の役割をメグが果たしてしまった。

「いや、本当にどういう訳だそれ」

遅れて、龍が本家のツツコミを入れてくる。

「先日、目安箱にこんなのが入っていたのさ！」

俺がクルツと回転しながら一枚の資料を龍の目の前に差し出す！

？天川立ち？決まったっ！

「？ずっと思っていたんですけど、生徒会執行部って頭おかしいんですか？　友達に聞きましたけど、大高に喧嘩を吹っ掛けるといい無茶苦茶な服装指導の強行といい……。正直、こんな事を無理矢理やらされて山高の秩序が乱れるようなら、去年のように生徒会が一任すればいいと思います。？だと」

誰も見てねえのか！　恥ずかしっ！　何か俺だけ頭がおかしいみたいだ……。

「これがそれとどう繋がるんですか？　たかがちっちゃな中傷文じゃないですか」

俺は「うむ」と頷いて、座り直す。

「確かにその通りだ。こんなのが入っているのは日常茶飯事だから気にする事はないんだが、俺はこれを見て思った！　ここの学力は、果たしてどれ程のものなのだろうかと！」

その瞬間、皆に激震が走った！ はず！

「よって会長である俺は、皆の学力を把握する必要があると判断した！」

「な、何ですかそれ！ まったく理解不能です！」

春が机を叩いて憤慨するが、それはただの瑣末な反抗。気にする事は無い。

「実際にこの投書通りだったら、取るべき行動を取らなければなら
ないからな！ 低学力者が執行機関に身を置いてるなんて恥ずかし
いし。……まさか、赤点取ってる奴なんか居ないよなあ……？」

俺の台詞に、メグだけが視線を逸らした。

「異論はないな！ いや認めない！ さあまずはメグからどうぞ！」

「またオレからかよつ。いや、ここはあえて龍からという選択肢は

」

「ないね！ この流れは必然に極まりッ！ 今更変えるなど言語道
断！」

「そついうのを横暴つて言うんだろつが！」

「だったら会長権限だ！ テスト結果を今すぐ迅速に見せる！」

「うわ、汚え！」

「おいおい侮るなよ？ ちゃんと事後拭いてるから大丈夫だつて」

「何を想像してるか知らねえけど、とりあえずそつちじゃねえよ！」

「冗談はともかく、早いとこ見せるよ。笑わないから。ははは」

「見る前から笑ってんじゃねえか！ は、解ったよ！ 見せ

りやいいんだろ、見せりゃあ！」

そつやや自暴自棄気味に言うつと、メグは鞆を漁り始め、一枚の一
回り小さい紙を取り出し、乱暴に裏側で机に置く。

「ほらよ！ 見たきゃ見ろよ！ ケツ！」

メグは急に卑屈になってしまった。でもそんなの関係ねえぜ！

俺は生唾を飲み込み、慎重に紙を裏返す。それと同時に皆紙を覗
き込む。

『うわぁ……』

「ハモった!？」

メグ以外がハモってしまう程、酷い内容だった。いや予想通りだけれども。

900点満点のテストにおいて、合計が150点にも及ばない。当然全部赤点である。見事に期待を裏切らないのは嬉しいが、狙ってやってるなら是非やめて欲しい。勿論そうじゃないのは解ってるけど。

「予想的中なのが凄く残念だ……」

「ひ、酷いです……。この世の終わりを見ているようです!」

「ゆとり教育の失敗はここまでのものなのか……」

「プギャー」

「ぐっ……」

俺達の感想に悔しさを拳に表すメグ。しかしそれは自分の責任。それを解消するには、自身の努力しかない。察するにそれがうまく出来ないんだろうけどさ。

よし、今日はその原因の解明といこうじゃないか!

「メグはいつもどうやって勉強してるんだ?」

俺は当たり障りのない質問をする。もしかしたらこれに原因があるかもしれない。初歩から誤ってるイメージがぶんぶんするのは、言うまでもないだろう。

「そりゃあ、書くんだよ」

「何を?」

「教科書を」

「教科書を? ……え、どういう事?」

「だから、教科書を写すんだよ。ノートに」

うん? 言い方がおかしいな。教科書の文や公式を写すってんなら話は解るが、教科書を写す? 教科書を……写す?

まずいな、嫌な予感がしてならないぞ。

「……今、それある?」

「おう、あるぜ」

「ちょっと見せて」

メグは一冊の無題ノートを取り出し、俺に手渡す。

俺は受け取り、すぐさまページを手早くめくる。

めくる。めくる。めくる……っ！

「なんという事だ……」

俺は愕然とし、ノートを広げたまま机に向き合う。そのノートを龍が見て、春が見て、夕が見て、俺と同じ反応をした。一方のメグは、意味も解らず首を傾げている。

ここが劇場だったら、迷わず「皆様には既に想像出来ているでしょうが」と言う場面だ。何故ならばこいつ、教科書を丸々写しているのだ。一字一句丁寧に。囲みも、色も似せて。そっくりそのままに。

言うなれば、完全なる教科書手書きコピー。もうこのノートが教科書と言っても過言ではない程の出来だ。普通に出版社が出した教科書と同じように使用出来る。増してやそれが手書きならば、十二分に評価出来る頑張りようである。

だが！ しかし！ これでは！ まるで意味が無い！

素直に認める！ これは本当に凄い！ もしこんな課題があったら、絶対に俺はやらない！ 投げる！ やる意味が解らないから！ だが！ しかし！ これが！ 彼女は己の勉強だと言っただ！

こんな日も暮れるような作業を！ 彼女は容易く勉強と言っただ！ 間違いなく、高校生の勉強方法では無い！ 要点を絞り、覚え、演習！ これを繰り返すのが理想の勉強！ 高校生としての嗜み！

だが！ しかし！ これこそ！ 彼女が編み出した勉強方法！

メグは努力家なんだ！ とても普段の雰囲気からは想像出来ないくらい、努力家だ！ その努力精神の大きさが災いして、こんな悲劇を生んでしまったのだ！

「それすげえ時間掛かったわ……。気付けば朝になってるなんてざらだったんだぜ？」

そりやそうだろうな！ 範囲外のページまで写してたらそうなるわ！

「まさか、これを全教科やったのか……？」

龍が恐る恐る訊くと、

「おう！ 手が尋常じゃなく痛かったけど、頑張ったぜ！」

メグは膨らみの無い胸を張り、眩しすぎる笑顔を作った。

「……くっ！」

「ん？」

その笑顔に、俺達は心を打たれる。

こんな……。血の滲むような努力をしたのに、テストの結果がこんななんて……。いや、勉強方法が悪いのは承知の上だ。承知の上だけでも！ あまりにも残酷すぎる！ さほど努力せずに高得点が取れる生徒と自分なりに努力を積み重ねても点数が取れない生徒！ どっちが優良だ？ 後者に決まってる！ 将来性は確実に後者の方が高いんだ！

なのに、これで通知表に一が付くなんて、俺は許せない！

「メグ！ 今すぐこのノートを先生に提出して来るんだ！」

「え？ 別に提出しろとは言われてねえよ？」

「いいから！ これを提出すれば、関心意欲態度は確実にAを取れるはずだ！」

「マジでえ！？ よし解った、行って来るぜ！」

メグはノートを手に取り、風の速さで部屋を飛び出した。きつと先生にもメグの熱意は伝わるはずだ！ 伝わなかったら俺が直訴……いや、生徒会執行部が直訴してやる！

「さて……。次は誰のを見ようかな」

俺は座り直し、仕切り直す。

「じゃー春のでも見ておくかー」

「何ですかその、暇潰しみたいな言い方！」

再び憤慨する春。

「だって今メグ居ないんだもん。こういう時こそ春の出番だよな！」

「そんな不名誉な出番は願ひ下げですよ！」

「どうせリアクションに困るような成績なんだろう？ 何となく解つてから安心しろよ」

「何言ってるんですか？ 私の設定忘れたんですか？」

俺は「んー」と頭の知識を絞るが、

「すまん、忘れた」

「それでも会長ですか！ まったく、私は飛び級ですよ！ まだまだピッチピチの十五歳なんですよ！ あなた達とは違うんですよ！」

あー……。そういえばそんな設定あった気がしてきた。ていうか、別に十五歳だけがピッチピチって訳じゃないから。十台はまだまだ十分ピッチピチだろう。

……はっ！ 飛び級ということはっ。

「まさか、成績良いのか！？」

「ふふーん！ これを見れば解る話です！」

春は煌く靄からテスト結果を取り出し、自信満々に机に示す。この中に、覆りよりの無い事実が隠されている……。春のこの先の命運が掛かっているのか……！

俺は慎重に手を伸ばし、それを手に取り……。十分な時間を費やし息を吸い 息を吐き 遂に意を決して刮目する！

「そんなに時間掛ける必要があるんですか！？」

こ、これは……ッ！

「普通じゃねーか！」

思わず俺は机にそれを叩きつける！

極めて普通！ 200位中100位！ オール平均点ジャスト！ 寧ろこんなにも平均点ちょうどこの点数を取れてる事に驚きだ！

まさしくミス平均！

「でしょう、でしょう！」

「何その踏ん反り！？ 別に何も凄くねーよ！？」

「逆に言えば、何も悪くないのです！」

「そりゃまあ、そうだな」

「でしよう、でしよう！」

「だから何だよそれ！ 腹立つ！ それにこの結果、飛び級って設定がまったく活かされてねーよ！？」

「はあ、困るんですね！ 飛び級だから頭良いつて思われるの！ 偏見ですよ！ まったく！」

「普通そうだろ！ 一体何の要素で飛び級してきたんだお前！？」

「まさにミステリーですね！」

自分の事をミステリーって言うてどうすんだこいつ！ いやまあ、俺はその理由を知ってるけれど。せめて春には自信の謎を解明する意欲を持って欲しいものだ。

さて、ネクストだが……。

夕に龍。究極の二者択一じゃないだろうか。どっちに踏み入れても、こっちがただでは済まない気がしてならない。

「よし、夕。テスト結果を見せてみる」

まず俺は、夕をターゲットにする事にした。

しかし当然ながら、首を振られた。

「駄目だ。俺には生徒会執行部全体の学力を見て、判断すべき事がある。これは会長としてやらねばならない事なんだ。解ってくれ」

「嫌」

「ぐっ」

解ってくれない。いや、解ろうとしてないんだろ。どうしても見せたくないらしい。余程悪い結果なんだろうか。

「大丈夫。笑わないから。誰にも見せないから。な？」

「嫌」

「我が儘はやめて欲しい。こっちだって強引な手段は取りたくないんだ。大人しく結果を渡せ。な？」

「嫌」

「……仕方ない。汚いやり方になるが、これは夕の選んだ道だっ！」
「（ガチャッ）」

「！」

俺が飛び掛ろうとした瞬間、夕がパソコンを構えた。つまりこれは、「動けば個人情報やネットに晒す」という事か！ 小癪な！
しかし、俺にも知られたくない事はある。増してやそれをネットに流されては、打つ手無しだ。

「ちっ……。仕方がない、夕は諦めるとするか……」

「」

已む無く俺は引き下がると、夕は上機嫌にパソコンをいじり始めた。

俺は最後の標的、ゲームに集中している龍に照準を向ける。

「これで最後だ、龍。テスト結果を見せろ」

「いきなり最後ってどういう事だ」

いや、そういう意味の最後って訳じゃないんだが。

「痛い目に遭いたくなかったら、素直に結果を見せるんだな！」

「見たければ見るといい。ただ今は手が離せない、俺の鞆から漁ってくれ」

「え、いいの？」

「別に隠すような事じゃないからな」

ほほう、やけになったのか？ ゲームオタクが成績を他人に見せるといふのは一般的には自殺行為！ 永遠にネタにされていく運命に位置付けられる！ 龍はまだその恐怖を知らないのだ……。ならば俺が教えてやろう！ ファイアーを！

俺はスクールバッグの中のクリアファイルから一枚の紙を発掘し、今それを視界に捉える！

「……！？」

今見たのは、幻想だな、うん。そうに決まってる。俺は目を擦って、本当の真実を見極める。

……あれ、見える数字が変わらない。もしかして俺の目がイカれたのか？ 錯視？

いや、文字は嘘を吐かない。ならば、これが、真実だと言っのか

……？

「何……だと……」

俺の手から、紙はひらひらと机に舞い落ちる。

「何ですか？ 私にも見せて下さい！」

春が机の紙を見下ろして、驚愕する。

「えーっ！ 信じられないです！」

夕は声にこそ出さなかったが、戸惑いの表情を隠せていない。

それもそのはず。

学年順位、11位。

組内順位、4位。

「嘘だア

！」

俺は叫んだ！ 己の感じているものを一字で表し叫んだッ！ 更に俺は熱弁をかます！

「ありえない！ ありえないぞ龍！ お前のキャラ的位置付けはなんだ？ ゲームだ！ オタクだ！ オタクキーだ！ 深夜までゲームをするという馬鹿げてる行為を毎日容易に行う救いよしの無い駄目人間のはずだ！ オプションとしてめんどくさがり屋という設定も付加されていたはずだ！ そのお前が！ こんな点数を取り、こんな順位を取る事は許されないッ！！」

それに何より、何故俺より順位が上なんだ！？ ここは会長が一番であるべきだろう！ いやもう春に越されてるけど、男子陣で一位であるべきだろう！

「お前の勝手な妄想で俺を決め付けるな。人格がどうかしているぞ龍に言われたくないわ！

「言っただろう。テスト前にゲームが没収されたって事を」

「聞いたけど、それがこれとどう繋がる！」

「それに加えて、詩織様による大変お節介なテスト対策講座……まあただの勉強会があったという訳だ」

「し、しかし、それだけでこんな順位を取れるなど……！」

「アベレージ98に教われれば、嫌でも成績は上がるというものだ」

「アアアベレージキュウジュウハチイ!?」

な、なんだそのふざけた数字は！ 余裕の1位じゃねーか！ 只者では無いと思っていたが、まさかその部門でも上手だったとは！ 是非とも俺も教わりたい！ 色々と！

「な、なるほど……。お前のおかしなステータスは、詩織さんが原因だった訳か……。とても遺憾な問題だな」

「良い事だと思うんだが」

そんな事あるか！

ゲームオタクは危険事項であるべきなのに、龍の場合それが立場を左右する事がない、おまけ事項になっっている気がしてならない！ 本来ならばいじられる対象なのに、いじったらいじったで危険だし、触らぬ神に祟り無しという状況だ！ 俺はこの情勢を受け入れられない！ くそう、いつの日か必ず龍を徹底的にいじってやるつ。で、取るべき行動というのは取るんですか？」

春の質問に、俺は「うむ」と腕を組んで少し思考する。

「どうやら問題児はメグだけのようだからな。夕のは知らないけど、そこまで悪くはないだろ、多分。だから何もしない。皆頑張っただけ強するように！ 来年は受験だからな！」

「私は何もしませんけどね！」

相変わらずの春の態度に、俺は思わず嘆息する。

「いい加減その考えを改めないか？ ニートに得る物は何も無いぞ？ ただの社会のゴミだ」

「ひ、酷い言われようです！ ニートにはニートなりのニートな理由があるんですよ！ 想像だけでゴミ扱いはいけないと思います！」

「事実なもんはどうしようもないって。ま、来年には考えが変わってるかもしれないから、今は何も言わないでおくけどな」

「期待を裏切る事、間違い無しですね！」

ふむ、流石は俺。瞬時に春の一言に噛り付くことによって、俺の成績暴露タイムを避ける事に成功した。特に悪くはないが、良くもないから……。今のところ、夕のを除くとビリ二だし。

「さーて、残った時間は何をしようか」
ガラガラ。

俺がしゃべってる最中にドアが開く。メグが帰って来たようだ。
「す、すいません！　お願いがあつて来ました！」

じゃなかった。ワイシャツ姿の山高生だった。見るからに一年。
短い茶髪にきちつとした服装……ああ、エキストラだから細かい
描写は省く！　どうせこの場限りだからいいよな！

「どうした？　急な事か？」

「は、はい！　今三人で帰ってたんですけど、途中で大高の人達が
居て……」

出ました大高。もう関わりたくないんだけどなあ……。

「居て、どうした？」

「二人が何故か喧嘩売っちゃって、連れて行かれちゃったんです！
どうにかしてくれませんか！？」

はゝあゝ？

「ふざけんなよこのへっぽこうじ虫！　そんなの自業自得じゃ
ねーか！　大高の喧嘩売るって自殺行為する方が悪いんだよ！　考
えなしの盆暗共がつ！　この××××がつ！　たっぷりお仕置きさ
れちまいな！　そんでお前は帰ってママのおっぱいでも吸ってな！
んで震えな！　ケツー！！」

とても言いたいところだが、それではあまりに酷なので今は何も
言わない。まずは状況分析からだ。

「その二人はどうして喧嘩なんて売ったんだ？　相手は大高だぞ？
ただじゃ済まない事は解ってるだろうに」

「そうなんですけど、何か大高の人達が遠回しに山高の悪口を言っ
てたんです。そしたら二人が掴みかかっちゃって……」

すまん、さっきの訂正。その二人はめっちゃいい人だ。山高の誇
るとても有能な生徒だ。ただ一つ。それはこちらから喧嘩を売った
んじゃないと思うぞ。

「僕は止めたんですけど、二人と三人は近くの工場に入って行っち

やって……」

「そして君は逃げて来たと」

「僕に喧嘩なんて出来ませんから。助けを呼ぼうと思って思い付いたのが……」

ああ、ここ、生徒会執行部ね。なるほど、ここの知名度は悪い方向に膨らんでいるようだ。成績云々よりも、早急な対応が必要だよ。うだ。

「お願いです！ 二人を助けて下さい！」

二人の為に頭を下げる様は、とても無様だが、とても勇ましい。うおお、マイハートが揺らいだぜ！

「よし解った。俺達に任せろ、エキストラ君」

「エキストラ！？」

「龍、出撃の準備だ！」

「何でそうなる？」

「こういう時こそ龍の出番だろ？」

「この上なく不愉快だ」

「いや、悪口じゃないから。頼むよ龍」

「悪い、今は手が離せない」

このゲームの虫があ！

「その話、本当かよ？」

エキストラ山高生の後ろに、いつの間にかメグが居た。ノートを提出しに行き終えたようだ。

「はい！ あの、関野さんですよ？ お願いです！ 二人を助けて下さい！」

「場所解るか？」

「はい！ 案内します！」

「頼むぜ！」

二人は一気に走って行ってしまった。メグは本当に行動が早い。それに比べてこの男は……。

「おいおい龍、出遅れてるぞ」

「言ってるだろう、今手が離せないんだ！　ゴルバチョフが強すぎるんだよ！」

「知らねえって！」

「ここだな」

「はい、間違いないです」

「よし、お前は隠れてろよ。面倒になるからな」

「はい。関野さん、気を付けて……」

オレは今こいつの案内で、周りに砂が積まれている、一つの工場に着いた。いつもは絶賛稼働中のはずだが、今日はお休みらしい。それをいい事に大高が縄張りにしてるってとこだな。

「　　ラア！　もういっぺん言ってみろお！」

「！」

閉じている扉の中から声が聞こえた。きっと今のが大高生だな。

「山高はいい高校だ！　お前らの廃れた学校なんかとは違う！」

別の声。これは山高生。

「そうだ！　さっきの言葉を撤回しろ！」

更に別の声。もう一人の山高生か。

「あゝ？　あんな田舎くせえゴミ溜めの場所かあ？」

最初とは違う声。二人目だ。

「ゴミはお前らだ！　こんな風に殴ったりする事しか出来ない、能無しだ！」

「……言ってくれんじゃねえか！　そんな能無しにやられてるお前らは何だあ？　ミジンコか？　ギャハハハハ！」

五つ目の声。それと同時に立て続けに聞こえる打撲音。今まさにやられてる感じだ。……これ以上は放っておけねえ。

オレは扉をゆっくりと開ける。本当は早く開けたいが、案外重い。開け終わると、中に居る五人が全員オレを見ていた。胸倉を掴まれてる山高生を見ると、顔は腫れ上がっていた。直視していられな

い。もう片方も同じ様子で、地面に放られている。

「そこまでにしとけよ。そんだけボコれば十分だろ」

「出やがったな、関野恵い！」

三人中で山高生を掴んでいた一人が手を離し、オレに向かってくる。やけに好戦的だ。その短い黒髪のおかげで、血眼がよく見える。

「覚えてるかあ？ 去年、てめえにやられたんだけどよお」

「あゝ……。わりい、殴った奴を全員を覚えられる程、頭良くねえんだわ。今回のテストも全部赤点だったしよ」

「だろうなあ！ 思った通りだ」

三人が愉快そうに笑っている。畜生、事実なだけに反論できねえがすげえむかつく。どうせお前らも頭悪いだろ。

「お前らは下がってるよお。 つつー訳でだ、去年の借り、返させて貰うぜえ！」

「どういう訳だ！」

向かってくる拳をオレは軽く避け、ジャブをかます。

「へっ！」

反応いいなこいつ。三発やったのに、それを全部避けるか。

しかも反撃も速い。右ストレートから右蹴り、回し蹴り。相変わらず、大高は喧嘩に関しては高度な技術を持ってやがる。

「！」

気付くと、オレは壁際に追い込まれていた。ちよつとまずいかもしれない。壁ハメつてのがあってだな、これはかなりいけねえ。

「オらあ！」

くそっ！ 蹴り上げまで避けてくるか！ 次は右脚を。

「！？」

な、何だこれ！？ 右脚に変なのが付いてる！ 釘が二本左右に付いて、それに線上の何かが通ってる。しかもかてえ！ 右脚がまったく動かねえ！

「はああ！？ んだよコレっ！」

「そいつあ合金ワイヤーだあ。お手製のなっ！」

「っ！」

今度は右腕に！？ くそっ！ なんつー力だ、抜ける気がしねえ！
「ほら、どうしたあ！？」

いつの間にか左脚まで！ やべえ、反応なんかしてる場合じゃなかった！

「ハハハ、残るは左腕だけだなあ？」

「ちっ！」

オレは左腕でやつの頭を掴もうとしたが、あっさりかわされ仕舞いには左腕まで拘束されてしまった。

「マジかよっ……」

オレは動こうとするが、出来ない。何だよこれ、固すぎだろ！
壁に突き刺さってんぞ！ どんな仕掛けなんだ！？ こんな漫画みてえな……！

「無理に動かない方がいいぜえ。肉が裂けるからなあ。流石の俺も、そこまでむごい光景は見たくねえんだよお」

「畜生……！」

そいつはオレに顔を近付ける。

「どうだあ？ 屈辱だろお？ 前は俺がその役だったんだぜ、ハハハハあ！」

「うるせえよ！ 息くせえんだよゴミクズがあ！」

「ほお？ この状況でこんな事が言えるたあ、本当にバカだなっ！」
「がっ！」

久しぶりに顔を殴られた……。いてえ……。

「この帽子、なかなか可愛いじゃねえかあ……。彼氏からの贈り物かあ？」

「ちげえよ。頭が寒いから被ってるだけだ」

「あゝ、そうかそうかあ。じゃあ今はいらねえよなあ！」

理由になつてない理由で、帽子が飛ばされる。こいつくらいに短い髪が曝け出された。

「ちよっと伸びたなあ。どうだ、嬉しいかあ？ ん？」

「触んじやねえ！」

「威勢だけは立派だなあ。どおれえ、もう一度戻るかあ？」

そう言つと、そいつはバリカンを取り出した。嘘だろ、何でそんなの持つてんだよ！？」

「俺はねえ方がいいと思うぜえ？」

「だったらお前とは趣味が合わねえな！」

「そうかあ。そいつあ残念だあ」

スイッチを入れて、徐々に近付ける。抵抗するにも出来ない。

うわあ、嫌だな。またハゲるの。最初はそれ程気にならなかったけど、鏡を見る度に嫌な気分になる。腹の底で何かが煮えてるような、不快な感覚。

……嫌だな。また、ああなるのは。

「そこまでだ！」

『！』

なんとか間に合ったか。予想とは裏腹に、恵がピンチだ。何故だか知らないが礫にされているぞ？　どんなプレイをする気だこいつら。

さて、話を戻そう。

「恵を放せ。後、そこに転がってるうちの生徒もな」

「お前、あれだろお？　副会長だなあ？」

一応恵も副会長なんだが。

「そうだな」

「山ノ下高校生徒会執行部副会長、城古我龍。通称、龍。ナイフで刺されても死なない男」

不本意ながら、変な方向で有名らしい。だがしかし、

「間違つてはいないな」

「俺あ興味がある。本当に死なないのか、確かめてえ」

男は懐から切れ味の良さそうなナイフを取り出した。おいおい、

常にこんな身に付けてるのかこいつら。逮捕されるぞ。まったく、
何で警察は動いていないんだ？ 無能にも程がある。

それよりも、今の言葉を利用すれば、この場を穩便に済ませる事
が出来る。

「それを確かめさせたら、そいつらを放してくれるか？」

「ああ、勿論」

「よせ龍！」

恵が警告してきたが、それだけで終わるならその方がいいに決ま
ってる。

「いいだろう。一刺しさせてやる」

「出血大サービスってか？ ハハハハ！ …… 保険を掛けてえ。壁
に寄れえ」

俺は言われた通りにすると、両腕に何かが巻き付けられた。壁に
は釘が刺さっていて、そこに何かが通っているようだ。

「これは？」

「合金ワイヤーだ。無理に動かそうとするなよ？ 肉が裂けるか
らなあ。俺はそんなむごい光景を目にたくねえんだよ」

なるほど、確かに動けない。しかも結構食い込む。無理に引き抜
こうとすれば肉は裂け、とんでもない出血に繋がる。保険というの
はこういう事か。

……普通に感心出来る技術だ。これをもっと別方面に利用すれば、
もつとまともな事が出来ると思うんだが。

「本当に死なねえんだよなあ？」

「さあ？ 今度は死ぬかもしれない」

「死なねえんだなあ！？ 行くぞあ！」

本気がこいつ。……あ、本気の目だ。何も血眼にならなくてもい
いだろう。

男はナイフを構えて、俺に向かって放つ。

俺の腹に何かを通る、嫌な感触が走った。その証拠に、腹からは
血が溢れ出している。

「ハ……ハハハハあ！ 本当だあ！ 本当に死なねえ！」

男は喜んでいるが、連れの二人は浮かれない表情をしている。引いている様子だ。大高の中でも、こいつはイカれている部類に入るようだ。

「むごい光景を見たくないと言った割には、随分と嬉しそうだな？」

「ハハハあ！ 興味は別物だあ！ それよりお前、痛くねえのかあ？」

「心配無用。俺はそういう身体なんだ。痛覚が麻痺してるのか知らないが、痛みを感じない」

「なるほどお。便利な身体をしてんなあ」

そんな事はない。

痛みを感じないのは長所じゃない。人間としては致命的な欠落。自身の異常に気付けないんだからな。もしかしたら俺は病気かもしれない。でも解らない。どんな痛みか、どんな症状かも医師に伝える事が出来ない。まあ、普通の人間が羨ましが理由があるのかもしれないが、俺には解らない。

「さて、さっきの続きだあ」

そう言つと、男は恵の方に向く。

いやおかしい。話が違う。

「おい待て！ 確かめさせたら解放するって約束だろう！」

「ハハハハ！ そんなの守る訳ねえだろお？ 俺は大高だぜえ？」

……しまった。そういう事か。恵の「よせ」の意味はこの事だったのか。不覚だった。

「散髪屋の開店だあ。ゲヘヘえ」

再びバリカンのスイッチを入れた。

……何だ。俺は何しに来たんだ？ 警察より俺の方が無能すぎる。普通に一発殴っておけば済んだ話だったのに。こいつらに無難な解決方法なんか不可能なのに。

何も出来てないじゃないか。

何も……出来てない……？

「ぐうつ！」

何だ？ 頭が揺れる。

俺はこの光景を知っている？

「うああっ！」

「おい、うるせえぞお！」

気持ちが悪い。

歯痒い。

この状態が、とても……とっても駄目だ。

耐えられない。

あり得ない。

あっちゃいけない。

何だ？

何なんだ？

この感覚は、一体……。

……ああ、解った、解ったぞ。

この感情こそが、？痛み？なんだ。

「おい、どうしたあ？ まさか、痛くなっちゃったかあ？」

「……ああ」

「ああ？」

「痛い、凄く痛いぞ。お前のせいで、今まで経験した事の無い痛みを、？思い出した？」

「はあ？」

な、何だ？ 龍が何か変な事を言ってるぞ。

「おい、頭がどうかしちまったかあ？」

「……ああ、俺は元から頭がどうかしてる。 だがとうとう、もつと頭がイカれそうだ」

何か龍の様子が変だ。もしかして壊れたのか？

いやいや、壊れたって言っても変だ。目の開き方がいつもと違う。なんて言うか、見開いて、もっと先を見ているような……。

「なあに訳わかんねえ事言ってるんだあ？ おちよくってんのかあ！？」

そいつは胸倉を掴んで顔を近付けるが、龍は表情一つ変えない。

「今更だがな、腹が痛いんだ。このナイフから伝わる刺殺力が、俺の触觉をこの上なく震わせている。 覚悟は出来ているんだろ？
な。ここまでの痛みを与えたんだ。やり返される覚悟は、出来ているんだろ？なあ！」

オレの見た事の無い、本物の龍の咆哮のような物言いだ。こっちの背筋が凍っちまう。

しかし、大高の奴は笑ってそれを受け流す。

「ハハハハハ！ そんな姿でよくそんな事が言えるもんだなあ！」

「……ああっ、もう駄目だっ！ 痛い、痛い痛い痛い痛いイタイツ！ 叫んでしまいそうだっ！ うああっ、ああああアッ……」

お……おいおいおい！ 何やってんだよ！ 無理だつて！ これ、本当に固いから！ 引き抜こうとするには相当な力が必要だぞ！
だけど力が強くなったら、逆に肉体への抗力？ が増すだけなんじやねえか？

だからやめとけて、本当に肉が裂けちまう 。
「無駄だあ。やめとけえ。肉が裂ける 」

そいつは言葉を失くした。オレも思わず口を開けている。

ワイシャツが、赤くなっていた。締め付けられている腕の部分から、血が噴き出ている。既に肉は裂けていたんだ。

「あっ、あああっ、うああああああアアアアアアッ……」

「お、おいしい！ もうよせえ！ それ以上やったら本当に」

「うとううあああああああああああ嗚呼嗚呼嗚呼あああ
亜亜亜アアアアa a a a aアアアああああアA A A
A Aアアアアアアア！」

龍の叫びと共に、四本の釘が血潮と共に勢い良く弾け飛んだ。

「ハアツ……ハアツ。痛い……痛いイ……ッ！」

ゆらりゆらりと身体を揺らす龍。龍の両腕は、血で染まっ
ていて、手の先から血がポタポタと垂れ、地面を少しづつ赤く
している。

しかしその姿はまさに、？肉を切らせて骨で立つ？を具現化して
いるかのようだった。

「な、なんだよお前えっ！ 化け物かよお！」

そいつは腰を落として、尻餅つく。……あれ、連れの二人がいつ
の間にか居ない。山高生もだ。どうやら逃げたみたいだ。そりゃ、
逃げたくもなるわな。オレだって逃げてえよ……。

「化け物……？ ああ、そうだ……俺は化け物だ……それで一向に
構わない……！」

龍は苦しそうな声を出しながら、一步步そいつに近付く。

「わ、悪かったあ！ 謝るから、何もしないでくれえ！」

「いいやアツ！ 俺はアツ！ お前を絶対に許さないッ！ その面
をつ、お前の血でッ、塗り潰してヤルウツ！」

龍は腹に刺さってるナイフを抜き、勢いよく投げ飛ばす。

「ひいっ！？」

そいつの顔を掠って地面に刺さる。少しの血が滲み出した。

龍はそいつの傍にしゃがみ込む。

「この腕を見る……。お前がこうしたんだ……」

そう言つて、自分の右腕を舐める。ヴァンパイアか！

「あ……あ……」

「血の味がする……。無味で無常の香りだ……。？あの街？で蔓延
っている臭いだ！ お前はそれを？僕？に与えた……。あ？？僕？

？　？　俺？？　……　あああつ、そんな事はどうでもいい！　お前にも俺の苦しみを教えてやるんだ！」

龍はナイフを再び右手に取り、振り上げる。
ちよっ、嘘だろ！？　それは駄目だつて！

「や、やめろよ龍！　そんな事したら　」
ヒュッ。

オレの右耳が、妙な音を拾った。ゾツとしつつ顔を横に向けてみると、ナイフが……！

「黙れえエ！　俺はア、お前の意見など求めていないッ！　……ハッ！」

こつちを向かずに言った。つまり見ずにナイフを投げたって事だよな。オレに。仲間のオレに。

鳥肌がオレを襲う。

……　はっ！？　ちよ、どういう事だよ！　今の龍は何なんだ！？　どうなつてんだ！　無差別殺人犯か！？　とうとうその道に走っちまったのかよ！？

……　とりあえず、今は黙っておいた方がいいんだよな……。

「さあ……　まずはその眼球を取り出して、お前にその味を教えてやる……。次に舌を抜いて、鼻を削いで、指を詰めて……　四肢をバラバラにしてからじつくりと殺してやる！　殺す……　クロス……！」

龍は右手を上げた。大高生はもう声も出ずに震えている。このままじゃ、本当に殺人犯になっちまう　。

「龍！　何してる！」

瞬間、扉の方向から新しい声が聞こえた。

それは天川のもだった。

「あ……」

龍は天川を見ると、その手のナイフを落とした。

「やめるんだ、龍！」

「オニガミ……さん……？」

いや、天川だぞ。誰だ、オニガミさんって。

途端に、龍が頭を抱え始める。髪に血の色が移る。

「ぐうつ……。違うッ……。俺は……。ただ、助けたくて……。っ」

これってもしかして、邪気眼って奴？ にしちゃ演技掛ってるけども。

「死にたく……。なかつ」

何か言ってる最中に、パタンと倒れてしまった。

それを見計らって、大高生は恐怖に縛られながら逃げて行った。こればかりはオレも同情するぜ……。

「メゲ！ 何だこの状況は！」

そう言いながら天川は俺に近付き、釘を外そうとする。

「えっと……。今逃げた奴がかなりのやり手で、追い込まれたんだけど龍が助けに来て、でもそれでも駄目で、そしたらなんか龍が暴走して……」

「まったく解らん！ てか何だこれ！？ 抜けないんだけど！」

「お前の腕力でなんとかなったら、とつくに抜けてるっつーの」「そりゃそうだな」

天川は散らかってる機材から細い鉄を拾って、それを釘に通す。

「よつと」

すると、簡単に釘が抜けた。

「え、どうして!？」

「はぁ？ てこも知らねーの？」

「てこ……。？」

「某クイズ番組に出れる事、間違いなしだな、と！」

言い終えると同時に、片方ずつの釘が抜き終えた。ふ、やつと動けるようになった。オレは落ちてる帽子を拾い被り直す。良かった、血は付いてない。

「うつ……」

呻き声を上げながら、龍が身体を起こした。

オレと天川は駆け寄る。オレは地面が血で侵食されている部分は避けたが、天川はそんなの気にせず龍の傍にしゃがむ。

「何があつた、龍!？」

「俺は……?」

自分の両腕を見て、龍は目を大きくする。

「何だ、これ……?」

更に自分の周りの血を見て、拳動不審になる。

「恵! 俺は一体何をしていた!？」

オレに訊かれても困る。こっちのほうに訊きてえよ。けど一応、オレが見た事を伝えておこう。

「何か知らねえけど、急に龍が痛い痛いとか喚き始めて、思いつ切り叫びながら釘抜いて、意味不明な台詞を吐きながらさっきの奴を圧倒してた」

「な、何だそれ!？ 誰だそれ!？」

「お前だよ! ていうかオレに訊くなよ! オレだってよく解んねえんだから! ……あーそうだな! まるで人格が変わったみたいな感じだった!」

やっとしっくりする言葉が浮かんだぜ!

「もう何がなんだか理解出来な」

言ってる最中に、龍はまた倒れた。

「血を失いすぎだ! 今は一錠だけ飲んで。んで帰ったらもう一錠な。解ったか？」

何だか知らないが、天川がカプセル状の薬を龍に渡した。そして龍はそれを水なしで口に入れ、飲み込む。龍は何度か頷いて、再度身体を起こす。

「天川……俺はどこまでおかしくなる?」

龍がオレには解らない問いを天川に掛ける。天川は首を振って、怪訝な表情で答える。

「解らん」

何の会話をしてるんだ、二人は?

龍は息を吐き、立ち上がる。

「血を流してくる」

血を落としながら、一旦工場を出る龍。ここら辺はあまり人通りが少ないから幸いだ、あんな血まみれな姿を人に見られたら、余裕で警察呼ばれるんじゃないか？ いや救急車か？

そんな事より、オレは訊かなきゃいけねえ事がある。

「おい、天川」

「……ん？」

天川はオレを見ずに応答した。

「言うべき事があるんじゃないかねえのかよ？」

「何の事？」

「龍の事だよ！」

オレは声を荒げる。

「明らかに天川は龍の何かを知ってるよな！？ オレの、いやオレ達の知らない事を知ってるよな！ それ以上に何か関わってるよな！ そこら辺のところ、オレ達は同じ役員として知るべきなんじゃないかねえの！？」

「……………」

天川は立ち上がって、出口を見る。

「まだ俺からは、何も言えない」

「誰にしゃべってんだよ！」

オレは天川をオレに向かせ、胸倉を掴む。

「暴力反対」

「それくらい気が立ってんだよ！ いつまでも蚊帳の外はごめんだ！」

「これは龍の問題なんだ！ 俺にだって解る事は限られてるし、そのほとんどは憶測だ！ 真実の証明は何一つないんだ！ それを伝える事自体不毛だし、第一お前達に今話しても何の意味も無い！」

天川は荒々しく俺の手を振り解く。

「俺だって俺なりに考えてるんだ！ もしそれを尊重する気があるなら、今は何も言わないでくれよ！」

オレは呆然としてしまった。こんな感じの天川は、もしかしたら

初めてかもしれない。

突如、天川はハツとして、頭を下げる。

「すまん」

「いや、オレの方こそ……」

「とにかく今は、話すべきタイミングじゃないんだ。その時が来たらちゃんと話すから、それまで待っていてくれないか？」

「お、おう」

「それに、いつかは絶対、皆の力が必要な時が来るはずなんだ。話すとしたら、多分その時。それまでは、今まで通りにして欲しい」

「……おお、解った」

いやよく解んないけど。

天川は龍の何かを知っていて、オレ達以上に親密。その理由を話すのはまだ先つてことだよな。よし、把握した。

いや、実際にところまったく把握出来てないけど。

いつも通り過ごしていけばいいって事だ。

難しい事では、無いはずだよな。

帰り道。あの状況はなんだったのか未だに解らないが、とりあえず身体に付いた血を洗い流し、制服はもうどうしようもないから、天川のを借りた。あんな姿で帰ったら、物凄く大変な事になることは避けられないからな。家にさえ入れて貰えないかもしれない。

……ん？ そうだとすると、天川はどうなるんだ？ まあどうでもいいか。

玄関の前で、もう一度自分の身体を見回して、外見的にはいつもと変わらないことを確認し、玄関を潜る。

「おかえり」

「！ ただいま」

何故か詩織がスタンバイしていた。その姿は半袖の夏服の制服にエプロンをしているという、きつと一般家庭では見れないものだった。

た。

「ちょっと今日は遅かったね。何かあったの？」

「い、いや。別に何も無い。ゆつくり帰ってただけだ」

「ならいいけど」

「りゅーにい、おかえり」

居間から私服の苺がわざわざ迎えに来てくれた。

「ただいま」

「りゅーにい、おふろわいてるよ！」

「ああ、そうか。じゃあ」

「じゃあいちごはいってくるね！」

「今の前振りは何だったんだ！？」

俺のツツコミを無視し、苺はスタタタと風呂場へ急行する。まあ俺は入る気はないからいいけど。一番風呂で血生臭くしてしまう訳にもいかない。それにいつも最後だから、何の問題は無い。

俺は居間に入り、素早く棚に入ってる薬を一錠取り、飲み込む。

ふう、これで少しは楽になるといいんだが……。

「龍」

「ん？」

後ろから鋭い声が聞こえた。

「脱いで」

「……は？」

突然何を言い出すんだ。

「上、脱いで」

「な、何で？」

「いいから脱いで！」

まさか、バレたのか？ うーむ、詩織ならありえるな……。

よし、ここは、

「話を逸らして、苺が出てくるまで時間を稼ごう。なんて考えてない？」

こ、心を読まれた……？ 千年品の使い手か！？

とまあ冗談はさて置き。今の威圧的な詩織が退くとは思えないな。
「解った……」

渋々俺はワイシャツを脱ぐ。詩織の目の前に、血の線が入った上半身が露になる

「な、何これ!？」

詩織が驚愕する。そういえば四月にもこんな表情をされたようないや、それよりも深刻か。

でも今は布を巻いてるから、以前ほどではないと思う。きっと布は血で染まってるだろうが。

「どういう事なの!? 説明して!」

「長くなるから簡略すると……。喧嘩、みたいな
パンツ!」

詩織の右手が俺の左頬を気持ち良く鳴らした。

痛くは無い。でも痛い。

「馬鹿! あれほどもう喧嘩はしないでって言ったじゃない!」

「そうは言っても、今回は仕方なくて」

「言い訳しない!」

「悪かった」

詩織はすぐさま救急箱を取ってきて、手際良く応急処置を始める。

「それにしても、どうして解った?」

「いつもの龍の匂いじゃないもの。血の臭いの方が強かった。後、その制服も龍のじゃないでしょ。きっと天川君のを借りたのね」

匂いと臭いだけでここまで推理出来るとは。本当に凄いな。出来る犬か、お前は。

「こんな傷を負っても、何にもならないんだからね!」

「……いや、将来的には勲章になるって事も
パンツ!」

今度は逆の頬が泣いた。

「馬鹿! 勲章にならない傷の方が圧倒的に多いの! ふざけた事を言わないで!」

「悪かった」

別にふざけて言った訳じゃないんだが、今は言い訳する余裕は無い。また叩かれる。

「もうやめてよね、本当」

「……………」

「死んじゃったら、どうするの…………？」

「……………どうしようか」

「またいなくなったら、私はどうすればいいの…………？」

「……………」

「？また？か。」

「まだだ。まだだよ。その意味が理解出来ない。」

「涙を零してる、詩織の心情が解らない。」

「？俺？が解らない。」

「いつになったら、？俺？は？俺？を知る事が出来るんだ？」

「こんな？俺？が、詩織を守る事が出来るのか…………？」

「一方。大民高校三年三組。」

慌てた様子で一人の生徒が飛び込み、椅子に座っている生徒に言う。

「か、翔さん！ 大変です！」

「お前に学習能力は無いのか？」

「あつ…………。すいません…………」

「やり直せ」

「はい…………」

生徒はとぼとぼと退室し、暫く経った後にまったく同じ拳動で教室に入る。

「た、高石さん！ 大変です！」

「何だ」

「また生徒会執行部です！ 五郎が泣かせられました！」

「泣かせられた？」

「え、ええ……。何だか精神的に相当ダメージを受けてるようで、もうあいつらとは関わりたくないとか……」

「そうか。なら、そいつはここに捨て置こう」

「……はい？」

「余興は済んだ。そろそろ、ケジメをつける時だろう」

「と言うと……どうするんですか、翔さ。高石さん」

「一カ月後だ。一カ月後に、ケジメをつけよう。強いのはどち

らか、決めようじゃないか」

「どうして、一カ月後なんですか？」

「さあな」

「は、はぁ……？」

「面白そうだから、とでも言っておこうか」

「……ちよつと、意味が解らないです」

「それで良い。俺も解らない。今の俺が、真なのか偽なのか。

一カ月後に、全てが解る」

第・2話：その言葉には優しさを包んで

〽約三ヶ月前・十月初めのとある日〽

「　　やあ、君が喜多美咲さんか。思った通りの美人で良かったよ」
町を見下ろせる展望台。

そこは公園にもなっていて、子供達が砂場やブランコで遊ぶ遊戯場にもなっている。無料で望遠鏡を楽しむ事が出来る、開放的で空気の美味しい場所だ。

望遠鏡の傍で、遠い眼差しを町に投げ掛けていた女性に、一人の男が話し掛けた。

その女性は、金髪の長髪を流している見目麗しい女性だった。赤いワンピースを着た彼女は、どこか寂しそうな表情で振り返る。

「……あなたが、鬼神さん、ですか？」

喜多と呼ばれた女性は、背広を着た男を見る。

柔和な表情を浮かべる、優男と言った印象だった。それを強調するような朗らかな声で、鬼神と呼ばれた男は優しい眼差しを向けながら話す。

「ああ、いきなり呼び出したりしてごめんね。　それにしても驚いたよ、まさか本当に来てくれるなんて」

「いえ、お構いなく。……ところで、今日はこういったご用件ですか？」

「うん、それはね……」

どうせ下手なナンパだろう。

喜多はそう思っていた。

突然、自分の携帯電話に鬼神からのメールが来たのは、つい先日の事だった。出会い系の迷惑メールかと思ったが、やる事も無かったので何となくの気分で返信してしまった。

そしたら当然のように返信が返って来て、それにまた返信するというスパイラルに陥り、最終的にはこのような形に収束する事となった。

どう考えても、彼女にとって利益は何一つ無い、無駄足に尽きる行い。下手をすれば不埒な事件に巻き込まれかねない。女子高生が手を出すには早すぎ、尚且つ危険な領域だ。

しかし彼女は、それを完全に理解した上でこの場に訪れた。病んだ心を持ったが故に。

「まずは一つ、断っておこう」

鬼神は人差し指を立てて　まるで喜多の心情を見透かすかのように、柔らかな表情で言う。

「俺は、君をナンパしに来た訳じゃない。君の身体をどうこうするつもりは無いから、どうかあまり警戒しないで欲しい」

「そう言う人に限って、身体目当てなパターンが多いんですよ」

「ああ、そうだね。君はもう経験があるからね」

「……？」

鬼神の言葉に、喜多は疑問を浮かべる。

「？ありそうだね？と言うのなら解る。推測の域での言葉は、この状況に置いては至って自然の選択だからだ。

しかし鬼神は、？あるからね？と、断言の域での言葉を選んだ。

つまり、何か根拠があってそう言ったのだ。

即ち鬼神は、自分の事を知っている。それも漠然的でなく、より深い事情まで。

この男は、只者じゃない。

喜多は不気味な不安感に背筋をなぞられ、より警戒心を強める。

だが鬼神は　その心中さえも見通すかのように、楽しげな笑みを浮かべながら言う。

「ははっ、君は賢いね。けど、俺はこう言ったはずだ。　警戒はするな、ってね」

「ッ！」

鬼神の底知れぬ力を帯びた言葉に、喜多の五感は一瞬冷たくなる。

「……読心術でも、お持ちなのですか？」

「んー、まあそう思ってくれて構わないよ。君が普通じゃないって事は、始めから解ってるから。俺も普通じゃないしね」

囁く様子もなくそう言う鬼神に対し、喜多の脳内に響く警告音は更に大きくなっていく。そして喜多は試すかのように、鬼神に薄っぺらな笑顔を向けながら訊ねる。

「じゃあ、私がどんな抵抗をするかもお見通しですか？」

喜多は手を後ろに回し、下着に隠してある物を掴んだ。

しかし鬼神はまったく動じる事なく、淡々と言ってみせる。

「大体はね。懐にナイフを忍ばせてるだろう？ いざとなったらそれで俺を一刺しするつもりなんだろうけど……。それは出来ないよ」

「……？」

「もし君が余計な事をしようとするのなら。君が受けた屈辱を、もう一度味わわせるだけだ」

「ッ……！」

自分の受けた過去の屈辱。決して忘れない、忌まわしき光景。

それが己の脳裏にフラッシュバックし、喜多の身体は自然と硬直する。まるで金縛りでも受けたように。

「俺だってそんな事はしたくない。でも、俺もまだ死ぬ訳にはいかないんでね。何事も穏便が一番だ、とりあえず楽にしてくれないかい？」

「……………」

喜多は蛇のように睨みながらも、渋々得物から手を離し、構えを解いた。

「結構。それじゃあ、話を始めようか」

そう言っただけ鬼神は、柵に身体を傾け、喜多の顔を見つめる。

期待を孕ませたその表情は、喜多に何か薄気味悪い感覚を覚えさせる。

「……？ あなたから、話があるんじゃないんですか？」

「半分正解。もう半分は、君自身が知っているはずだ」

「はあ……？」

「俺の最大の目的は、君の話を聴く為さ」

「私は、あなたに話すような面白い話は知りません」

「君は、大きな悩みを抱えているだろう？ 自分をしている事

の正しさを、己の中で常々問い続けている、違うかな？」

「っ……。あなたに、私の何が解るって言うんですか？」

語気を強めて問う喜多に、鬼神は変わらぬ表情で答える。

「全てだ。君の行っている事も、君の過去も、君の本心も解っている。その上で俺はここに居るんだ。君を、救う為にね」

「私を……救う……？」

「そう。さあ、話してご覧。他言は絶対にしない。自分の好奇心は、他人に漏らさない主義だからね。俺は君に興味を持った。これが君にとっては僥倖なのさ。君はこう思っているだろう。？ やつと話を聴いてくれる人が現れた？ と。……ほら、身体力を抜いてご覧。そうして君の中の毒を、俺に向かって放つんだ。難しい事じゃないよ。まずは深呼吸をして、目を閉じて」

鬼神の言葉は、まるで催眠術のように喜多の五感に染み渡り。気付けば喜多の口は、流暢な言の葉を紡いでいた。

「俺は全てを知っている上で、敢えて君にその復唱を求めた……。何故、こんなまどろっこしい事をしたか、解るかい？」

「……解りません……」

虚ろな表情で答えた喜多に、鬼神は満面の笑みを浮かべる。

「解らなくて良いんだよ。そして、君のしている事は、正しい」

「本当、ですか……？」

鬼神は喜多の耳に口元を近付け、怪しく囁く。

「だが、足りない。そんなものでは、君の正義は伝わらない」

「では、どうすれば……？」

「君に俺の力を分けよう。誰にも屈する必要の無い、強固たる力だ」
そう言つと鬼神は顔を離し、一枚の名刺を喜多に渡す。

「これは……？」

「助力が欲しい時は、迷わずその番号に電話するんだ。俺の友人が出る。力になってくれるよ。その力を使って、君は君の思い描く？理想郷？を創り上げるんだ。君に歯向かう者は全て敵だ。その者達は、悉く排除するんだ。そして君に選ばれた者達の中で、君は皆から賛美されながら、晴れやかに卒業するんだよ」

「私は……何をすれば良いんですか？」

「簡単さ。君はね、笑えば良いんだ。本心のままに 笑っていれば良いんだよ」

「……はい、解りました。 解りました」

喜多は笑顔を浮かべた。

その笑顔が、まるで猛獣のそのように歪んでいる事にも気付かずに。

鬼神もまた 愉悦の笑みを自分に対して浮かべている事にさえ気付かずに。

クリスマスの近づくこの季節。

豪勢な屋敷の広大なリビングは、俺の一言によって圧倒的な静寂に包まれていた。もう俺が言葉を発してから三分は経つ。あーあ、即席ラーメンにお湯かけとけば良かったな。時間も時間だから、小腹が空いてるんだよな。

にしても、返答に時間掛かり過ぎたる。まあ直球すぎたかなとは思うけど、テンプレの一言くらいは返せるはずだ。それもないとなると、よっぽど予想外な一発だったようだな。逆に予想されてたら困るけど。

さて、別に俺は短気な訳じゃないが、延々と黙りこくられてたらどうしようもない。話をしない事には始まらない。もう一度ノック

して、声を掛けてみる。

「おい、いい加減応答してくれよ。本当の事なら今頃ズルズルいつてるところなんだぞ。それとも何か？ お前の頭は煮え切らないと働かないってのか？」

「五月蠅い。死ね」

「まだ命は大事にしたいね。ていうか俺の言った事、聞いてたか？」

「五月蠅い。死ね」

「何だか俺をマゾと間違えてねーか？ まったく興奮しないから止めて欲しい」

「五月蠅い。死ね」

「リピート機能とは便利なこった。そろそろ、本格的なキャツ

チボールしようぜ？」

「五月蠅い。死ね」

「そうか、キャツチボールは苦手だったか。なら」

バトミントンだなと言いつけた時、ドアが開かれた。今までの話相手と思われる人物が、目の前に仁王立ちしている。

親譲りの長く白い髪は左右におさげして、ドリルの如く縦ロールにされている。黒シャツの上に白のカーディガンを着て、白のショートパンツに黒のニーソックスを履いている。流石は家族と言ふべきか、身長やBWHには若干残念感が否めないが、優美さを兼ね備えている。

夏美さんに似たその顔は綺麗な形だが、目がまるで豹のようだ。

見るもの全てを敵視するような、見るものを寄せ付けないような。

ポジション的には、山高で例えれば会長に近いものだ。しかしこちらには、バリッバリのツンツンオーラが醸し出されているが。

「何ジロジロ見てんの？ 気持ち悪っ」

「ふっ。最高の褒め言葉をありがとう」

もう慣れちゃって、俺の中ではそういう認識に落ち着いている。

「マゾじゃん、気持ち悪っ。 入りたきゃ入れば？」

罵倒しつつも、俺を部屋へ招き入れるという事は、もしかして早

速攻略しちゃったって事か！？

……いや、だったら顎で示したりはしないよな。そもそも今まででどうしてそんな事になり得るのか。自分のお気楽煩惱にいい加減鬱陶しさを感じる。

何はともあれ、俺は扉を開ける事が出来た。その先に広がる光景を、双眸に焼き付ける。

「……こりやすげえや」

入って、圧巻。世界の広さ、いや日本の広さというものを、改めて実感させられた。

まず、広さ。軽く俺の四畳半の三倍、いや四倍？ それとも五倍？ とにかく広く、一面に橙色の床と壁が広がっている。あれだぞ、俺のは玄関とキッチンを含めてだぞ？ あんな部屋で満足してるのが哀れに思えてきた。

次に、匂い。俺ん家じゃ畳と虫の臭いしかないから、この匂いに思わず魅了されてしまった。女子の部屋は良い匂いがするって本当だったんだな。廣瀬の部屋は、お世辞にも良い匂いとは言えなかったから、あまり信用してなかった。

最後に、小ささ。遠近感、と言うのだろうか、ベッドと机がめっちゃ小さく感じる。この広さと小物の無さが災いして、ちょこんと置いて可哀相に思えてきた。決して低価の物ではないんだろうけど。

ていうかスペース持て余しすぎだろ……。我が儘の出来ない俺の身になってみれば、どれだけ恵まれているのか解る。MOTTAI NAIとはこの事だ。

「何ボーっとしてんだよ。気持ち悪いから歩け、茶髪頭」

「立ってるだけで気持ち悪いとは失礼だな！ それに俺には天川って名前があるんだ！ 茶髪頭だなんて無粋な呼び方で呼ぶな！」

「ふんっ、知るかっつての」

なるほどな、こんなのと相手してたらビキビキ来るのも無理は無いな。今やっ和大輝の気持ち解ったよ。

二ノ宮がベッドに足をぶら下げて座ったのを見て、ふと俺は疑問に思う。

「ん、俺はどこに座れば良いんだ？」

「立ってればいいじゃん？」

「いやいや、座りたいんだけど」

「じゃ、そことか」

爪先で示した先は、地べた、即ち床。

「……関野と廣瀬は、座布団用意してくれたんだけどな」

「何か言った？」

「いえ」

若干憤りながらも、俺はその場に胡坐をかいて座り込む。なんだなんだ、ちよつとくらい気遣いはあってもいいんじゃない？ まったく、最近の若いのは心が狭いんだから。

「不満そうな顔すんじゃないよ。蹴るぞ」

「だから俺はマゾじゃねえから！」

「ふんっ！」

うぬう……圧倒的なツンッ気。デレる様子は、一切無い。……いや寧ろ見たくないな、気持ち悪そうだ。

さて、こんなプレイを楽しんでる場合じゃない。俺は別に楽しんでないけど。話すべき事を話さねばならない。その為に来たのだから。

「本題に入っているのか？」

「……あたしが殺したって、どういう事だよ」

「ん、ああ。お姉さん……夏美さんの事故死は、当然知ってるよな」

「一応、家族だからね。耳塞いでも入ってくるわ」

？一応？

納得出来る据え置きだった。

「そうか。だったら残念な報せかもしれないな。あれは事故死じゃないんだよ。他殺なんだ」

「……はあ？」

「廣瀬に警察のデータベースに入って調べて貰った。この事故についての記録もしっかり残ってたよ」

「それ、普通に犯罪じゃん。通報しよ」

とても普通の反応をされてしまった。俺は慌てて二ノ宮を止める。
「待て待て待て待て！ 早まるんじゃない！ そんな事されたら捕まっちまうだろ！」

「きやははっ、ウケる」

「ウケるな！ とにかく、今は俺の話を聞け！ 折角のシリアスなムードが台無しだろうが！」

「ウケる〜」

「はあ〜……」

こりゃあ、再教育が必要だな。近い内に家庭教師を雇う事を勧めておこつ。

いや、悪い事してるのは間違いなくこちらだからそんな資格はないのだろうけど……。

「続きな。警察のデータベースには、この事故……いや事件について記されてた。容疑者もはっきり載ってたよ。二ノ宮春香。お前の名前がな」

「……………」

沈黙。

時によってそれは、肯定の意を示す。罵倒を好むこの娘がこうなるといふ事は、今がまさにその時という事だ。

「何故大事に至らなかったかは、この屋敷を見れば想像に難くない。金つていう権力を使っただろうな。汚いね、まったく」

「……………」

「どういふ事かは説明したぞ。 あつ、証拠出せとは言わないでくれよ。今は無いから。明日にでも、廣瀬に見せて貰えば解る事だ」

「……………」

「さあ、原点回帰だぜ、お嬢様」

俺は右足の膝を立たせ、右腕を置いて、顔を俯かせている二ノ宮

に、先程の質問をする。

「どうして、夏美さんを殺した？」

ふっ、決まったっ。

「……カッコつけんなよ、気持ち悪っ」

あれっ、決まってなかったっ。

仕方なく俺は胡坐の体制に直る。

「そうだよ」

二ノ宮は短く言って、顔を上げた。

目が細く据わり、禍々しく黒い瞳が俺を捉える。

常人の目？ 否。この目は、イカれた奴の目だ。こんな目を幾つも俺は見てきたから解る。常軌を逸した目。狂気の沙汰の目。

「あたしが殺した。殺した。殺してやった。殺してやったよ。フッフ……」

さっきまでのギャル混じりの声とはまったく別物の声だった。低く、暗く、どす黒い。少なくとも、十四歳の少女のそれとは思えない。

「それは知ってたんだよ。俺はどうして殺したかを訊いてるんだ。お母さんから聞いたが、素晴らしい姉じゃないか。本来誇りである姉を、どうして――」

「誇り！？ 誇りって何！？ 埃の間違いじゃないの！？」

「意味としては雲泥の差だな。そこまで感じる出来事でもあったのか？」

「ううわっ！ マゾに加えて変態かよっ、最悪じゃん！」

「何か致命的な勘違いしてるよな。別に性的な意味じゃねえよ。ていうか、今の流れで何でそうなる？ いつもならこんな会話は大喜迎なんだが、今はそんな気分じゃないんだ。質問に答えてくれよ」

「チッ」

どうやら話題を逸らそうとしたらしい。しかし、残念ながらそうはいかない。まずは二ノ宮の心境を確かめないことには始まらないからな。

俺の真剣な表情に圧されたのか、二ノ宮は話し始める。

「あんたは、あいつの事、どんな風に聞かされた？」

あいつとは、夏美さんを指すのだろう。俺は天井を見て、秋奈さんの言葉を思い出す。

「んーと、？大変素晴らしい子でした。私達の言う事に全て従って、勉強にも努めて、難関校にも合格して。正しく才色兼備をその身で示していました。将来は、夫の会社を継いで、より多くのお金を稼いで、私達を養ってくれると思っていました。？って聞いてるけど」
我ながら感服するぜ、この記憶力！ 言っとくけど、コピペではない。断じて。

「やっぱり。そんなこったろうと思った」

「ん？ 違うのか？」

「いや、表向きは合ってるよ。で、あたしは？」

「えっと、？怠惰の象徴と言っても過言ではありません。夏美と違って、私達の言う事は聞かないし、勉強は放り出すし、口答えはするし。だから、私達はあれに構うのはやめました。？って言ったな」

「はっ。思った通りだ。ふざけんなよ……」

「やっぱ、違うのか？」

「……………」

再び沈黙。これが何の意を示してるかは解らないが、どうも嫌な匂いがする。

「あいつは、優秀だったよ」

さっきの低い声で言の葉を紡ぐ。

「何でも言う事聞いて、何でもやって、何でもやった。全部うまくやってた。完璧だよ。ババアがそう言うのも、無理はない」

「それでもってあの容姿だ。自慢するのも解るぜ」

もしあの人が見合い相手だったら、光の速度で結婚するだろうな、俺なら。

「確かに、あいつは賢かったさ。その才能が、喉から手が出るくら

い欲しかった。もういつその事、奪ってやりたいと思ったくらい。でも、そんなの出来ない。だからあたしは努力した。あたしなりに、全身全霊で努力したつもり。……それでも、あいつには届かなかった」

何となく、話の筋が見えてきた。

机の上に置いてある木彫りの小鳥。夏美さんの部屋にあったのと同じものだ。形はまったく違うが、こちらのは血の滲む努力の跡が窺える。あちらに比べれば芸術品には程遠いが、より良い物を作ろうとした熱意は伝わる。

「あたしは認められようと必死だった。言われた事には何でも従ったし、何でもやった。でも足りなかった。あいつと見比べると劣ってたんだ。完璧主義者の……守銭奴のババアには、見えるところなかった」

「ふむ……」

「段々とき、どうでもよくなってきたんだ。ババアには見向きされないけど、あいつはあたしを見てくれた。優しく接してくれた。こんなになったあたしでも、変わらずに」

「なら、どうして？」

「偽善だったんだよ、全部！」

豹の目が俺を睨む。

「ある日、家に帰ったらリビングでババアとあいつが話してた。話題は、妹の価値について。酷い言われようだったさ。出来損ないだの屑だの。ババアだけならまだしも、あいつまでそれに乗っかってたからショックだった。そんな風に思われてるなら、死んでやる。初めはそう思った」

その瞬間、俺の背筋が凍った。

「……まさか、お前は幽霊かつ！？」

思わず身体が仰け反る。

「ばーか。ただ死ぬだけじゃつまらないじゃん。いつその事、二ノ宮の名を汚すつもりで、今回の件を思い付いた。だから事件が事故

で済まされたのには驚いたよ。……ちつ、逮捕された方が面白かったのに」

ああ良かった。呪い殺されるかと思った。

……いや良くねえか。

「つまり、夏美さんがお前の事を罵ってたから殺したって事か？」

「それだけじゃない。あいつさえ居なければ、あたしは愛を感じる事が出来た。本来平等に与えられるはずのそれを、あいつは根こそぎあたしから奪ったんだ！　？金の成る木？はあいつだったんだよ！　……解るかよ、この気持ち！　誰からも愛されずに生きてきたこの気持ちか！」

「解るよ」

「！」

二ノ宮は俺の言葉に驚き、表情を固めた。

「俺も、本来なら誰にも必要とされなかった人間……いや？モノ？さ。たまたま出来た過程品。愛なんて、以ての外だった」

「……そうやって、同情する振りしてるだけだろ！　あたしは騙されねえぞ！」

「別に信じたくなくや信じなくていいよ。俺も信じて欲しいとは思ってないしな。俺がここに来た理由は一つ。伝えに來ただけだ」

「伝え、に？」

俺は鞆の中から一冊の黄色いノートを取り出し、二ノ宮に差し出す。

「……これは？」

「夏美さんの日記だ。ちゃんと全部読んどけよ。号泣必至だ」

「日記……？」

二ノ宮は恐る恐る受け取って、最初のページを開く。

「……！」

その見開かれた瞳には、ぐちゃぐちゃに捻り曲がった歪な言葉の群れが映っているだろう。

「さっきお前は、夏美さんが出来損ないだの屑だの罵ってたと言っ

てたけど、それは心からの声じゃない。夏美さんもまた苦しんだ。秋奈さんからの過度な期待、重すぎる労働。その時だって、合わせないと自分の身が危ないと思ったんじゃないか？ あの人なら、本気でバイオレンスに成りかねないからな」

「……………」

二ノ宮はページを凝視していて、聞く耳を持ってないようだ。それも解る。俺だって初めて見た時は心底驚いた。

果たしてこの家族に、幸せな人間は居たのだろうか。読み終えた時には、そんな自問が浮かんだくらいだ。

「自殺するつもりだったみたいだな、夏美さん」

「はぁッ!？」

「おっと、ネタバレ自重ってか」

俺はおどけて、鞆から純白のマフラーを取り出し、二ノ宮に放った。

「これは……?」

「お前へのプレゼントさ。フロム夏美さん」

「ぶ、プレゼント……?」

呆氣に取られた二ノ宮は、信じられない様子でマフラーを嘗め回すように見ている。ちなみにそれは手製なのだが、まあ刺繍されている？春香？って文字を見れば解るだろう。

「ま、俺が伝えたかったのはこれだけ。どう受け止めるかはお前次第だ。真実として取るか、虚実と取るかは」

「……………」

と言っても、筆跡から夏美さんだって事は、二ノ宮も解ってるだろうが。

さて、そろそろお暇しなければならぬようだ。俺の腹が叫ぶ。

「んじゃ、腹減ったからもう帰るわ。また来るから、その時はよろしく」

正直な気持ちを書いて、俺は鞆を右手に立ち上がる。

「ちょ、待てよ！」

「おやおや」

俺は嫌らしい顔（だと思っ）で振り向き、ニタニタ笑う。

「もしかして、デレか？　俺、ツンデレをととう攻略しちゃったのか？」

「ふざけんな！　説明が足りなすぎんだよ！　何であんたがあいつの日記を持ってて、このマフラーを持ってんの！？　まさか勝手に入ったんじゃないだろうーな！？」

「ちゃんと秋奈さんに断ったよ。理由は単純、好奇心だ」

「……面白くねえよ。何にも面白くねえ。あんた、何が目的でこんな事しに来たんだよ。うぜえっつーの……」

「面白いかなんて関係ねえよ。これは見せ物じゃねえんだ。面白くある意味も、必然性もないんだよ」

「偽善だろ、あんたのやつてる事は！　どうせあんたも、最後にはあたしを裏切るんだ……ッ！」

「じゃあ約束しよう。俺は絶対に、お前を裏切らない。これで、お前は絶対に俺に裏切られる事はないさ」

「これ？　これって何だよ！　高が口約束でそんな保障ねえだろ！　どうせ反故にする癖に！　いつちよ前にカッコつけてんじゃねえよ！」

「約束は破らない」

二ノ宮が声を荒げたのをお構いなしに、俺は出口のドアノブに手を掛ける。

「それが俺の生徒会だ」

「……信じねえかな。あんたの事なんか……絶対にッ！」

「俺は信じなくても良い。でも、夏美さんは信じろよ。その日記に綴られている全てが、夏美さんの肉声そのものだ。……金の成る木は、カラスに一生たかられる運命だったんだよ」

「あたしは……あいつの事なんか……！」

「もしも信じる気になったら、自分と向き合ってみたらどうだ？

自分の出来る事を、すれば良い」

「あたしに出来る事……？ そんなの、あいつが全部……っ！」

「お前にしか出来ない事、あるはずだぜ。自分を信じるよ」

「あたしに、しか……？」

「じゃあな」

頭を抱える二ノ宮を尻目に、俺は部屋を出る。

彼女は自分から罪を被った。だけど結局、その罰からは逃げ続けた。

だったらもう するべき事は、解ってるはずなんだ。

後は彼女を信じるしかない。

彼女達を、信じるしか。

クリスマスの朝。山ノ下高校は、それはもうとても寒い空気に包まれていました。

冷気で凍える一方の教室では、生徒が溢れ返っていました。入り口で懸垂をする生徒、机の周りに屯って談話する生徒、静かに読書をする生徒と、行動は様々です。

規定の時刻に、朝のショート・ホーム・ルームの始まりを告げるチャイムが学校中に響き渡り、生徒達は各々の教室に散って行きます。

教室に担当の男性教師が入室すると、時間ギリギリまで話をしていた生徒が自分の席に着きました。教卓に教師が出席簿を置いて、「号令」と若々しい声で言い放ちます。

それを合図に、冬の季節にそぐわない長袖のワイシャツ姿の男子生徒が「起立」と声を掛けました。生徒全員がその場で起立し、「礼」で全員が着席しました。「相変わらず挨拶がないな」と教師は嘆き、出席簿を開きます。

「今日の欠席は……。珍しい、居ないのか」

「何言ってるんですか。いつも通り二ノ宮が居ないっすよ、先生」
先程号令を掛けた生徒が、腕を組んだ体制で言いました。

「ああ、二ノ宮なら登校して来ている。今は廊下に居るんだ」

「……あ？」

その一言を切っ掛けに、教室で言葉が飛び交います。

「は？ 何で、どういう事？」 「あいつも登校して来ないんじゃないのかよ」 「どうして来ちゃうのー？」 「ありえない」 「あの顔見るだけでむかつくんだけど」 「一生お屋敷の中に閉じこもってるっての」 「死ねばいいのに」

「静かにっ！」

教師の一喝で、教室は静まりました。

「どうやら私の知らない間、クラス内で一悶着あったようだな。それで二ノ宮も責任を感じて登校しなくなったと言っじゃないか。……やっぱり、これも生徒会の圧力なのか、小林？」

小林と呼ばれた生徒 先程号令を掛けた生徒は、そっぽを向いて知らん顔をしました。教師は嘆息し、続けます。

「まあいい。二ノ宮はその事について、話したいそうだ。同じクラスの一員として、ちゃんと耳を傾けて聞くように」

教師がそう言ったところで、生徒の大半は呆れ顔をして笑いました。とても話を聞くような態度ではない姿勢が多くを占めている現状に、教師はまたも嘆息しましたが、言っても無駄だと悟り、閉まってる入り口に顔を向けます。

「二ノ宮、入れ！」

それを合図に、引き戸がゆっくりと開かれました。その奥から、一人の女子生徒が行儀良くお辞儀をしてから入室し、引き戸を戻し、教師がどいた教卓に立ちます。

生徒達が彼女を見た瞬間 。大勢の絶句と啞然が混ざり合った顔が、一瞬で出来上がりしました。

とても長かった髪は首筋までショートヘアに切り揃えられ、以前はだらしなかった制服は綺麗に整えられ、全てを敵視するかのようなその瞳は、柔らかく穏やかな瞳になっていて 生徒達の知る彼女とは、まるで次元を超えた別人でした。

静寂に包まれた教室の中で、生徒達は徐々に我に返り、驚嘆の聲が四方八方から飛び跳ねます。

「はっ……誰？」「言ってたじゃん、二ノ宮だよ」「嘘でしょー？転校生かと思っただし」「ドリルが無くなってる……」「幽霊に取り付かれたんじゃないやね？」「馬鹿、自縛霊だろ」「どっちも同じじゃん」「悪魔だ、悪魔に魅入られちゃったんだ」

「みっ……皆さんっ！」

二ノ宮と呼ばれた生徒が張り詰めた声を上げると、それらの声は止まり、皆が沈黙して次の言葉を待ちました。

「……ッ！」

二ノ宮は過去と現在を照らし合わせ、一瞬躊躇しましたが。

次の瞬間、思いっきり頭を下げました。

ゴツンと額が悲鳴を上げ、反射して「イタッ！」と顔を上げて額を両手で押さえます。

「……………」

二ノ宮が目尻に涙を浮かべながら額を撫でてる様子を、生徒一同と教師はまじまじと見ていました。今までの二ノ宮からはどう頑張っても見れない光景だったので、興味が底から本能的に動いた結果でした。

その視線に気付いた二ノ宮ははっとし、その場から一步横にずれて、再び頭を深く下げました。

「今までご迷惑をお掛けして、本当に申し訳ありませんでした！」

やっと言えた一言を切り口に、頭を下げたまま、用意してきた台詞を吐き出します。

「私は自分勝手でした！ 他人の迷惑も顧みずに、生意気な事ばかり言って、皆さんに不快な思いをさせてしまいました！ 許して貰おうとは思ってないです！ これからも皆さんに迷惑を掛けない様、登校は自粛するつもりです！ でも、どうしても一言謝っておきたい、この場にお邪魔した次第です！ 本当に、ごめんなさい！」

最後にもう一度頭を下げて、秒針が三つ数えたところで頭を上げて、無言の教室を出ようと引き戸に手を掛けたその時、パチッ。パチッ。

等間隔の拍手が聞こえ、その方向を見ると、小林がそっぽを向きながら、ただ拍手をしていました。

否。ただ、合掌する動作を繰り返していました。

何の意味を込めての行為なのか、二ノ宮も教師も他の生徒も理解し兼ねました。十数回叩いたところで、両手を合わせたまま、

「いいんじゃないの？」

不敵な笑みを浮かべました。

「こうして頭を下げて謝ったんだからよ、全部チャラって事で。並じゃビビってお家にお籠りなところでここまで勇気を出したんだ、称賛してやるーじゃねーか。……なあ、皆？」

生徒達は互いに顔を合わせ、未だに意図が掴めずに怪訝な表情を隠しきれずにいます。

「で、でもっ！」

二ノ宮は逆接の語を用いて言います。

「私はっ、小林君につ、酷い事を……」

「あーあーあー、うるせーうるせー。んなこたあもう気にしてねえよ。だからウジウジすんな。前のお前はどこ行っちゃったんだよ、おい」

「……でもっ！」

「あーうつぜえな！俺がいいって言ってんだからいーんだよ！ぜーんぶおしまいだ！それでいいだろ、ええ？」

小林が立ち上がって教室を見渡して言うと、「小林がそう言うなら……」や「別にいいけど」と所々から聞こえてきました。

「まっ、あたしは元から嫌いじゃなかったけどねー」「しかし、ツンデレ好きとしては複雑な心境だなあ」「よく見ると可愛いよな、二ノ宮って」「それに良い匂いもするし」「流星はお嬢様だよな」

「しかも貴重な貧乳だしな」「それおかしくね？」

「……え？」

罵詈雑言の嵐を予想していた二ノ宮は、驚きのあまりきょとんと立ち尽くしていました。先程廊下で聞こえた非難の荒波は何だったのかと己の中で問いましたが、当然のように答えは出ませんでした。「そういう事だ。良かったじゃないか二ノ宮。蟠りは解消しただろう？」

窓際で場の流れを眺めていた教師が教卓に戻り、一つの席を示しました。

「あそこはお前の席だ。そろそろ一時間目が始まるから、早く席に着いて、授業の準備をしなさい。と、その前に……」

俯いてる二ノ宮を見て、軽く 微笑ましく息を吐いて、

「まずは、顔を洗わないとな」

優しく、顔を覗きながら言いました。

夕刻 太陽が落ちようとしてる頃。

人気の無い商店街を一人、二ノ宮は歩いていました。挟む店はどれもシャッターが閉まっていて、表面はどこかの誰かがスプレー缶で書いた、芸術的で思わず感心してしまうような落書きが支配していました。

「こんなに綺麗な落書きが書けるなら、もっと別のことに活かせばいいのに……」

二ノ宮がそれらを見ながら呟きました。

この日、二ノ宮は教室で皆の注目の的でした。今まで訊けなかった事をたくさん訊かれたり、他愛の無い談話をしたり、鞆を持ってきてなかったので初めて人から物を借りたり。友達が誰一人居なかった二ノ宮にとって、とても刺激のある一日でした。

ただ一つ、懸念してる事がありました。

つい先程まで自分を拒否していたのに、何故こうも簡単に自分を受け入れてくれたのか。

もしかしたら、それは見掛けだけで、明日には手の平を返されるのではないか。その時は嬉しさのあまり涙腺が崩壊してしまい、考える間もありませんでしたが、今冷静にこうやって考えると、偽善にも思えました。

「……偽善……」

過去の経験が脳裏をよぎり、不安が胸に募ります。

今度は、どっち？

心の中で問うても、答えは出ません。

「……んっ！」

突如、自分の頭が何か柔らかい物に当たったのを感じて、顔を上げます。

当たった物とは、人の腹でした。お世辞にも屈強とは言えない腹筋の持ち主は背の高い男で、とても怖い顔で二ノ宮を見下ろしています。

「ご、ごめんなさい！」

二ノ宮は危険を察知して、すぐさま頭を下げて脇を通ろうと思いましたが、。

案の定と言うべきか、その男に肩を掴まれました。

「おい、こいつか？」

「あー、そうじゃね？」

背後から更に二人、柄の悪い男が出てきました。

「白い髪の子びっ娘……。山高の制服だし、間違いないっすね」

「そか。お嬢ちゃん、痛い目遭いたくなけりゃ、大人しく付いて来なよ」

「……！」

？知らない人にはついて行くな？

遠い昔、母親に言いつけられた言葉を思い出し、二ノ宮は首を振ります。

「い、嫌です！ 放して下さい！」

二ノ宮は掛かっている手を振り払い、逃げようと身を翻しました

が。

「おおっとお」

別の男に退路を塞がれ、結果三人に取り囲まれてしまいました。

「あっ……」

「いやさ、俺もこんな事はしたくねーんだけどさ……お金の為なのよ」

「好き放題やった上に金を貰えるなんてな。お宅の生徒会は太っ腹だねえ」

一人が二ノ宮の腕と口を瞬時に押さえると、二ノ宮は軽い悲鳴を上げました。

「んんっ！」

「おい、お前ってロリコンだろ？ 最初はお前に譲ってやるよ」

「おっ、マジっすかあ？ へへへ、申し訳ないっす」

「あ、でも処女は俺が貰うかな」

「ちよつとちよつと、俺にもやらせて下さいよ？」

男達の慈愛の無い会話を聞いた二ノ宮は、この先自分が何をされるのか想像し。身体が震え始めました。

「嫌……やめて……！」

やっと発した言葉はあまりにか弱く、男達の卑しい笑みを誘うだけでした。

そして再び口は押さえられ、とうとう一人が局部に手を伸ばしていきます。

どうして？

どうして生徒会は、こんな酷い事をするの……？

折角、皆に謝れたのに……話が出来たのに……。

？てめえなんかな、誰にも必要とされてねえんだよ。愛されてもいねえんだよ。ただ存在がうぜえだけなんだよ。だからもうその面見せんじゃねえ。吐き気がすんだよ、成金ビッチが？

ああ、そうか。

結局は、そういう事なんだ。

奇妙な納得感と、不穏な緊張感。

この二つに蝕まれながら二ノ宮は、目を閉じてその時を待つしかありませんでした。

自らの罰が下される、その時を。

しかしそれは、思わぬ障害に阻まれる事となりました。

「ッ！」

男の頭に何かがぶつかり、その衝撃に脳を揺らします。

「ああ……？」

落ちていたのは、別段変わりの無いスクールバッグでした。

男はこれが自分に投げつけられた物だと悟ると、ワナワナと身を震わせ、

「何だあ！？」

怒号と共に、後ろに振り返りました。

するとそこには、ワイシャツ姿で角刈り頭の高校生が一人、何食わぬ顔で立っていました。

「おい、こいつはテメエのかあ！？」

「わりい、砲丸投げの練習してたら当たっちゃった、うん」

「なめてんのかテメエゴラア！」

二ノ宮を拘束していた男が、吠えながら走って殴ろうと振り被りましたが、それはあっさりと回避され、

「があっ！」

返しのブローを顎に食らって倒れてしまいました。

「！」

その光景を見ていた二人は、即座に理解しました。

こいつは、相手しない方が良い。

「あんちゃん、悪い事は言わねえ」

リーダー格の男が、和解を求めるかのように手を広げて近付きます。

「砲丸投げの練習たあ熱心だな、感心するぜ。何、それで当たっちゃったんなら仕方ねえ。寛容の精神って奴で許してやろうじゃねえか。 どうだい、あんちゃんも結構なワルだろ？ 今からこの女を一発やってやろうと思うんだが、あんちゃんも一緒に」

「うるせえよ、馬鹿」

最後の言葉の直前に、男の股間は振り上げられた脚によって潰されました。

「ぬっ！ ぐっ、おおっ……！」

男は痛さのあまりにその場に座り込み、股間を押さえ悶えます。

「残念、もつてめえのキンタマは役に立たねえな。そいつでどうやってやんだよ、ええ？」

「この野郎！」

倒れていた男はナイフを取り出し、高校生の向かって突進します。刺されれば確実の致命傷。下手をすれば死んでしまうかもしれませんが。

しかし彼は至って冷静に男を捉え続け、直前のところで身体をよじり、鮮やかに回避。お返しに、肛門に鋭い蹴りを贈りました。

「うああっ！」

男はナイフを捨て、苦悶の表情で自らの肛門を押さえるという、みつとも無い姿を晒しながらその場で飛び跳ねました。

「もつと掘られたい奴は？ 遠慮はいらねえぜ、おい？」

高校生が微笑みながら訊ねると、男達は「覚えてやがれ！」と捨て台詞を残し、退散していきました。

「けっ。根性のねえ意気地なし共が。一生ケツの穴守って生きてろ、クズが」

高校生は汚い言葉を吐くと、その場にぺたんと座り込んで二ノ

宮に近寄って声を掛けます。

「おい、大丈夫か？」

「あつ……。小林君……。どうして、ここに……。？」

二ノ宮が訊くと、小林と呼ばれた高校生は首筋を搔いてそっぽを向きました。

「たまたま通り掛っただけだ。」

変な勘違いするなよ。別に助け

たくて助けた訳じゃねえからな。やばそうだったから仕方なく、だからな。ほんつと、しかたなくだからな！ 解ったな、ええ？」

「うん」

「まつ、怪我はねえみたいだからいいけどよ。んじゃ、気をつけて帰るな」

小林が踵を返し、その場から立ち去ろうとすると

二ノ宮が、ズボンを掴んで引き止めました。

「何だよ？」

見下しながら訊くと、二ノ宮は恥ずかしそうに視線を逸らして、

「……腰が抜けちゃって……」

.....

気付けば、太陽は既に沈んでいました。

「
　　た
　　く、
　　何で俺がこんな……」

人気の無い商店街を越えた先の街路。様々な形の家が左右に立ち並び道を街灯が照らしていて、中央を車が行き交います。少し奥には、青の信号が見えます。

悪態をついた小林の背中には、小さく丸まった二ノ宮がおんぶされていました。小林の両手が二ノ宮の太腿を支え、二ノ宮の両手が小林の首を巻いています。

傍から見れば、それはまるで恋人のようです。「あらやだ」とレジ袋を左手に下げたおばさんが言いますが、本人達にそんな気は一切ありません。

元々基礎体力の高い小林にとっては大した労働ではない為、平然と二ノ宮の帰路を歩いて辿って行きます。時々意味も無く「はあ」と息を吐きながら。

「どうして……」

「ああ？」

「どうして、許してくれたんですか？」

「くだいなお前。俺がいつて言ったんだからいいんだよ。それ以外に理由があるか？ それとも、また俺を怒らせたいのか？ いい度胸してるぜ」

「そんなんじゃないです。だって、どう考えてもおかしいじゃないですか。ついさっきまで私を罵って非難してた連中が、何の片鱗も見せずに簡単に私を受け入れるなんて。私を許してくれたのなら、それはそれで嬉しいですけど、それ以上に不気味です」

「……俺の圧力だよ」

「圧力？」

小林は若干表情を濁しながら言います。

「もう身に染みてるとは思うが、俺はお前がとことん嫌いだった。入学当初、お前からキツイ一言を貰って以降。ここまで女が嫌いになったのは初めてだ」

？何その頭？ 汗臭いスポーツ男って見てるだけで鬱陶しいから、黙って無駄な努力でもしてれば？ どーせオリンピックなんか出れやしないんだし？ なのに馬鹿みたいに熱中しちゃってさー、馬鹿みたい。あー、暑っ 苦しい。マジ勘弁してよね、ほんっと？

「あの時は……。小林君から声を掛けてくれたのに、ごめんなさい……」

「けっ。」

九月の中旬、生徒会は一つのシステムを施行した。？

登校拒否システム？だ。一定数の票が集まった生徒を対象として、その生徒の登校を学校側が拒否する。ただしこれは本人の意思に係なく、強制的に登校する権利を剥奪される。もし何の許可無く登校したりしたら。解るだろ？」

二ノ宮は先程の出来事を思い出し、震えながら頷きました。

「俺はそれに乗っかって、お前を登校させないようにしようと思った。票数が必要にはなるが、あの性格だから嫌ってる奴はたくさん居るだろうと思って、難しい問題じゃないと思ってた」

小林がため息を吐くと同時に、信号が赤に変わりました。行き交う車を見ながら、小林は続けます。

「だが意外にも、そうはいかなかった。？あのツン具合が逆にいい！？とか？可愛いから許す？とか、お前のステータスを皆受け入れた。つんでれ、つーの？なんかそんな感じで、欠点は声は掛けにくいってだけだったらしい。まあともかく、これじゃあ正攻法は無理。だから俺は、クラスを脅した。お前ら全員留年させるぞって言うてな」

「そんな事、本当に出来るんですか？」

「出来るさ。あの会長なら、簡単にやっちまうだろうな」

「……怖いですね、会長さん」

「まったくだ」

信号が青に変わり、人々が動き始めました。小林もそれに倣います。

「十月の中旬くらいに、皆が顔色変えてお前と接してたら？ 結果として、票数を確保した俺はシステムに従ってお前に追放の意を伝えた。あの時のお前の顔は忘れられないねえ」

「……最悪です」

「お互い様だ」

その後しばらく沈黙し、吹っ切れたように二人は同時に笑い出した。

「なら、何で？」

「……一番の動機は、今の生徒会への謀反心だ。どう考えても、あの生徒会はおかしい。どうかしてる。天川にそれを気付かされたぜ、不覚にも」

「天川……」

以前、訪問してきた人間を思い出しました。

「あいつは馬鹿だよ。はつきり言って、喜多美咲は狂人だ。膨大すぎる支配欲に取り付かれちまってる。する事やる事が悪魔染みてる。あんなのを敵に回す奴は、正真正銘の馬鹿だ」

「そうなんですか」

「そうさ。だから、俺も馬鹿だ」

「そうですね」

小林は軽く笑い、歩を止めました。

「？」

二ノ宮が不思議がつてると、小林がもごもごと口を動かして何かを言っていました。二ノ宮に聞こえませんでした。

「え、何ですか？」

「いや、その……。悪かったな。俺のせいで、嫌な思いをしただろ。許してくれとは言わねえよ。けど一言、謝っておこうと思っただ。本当に、その……。ごめん……な」

「元々、酷い事を言っただのは私です。だから、小林君が謝る必要はないです。私の方こそ、ごめんなさい」

「……けっ」

面白くなさそうに悪態をついた小林は、再び脚を動かし始めました。

「やり辛かったらありやしねえ……。前の毒舌だった頃の方がずっとマシだ……。敬語なんか使いやがってよお。似合わねえんだよ」

「……あの……」

二ノ宮が頬を赤まらせて、恥ずかしそうに言いました。

「何だよ、ああ？」

「手が、お尻に……」

小林の手は、いつの間にか二ノ宮のお尻を鷲掴みしていました。

「あつ……。わりい」

小林は謝ると、手を太腿の位置に戻しました。

「そこは太腿です」

「知ってんよ」

「……最悪です」

「ああ！？じゃあどこでおんぶれってんだよ！」

「靴底でお願いします」

「どこでお願いしてんだお前！こっやってるだけでもありがたい
と思いやがれ！ふざけてんじゃねえぞ、おい！」

「解りました。なら、セクハラで訴えます」

「おー！？やれるもんならやってみな！ぜってえ勝つからな！
おい、俺の知り合いなめんじゃねえぞ！何てったって？氷の弁

護士？って言われてるくらいなんだからな！どんな野郎が相手だ
ろうと」

「……ふふっ」

「っ」

ここで、小林は自分が遊ばれていた事に気付き、

「けっ！」

つまらないと言わんばかりに、今日何度目かの悪態をつきました。

「小林君は……」

「ああ！？」

「友達に、なつてくれますか……？」

「あつ……？」

怒鳴る気満々だった小林は拍子抜けし、鼻で笑いました。

そして、半分呆れ 半分笑みを含めて、あくまでもぶっきら棒
に。

「今更言わせんなよ、恥ずかしい」

「……」

瞬間、小林の背中が冷えました。背中を襲った冷感にぶるっと身

体を震わせた小林は、後ろを見ずに注意します。

「鼻水垂らすんじゃないよ、つめてえ」

「ちっ、違いますよ！ 涙ですよ、これは！」

「……どっちも変わんねえよ」

「あれ、おかしいな……。止まらない……」

いくら手で拭き取っても零れ落ちて、背中がその度濡れました。

「止まらない……。止まらないよお……」

「……止まらなくてもいいんだよ。止まるまで、泣いとけ。泣き疲れるまで、泣きまくれ。その代わり、明日からは笑ってるよ、馬鹿みてえによ」

「ううっ……」

二ノ宮は、小林の広い背中に顔を埋めました。

「おーい、ここだろ、お前ん家」

その時にはもう、二ノ宮の豪勢な家に到着していました。

しかし二ノ宮は離れる気が無いように、小林に縋って泣いていました。

その泣き声が起因してか　小林はある事を思い出しました。

「……げっ、鞆忘れた」

小林は溜め息を吐いて、全てを見ていた丸い月を見上げました。

「偉そうに見下しやがって……クソが」

届きもしない言葉を吐いて、背中を見ました。

そして、軽く笑いました。

「……こんな日も悪くねえ、か……」

小さい泣き声が、その場で響いていました。

丸い月が、雲に覆い隠される時までずっと。

〈同時刻・とある豪邸での座談会〉

「うわあ、すげえ……。美味そうな食い物ばかりだ……」

「うむ。シェフに極上の料理を出すよう言ったからな。味は保障するよ。さあ、遠慮せずに食べたまえよ、天川君」

「いやっほう！ いただきまーす！」

「食べながらいいから聞いて欲しい。今から話す事は、君に知っておいて貰いたいのだ。今日、君を招待したのもその為だ」

「うっわー、何これ、超美味い！ この蟹も海老も半端なく美味い！ 肉も柔らかいしジューシーだし……。こりゃデザートが楽しみだなあ！」

「……天川君」

「あんれすは？」

「食事を楽しんでくれるのは大いに結構。しかし、残念ながら今日は食事会ではないのだ。是非とも、私の話に耳を傾けて」

「うわあー！ キヤビアだこれ！ すげー！ 生で見れる日が来るなんて感激だ！ しかもこれはフォアグラ！？ 三大珍味が俺の目の前にいいッ！？ くうう！ 夢のようだぜえ！」

「安城君、早急に皿を片付けたまえ」

「すいませんでした。ちゃんと聞くので、夢を見させて下さい」

「私としてもそれが望ましい。さて。君は我が娘、春香に接触し、再教育して下さったのだとか。秋奈から聞いたよ。なんとも複雑な表情だったが」

「再教育だなんてとんでもない。俺は言いたかった事を言っただけです。それと渡し物を。そしたら学校に行ったらいいですね。良かったですよ」

「むっ。君は、今日は学校には行っていないのかね？」

「他にも弾かれた生徒が居るので。まずは、全員の自宅を回らないといけないんです。学校に行くのは、その後です」

「そうか……。事情は察せ無いが、君も苦労しているようだね」

「それで、お話というのは？ あなたは……。冬人さんは、仕事がとても忙しくて、滅多に帰宅されないんですね？ わざわざそうし

て、更に俺を招待するって事は、余程大事な話だと推測しますが」

「名前を覚えてくれて光栄だ。いかにも。君は、夏美の部屋を調べたようだね」

「人聞きが悪いですね。俺は好奇心に揺らされて、物色しただけですよ」

「……その時、もしや君は、？事件？についても調べたのではないかね？」

「ええ。認識があつたとは驚きです。 ああ、あなたが隠蔽したんですか」

「頭の回りが速い子だ。その通り。私が県警に交渉をつけた。人間というのは弱いものだよ。こんな紙つぺら数百枚で、簡単に道理を捨ててしまうのだからね。……君にも必要かな？」

「いいえ、別にどうこうするつもりはないですよ。俺に得は何一つないですから」

「それは助かる。我が社の信頼が揺らぐ事は、金輪際あつてはならないのでね」

「さいですか。 しかし凄いですね。確かに二ノ宮は、名を汚すつもりでやったと言って、逮捕されようとしていました。それを察知して防ぐとは……。賢いというか、悪知恵が働くというか。親子なんだな、と実感しますよ」

「……そうか。春香は、そんな事を……」

「え、知らなかったんですか？」

「ああ。何せ、家にもろくに帰ってなかったから、春香に顔を合わせる事もありませんでしたのだよ。帰る頃にはもう眠っているものでね。前に会ったのは、もう三ヶ月も前になるか」

「大変ですねえ。……だったら、何で隠蔽なんか？ 県警に賄賂しなくても、放送局にやった方が軽い出費で収まつたんじゃないんですか？」

「何を言つかね君は！ 愛する娘が逮捕されるのを黙って見てる訳にはいかないだろう！ どんな手を使つてもそれを防ぐ！ 親と

して当然の行いだと思わないかね!？」

「そ、そうですね。軽率でした、すみません（俺としては、罪を償わせるのが当然だと思っけどなあ）」

「……失礼。声を荒げてしまった。無礼を許して欲しい」

「いえ。あなたの春香さんへの愛情が伝わりましたよ。にして
も意外ですねえ」

「意外とは、どういう意味だね？」

「怖い顔しないで下さいよ。あの妻にしてこの夫ありって奴です。
誰でもそう思うと思いますよ？」

「うむ……。秋奈は、夏美を溺愛しすぎだったのだ。その一方で春香には厳しく当たり、拳句の果てには放り捨てる始末。大きな声では言えないが、母親の自覚がまるでない。それが悩みの種だった」
「本当、大変ですね」

「ああ。私は娘を、春香と夏美を平等に愛していたというのに、それを形として春香に示す事が出来なかった。私が春香に愛情を見える形で示していたら、こんな事にはならなかったと懺悔しているよ」
「過去をいくら悔やんでも、現在は何も変わりませんよ」

「解っているとも……。それでも尚、悔やまずにはいられないのだ
……」

「……初めに言っていた、知っておいて貰いたい事とは？」

「……うむ。単刀直入に言うが、春香の友達になってやってはくれないか？」

「はい？」

「春香は友達が居ないのだ。家でのストレスが学校で顕著に現れているのか、友達に恵まれなくてな。今までずっと、友達の温もりを経験していないのだ。だから君に、その役を担って貰いたい」

「はあ。俺自身は問題ないんですけど、本人がなんて言うか……」

「安心したまえ。私がちゃんと紹介をつけるから、どうとでもなる」
「そんな、お見合いじゃないんだから」

「ははは。さ、話したかった事は以上だ。忙しいところをすま

なかった。君は、君の仕事に戻ってくれたまえ」

「ええ、そうさせて貰います。ところで」

「何かね？」

「俺は、あんたを見た事がある」

「私は記憶に無いが」

「二年半前。地下収容施設で行われた、あんたらの馬鹿げた思想を叶える為の？リサイクル法案？。あれに俺も、参加してたんだよ。

……いや、参加させられていた、かな」

「！」

「二ノ宮……。どつかで聞いた事のある名前だと思ってた。それが今やっと解った。あれの主催者の爺さんの苗字だ。あんたは、その隣に居たな」

「……それはっ……」

「別に咎めてる訳じゃない。寧ろ俺はあの催しに感謝してる。おかげで、俺は生き甲斐を取り戻した。鬼神さんのおかげで」

「！鬼神……ッ！あのっ……、あの悪魔かッ！」

「これまた人聞きが悪いですね。あの人は、俺の肉親とも言える存在なんですよ？」

「そんなのは関係ないッ！あの男はっ……私の父上を……ッ！」

「自業自得でしょう。それに結果的には、あの人が殺した訳じゃない」

「……これ以上、この場でこんな事を言っけていても不毛だ。君も、あの男に関わるのはやめなさい。奴は？全てを知る者？だ。これ以上関われば、確実に人生を狂わされるぞ」

「俺の人生は、初めから狂っているんですよ。だから、とことん狂えば良い。解ってる。俺があの人の手の上で踊っているって事くらい、解っていますよ。けどそれで俺の望みが叶うなら、ピエロにでも何でもなってる。舞踏会でも何でもやってやるさ」

「……この事は、娘には黙っていて貰えないか。知らなくて良い事は、世の中に溢れている」

「まったくそうだと、俺も思いますよ。勿論、口外はしません。これからお友達になるお嬢様の面汚しは、俺としても好ましくありませんから」

「話が早くて助かる。恩に着るよ」

「それはお互い様ですよ。……それじゃ、俺はこれで失礼」

「ただいま帰りました」

「おっ」

「あっ……」

「げっ！」

「あれ、何で大輝が？」

「畜生、一番見られたくねえ奴に見られた！」

「春香！」

「あ、お父さん。……お久しぶりです」

「どうした、目が赤いぞ？」

「これは、その……」

「こいつ、大泣きしてたぜ。ビービーってガキみてーによ、ったく」

「あっ！ い、言わないで下さいよ！ お父さんの前で！」

「……そうか、君が春香を送ってくれたのか。ご迷惑をお掛けした。その詫びと言ってはなんだが、そこにある料理を好きなだけ食べて貰って構わない」

「わりいけど、俺は金持ちの食卓は嫌いなんだ。貧乏臭くて不味い飯の方が、余計な脂肪をつけなくて済むんだよ」

「うむ……なら、仕方あるまい」

「小林君……ありがとう」

「けっ」

「だ、大輝……！」

「何だよ、ああ？」

「お前、遂にデレたのか……？」

「ああああああ！ だからお前には見られなくなかったんだ！ 気持ち悪い事ばかり言いやがる！ 畜生めえ！」

「天川……さん」

「ん？ ……おお、随分と変わったな。敬語なんて使うようになったちゃって。しゃべり辛かったらありやしないだろ？」

「あはは……。正直、まだ慣れてないです。でも、その内に気にならなくなると思います。それまでは、我慢です」

「その髪も、可愛くなつたもんだな。 夏美さんを意識したのか？」

「はい。 お姉ちゃんは、もう帰って来ないです。だから私が、少しでもお姉ちゃんのようにになれるように頑張るんです。お姉ちゃんの為にも、……お母さんの為にも」

「良い心掛けだ。 ところで、話が変わるけど……」

「はい、何ですか？」

「役員にならないか？ 執行部の」

「執行部？」

「来年に発足させようと思ってる機関の名前。生徒会執行部だ。今の生徒会とは違う、別の生徒会。俺の生徒会だ。今役員を集めてるんだが、まだ確定してるのが一人なんだよねえ。どうか、役員に立候補して頂けるとありがたい」

「おい天川、何だよそれ。聞いてねえぞそんなの、おい」

「デレ期到来の大輝君には興味ありません」

「んだよそれ！ てめえ、いい加減ぶん殴って」

「それに入ったら……」

「うん？」

「友達たくさん、出来ますか……？」

「ああ、勿論。よしっ、まずは俺が友達になってやる！ 記念すべき第一号って訳だ！」

「はっ！ わりいな天川。第一号は、この俺だ」

「何い！？ お前いつの間に！ さては寝込みを狙ったな！？」

「こいつのどこにそんな隙があったよ！ 素直に俺が友達になってやっただよ！ この俺様がなあ！」

「おいおい、調子乗るなよ大輝！　ちよつとバスケット出来るからつていい気になるのはよくねえよ。前回のテスト、学年何位だっけー？」
「き、汚えぞ！　お前だつてたいしてよくねえだろうが、ええ！？」
「何だこの野郎！　少なくとも、お前のオツムに比べりゃ遥かにマシだけどな！」

「よおし、表出やがれ！　男らしく拳で決着つけようじゃあねえか、おい！」

「いやいや落ち着けて。もっと穏便な解決法がだな」

「ゴタゴタ言つてねえで来いや、オラア！」

「ちよつと待て話せば解る話せば」

「……お父さん」

「む？」

「私ね、初めて、友達が出来たよ！　面白くて楽しい、友達が！」

「……ああ。良かったな、春香。本当に、良かった」

「もつともつと友達作つて、そしたらお家に呼ぶから！　楽しみにしててね！」

「ああ、今からそれが楽しみだ。その日が、とても楽しみだ。

ああ、神様。最高のクリスマスをありがとう。いつまでもこの幸せが、春香にあり続けますように」

翌日。

彼女は再び、孤独になった。

第12話「転機は計画通りに訪れる」

「あつちー……」

七月中旬の生徒会執行部室にて、天川が団扇片手に、背凭れに体重をかけ仰け反りながら、重々しく口を動かした。

すっかり暑くなってしまった今日この頃。何でも最高気温が三十七度だとか。どうして太陽はそんなに地球をいじめたいのだろうか。人類からすればとんだとばかりだ。

窓を開けても広がってるのは、熱心なテニス部員と跳ねるボールの音だけ。こんな猛暑日だというのに、風一つ入ってきやしない。何より、この部屋にはエアコンは愚か扇風機すら無い。唯一あるのは一枚の団扇だけ。それも今は天川によって独占されている為、それぞれ各自の方法で涼んでいる。

目の前の二ノ宮は、あんぐりと口を開けながら自前の金色の下敷きを扇ぎ、髪を揺らしている。今更ツツコむ事でもないかもしれないが、何でもかんでも所持品が金色なのはどうしてなんだ。金持ち「金色とでも言いたいのか？ センスの欠片も無いチヨイスだ。これだから成金は困る。」

その隣の廣瀬は、両手を前に放り出して机に伏せていた。流石の廣瀬も、こんな暑さの中じゃパソコンを弄る気にはなれないらしい。時々二ノ宮が扇いで上げると、見た事の無い幸せそうな表情をこちらに向けていた。……もしかしたら、これが？ 萌え？ という感情なのかもしれない。

俺の隣の恵はと言うと、腕を組んで呆然とした顔で天井を見ていた。心頭滅却と言ったところだろうか。別にそれ自体は何の問題は無いんだが、何故こんな暑いのにその帽子は取らないんだ？ 心底疑問に思う。よっぽど大切な物のようだが、だからってなあ……。

「なあ、恵」

俺は襟元をパタパタと動かし、微風を浴びながら訊いた。

「……………」

まさかの無視だった。いや、そう決め付けるのはまだ早い。何か考え事をしていたのかもしれない。俺は恵の肩を叩いて、意識を誘導する。

「ん？」

「何か、考え事か？」

「いや。こういう暑い時は、ボーっとしてた方が暑さを凌げるんだぜ。特に涼しい事を思い浮かべながらだと、よりグッドだ！」

「ふうん。なるほど、為になった。けど俺が訊きたいのはそうじゃなくて、その帽子だ」

「うん？」

恵は帽子のあちこちを触った後、首を傾げて俺を見る。

「これがどうかしたか？ いつも被ってんだろ？」

「それが気になってるんだ。何でこんな暑いのにそんな物を被ってるんだと。夏なんだし、そんな暑苦しい物脱げよ。見てるこっちの方が暑くて」

「……そんな物とは何だよ！」

怒鳴った恵が机を叩いて、俺を睨みつける。叩いた時二ノ宮が声を上げていた事はどうでもいい事。

「これは大事な物なんだ！ そんな物とか言うんじゃねえ！」

突然の事で、部屋は沈黙に包まれた。俺も驚きで固まる。その空気に気付いた恵は「わりい」と詫びて、帽子を目が埋まる程に深く被る。

「龍にとっては高が帽子と思うかもしれないけど、オレにとっては凄く大事な物なんだ。あまり粗末な言い方はしないでくれ」

「……悪かった」

俺は素直に謝った。

軽率な判断は事故を招く。それが現在進行形で身に染みた。今後は発言に気を付ける事にしよう。ズボンを履くなんてナンセンスだなんて、口が裂けても言っちゃいけないという事だ。

「けどよーメグ。いくら何でもこんな暑い中にまで被らなくてもいいんじゃないの？ 見てるこっちが暑くて仕方ねーよ」

天川が団扇で自身を扇ぎながら言った。お前って奴は！ 折角俺が犠牲になったというのに！ これじゃ二の舞を踏む事になるだろう！

「オレが暑くねえからいいんだよ。別に迷惑掛けてるんじゃないからねえんだからいいだろ？ ファッションは個人の自由だぜ」

あれ、怒らないのか……。俺の時は怒ったのに……。

「まあいいけどさ。　　っつーかも無理！　　こういう日に限って何で無風なんだよ！　　しかもクーラーもないし！　　暑くて死にそうぞぞ！」

確かに暑いが、死因になる程では無い。熱中症なら話は別だが。「もうやめだ！　やってられっかこんなの！　執行もへったくれもあるか！　やめだ、やめやめ！　今日はもう、おしまい！」

マジか。それは俺としてもありがたい。家に帰れば、エアコントロールされた部屋で寛げるだろうし。更にゲームも出来て一石二鳥だ！　やはり会長は格が違う！　役員の気持ちをしっかりと汲んでいる！　天川が会長で良かったー！

という訳で、今回はここまで。また次回、お会いしましょう。

「何言ってるんですか。まだ何もやってないじゃないですか。要望書、こんなにあるんですよ」

とはまだいかないらしい。

空気の読めない二ノ宮は、どこから取り出した要望書の束を机にどんと置いて、弱々しく机を叩く。

「これを片付けないと、今日は帰れませんよ！」

「おいおい、勘弁してくれよ春。お前、いつからそんな真面目キアラになったんだよ。『あると思います！』とか言ってた頃のお前はどこに行っちゃったんだ」

「ふっふーん。私も日々成長してるという事なのです！」

「そうか。その貧乳も、いつか成長するといいな」

「な、何を言ってるんですか！ 胸だって大きくなってますよ！……多分」

「Bカップの春を生きてる内に見れる事を、心から祈ってるぜ」

「どれだけ絶望的なんですか私！ いいですか、人には希望というものが常にあるんです！ 今はイマイチな私でも、いつかは見違える様な美女になれるという事ですよ！ そりゃあもう、男性なら思わず鼻血が出てしまう程にまで！」

「さーて、要望書を片付けようかー」

「……………」

無視された二ノ宮は、下敷きで廣瀬を扇いだり突いたりして、その反応を楽しんでいた。惨めだ。そしてざまあみる。

「龍、読んで」

天川が再び仰け反り団扇を全力で扇ぎながら俺に言った。最早めんどくさいという感情を通り越した中、俺は氣力を振り絞り、一番上の一枚を手に取り、読み上げる。

「えーと、これは評議委員会からだな。？最近取った携帯電話のアンケートで、出会い系サイトを使っているという人の割合が、実に三割を越していました。それだけじゃなく、何と山高を待ち合わせ場所ですべていると、一部の生徒から証言を得ました。これは大きな問題だと思います。執行部で対策をお願い出来ないでしょうか？ という事だが……………」

資料を手放した俺は額に手をやって、深々と嘆息する。

「こんなに廃れていたのか、この学校は……………」

自然に恵まれた素晴らしい環境にあるというのに、このような如何わしい所業を…………。生徒として恥ずかしくないのか！

「うむ…………。これはまずいなあ。高校生の内に出会い系に手を出しているのもまずいし、何より山高が恋のキューピットになつてるのがただだけない。そういうのは、盛んな都会でやって欲しいもんだ」

天川が資料を片手に、団扇を扇ぎながら言った。

「私達がこうしてる今にも、誰かが出会ってるという事ですね」

二ノ宮が顔だけを向けて結論をまとめた。天川が資料を置いて「んゝまあ」と前置きして言う。

「実際はそうはいかないだろうけどな。そもそも出会い系なんてのは、セフレを作る為の場所、いわば社会人の憩いの場だ。アール指定目一杯の社交場。そんなのに高校生が手を出したらどうなるか……。簡単な事だろ？」

「……………。うわぁ、最悪です！」

二ノ宮が想像して感想を言うと、はっとして、笑顔の廣瀬に顔を近付けて訊ねる。

「ま、まさか、廣瀬さんはそんなのやってないですよー!?　いくらお金を稼ぐ為だからと言って、こんな不埒な事!」

「やってないよー」

今まで聞いた事のない、女子らしい高い声で答えたので、俺達は驚いた。

「夕ってそんな声出たんだ……」

最も関係が深いであろう天川でさえ、聞いた事のない声らしい。暑さというのはキャラさえも崩壊させてしまうらしい。俺も気を付ければ。

「なあ、一つ訊きたいんだけど」

不意に、恵が挙手する。天川が「どうした？」と促すと、

「セフレって何？」

首を傾げながら訊いた。

それに思わず俺は咳払いをし、天川も一瞬視線を逸らした。その後、何とも言えない表情で回答する。

「んっ。……ググレカス！」

「は?　何て言った？」

「あー駄目だ、メグには効かないかぁ……………」

天川が次の手に苦しんでいると、二ノ宮が元氣良く挙手して、

「私も知りたいです!　セフレって何ですか!」

質問に加わってきた。これに天川は「むむむ」と頭を悩ませた挙句、俺を指差した。

「龍。君に、説明の義務を与える」

「なっ。な、何で俺が説明しなきゃいけないんだ！ 会長らしく、お前がよく解る解説をすればいいだろう！」

「それじゃあ単調でつまらないからな。最近はおろくな働きをしてなかっただろ？ たまには副会長らしいところを見せてみる！」

「ぐっ……」

言われてみれば、ここ数日、執行部の方は放りっ放しだったな。色々と用事が重なったせいで、赴く事も出来なかった。否定しようの無い事実だが、だからってこの仕打ちは酷すぎるっ！

かと言って、投げてでも投げ返されるだけ。以下ループなんだろうな。どうせそうなるのなら、潔くこの役目を受け入れた方が得策かな。解った……。説明すればいいんだろ」

「おお、龍知ってるのか！ 博識じゃねえか！」

「見直しましたよ、龍さん！ よーし、後で奮発してキャビアをあげちゃいます！」

俺は恵が？ 博識？ なんて言葉を知ってた事に驚きだ。褒めてやりたい。二ノ宮はどうでもいい。餌付かせようとしても無駄だ！ まあ貰える物は貰っておくが。

それに、こんな事を知ってるのを褒められても、何も嬉しくない。普通は要らない知識だ。知ってて損は無いが……。知ってても得をするかと言われると首が折れるようなもの。

出来ればこの場で披露したくない事だが、尊敬の眼差しが二本も向かれてる中、応えない訳にもいかない。

「ていうか廣瀬、お前も知ってるんじゃないのか？」

俺が訊くと、ぷいっとそっぽを向かれた。絶対知ってるよな。ネット通な廣瀬が知らない訳がない。けどあの様子じゃ加勢は期待出来ないか。

仕方ない、孤軍奮闘の如く、やるしかないっ！

俺は深呼吸して精神統一。そして、俺の知識を脳内でまとめ、言葉にして吐き出す。

「では説明しよう。セフレとは、人間関係を表す言葉の一つで……。単刀直入に言うと、セックスフレンドの略称だ。意味としては、恋人ではなく、友人でありながらセックスを行える関係という事。つまりは文字通りの意味だ。これは浮気や不倫だけでは成立せず、あくまで行為によってつながった男女、または同性同士を指す。この単語は大きく二つに分けられて、？セックスするだけの関係？と？セックスもする関係？に分かれる。大体は前者を指す事が多いが、後者の意識でそう称する事もあるかもしれない。ただし、これは互いの合意の上で成り立つ関係。一方的であってはならない。それではただの肉便器だからな。常に同じ立場である事が必要になってくる。また、？できちゃった婚？にも関連があると言われており、時事的にもそろそろ問題になってくる可能性があるだろう。受験生には持って来いの課題という事だ。更に深く掘り下げるとするならば」

「いや」

俺の必死な説明を、恵が右手で制し、

「もういいです」

二ノ宮もそれに倣った。

そうして、二人同時に口を揃えて、

『この変態』

蔑むような目付きで言った。

「いやいやいや、何故だ、何故そうなるんだ！俺は再び必死に弁解する。」

「待て、待てくれ！俺はお前達の希望に則っただけじゃないか！お望み通り説明してやったんだから感謝するべきだろう！なのに何で軽蔑されなきゃなんないんだ！？これじゃ俺の苦勞が報われないだろ！」

「そんな卑猥な知識、誰が教えてくれって言ったよ」

「お前らだよ！ 二人揃って教えろと迫ってきただろうが！」

「別にそこまで求めてないです。せいぜい二行だと誰もが予想してたのに、何ですかこれ。数倍以上はあるじゃないですか。どういう事ですか、これ」

「俺なりに解り易くしようと頑張った結果だ！ 何故そんな風に俺を見る！？ 俺が何か悪い事をしたか！？ なあ、してないよな！？」

「まあまあ。落ち着け、龍」

俺は息を切らし、微笑んでる天川に顔を向ける。

「大丈夫だ。お前はよくやった。副会長の面目躍如ってところさ。俺は会長として、お前を誇りに思うぜ」

「あ、天川……」

「何でそんなに詳しいか、甚だ疑問だけどな」

「うっ……」

『この変態』

「ち、違う！ 俺だって好きでこんな知識を身に付けた訳じゃない！ 無理矢理覚えさせられたんだ！」

「誰に？」

「誰って……」

家にこんな事を教え込むのは、一人しかいないだろ。いや一人いれば十分だ。

そんな俺の心境を察してくれたのか、天川は首筋を掻きながら言う。

「……詩織さんか」

「……詩織さんだ」

本人曰く、「正しい性教育の欠如が現代の少子高齢化、幼児虐待に繋がっている」らしい。何となく筋は通ってるし、こちらには否定する材料は無く、最終的には立場の差で抵抗を諦めざるを得ない。言い分は解るが、俺一人に教えても意味無いと思うんだが……。布教しろとも命じるつもりだろうか。

「もしかして……。家じゃあんな事やそんな事を毎日毎晩欠かさずやってるのか！？ そうなのか！？」

興奮気味に訊いてくるが、あくまで俺は冷静に答える。

「残念ながら、お前の考えてるような展開は一切無い。あるのは、眠くなるような講義と筆記試験だけだ。しかも居眠りしたらゲーム剥奪だぞ。恐ろしいったらありやしない……」

「そしてその後に、お楽しみの実習って訳かい。くそっ、なんちゅー淫らで不真面目な家庭なんだ……！ 羨ましい！」

「勝手な妄想して羨ましがられてもな！ それに淫らでもないし不真面目じゃないし！ 寧ろ真面目に取り組んでるし！」

『この変態』

「何でそうなる！？ あのな、変態っていうのはそこら辺の女子に見境無く襲い掛かるような奴らの事を言うんだ！ 俺がそんな奴に見えるっていうのか！？ 見えないだろ！」

『この変態』

「見えるのか
！ 俺って変態に見えるのか
！」

「お、おい龍、俺は襲うなよ。そんな趣味は無いから」

「誰も襲わん！ ていうかそっち方面の変態！？ 俺だってそんな趣味は無い！ だいたい襲うとしても男なんか狙うか！ そうするならまだ女子の方が」

『この変態』

「あああああああああああ！ 五月蠅い、黙れ！ 俺は変態じゃない！ どこにでも居る、極普通に健やかでゲーム好きな高校生だ！」

「ゲームって、美少女ゲーム？」

『この変態』

「がああああああああああうううるさあああああああ
ああい！」

何とかこの場は凌ぎ切ったが、この後続いた処理の最中も、悉く

俺に災いの種が降り注いだ。
元凶は、言うまでもない。

その後、学校内での活動が終わりを向かえた時間。

低い太陽が照らす整備された道を、廣瀬は一人、鞆を両手で前に下げて歩いていった。

周りには誰も居なくて、車も走っていない。左手にある家々の窓は閉まり切っていて、通り過ぎた公園も、普段は賑やかだが今日という今日は誰一人遊んではいなかった。町全体が、この日の暑さを物語っている。

「暑い……」

外では滅多に口を割る事の無い廣瀬も、セミの音につられて漏らした。右手の甲で額の汗を拭うが、滝のように再び流れ出る。

また汗が滲み出て、同じように拭う。歩いてる途中、それを何度も繰り返した。

アパートが見えた頃、廣瀬の表情が晴れた。部屋に入ったらまずクーラーを点けて服を脱ごう。パソコンを広げて「暑いぞこの野郎どうしてくれるんだ」と殴り書いてやろう。

そう思いながら階段を上ろうと一歩踏み出した時、

「ひーろせちゃん」

後ろから聞こえたその声に、身体がびくりと震えた。聞き覚えのある声で、聞き覚えのある呼び方だった。

顔だけで振り返って見ると、一人の柄の悪い高校生がヘラヘラと笑いながら立っていた。見覚えのある顔で、忘れられない顔だった。廣瀬は恐怖に駆られ、脱兎の如く逃げ出そうとしたが、

「おおっとお」

高校生に肩を掴まれ、失敗に終わった。更に高校生は左腕を肩に掛け、顔を右肩に乗せる。廣瀬は汗を垂らし、表情を怖がらせる。

「久しぶりに会ったのに、それはないんじゃないの？ 挨拶とか

ないわけ？」

高校生の臭い息が顔にかかる。

「ほら、もう卒業式以来じゃ〜ん。俺さ、ずっと会いたかったんだけど、いつの間にか引越してたとかないでしょ〜。連絡頂戴よ〜」
加速する心拍数と共に、廣瀬の息は荒くなる。

「にしても、結構綺麗になったね〜。八方美人って奴〜？ 随分とやらしくなっちゃってまあ〜。ここも大きくなっちゃって〜」

太腿から腰、最後に胸を触われた瞬間、廣瀬は反発的に身体を離す。

「……触らないで」

振り絞った声で言ったが、高校生はヘラヘラと笑う。

「あつれ〜？ なになに〜？ 中学ん時はそんな文句言わなかったじゃんよ〜。ねえ〜、前みたいにまた遊ぼうよ〜。ご無沙汰してたんだからさ〜」

高校生が一步近付く。

「……嫌」

廣瀬が一步退く。

「冗談はよしてよ〜。大丈夫だって、前みたいに優しくするからさ〜」

高校生が二歩近付く。

「……来ないでッ」

廣瀬が二歩退く。

そして、高校生の顔が強張る。

「あ〜そう。そういう事言うんだ。散々弄ってあげたのに、まだ足りないんだ〜。それじゃあ仕方ないなあ〜。もっとキツイお仕置きをしなきゃねえ〜っ！」

そう言って飛び掛ろうとした高校生に、廣瀬が目を塞いで身構えた時。

後ろから別の手が、肩を掴んで高校生を制する。

「やめときな。俺達は連れて行くっただけだ。ヤンなら他にしろ」

「……ちえ」

高校生が渋々引き下がった隙に廣瀬は逃げようと振り向いたが、そこには既に別の男が道を塞いでいた。

「そういう訳だからさ、ひるせちゃん」

廣瀬は挟まれて、身動きを封じられる。

「大人しく付いて来た方が、身の為だよ？」

飛びっきりの笑顔で、期限切れの保障を込めて優しく言った。

下卑た笑みに染められた、残酷無比な現実を。

「ふう」

日が沈んで人工的な光が満ちる時間帯。俺はバイト先のコンビニのロッカー室で、扇風機に当たって涼んでいる。今は休憩時間で、後四時間、つまり十一時までは働かなくてはならない。その束の間だ。

「はあ。……ん」

ポケットの携帯が揺れているのを感じ、取り出す。着信だ。

「お？　夕からだ」

これは珍しい。夕から電話なんて稀にしか、……ていうか一度も無かった。せいぜい、素っ気無い文章のメールだけだ。

これはようやく、俺にも女神が微笑んだと言う事か！　そりゃそうだよな、俺だって頑張ってるもんよ。ちょっと良い事が一つ二つあったって、バチが当たるはずがない。ご褒美はあの豊満な……ンフフ。

俺は期待を膨らませて、電話に応答する。

「もしもし」

返って来た声は　。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5290w/>

生徒会執行部～前期の部～

2011年10月10日03時18分発行